針葉樹

第14号



1985

一橋大学一橋山岳部

〈表紙写真〉
常念上空より穂高
撮影＝礒貝浩、協力＝全日空

針葉樹

第 14 号

1985

一橋大学一橋山岳部



ウドレン・ゾムＣ２付近よりサラグラール西面（撮影　鈴木羊三）



遠見尾根より鹿島槍ガ岳



甲斐駒八丈展望台より赤石沢奥壁

バタルよりホワイトセール
（以上三葉 撮影　金子晴彦）

針葉樹

第十四号

正誤表

2021. 8. 23

■主要山行記録（79～157 頁）
北海道日高および大雪山系
①124頁　中段　　3行目
（誤）　札幌発（一六・四〇）－
（正）　札幌発（一二・四〇）－

■地域別、年代別全山山行記録（191～217 頁）
北アルプス南部
①195頁　中段　　1974　　5. 24～28　【参加者】
（誤）　前神、藤本、古橋、加藤、藤
田、増井、元井、大枝、佐藤、
若林、松田、近藤、永戸、坂巻
（正）　前神、藤本、兵藤、加藤、藤
田、増井、元井、佐藤、若林、
松田、近藤、永戸、坂巻
（古橋→兵藤、大枝を削除）
②195頁　中段　　1974　　5. 29～31　【参加者】
（誤）　前神、藤本、古橋、佐藤
（正）　前神、藤本、兵藤、佐藤
（古橋→兵藤）
③195頁　下段　　1974　　11. 6～9　【参加者】
（誤）　前神、藤本、兵藤、浅田
（正）　前神、藤本、浅田
（兵藤を削除）

北アルプス-----後立山周辺
①200頁　中段　　1975.　10. 24～26　　追加
　　【山名・コース】 五竜から鹿島槍（偵察山行）
　　【参加者】 加藤、兵藤、松田

北アルプス-----剣岳周辺
①203頁　中段　　1977　　7. 20～30　【参加者】
　　末尾に「(OB)　兵藤」 を追加

南アルプス
①207頁　上段　　1974　　4. 28～5. 2　【参加者】
　　（誤）　　元井、松田、若林
　　（正）　　兵藤、元井、松田、
　　（若林→兵藤）
②207頁　上段　　1974　　5. 2～6　【参加者】
　　（誤）　　藤本、加藤、兵藤、佐藤
　　（正）　　藤本、加藤、佐藤
　　（兵藤を削除）
③207頁　中段　　1974　　11. 8～11　　追加
　　【山名・コース】 西沢渡～聖岳往復
　　【参加者】 兵藤、坂牧
④207頁　下段　　1976　　9. 23～25　【山名・コース】
　　（誤）　　甲斐駒黄蓮谷左俣
　　（正）　　甲斐駒黄蓮谷右俣
　　（左俣→右俣）

北海道・東北
①216頁　中段　　1975　　8. 10～12　【山名・コース】
　　（誤）　（詳細　　参照）
　　（正）　（詳細 124 ページ）

巻頭言

『針葉樹』十三号が発行されてから二十年たった。この間、十四号の発行が幾度か検討されながら結局実現しなかった。

登山は、対象の山、ルート如何で難易度はどのようにも変化するが、その対象の山を選ぶのは他の誰でもない自分自身である。トーナメントを勝ち抜き、次第に手強い相手と相対するのとは異なり、最初からとんでもない強敵にたち向かうことも自由である。困難な山を選び、いかに苦しんだとしても、それは自ら求めたことであり、誰のせいにするわけにもゆかない。しかも、困難であればあるほどそれを克服する高い能力が必要となり、成功の折の充足感はより深くなる。登山を続けているうちに、〝困難〟というやっかいなシロモノがひとつの大きな目標となるのである。

それだけに、登山においては自己の実力に見合った、あるいは若干の飛躍を必要とする対象を選択するために相当な精力が費やされる。登れるか登れないかの煩悶が常につきまとい、意志決定の手がかりとして先人の残した記録が熱心に研究される。

その記録が、クラブの先輩であるような直接よく知っている人のものであればより多くのものが吸収できる。「あれだけ強い人が苦しいと言うのだからこれは相当だろう」とか「あの人でさえ登った

のだから何とかなるだろう」とか。記録は立体的な厚みを持ってオールラウンドな判断を可能にしてくれるのである。そして十三号までの『針葉樹』はまさにそうしたものとして発行され、活用されてきた。「我々はいつも或る目標を追求していかなければならない反面、絶えず新しく入れかわる構成員に、今まで積み重ねられてきた成果を伝えていかねばならない」との十三号の巻頭言は、このことを端的に表現している。

　ところが、この二十年間、『針葉樹』は発行されなかった。この背景には大学山岳部の弱体化と大学山岳部の弱体化、発表すべき記録の低迷等々があげられようが、この間一橋山岳部の活動が、次第に山岳部組織というものをあまり意識しない、比較的個人的な活動に傾いてきたという事実であろう。自分が山岳部に在籍する数年間に限っての個人的な視野は必ずしも求めようとはしないし、それを越える組織的な視野は持っていても、それを越える組織的な視野は必ずしも求めようとはしないし、したがって『針葉樹』の必要性もさして切実なものではなくなり、二十年間のブランクは、いわばいつの間にか生まれたと言ってよいものとなっている。

　そうした状況の中で、このたび十四号の発行がようやく実現した。一部篤志家の間に「出さなくては……」という思いは細々と受け継がれており、幸いにして変色した古い記録が編集子にゆだねられた。しかし、二十年間にわたる記録を集め、各年代の発行委員会からの呼びかけのたびのそもそものきっかけは、如水会が推進している一橋百年史編纂委員会からの呼びかけは、如水会が推進している一橋百年史編纂委員会からの呼びかけであり、必ずしも積極的なスタートではなかった。しかし、二十年間にわたる記録を集め、各年代のリレー型式の活動概況報告を通読する機会を得てみると、「何とか出してみたい」という積極的な思

いが編集子の間で生まれた。

どんなに時代が移ろうとも、一橋山岳部の本的環境はそう大きく変わるものではないというこ合が往々にしてあるものである。それぞれの年代のリーダーたちがとして立ち向かい苦心していたことも、実は遠い先輩たちが既に同じように悩分かる。OBとの山行計画についての協議、後輩の指導といった「制約」にかいう「組織」に参画し活動することを選んだ部員がいて、山岳部が存続するかり、山行の対象の選択、あるいは部の運営等々に関わる意志決定の手がかりとして『針葉樹』を残すことは大きな意義があるばかりではなく、組織としての必然であることに思いいたり、これが「何とか出してみたい」という思いを生んだのである。

本書を読む部員諸君は、これを単なる過去の記録ととることなく、明日にも我が身に関わることと捉え、自らの血肉となるよう十二分に活用して欲しい。幸いにしてこの二十年間に活動したOBは身近にあり、諸君がより突っ込んだ情報を欲しいと思えばすぐに応じられる状態にあるはずである。

最後に、二十年ぶりのこの記念すべき十四号の発行にあたって御協力をいただいた針葉樹会、如水会の皆様ならびに新制作社の古茂田氏に深く感謝申し上げたい。

発刊によせて

山岳部の一OBから山岳部長になってはやくも二年近くの年月が経過する。そのことはいえ、大学山岳部の変貌ぶりに驚くばかりである。

まず最も気にかかることは、一〇年ほど前から定着してきた部員数の激減である。（昭和三十六年卒）のみで一〇名、夏山合宿ともなれば全体で四〇名近い大世帯となった頃を思い出す、二年生をリーダーに五名で合宿を行っているにすぎない。隔世の感がする。いまも春山へ、二人を除けば山岳部自体としての山登りの実力は昔とくらべものにはならない。山登りに必要な「しごき」も、おのずから昔とはその内容を異にする。

現在、キャンパスでは山岳部のほかに、ワンダーフォーゲル部、スキー部があり、さらには山友会（山歩きの同好会）も活発に活動を行っている。価値観も多様化したのである。「山登りは生き甲斐」と称し青春を山にかけるという若者の数はそう多くはない。登山も趣味の一つにすぎなくなった。まさに豊かな日本の経済社会の反映である。

といえるのだ。山登りも自己研鑽の場ではなく、のんびり楽しくやろうというのが一般的風潮このような社会的ムード、キャンパスの環境の中で、山岳部の活動方針をどこに求めたらよいの

か、実に難しい問題となっている。国有財産の中で唯一つ私的に認められている部室の維持さえ、今後どうなるのか心配になる有様である。

しかし一歩も前進しない。ただ幸いなことに、数名とはいえ山好きの仲間が毎年少数ながら必ずいる。この現状をいたずらに嘆くだけでは、部員全体の力のレベルアップを図るべく各自が努力してもらいたいものだ。それには一日でも多く山へ登り、地道にこつこつ実力を養うほかはない。

最近、〝山岳部機関論〟という話もあるときく。しかし、部を単に貸道具屋とみたてたり、パート旋所としか考えないとしたら淋しい限りである。これは一オジンの嘆きであろうか。やはり青春の情熱を山にかけ、苦楽を共にする仲間を作る場としての山岳部にして欲しい。それでこそ、ボー様、一橋で長い伝統をもつ山岳部の存在があるといえる。難しい話もいい。しかしそれより、もっと良き仲間と山へ登ろう。

石　弘光

目次

一　巻頭言
活動発刊によせて ……11
主要山行記録 ……25
部誌 ……79
部誌 ……159

『山小屋……284
地域別、年代別全山行記録……283
海外遠征記録……219
岳友追悼……191
『針葉樹』第一～十三号収録内容……175
最新登山装備事情（57・63・76頁）
あとがき

1963年から1984年まで

二十有余年の活動を回顧し、
現状をみすえ、
将来を展望する。



はじめに

かつて、日本の登山界の中心には学校山岳部があり、一九五六年、日本山岳会隊がマナスルの初登頂に成功した後、六〇年代には多くの大学山岳部が七〇〇〇㍍峰を目指しヒマラヤへ出かけた。日本の冬山で訓練されたポーラーメソッドは長大なヒマラヤでその威力を発揮し、六〇年代の終わりには主だった七〇〇〇㍍峰は登りつくされてしまった。

他方、一九六五年にはRCCⅡの芳野満彦と渡部恒明の二人の社会人によってマッターホルン北壁の日本人初登がなされた。大学山岳部が長い縦走やポーラーメソッドによる冬期登山を最終目標としたのに対し、社会人山岳会メンバーは限られた時間の中で未登の岩壁や氷壁のトレースを指向し、以後日本人はヨーロッパアルプスの大ルートに続々と足跡を残すようになった。

こうした動きのなかでヒマラヤでの比較的近づきやすい山々の初登頂がひとつとなされると、ポーラーメソッドを中心としていた大学山岳部の活動は急速に縮小し、日本の登山の主力は大学山岳部から社会人山岳会に移ることとなった。

さらに一九七五年にはメスナーとハーベラーによるヒドンピークのアルパインスタイルによる登頂がなされ、ヒマラヤの巨峰での登り方も姿を変えはじめた。アルパインスタイルの実践者のひとり、アラン・ラウスは「ポーラーメソッドでは無能な人間でも組織の力で頂上に達することがあるが、アルパインスタイルでは非力なクライマーが危険な高度まで登れるようなことはない」といういい方をしている。ポーラーメソッドのメリットが減殺されたわけではないが、純粋な個人の力というものが一貫して求められるようになるのである。

また、山への関わり方も多様化し、学園にはワンダーフォーゲル部、あるいは探検部といったクラブが誕生したし、登山そのものも、沢登り、ボウルダリング、トレッキングとフリークライミング、さまざまである。

こうしてこの二十年間に大学山岳部をめぐる環境は大きく変わり、一橋山岳部もその影響を否応無く受けることとなった。この間の事情は活動概況報告にくわしいが、ここでは二十年間を通観したうえで山岳部活動の流

れをとらえてみたい。

分散合宿か全体合宿か

象徴的なことに、最初の年、**一九六三年**にリーダー蛭川はポーラーメソッドの物足りなさを訴えている。春山で横尾尾根から奥穂高岳、槍ガ岳へ登ったものの全員がフルに動いたという満足感が得られず、かわりに小人数の分散山行が指向される。ところが五月の奥穂高岳で滑落事故をおこし、冬山は予定されていた参加メンバーの減少から明神主峰東稜から前穂高岳往復のポーラーメソッドを繰り返さざるをえなくなる。

翌**一九六四年**の新人はわずか三人と従来になく少なくリーダー層は今後を憂慮するが、層の厚い三年生が六月に奥又白での岩登り合宿を行い、岩壁登攀技術向上のきっかけをつくり、積極的な活動を展開する。高崎は全員新村ルートをトレースできたとこの合宿を評価しており、以後このグループは穂橋会と名乗ることになる。夏山では前年に続いて沢登りを含めた小人数の分散山行を実施したが冬山については連続しうることから、リーダー小島は目標を北鎌尾根一本にしぼることとし、ポーラーメソッドにいる。

一九六五年に入りようやく本格的な分散山行の機は熟し、春山では隊を本隊、分隊の二つに分け、冬山では笠ガ岳から硫黄尾根の縦走パーティと涸沢岳西尾根から北穂高岳、横尾尾根を下る二隊を出し、三年来の懸案の冬の少数分散山行を実現する。当時の岡田はこの山行を「ハイレベルの山行」と評している。この間、OB、穂橋会を中心に一橋山岳会としての海外遠征の計画も進展しており、活動は活況を呈するに。

こうして、ここに今後のひとつの方向性が打ち出せたかに見えたが**一九六六年**になると主力の上級生が卒業し、ようやく手にした新機軸は十分に扱いかねる状態となる。肝心な冬山の目標が容易に定まらず試行錯誤の挙句、内蔵助谷から剣岳へと向かうが豪雪に阻まれ前進を断念している。（この年の六月、ヒンズークシにOB六

名、学生一名からなる遠征隊が出され、ウドレンゾム南峰、サラグラール南峰、ノーバイズノン・ゾムの登頂に成功したが一橋山岳会としての遠征はこれ以降出ていない。）

一九六七年になると新機軸の追求といったことよりは部員の少数化、新鮮な目標の喪失、あるいはより困難な登高能力の減退から部の転機が強く意識されるようになる。これに対し社会人山岳会はヨーロッパアルプスで目ざましい活躍を見せ、この年入部した新人の一人は社会人山岳会を選ぶべきか大学山岳部に進むべきか迷った末秋になって入部している。こうした実状をとらえてリーダーの中村は「今こそ地道に足元を固めてゆく」という方針をかかげ、比較的アプローチの短い後立山を新しい目標におき、連休、秋と偵察をくり返し、冬は唐松岳から長駆針ノ木岳へ向かう計画を立てる。しかし、豪雪のため、健闘むなしくA沢のコルで断念させられてしまい、二年の戸川は「やれるだけはやったが……」と記している。

連続する事故

その冬山の反省で、的確な気象判断と、迅速な行動力、ラッセル力の不足が指摘され一**九六八年**の春山は六人の新二年生をフルに動かせるべく立山弥陀ガ原経由、剣岳に登った。この年の冬山の目標も再び後立山周辺におかれ、今年こそ成功させるという意気ごみの下に、五月には偵察を兼ねた後立山縦走が計画される。しかしこの山行で、鹿島槍天狗尾根にて二年生の中村が転落、死亡事故をおこしてしまう。夏山を前に四名の部員が次々に退部し八名となり、その後の運営が危ぶまれた。「死んでまで山に登る価値はない」と退部した三年の大田は記した。しかしリーダー俵の努力により活動は継続され冬山は爺ガ岳南尾根から鹿島槍ガ岳と針ノ木岳を往復し、三年振りの成功を手にする。

しかし、二人の四年部員が卒業した一**九六九年**は僅か六名でスタートすることになり、南アルプス南部で春山合宿をしたものの、その後の方向が全くまとまらない。

一九六六年の目標喪失が虚脱感に由来するものとすれば、この年のそれは、大きな事故のあとの混乱に由来するものといえよう。大学では学園封鎖といった事件もあり、冬山は結局見送りという異例の事態となって終る。山への意欲そのものが大きくゆらいだ年であった。

続く**一九七〇年**は前年までの活発な活動のあとの冬山放棄をふまえ、『何故山に登るのか』という議論からスタートしている。登山の面白さと充実の要件といったものがあげられ、この実現の為に山行は南アルプス北部、特に甲斐駒ガ岳が注目されるようになる。こうした行き方は登高意欲の減退と力が、ともすれば面白さと充実といった感覚的側面が出すぎ、地道に足元を固めるという側面は無視されがちになる。そして、北アルプスの山行経験は乏しく部の運営は容易に軌道にのらない。不足という現実からぬけだすべく考えられたものであるボート部で四年をすごし山岳部に転じた上田は訓練第一主義を打ち出すが『単に技術的訓練の為に合宿を強いるならば山岳部は山岳部を支える個人、即ちその根底から崩壊するだろう』といった合宿廃止論と対立するようになる。

以後、部活動はどん底となり休部に近い状態が続く。六七年に部活動の転機として漠然と懸念されていたことが、考えられる最悪の事態となって現実化してしまったことになる。

合宿と個人山行

一九七一年には新人を主体とした登山といった形がとられ、**一九七二年**になって新人が六名加わり、部員が一二名となると、ようやく年間計画がたてられるようになる。しかし、事故後の断絶のせいでリーダー層そのものの山行経験は乏しく部の運営は容易に軌道にのらない。ボート部で四年をすごし山岳部に転じた上田は訓練第一主義を打ち出すが『単に技術的訓練の為に合宿を強いるならば山岳部は山岳部を支える個人、即ちその根底から崩壊するだろう』といった合宿廃止論と対立するようになる。

一九七三年には甲斐駒の遭難を直接知らない部員ばかりとなり、ともかく数多くの山行を実践するという積極

性がようやく生まれる。そして、前年の訓練第一主義と合宿廃止論の対立をふまえ、個人山行を優先し、合宿は訓練的色彩を持つものに限定するという従来からすればまれた自由で個人的な雰囲気、さらには、中堅OBとの頻繁な接触のなかから部員の登行意欲は次第に高揚し、冬には東鎌尾根から槍ガ岳往復が計画されるが、異例なことに、合宿ではなく個人山行という位置づけがなされている。結果的にはわずかの好天を逃がし、水俣乗越の先から撤退することとなったが、リーダー前神は経験不足なのだから仕方がないと大らかな受け止め方をしたえで翌年に期待をつないでいる。この対応は一九六六年並びに一九六七年の冬山失敗に伴う深刻な反省とは大きく様相を変えており、こにようやく、新しい時代の新しい山岳部風土がその姿を見せ始めたように思われる。

翌**一九七四年**は前年のリーダー層が四年となり、二度目のリーダーということで意欲的なスタートがきられ、春山は高嵐尾根から黒部五郎、赤牛岳を登った。五月には個人山行の形で三隊が計画され、前年の『まず第一に山行を』という方針は一歩進められ、個人山行を重視するというこた。ただし、冬山については、前広に計画に入り、合宿として再度とし、この為の山行を夏、秋と実は笠ガ岳～槍ガ岳～北穂～横尾尾のトレースに成功し、甲斐駒遭難く活動は軌道にのることになった視に象徴されるとおり、その内容個人的な色彩の濃いものであり『きず、拡散的な活動に終始していた。

このため、**一九七五年**になると部のまとまりといったことが求められ、加藤は年度当初に冬山の目標を後立山に設定、一年間の山行をその実現というオーソドックスな手法を採用する。この結果一九六七年に敗退した冬の五竜岳～爺ガりに成功する。この間前神、藤本ドヒマラヤのハヌマンティバを登頂している。

しかしながら、**一九七六年**になると前年にその兆しの現われていた部員数の減少傾向が顕著となり、上級生の登行意欲の充足と下級生の養成の相克による悪循環といったものが意識されるようになる。春山では天狗のコルから奥穂、前穂を往復する計画であったが新二年生には荷がかちすぎ、リーダー層には物足りないながら、下級生をひっぱりきれないという中途半端なかたちとなり失敗してしまう。その後、この相克は加速し、しかも対策を打ち出せないままに夏山を終えるがその後退部者が続出し、冬山直前に三年部員は払底してしまうことになる。このため冬山は白山と前年からすれば相当のレベルダウンを余儀なくされ、新人の養成を中心とし一応の成功は納めるが充足感からは程遠いものとなってしまう。リーダー松田はこの悪循環をいかに打破してゆくかが今後の課題であるとしている。

これに対し、**一九七七年**になると若手部員を中心に岩登りが注目されるようになる。それまで甲斐駒遭難の後遺症とでも言うのか、岩登りが積極的にとりあげられることは少なかったが、折からのフリークライミング、あるいはボウルダリングの普及もあってゲレンデ通いが増加、七月には三ッ峠で岩登り合宿をしている。

また、八月には松田、佐藤の若手OB二人がケニヤ山レナナ峰へ向かい、これに刺激されて神野を中心に夏合宿をアフガニスタンでやろうというアイデアも出された。こうして視角は多面的になり、ムードも明るくなる。冬は部としては久方振りに大日岳経由剣を目指すが剣御前で一週間の停滞を余儀なくされ失敗、海外夏合宿のアイデアは途中で諸事情からつぶれてしまう。

再び続く事故

この影響か、**一九七八年**は一種の虚脱感の中から出発している。そして、最初の春山合宿の悪沢岳の西斜面で滑落事故を起こしてしまう。事故の原因として、上級生同士のパーティーによるなれあい、緊張感の欠如があげられているが、前年の積極性の裏返しとして安全性への地道なとりくみが欠けたことは否めないであろう。この年は続いて夏山でも北尾根四峰東南面で落石事故を起こしており、甲斐駒以来八年で再び深刻な事態を迎えるこ

ととなった。

翌**一九七九年**は下界における日常活動の充実ということを目的に二月に部室で合宿し資料整理等をするという新しい試みがなされている。しかし、事故の影響で活動可能な上級生はわずか二名であり、運営は下級生主体とならざるを得ず、上級生と下級生の相克という一九七六年に出された問題が切実なものとなる。

続く**一九八〇年**には六名の新三年生がクラブの指導層となり、かてて加えて新人も多数入部し、活動目標を早と冬の後立山縦走におき活発な活動を開始した。連続事故後のたてなおしということで、部員数の厚みを利して、後立山を中心に多方面への山行を試みている。とりわけ、二四日間にわたる第一次夏山と、九月上旬の岩登りを中心とした第二次夏山では北アルプスに広く深くふれている。こうした活動の中から三年生の間に海外遠征の計画が持ち上がる。七八年の連続事故以来、思いきった活動ができなかった反動ということもあり、夏山の成功後に計画は具体的に進み始める。しかし、これに対し、たった一人の四年生は十分なチェック機能は果たえず、計画の検討はクラブ内部よりも、外部にたよりがちであった。個々の合宿は順調に進むが、富士山雪上訓練で一年生が滑落事故を起こし、滑落を止めてくれた他山岳会の方に多大な迷惑をかけている。このため、冬合宿の出発は遅れ、屏風尾根より鹿島槍ガ岳を経由して五竜岳までを目指すが、四年部員の不参加に加え、十年来の悪天により鹿島槍アタックをもって敗退している。

一九八一年に入り、四人から三人に減った遠征希望者が山岳部の運営と遠征計画を並行して活発に進めることになる。三月には奥大日尾根より剣岳登頂後、一旦、黒部に下り、スバリ岳を登り、屏風尾根を下るというスケールの大きい春山合宿が計画されたが、黒部湖の結氷状態が悪く、計画の前半で断念している。その後、五月上旬にはホワイトセールの登山許可がおり、遠征準備と訓練的色彩の強い合宿が進められる。最上級生の個人的遠征ということで部としては単にそうした準備を側面から援助するというかたちにとどまっている。実際の計画に関

してはOBとの協議を数度にわたってもっている。夏合宿は一人だけ残った四年生が率いて剣へ向かい、三人の遠征隊は八月一日にインドへ出発した。そして、九月中旬、一行はホワイトセール南東稜上で姿を消し、二度にわたる捜索にもかかわらず遺体も確認できない事故となってしまった。以後半年間は停止されたが、事故に直接関わった当人たちが皆無の中での反省と方針の打出しは具体性を欠き、上級生が少ないこともあって、各部員はそれぞれの希望を中途半端に自制することになり、満足のゆく山行はなかなかつくれない状態になってしまった。

一九八三年になると部員は女子一名を含む九名となる。一桁台になったのは甲斐駒遭難後の一九七一年以来であり、合宿をもつことそのものが困難な状態となる。しかしながら、下級生の積極的な参加、基礎的技術の繰り返し等を通じて地道な活動を展開し、冬には北俣岳南尾根から槍ガ岳までの縦走に成功する。

そして、『針葉樹』十四号のカバーする最後の年**一九八四年**には、座談会（一八六ページ）にあるとおり、従来悩まれてきた諸問題が、解決すべき問題としてよりは、部の現実としてとらえられ、むしろ淡々とした雰囲気のうちに活動が展開されてきている。一人だけいる女子部員が単なる形だけの部員ではなく、活動部員としての位置付けられていること、若手部員とOBの山行が幾度かもたれていること等は部の多様性を端的に示しているともいえる。

冬山は、大雪の直前の好天をとらえ爺ガ岳東尾根より

模索の中より

こうした場合に一体どうすればよいのか、それは個々の部員の真剣な判断が第一であるがクラブとしての過去の経験を見返す時必ずや、同じような状態と、それへの対応が見られ、大いに参考になると思われる。しかし、幾度かの事故や、時代の隔たりの結果、過去との関係は薄くなっており、生かされるべき経験が必ずしも生かされないという状態は否定出来ず、三人を喪失したあとの**一九八二年**はあてのない模索の内に過ぎたといえる。

鹿島槍が岳に登頂している。

しかし、三年の自石が落石を受け、左手中指の機能を失った夏山の事故については、偶発事故とはいえ、結局突っ込んだ反省はなく、淡々とした雰囲気が無責任体制を生み出しかねないことに注意する必要があろう。

何が変わったのか

以上二〇年間を通観してみると、大小の事故はあとをたたず、リーダーが思う存分活躍できたとしているケースも少なく、わずか四年の間に満足のゆく活動を安全に実践することがいかに難しいかよく分かる。

小人数の故に、当初二年間で訓練を受けたとしても、その後は後輩のために時間を割かなければならない。自分の技量を練磨し、自由に山を楽しむチャンスは限られてしまう。

かといって『さあ、これから飛躍の時だ』と考えて、意欲的な山行を計画すると、途端に事故に足をすくわれる。事故のあとにはともすれば、いたずらに観念的で後向きの反省の時期が続き、メンバーが入れ変わると、その反省は、きれいさっぱり忘れられてしまう。

しかも、こうした似たような悩みが時代を違えて悩まれてきたにしては、決め手となる何ら有効な解決策も、進歩もない。

すると、『一体何のための大学山岳部なのか』ということになる。これは本来、山岳部に結集している現役部員がそれぞれに納得していればそれでよいことではあるが、以下、二〇年の間に散見されたいくつかの考え方を手がかりに、この点をさぐってみたい。

登山の究極目的が『初登頂、初登攀』といった、大変分かりやすい、いわば、客観的価値そのものである時代があった。そこでは、登山の価値は、対象の山自体が持っている価値（高さと処女性）と密接不可分であり、それを果敢に追求する『パイオニアワーク』こそが登山の真の姿であるという考え方は誠に素直に納得されるものであった。

その後、活発な活動により、初登頂、初登攀の対象の山々が物理的に限られるようになっても、この考え方自体は確固として生き続け、大学山岳部の活動にも大きな影響を及ぼしてきた。

二〇年前、『どこに言っても人だらけで、岩場にはハーケンが連打され、新鮮な山は失われた』との慨嘆がしきりに聞かれた（一九六五レポート）。パイオニアワークを意識した気負いに満ちた発言である。

ところが、その後、『人だらけ、ハーケンだらけ』の事実は一層促進されているにもかかわらず、こうした発言は次第に影を潜めるようになった（一九七七冬山）。

山がここまで開けてしまえば、そんなことにいちいちメクジラたてても始まらないし、初登頂、初登攀といった客観的価値の威光もかわりに、登山界ではもうあまりに遠くなりすぎた。ライムだの、果ては、トラバース登攀だのと、山そのものというよりは、登る側の勝手な思い入れを実現する登り方そのものが関心をよぶようになってきた。

そのせいか、一九七三年の冬山は合宿形式のかわりに、個人山行という形をとり、その後も個人山行優先の方針が堅持されるようになる。一九七五年には活動があまりに拡散的になった反面として統制色の強い全体指向が復活するという揺れもどしがあるものの、一九七八年には「上昇指向を持たない人間、より困難な山を登りたくない人間、そのような者は退部しろと言うのはたやすい。しかし、山岳部が部として維持されてゆくには、山岳部自体が姿を変え、多様な人間を包みこめるようになることが求められているのである」という、従来からすればつては絶対的でもあった指向自体より高く」という、かひとつ」としてとらえられるようになるのである。

山との接し方のなかに登山活動の価値を切り拓いてゆくということはいつにかわらぬ基本であるが、接し方の重点は次第に「対象の山そのものとの関係の在り方」へとシフトし、それにつれ、部員たちにも山そのものに新鮮さがないと嘆くような気負いは薄れ、かわりに、個々人が山に対して持つ各様の思いが次第に前面に出てくるようになってきたのである。

こうした傾向は、価値の多様化という世間一般の動向と軌を一にしている。しかし、それは、重点を対象の山そのものに置き、部一丸となって目標を追うといった従来の山岳部のあり方とは相容れにくいものと言わざるを得ない。たとえば、最近の学生の議論に、〝山岳部機関論〟と〝共同体論〟の対立があるが、前者は、山岳部と

は、目的の山に登るためのパートナーと道具を提供してくれる機関であり、それ以外の組織的義務は少ない方がよいというものであり、また後者は青春の一時期を共に苦労し山行を組み立て、みを分かちあおうというものである。いわば、両極に位置する議論であるが、かつて、これほどはっきりと機関論が打ちだされたことはないだろう。

さまざまな考え方が並存し、そのすべてが期待どおりに実現されることは誠に望ましいものの、あまりにこみいった事態ではある。

そして、それだけですめば問題はない。しかし、登山には遭難という危険が常につきまとう。一旦遭難をおこせば、途端に、それは否応なく、ひとつの社会的事件になってしまう。そして、遭難のあとにはどうしても、旧来の方法で「地道に足元を見つめてゆく」ことを余儀なくされるのである。

その揚句、「一橋はOBがサラリーマンで他の大学のように現役を引っぱってゆくことができない。部員数も少なく上級生は下級生の面倒を見るので精一杯だ。だから思いきった山行はできない」といった紋切り型の宿命論に逃げ込むかと思えば、山岳部を見限って退部する者も出るのである。部誌上には、こうした現実の悪循環をめぐる幾多の議論が見られる。

これからの山岳部

これが、わずか四年間で終わる大学山岳部ではなく、社会人山岳会の場合はやや事情は異なるかもしれない。「学年」といったものにまどわされることなく、自分そのものを見つめ、自分の目的を、時間をかけてじっくりと追い求めてゆけるのかもしれない。

すると、ここで再び、「一体何のための大学山岳部なのか」ということになる。組織が存在するだけで、十分に機能していた時代は終わり、「山岳部」といえば、おのずと意味したことどもも曖昧になってしまった。

そして、さまざまな枝葉を払い、とことんつきつめて見るとき、最後に、しかもきわめて魅力的な意義を持って残るのは「多感な同世代の若人が、熾烈な自然の只中で、生死をかけて全生活を共にする」という事実ではなかろうか。今の世の中で実に類い稀となった、こうした

行為の生みだす効果、成果は一律に規定できはしない。しかし、その豊かさは疑いなく、山岳部に結集した部員たちは、すべて、漠然とではあっても、こうした指向を持っているのではなかろうか。

そして、もし、この意義すらもがひとつの考え方に過ぎないというのであれば、最早、大学山岳部の存在理由はあるまい。

逆に、部員の少数化、あるいは、上級生と下級生の相克といった、「解決」といった対応とは最早なじまない「現実」を認めつつ、なお、活動を続ける限りは、個々人の考え方が上下級生の区別なく相互に十分に理解されうる自由な雰囲気のなかで、安全を確保しつつ、このギリギリの意義を目途としてバラエティーに富んだ活動が続けられるよう工夫してゆくことが肝要であろう。

そして、その実現のためには、必ずしも旧来の組織のあり方にこだわってはいられないケースも出てこよう。生死の緊張感に満ちた自然の只中で生きるということがおのずと求めるサバイバルの技術、登攀技術、最低限必要な技術は、部外の力を頼んでも効率的に、しかも、ぬかりなく身につけることは絶対に不可欠であろう。また、部員の少なさが趣好の実現の足かせになるのであれば他の大学山岳部との相互補完的な交流も必要かもしれない。

最新の報告、一九八四年の内容は、表現上は紋切型の宿命論となっている。しかし、その世代の座談会の内容（一八六ページ）を見ると、本質はそうした表現では言い尽せない、かなり異質なものであることが分かる。いまだ言葉がないのかもしれない、あるいは言葉などはいらないのかもしれないが、より自由な新しい山岳部組織が脈動しつつあるのではなかろうか。

幸いにして一橋山岳部は自由な雰囲気を伝統的に伝えてきた。今後は二〇年の推移を踏まえたうえで自分たちの拠ってたつところをはっきりとわきまえた、旧風にとらわれぬ、はつらつたる活動が実践されることを期待したいものである。

（金子晴彦）



活動概況報告

二十有余年にわたる活動概況を、各代のリーダーの手によりリレー形式にまとめた

１９６３……２６
１９６４……２９
１９６５……３１
１９６６……３４
１９６７……３７
１９６８……４２
１９６９……４４
１９７０……４６
１９７１……４９
１９７２……５１
１９７３……５４
１９７４……５６
１９７５……５８
１９７６……６０
１９７７……６２
１９７８……６４
１９７９……６６
１９８０……６８
１９８１……７０
１９８２……７２
１９８３……７４
１９８４……７７

1963

（27人）

◎夫　彰介彦雄浩三　雄弘人充肇敏力　平洋隆尚貞男　志正平雄弘正
隆　泰道寿　泰　三溢和茂　之　俊昭信久博紀　健　晋行義

4年　川中上沢橋間和　場本島森野藤藤　崎知田藤　川　磨田藤川沼東沢
蛭竹村長中本名　半山小三小佐佐　高池石佐原平　須岡斉吉田伊吉

3年・2年・1年

（◎CL）

飛躍への手がかりをつかもうとしながら、そのたびに遭難事故をひきおこしてうちのめされる——こんなことを幾度くりかえしたことだろう。時は容赦なく過ぎ、私たちは最上級生になった。先輩の事故を次々に見せつけられながらも、さほど意気阻喪したとも見えない三年生、二年生が多数いることが、せめてもの救いだった。ここから新しい上昇エネルギーが必ずや生まれてくる——そういう期待をもって私たちは一九六三年度を迎えた。

春山合宿は横尾尾根から奥穂高岳および槍ガ岳を往復した。しかし何となく残る空しさをどうしようもない。極地法に固有の欠点によるのだろうか。下級生一人一人にいたるまで全員が精一杯動き回る——そういう山行を通じて個々人の技量を高め、経験を深めることこそが次の飛躍に向けて必要なのではないか。冬山の偵察を兼ねた五月連休の山行は、極力小人数の分散山行にしよう、気持は自然にそう固まっていった。

一方、私たちは穂高の山域に最も愛着をもっていたが、そのなかで、積雪期はおろか、夏にも稀にしか入ったことのない明神連峯に、ある種の魅力を感じつつあった。できるかぎり末端の尾根から取り付いて明神諸峰を縦走し、前穂、奥穂（できれば西穂）まで足をのばせれば、学生生活最後の雪山合宿として思い出深い山行になるだろう。それに、次代を背負う下級生にとっては絶好の訓練の場となるのではないか。私たちはこんなふうに冬山を構想していた。

しかし、五月連休山行では奥穂高岳でまたしても事故を起こし、冬山偵察の目的も

【春山】3月6～25日　蛭川他13名横尾尾根～奥穂高岳、槍ケ岳往復
【連休】①4月24～30日　竹中他5名西穂～奥穂、27日夕刻奥穂の下りで中橋スリップ、翌朝救出、30日上高地着
②①と同期間。蛭川他5名、奥穂隊の救助にあたる
【雪訓】6月6～9日　蛭川他17名明神および岳沢周辺。同時に明神東稜、東南尾根を冬山偵察のためトレース
【夏定】7月18～31日　蛭川他16名剣沢周辺
【夏縦】①8月1～4日　竹中他3名内蔵助平～棒小屋沢～爺ガ岳～針ノ木岳　②8月1～7日　小島他3名　黒薙～柳又谷～雪倉岳～白馬～唐松岳
③8月1～7日　蛭川他5名内蔵助平～平～五色～薬師～源流～鷲羽岳～湯俣尾根
【秋山】①10月17～21日　蛭川他2名荒川本谷～アスナロ沢～農鳥～北岳～バットレス三、四尾根　②10月15～21



1963. 12
明神にて

佐藤(久)　石田　原　山本(溢)　池知　蛭川　岡田　小島　佐藤(之)

ほとんど果たせぬままに終わってしまった（この経緯は『針葉樹』13号に詳細あり）。それでも、明神への手がかりを少しでも雪が残っている時期につかんでおきたいという気持から、通常谷川岳で行なわれてきた雪上訓練を、六月上旬明神周辺で行なうことにした。予定していた東面は残雪が少なく、テント場を岳沢に求め、天狗沢で新人訓練を行なうかたわら、東稜、東南尾根に各一パーティーを冬山偵察の目的で出した。

こうしてスタートからつまづいたが夏を迎えた。夏の北アルプスと言えば、主稜線には鈴なりの人また人の列、岩場でもハーケンと先人の手あかと順番待ち。大自然のふところに抱かれているという感激はともすればうすれがちである。しかも、事故と反省会のくりかえしのなかで、登山のもつロマンチシズムは見失われ、夏山はマンネリになりかねなかった。合宿には是非とも他人に会わない感激をとりこんでみたいものだ。このような動機が生まれ、夏山合宿の縦走には沢登りをとり入れることにした。すなわち一パーティーは黒薙から柳又乗越を経て、楊河原から柳又谷を遡行して白馬岳へ、もう一パーティーは黒部ルートの途中、西沢小沢出合いから棒小屋沢を遡行して主稜線に出、針ノ木岳に至る。さらに新人をつれたパーティーも、単に尾根を歩くのではなく、たとえば一ノ越に出るのに内蔵助平、黒四ダム、タンボ平を経てゆくルートをとり、さらに薬師岳からは、薬師沢出合に下って黒部の源流地帯を遡行するなど、喧騒を避けたルートを求めたのである。

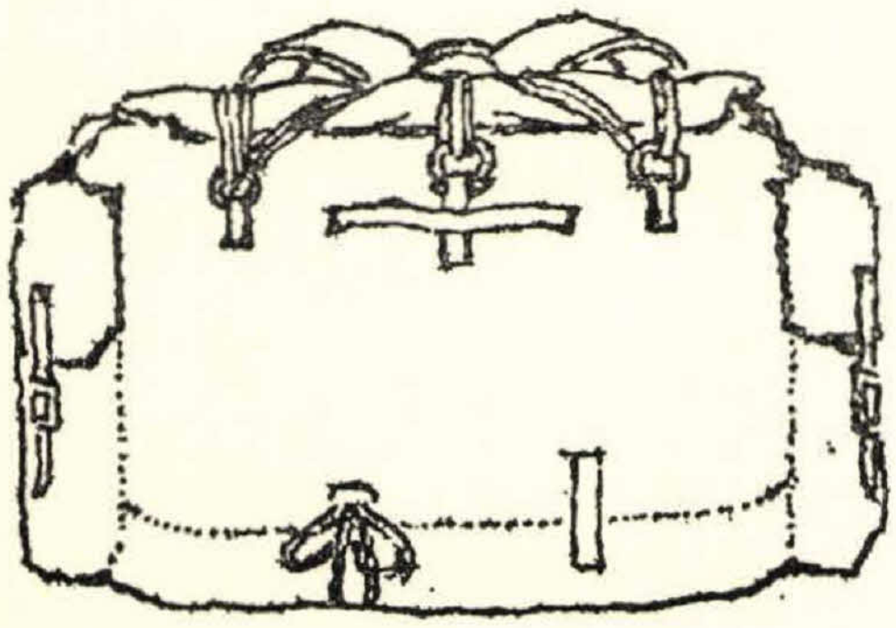
日　本間他5名　横岳峠～鋸～甲斐駒～仙丈～早川尾根～鳳凰山
③10月16～23日　長沢他2名　赤石沢源流、百間洞沢、赤石沢本流下降、奥赤石沢遡行　④10月16～22日　小島他6名　高瀬～槍～涸沢、春山偵察
【氷訓】11月16～22日　小島他17名　富士山吉田口
【冬山】12月14～27日　蛭川他9名　明神主峯東稜～前穂往復

夏の沢登りで得た新鮮な感激を忘れかねて、恒例の秋の南アルプス山行においても、従来の単なる縦走ではなく、あるパーティーは赤石沢源流地帯の遡行、また、あるパーティーは荒川谷本谷からアスナロ沢遡行などを交えた山行を楽しんだのであった。

こうして春、夏、秋を過ごし冬となった。しかしスタートでつまずいた冬山計画は、その後も何かと障害が続き（最も痛手だったのは最上級生一名ということに象徴される参加人員の減少である）、明神東南尾根から奥穂往復という計画は主峯東稜から前穂往復と大幅に縮小を余儀なくされた。そのかわり総勢九名全員で前穂の頂上を踏んでこよう——そういう気持で、十二月十四日部室を出た。

ヒョータン池にC1二張を設営したのが十六日、ラクダのコルにC2を出したのが十九日と順調に進み、二十三日には晴天を利用して四名がC2より前穂を往復した。この間、一枚岩とその前後に延一二〇〇㍍、主峰バットレスに四〇〇㍍のフィックスザイルを要した。東面のせいで強い季節風をまともにうけることは稀だったが、雪の降りしきる悪天に計五日の沈澱を強いられた。食糧からすると最後のチャンスとなった二十六日、残った五名がアタックに向かった。主稜線では強い西風が荒れ狂い、その冬最悪といってよい厳しい吹雪の中を一行は進んだが、ついに奥明神沢コルで前進を断念、そのまま撤収に移らざるをえなかった。

（蛭川隆夫）



1964

（20人）

4年　◎人和　○雄三　弘溢　肇敏　充平　洋隆　尚男　貞正　雄平　志明　已剛　浩〕
小島　和之　茂俊　昭信　久紀　博行　晋健　雅正
半場　山本　小野　佐藤　森崎　知田　藤川　原斉　藤沢　沼吉　岡中　加金　本
3年
2年
1年
〔5年

（◎CL，○SL）

春合宿に裏銀を通り常に我々と向かいあっていた北鎌を今冬の目標とされながら、偵察を出すことで今年の活動は開始された。北鎌は六十二年の冬の目置き、五月に走、黒部上の廊下下降、打込谷下降、金木戸川遡行といった計画をたて、新味を追求した。北鎌は六十二年の冬の目標とされながら、偵察を出すことで今年の活動は開始された。日高に出かけた連中は悪天による増水に大変苦しめられた。八月の末には再度ら、その夏の事故により断念されたルートでもある。

新人はわずか三人――今後が思いやられるが、五月の早川尾根、六月に奥又合宿を実施、全員が新村ルートをトレース走と力をつけていった。

他方、元気のよい三年生六人は登攀技術を向上させたいということで後立山縦走の冬山前宿を実施、全員が新村ルートをトレースし、「段階をじっくり踏んだ収穫を得の余裕をもって登れた」といった。

夏には人気の少ない横尾に定着し、滝谷登攀後、新人練成のため剱までの縦走と力をつけていった。

新人はわずか三人――今後が思いやられるが、五月の早川尾根、六月に奥又合宿を実施、全員が新村ルートをトレースし、「段階をじっくり踏んだ収穫を得の余裕をもって登れた」といった。

他方、元気のよい三年生六人は登攀技術を向上させたいということで後立山縦走の冬山前宿を実施、全員が新村ルートをトレースし、「段階をじっくり踏んだ収穫を得の余裕をもって登れた」といった。

夏には人気の少ない横尾に定着し、滝谷登攀後、新人練成のため剱までの縦走、黒部上の廊下下降、打込谷下降、金木戸川遡行といった計画をたて、新味を追求した。北鎌は六十二年の冬の目標とされながら、偵察を出すことで今年の活動は開始された。日高に出かけた連中は悪天による増水に大変苦しめられた。八月の末には再度ら、その夏の事故により断念されたルートでもある

1964.8
涸沢にて



半場
佐藤（之）
小島
三森
小野
山本

く、「〇〇の山へ行きたい」、そのうち、今現在の我々に許される山に行こう、そしてそのために必要なものを事前にできるかぎり身につけよう、しかで登山者として今後も、当の合宿のなか吸収してゆこう——そういう考え方だった。具体的な方法については数々のルートによる分散、集中形式が討議されたが、縦走形式が討議さ本、ポーラー形式を採用した。それは連続した遭難後の発展の基礎として、この合宿を何が何でも成功させなければならないという気持もあったためである。

結果は好運に恵まれ、三パーティーを槍ガ岳に送り込み、所期の目的を達成することができた。しかし、欲をいえば、多くの部員が参加する合宿においては、もう少し幅の広い目標が必要なのではないだろうか。全員がひとつのルートに集まることなく、分散しながらも全体でひとつのことを仕上げるといった方向に持ってゆかねばなるまい。反省会で出た分散合宿は今後の部活動の必然的方向であろうが、この採用にあたっては、山岳部というひとつの団体の合宿のあり方と、現在および将来の山行のあり方について充分検討する必要があろう。

（小島和人）

佐藤他3名　上の廊下へ向かうも岩苔小谷で引返す　④8月3～11日　半場他3名　新冠川～幌尻岳～エサオマントッタベツ岳～トッタベツ川～帯広
【秋山】①10月17～26日　小島他5名　北鎌冬山偵察　②10月17～23日　原他4名　小渋川～大聖寺平～三伏　③10月17～21日　三森他2名　転付峠～奥西河内沢遡行
【氷訓】11月20～22日　小島他11名　富士山吉田大沢
【冬山】12月7～26日　小島他16名　北鎌尾根

1965

（22人）

4年　◎平貞洋　○平正雄志　明巳剛　久行稔雄昭
　　俊博隆尚男　晋　行健　雅正　幸隆　海寿
　　昭信久紀　敏之三溢弘
　　高崎　知田藤川　佐藤　半場　山本
　　原池石佐平
3年　吉川沢藤沼田村藤成　武川田藤
　　吉斉田岡中加金　宮賀千佐俵
2年
1年
5年

（◎CL，○SL）

積雪期合宿の対象山域を槍、穂高に移して二年間、我々は横尾尾根（六四・冬）、明神東稜（六三・春）、北鎌尾根（六四・冬）と、この山域の残る地域で、合宿にふさわしいルートはいくらでも考えられるが、我々は、岳沢周辺の山々および穂高の岐阜県側を主な対象として検討を進めた。と同時に、この残された地域を埋めることによって、槍穂高にこだわる山登り、ひいては山域にこだわる山登りに一応の終止符を打とうと考えた。なぜならば、登山人口の急増を一つの要因として、冬でもシーズンとなると夏山なみの混雑となり、我々の求める山登りをすることが段々と困難になってきたからである。

また合宿の形態については、諸先輩がつねにその時点での最良の方法を模索されたように、我々のおかれた環境、特にメンバー構成から見て、もっともふさわしい形態を我々なりに追求しようと試みた。すなわち、相対的に上級生が多く、下級生の少ない部員構成で、積雪期の合宿を最も有効に行い得る一つの形態として、少人数パーティーによる別動隊を一部取り入れるのが適切であろうと考えたのである。

A　春合宿（岳沢周辺の山々）

我々の春合宿の計画は、隊を二つに分け、本隊一〇名は、明神岳の主稜線に極地法を展開して奥穂高を登頂し、分隊四名は西穂高から奥穂高・前穂高と縦走して本隊に合流する。その後全員で、明神岳東面の雪稜を登ろうというものであった。

三月二日に先発隊二名、三月四日に本隊一一名が東京を離れ、三月二十四日に下山するまでの約二十日間、計画をほぼ完了して終ることができた。この合宿の反省として次のようなことを挙げることができるであろう。すなわち、少人数編成の縦走隊には、偵察、ラッセル、フィックス工作、ボッカ等の効率的な行動、および、それを実施できる柔軟な機動性が肝要である、ということを我々なりに体験することができたこと。ポーラー形式をとった本隊の行動には、奥穂高登頂という目標と西穂隊への若干のサポートおよび収容という目標が、あいまいに混在し、充実感に欠けるものがあったこと。また、アプローチに採用した明神の主稜線および最南峰の主稜は、下級生の訓練に適切なルートとは言えず、結果的に、下級生の動き不足になってしまったこと。

このような反省に立って、同じようなメンバー構成で行う次の冬合宿には、できればパーティーくらいに隊を分け、それぞ

れの隊にふさわしいルートを縦走するという分散合宿の形態を目ざすこととした。その前にもたれた夏合宿は次のような内容だった。

B　夏合宿

夏合宿は七月中、下旬と八月下旬の二期に分かれたため、本来目標の体力増強、山慣れ等が十分に得られたとは言い難い。この変則形式の最大の理由は四年生の就職戦線の異常さにあったが、このため四年生の参加しない合宿の前半は安易に流れ、全く効果を上げなかった。これに対し、涸沢での定着と、一年生のための縦走を含んだ後半は天候、環境ともに恵まれ目的は八、九分通り満たすことができた。反面二年続けての涸沢入りのため、岩登りも二年生以上相当程度のルートをこなしたが、それが実力相応以上のルートも何の抵抗もなく登ってしまうという結果をもたらした。

C　冬合宿

笠ガ岳→硫黄尾根　涸沢岳西尾根→(滝谷)→横尾尾根

春合宿の反省をベースに、我々は来るべき冬合宿には、少人数パーティーによる分散形態を考えていた。それも、少人数を最大限に利用しての機動性を問うものとして縦走を目ざした。

このような分散型式の合宿をとろうとする段階で、内部に異論が全く無かったわけではなく、また若手OBからも慎重な対処を望む忠告を受けた。すなわち、分散合宿という形式にこだわり過ぎて、部の最大行事である冬合宿に全員で参加するという『部』の行事としての意味を見失い、危険を増幅し、ひいては責任の所在を不明確にするものではないか。これに対し我々の見出した結論は、合宿を計画実施するに当たって、従来全員で行って来たことを、単に少人数のパーティーに振り分けるだけなら、これほど危険なことはないであろう。しかし、各パーティーの構成員が、少人数であるがゆえに、従来以上に自分の参加する山行計画について熱心に研究し、互いに協力し、トレーニングにはげみ、万全な準備を自ら求めるならば、その危険の相当部

【春山】①3月2～24日　原他3名　西穂～奥穂～前穂～明神②隊と合流　②3月2～24日　高崎他8名　明神東面　二峰東稜　四峰東稜
【連休】①4月30日～5月6日　池知他3名　東鎌縦走　②5月4～11日　硫黄尾根冬山偵察　③5月2～5日　岡田、田沼　小太郎尾根春山偵察　④5月1～5日　高崎他2名　鳳凰三山縦走　⑤4月30日～5月4日　佐藤(久)、吉沢　涸沢岳西尾根冬山偵察
【雪訓】5月29～31日　高崎他13名マチガ沢、芝倉沢周辺
【夏縦】8月24～30日　池知他4名　黒四～五色～薬師～槍～横尾、夏定に合流
【夏定】8月24日～9月6日　高崎他5名　滝谷、奥又、屏風岩周辺
【秋山】①10月(日付不明)池知他3名　笠ガ岳～硫黄尾根　②10月17～24日　岡田他5名　三伏峠～光岳　③10月18



1965. 3
穂高にて

〈後列〉　佐藤(之)，平川，池知，田沼，佐藤(久)，吉沢，石田，原
〈前列〉　斉藤，加藤，金成，中村，高崎

分を避けることができる、というものであった。

当初の計画では三パーティーを考えたが、参加人員の関係からやむなく二パーティーにしぼらざるを得なくなった。すなわち、笠ケ岳から硫黄尾根のトレースと、涸沢岳西尾根から北穂高にいたり、滝谷第一尾根を登攀し、横尾尾根を下る、の二パーティーである。

結果は、滝谷の登攀は天候の関係で断念したものの、二パーティーの縦走は無事終えることができた。

以上三つの合宿をもって、三年間続いた槍穂高を中心とした山登りに一応終止符を打つこととした。ある山域に的を絞って、集中的に登る、というのも一つの山登りの方法であるが、登山人口が増加の一途をたどり、冬山でもトレースのない尾根を探すのが困難になった現在、全く従来とは異なった「目標」を設定し、自分達なりに満足出来るような山登りを追求するための一つのトライヤル・ステップとなりえたであろうか。

（高崎俊平）

～25日　高崎他4名　聖岳～北岳　④
10月　原他3名　白馬～烏帽子岳
【氷訓】11月末　高崎他16名
【冬山】①12月15～29日　高崎他5名
涸沢岳西稜～北穂～横尾尾根　②12月
14～24日　池知他4名　笠ガ岳～硫黄
尾根
【海外】7月21日～8月26日　丸子博之、甘利仁郎OB、佐藤之敏、カラコルム遠征先遣隊、ミール　サミール登頂

1966

（15人）

4年　岡田　健志◎
　　吉川　晋平
　　斉藤　　正
　　田沼　行雄
3年　中村　雅明
　　加藤　正巳
　　金成　　剛
2年　宮武　幸久
　　俵　　昭
　　藤原　朋信
　　賀川　隆行
1年　戸川　哲哉
　　藤浪　育夫
　　山口　慎爾
　　大田　揮久

（◎CL）

一

一九六六年度の我部の活動はその目標がはっきりと定まらず、それに対する努力の欠如が比較的早くから意識されながらも尚ズルズルと終った感がする。目標を高くかざしてその実現に努力をするという態度は、より高度な山行を目指す一橋大学山岳部の伝統である。いやむしろ岳人なら誰でもとるべき態度であると思われる。しかし、そういった努力はあくまでも現実を客観的に、正しく評価した上になされてはじめて美しく開花するのである。

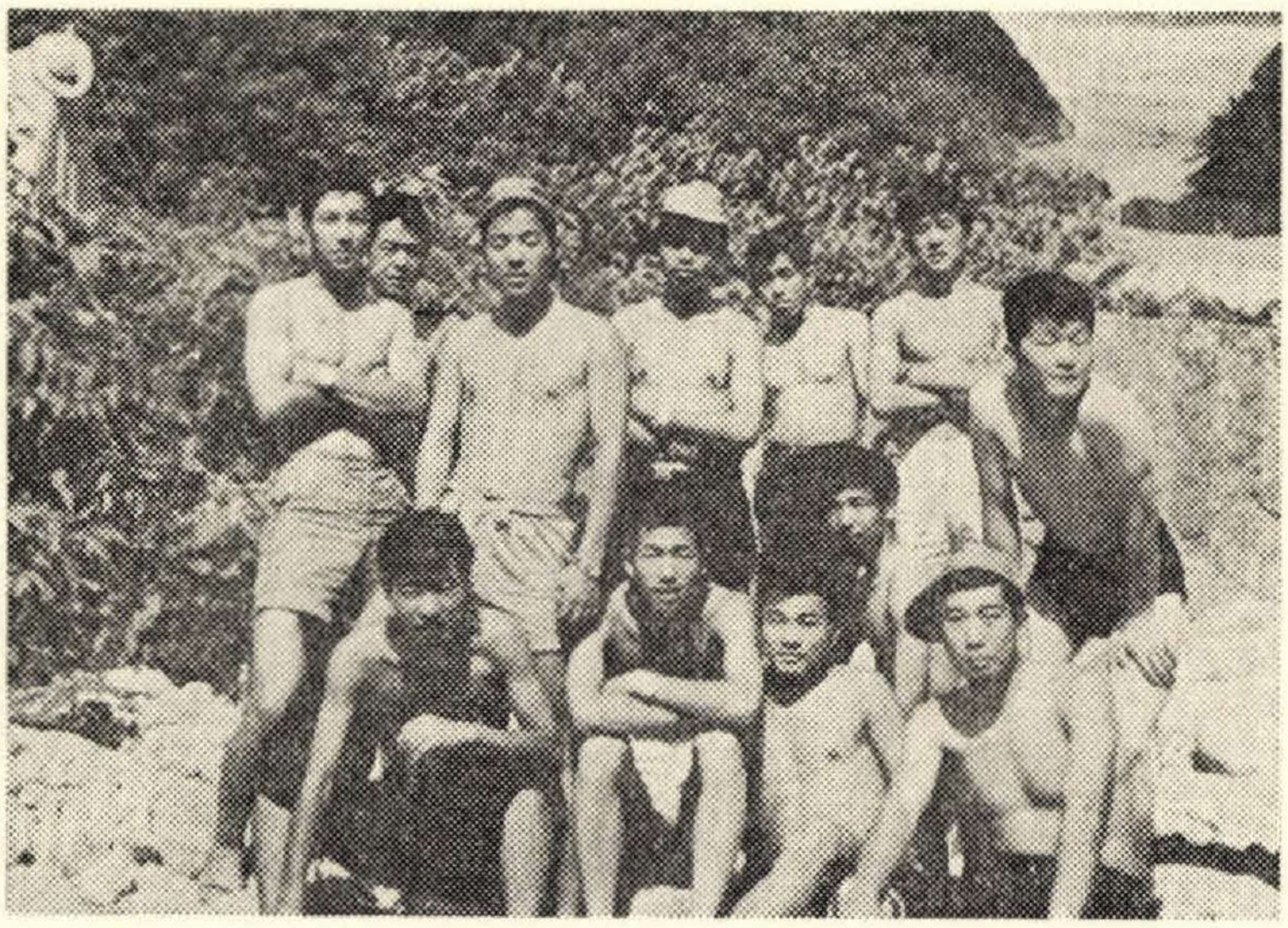
ここに我々の一年間の部活動の報告、反省を記すことにより、後から来る人達に少しでも糧とするに足ることがあると信じる。

二

我々が穂橋会からの受け継いだものはいったい何であったのか。そしてそれをどのような形で次代に残そうとしたのだろうか。

穂橋会が目指したものは、その冬合宿の計画にはっきり示されていたが、この考え方を受け継ぎ、そして基礎としながらも、我々は残念ながら年間の部の運営方針を打ち出すことができないままに春合宿を迎えてしまった。その結果、春合宿は一応は縦走による実力の養成ということを第一の目的としながらも、どうしても此処がやってみたいからという気持のない地域で行い、ただ訓練合宿的なものに終り、満足のいくものでは決してなかった。その原因としては、新リーダー間の部員構成の理解不足、部員構成の

【春山】 3月6～23日　岡田他6名
三伏～塩見～北岳～池山吊尾根　3月18日八本歯にて加藤転落足首骨折。21日より下山するも、ようやく23日、野呂川発電所にたどりついた。
【連休】 ①4月29日～5月4日　岡田他4名　鳳凰三山～早川尾根～戸台
②5月1～13日　斉藤他3名並びにOB5名　五竜岳周辺G2中央稜～鹿島槍北壁
【雪訓】 5月28～31日　岡田他9名
マチガ沢、芝倉沢周辺
【夏定】 8月1～15日　岡田他10名
剣沢周辺
【秋山】 ①10月19～30日　岡田他7名
内蔵助平～真砂尾根～立山往復、冬山偵察　②10月22～28日　中村他2名
八方尾根～五竜岳～鹿島槍～天狗尾根～大谷原、春山偵察
【氷訓】 11月20～23日　岡田他8名
富士山吉田大沢周辺
【冬山】 12月10～15日　岡田他8名



1966.7
剣二股にて

吉川　大田
賀川　斉藤
中村　戸川
田沼　山口
加藤　藤浪
岡田

急激な変化――前年は上級生から順に七、四、三だったのが我々の時は三、二、二と半数の参加者であった――および新・旧リーダー間の話し合いの不足等が挙げられようが。部員構成の変化について言えば、少ないならそれなりに満足な山行も可能なのであるが、我々の場合、それまで行ってきた上級生との山行にとらわれすぎ、実は南アルプスの縦走すら完全に成し遂げることができるかどうかわからないのであるからそのための努力が必要だ、という意識をもてなかったきらいがある。その結果、準備段階における全員一致しての協力態勢がとれなかったという反省が出た。

これらの諸点については、今までより一層の部会の充実が望まれる。

三

このような状態の下でも我々の雪の後立山連峰に対する執着は強く、五月の連休には鹿島槍へ偵察パーティーが出ることになった。しかしながらこのパーティーは合宿としての形態をとり得ず、一応三名が入山したものの偵察という目的を逸脱した行動をとり帰京しこの一年の山行にますます大きな影を投げかける結果になってしまった。そして我々は再び残雪期にこの地域に入る余裕も熱意もなくなったような状態になってしまった。

夏合宿は一応計画をこなしたものの、部員間の山行意欲は海外遠征を計画する若手諸先輩の素晴らしい意欲とは逆にますます尻すぼみとなり、一部々員のごくわずかな個人山行記録が見られたのみであった。このことは山行ばかりでなく、日常の部活動に於ても同様であった。これについては個人的な理由があると同時に部の在り方自体にも問題があると早くから指摘されていたが、これを改める具体策で効果的なものは見つからなかった。

秋に入り冬合宿の目的地の決定を迫られた我々は、一九六七年の春合宿の偵察が不充分なことも手伝い、苦しいやりくりの中

から内蔵助平へ偵察パーティーを出した。そして内蔵助平から真砂岳を経てポーラーメソッドにより剣岳登頂という多雪と悪天にもまれる地味ではあるが比較的新鮮な計画を立てた。

ポーラーメソッドを選んだのは、部員が全員一致協力して一つの山行を成し遂げるのだという意識を高めることにより、この一年間の締めくくりにすると同時に、各自が実力に相応した行動を取りえ、その結果、来年以降の山行への基礎を確立せんと考えたからであった。合宿における山行で目指すものと、部員各自が山行で目指すものとは必ずしも一致せず、これをいかにして一致させるかということは大学山岳部のほとんど宿命的とも思える程の課題である。そしてこの課題に対する一つの解答が前年に打ち出された分散形態の合宿であった。ここで我々があえてこの形態の計画を立てることを放棄し、従来通りの全体合宿を選んだのは、部の実力を厳しく評価した必然的な結果とも言えるが、それ以上に今の我部においては力を合わせて共に苦労し一つのことを成し遂げるという仲間意識が欠如しており、このことが部生活を興味の薄いものにしているのではないかという考えに基づいたためであった。

こうして冬合宿を迎えたのであるが、無惨な結果に終ったのは残念でならない。結果としての失敗自体は何事においても存在することであり、これをもってすべての点で失敗だとは言えないことは言うまでもない。問題は二度同じ失敗を繰り返すことのないよう努力し失敗をいかにして成功に結びつけるかである。冬合宿後の事後処理の努力に対して、評価が下されるのは今後の部活動においてである。

このように一九六六年、一年間は決して満足出来るものではなかった。この文章がこれからの部の山行において楽しい山行計画がどしどし立てられる際の参考になればこれに勝る喜びはない。

最後に、一九六七年六月、一橋山岳会からヒンズークシ遠征隊が出発した。学生が弱体化している時であり、一番雑事を行いうる我々がほとんど何のバックアップも出来なかったのを残念に思っている。

（岡田健志）



1967

（16人）

4年　中村　雅明◎
　　加藤　正巳○
　　金成　　剛
3年　俵　　昭久
　　宮武　幸朋
　　藤原　信行
　　賀川　隆哉
2年　戸川　哲久
　　大田　揮久
　　今泉　佳一
1年　西牟田伸介
　　前田　庸一郎
　　中村　慎彦
　　金子　晴孝
　　松尾　信悟
　　藤巻

（◎CL，○SL）

一　はじめに（春合宿まで）

一九六六年度の山岳部は混迷のうちに終始した。特に年間の総決算たる冬合宿の惨めな敗北により、我々は大きなハンディキャップを背負って春合宿に臨まねばならなかった。

冬合宿の失敗は直接的には、内蔵助平の積雪に対する認識の甘さが原因であったが、その背後にはもっと根本的な問題が横たわっていた。即ち山岳部は次に述べる二つの意味で転換期にさしかかっており、そこから生ずる様々な矛盾が失敗の遠因をなしていた。

まず第一の問題は「部員数の減少」である。登山人口が飛躍的に増加したにもかかわらず、部員数が遥減するのはすでに大学山岳部の一般的傾向となっていたが、我部にもその波が押し寄せ、二、三年前からその傾向が顕著になっていた。それがはっきりと表面化したのが六六年度であり、各学年三～四名で全部員合せても十名足らずの少数であった。それは部員相互の切磋琢磨の機会の減少である。次に述べる目標の設定にしてもこの傾向はその後も続き現在にまでおよび、部活動の上での大きな制約条件、与件となるのである。例えば冬合宿、春合宿の大事な偵察山行の機会である五月の山行が、メンバーの一人の都合から空中分解したり、メンバーのやり繰りがつかず延期になったり、以前では考えられないような事態がいとも簡単に起った。それがまた、部員のまとまりに微妙な影響をおよぼし、部の存立条件を脅かしつつあった。常に新陳代謝を繰り返す大学山岳部においては、切れ目なく活動を継続し、かつレベルアップを図るためには、次の世代に良き伝統、技術を伝えなければならない。しかし上級生が少ない時は、例えばチーフ・リーダーが自己の山登りを全て犠牲にして後輩の指導にあたるとか、上級生本位の登山で下級生の中途半端な育成に甘んずるとか、いずれにしても問題を生じやすい。さらに部員数の減少はこのように目に見えるマイナスのほかに、より深刻な問題を惹き起こしつつあった。それは部員相互の切磋琢磨の機会の減少である。次に述べる目標の設定にしても、安全の確保にしても、部員一人一人が自分達の問題として考え、議論し、またその過程でお互いを仲間として理解しあい、そこから共通の目標へ向かってのエネルギーが生み出されるのだ。部室へ行っても誰も居ないことがたり、メンバーのやり繰りがつかず延期になったり、以前では考えられないような事びもつかない。

第二の問題は「目標の喪失」である。六二年度から続いていた穂高周辺をテーマに員のまとまりに微妙な影響をした山行は六五年度の分散合宿で一応終止の存立条件を脅かしつつあっ符を打ち、次の目標を設定する必要があっ

た。しかし従来のような二～三年集中して取組むに足る新鮮な山域を捜すのは難しかった。といって山の登り方をテーマに選ぼうにも質量とも低下した部の実力からくる制約に阻まれた。鹿島槍を狙った立山周辺に目を移したり仲々焦点が定まらず、これが部員数の減少と相俟って部のまとまりを欠いた原因となっていた。

二　再出発をめざして

――杓子岳双子尾根より唐松岳および白馬三山（春季合宿）

このように部員数の減少、目標の喪失という転換期の難問を抱え、その上にベースキャンプさえも設立できずに敗退した冬山の挫折により、春合宿の性格は一つの山行理念の実現とか、新規ルートの開拓とかをはかるよりも、なによりも雪山での基礎技術の習得を目標としたトレーニング的な色彩を濃くしたものにならざるを得なかった。この時の春合宿の計画書には、「一九六五年度までの穂高山群にその対象を求めて行われた山行からえられた方向は分散形態による合宿という方向であった。しかしそれは地道な努力の積み重ねによる実力の向上をまってはじめて可能なことであった。部員数の減少とそれに加えての実力の低下という現時点においては、分散か全体かを議論する前にまず登山に対する態度の確立と基礎技術の習得をめざすことが要求される。……」と書かれている。このような考えを持って、春合宿はその対象を後立山・杓子岳双子尾根から唐松岳、白馬三山に求め、それをオーソドックスな極地法で行うことになった。すでに前年より穂高にかわる新しい目標として後立山が考えられ、双子尾根は偵察済の尾根であった。後立山には鹿島槍、爺ガ岳を中心に先輩の輝かしい足跡が印されている。その意味では後立山という対象は何ら新鮮なものでもなく、山岳部の歴史に新しいページを開くものでもなかった。しかし穂高しか知らない我々にとっては、後立山は未知の領域であり、苛酷な気象条件の下での長距離の縦走、鹿島槍を中心に東面に派生する難易さまざまの尾根の登攀は、依然として積雪期

【春山】3月4～18日　中村他7名
双子尾根～唐松岳・白馬三山
【連休】①4月28日～5月1日　金成他4名　鳳凰三山　②4月28日～5月6日　中村他3名　五竜岳～鹿島槍ガ岳～針ノ木岳～七倉岳　③5月1～6日　加藤他2名　内蔵助平～鹿島槍
【雪訓】5月26～29日　中村他8名
マチガ沢
【夏縦】①8月1～7日　加藤他2名
黒部源流～薬師沢～薬師岳　②8月15日　中村他4名　針ノ木岳～槍ガ岳～涸沢
【夏定】8月22日～9月4日　中村他8名　涸沢周辺、滝谷四尾根、ドーム北壁等
【秋山】①10月18～24日　中村他6名
転付峠～三伏峠～塩見岳～北岳　②10月21～28日　加藤他4名　八方尾根～五竜～鹿島槍～新越乗越
【プレ冬山】①11月10～14日　中村他2名　爺ガ岳～鹿島槍　②11月11～16



1967.3
白馬鑓にて

金成　大田　藤原　俵　戸川　藤浪

登山の対象とするに十分であると考えられた。したがって春合宿は何よりも基礎技術の習得という訓練合宿的性格を持つもので あったが、単に訓練にとどまらず、後立山という新しい目標への第一歩の意味を持つものであった。合宿の成功を単に計画したルートを予定の日数で無事踏破したこととするならば、この春合宿はまず成功したと言って良いであろう。しかし当初述べたようにこの合宿の主眼点が積雪期の基礎技術を習得し、自己の力を客観的に認識することにあったことを考えると、双子尾根はあまりにも短く、稜線での生活が絶対的に不足し、また天候が過去の記録に比較してあまりに順調だったことを指摘せざるを得ない。過去の記録にあらわれる後立山の天候の特徴は、不順な気候と強い風、猛烈なラッセル、テントを埋めるほどの大雪である。春合宿は、アタックの日を除いてはこのような苦しみに遭遇することなく、あっけなく目標を達成してしまった。このように後立山の厳しい気象を身をもって経験しなかったマイナスがどれほど大きかったかは後述する冬合宿でいやと言うほど思い知らされるのである。また基礎技術の習得を謳いながら、稜線にテントを張ることがなく、天狗小屋に入ってしまった計画の不備、精神的ひ弱さも反省せねばなるまい。しかしこの合宿の最大の収穫は、それまでバラバラであった部員の気持が、ささやかではあったがこの春合宿の表面的な成功によって明るくなり、再び山へ向う意欲を回復したことである。それほど過去一年間挫

日　俵他2名　弥陀ガ原～剣岳　春山偵察
【氷訓】11月22～25日　俵他11名　富士山吉田大沢
【冬山】①12月11～26日　加藤他3名　八方尾根～五竜岳～A沢のコルにて退却　②12月12～24日　中村他4名　爺ガ岳南尾根～鹿島槍往復
【海外】5月29日～8月30日　山本健一郎OB他7名　ヒンズークシュ遠征、ノーバイズノン・ゾム並びにウドレン・ゾム登頂

折の連続であった我々は成功の味に飢えていたのである。

三　冬合宿へ向かって

今にして思うと、春合宿の反省がいかに底の浅いものであったか悔まれるが、我々は再出発の第一歩を確実に踏みしめた喜びで、最終目標である冬合宿の準備にとりかかった。冬合宿は唐松岳から針ノ木岳を踏破しようとの目標が打出され、まず五月に二パーティーが偵察に出かけた。稜線の縦走が目標となったのは、後立山特有の厳しい気象条件の下で岩と雪の困難な稜線を長距離歩くことによって培われるオールラウンドな実力を身につけようと考えたからである。それはまた、将来より困難なルートを狙う布石ともなるとの期待もあった。五月上旬には中村(四)以下四名が、遠見尾根から七倉尾根までの稜線を縦走し、加藤(四)、今泉(二)で爺ガ岳南尾根、新越尾根等扇沢周辺の入、下山ルートを偵察し、冬合宿の見通しがえられた。キレットの通過等困難は予想されるものの、精鋭パーティーで機動的に歩けば稜線の縦走も成算ある。爺ガ岳南尾根からサポート隊が入山して下山ルートは新越尾根にとろう……と意欲満々であった。五月末には例年通り谷川岳雪上訓練合宿、夏合宿は前半（八月初旬）と後半（八月後半）に分け、前半は縦走、沢登り、後半は新人の縦走と上級生の岩登りを行った。合宿はほぼ予定通り消化されたが、当初述べた部員数の減少という部の構造上の弱さが露呈し、従来通りの合宿をこなすのには相当の無理があった事も見逃せない。特に次のリーダー層たる三年生のうち一人をヒンズークシュ遠征に送り出し、一人は体調を崩し夏合宿に不参加、あとの一人は一年遅れての入部で山岳部では二年生であり、この時期は四年生がフル稼動してやっと辻褄を合わせたのが実情であった。したがって冬合宿に備えて基礎体力の充実、機動力の向上に見るべきものがなかったのは悔まれる。

秋に入ってからの明るいニュースはそれまで二人だった一年生が六人に増え、その将来が期待されたことである。一方、四年生を中心にして冬山を間近に控えて、荷上げに偵察にと準備に拍車がかかった。十月には加藤（四）以下、宮武（三）、藤原（三）、今泉（二）、大田（二）の五名が八方尾根から種池まで縦走、新越尾根を下山して、縦走用の荷上げと偵察の目的を果たした。さらに十一月には中村(四)、金成(四)、今泉(二)の三名で扇沢より種池小屋に入り、鹿島槍の往復、入山ルートの爺ガ岳南尾根を下降してサポート用ルートの偵察を行った。このように偵察、荷上げを順調に終えて冬合宿を迎えることになった。

四　新しき「目標」への出発

――唐松岳より針ノ木岳（冬合宿）

「対象、唐松岳より針ノ木岳。四名より成る縦走隊が八方尾根より入山し、唐松岳を登頂後、五竜岳―鹿島槍ガ岳―爺ガ岳―岩小屋沢岳まで縦走し、そこから針ノ木岳を往復後、新越尾根を下山。なお途中、爺ガ岳南尾根より入山の五名より成るサポート隊のサポートを受ける。サポート隊は独自で鹿島槍をアタックする。」これが冬合

宿計画書に書かれている合宿の最終案である。しかしこの計画に決定するまでにはメンバーの足並が揃わず、いろいろな紆余曲折があった。コースそのものは五月の偵察山行の直後に描いた青写真とほぼ同じものであるが。その意味では冬合宿に至るまでの経過は順調であったが、合宿直前になってもメンバーが確定せず、意欲だけが先走りしてしまう構造上の弱さは覆い隠せなかった。しかし、二年生以上ほぼ全員が参加し、部の総力を結集して冬山へ向かった。その経過は別稿に詳しいが、厳冬期の唐松岳から針ノ木岳の稜線を踏破し、新しい目標への出発点にしようとする魅力ある計画も、その半ばを消化したにとどまり、結局、中途半端なままで下山せざるを得なかった。合宿の成功・失敗を安易に云々できないが、立案計画したものを実行できなかった事実は厳しくみつめる必要があろう。一週間のうち行動日が一日か、せいぜい二日しか期待できない後立山稜線では、的確な気象判断と、迅速に行動する機動力、豪雪をものともしないラッセル力、ボッカ力が要求される。それらに対して我々は余りにも非力であった。体力不足、後立山の気候・積雪に対する認識の甘さを謙虚に反省しなければならない。春合宿は雪の状態が良く、天候にも恵まれあまりに順調に終り、本当の意味での雪山の厳しさを身を以って体験しなかったこと、気象判断のマズサを反省しながらも、それを克服するために気象の研究、気象判断の訓練をするとかの地道な努力を怠っていたことがその根本的原因であった。各合宿の後の反省は決して的はずれであったとは思わない。欠けていたのは反省によって明らかにされた欠点、問題点に対して適切な解決策を見つけ、それを着実に実行し、一歩一歩高みに登っていく地道な努力、真摯な態度である。安全に対する配慮もまたしかり。翌年五月、鹿島槍ガ岳天狗尾根における遭難も、直接の原因はともかく、我々のこのような体質的な弱点が露呈したものと言えるのではないだろうか。部の力が質量ともに低下した時期において、意欲を失い後退してしまうか、意欲だけが先走り、足元を見ずに飛躍しようとあせる危険が大きいの現れであるならば、六七年度はその後者の現れであろう。この内に秘めつつ、地道にない実力と自信を身につけることが肝要である。これは部員数が少ない時は非常に難しい。しかし、これを怠った時の帰結は、その後続いた遭難が冷厳に示している。今後当分の間このような危険が常に潜在していることを念頭に置き山行を続けるべきであろう。

（中村雅明）

1968

（13人）

4年　俵　　昭◎
　　宮武　幸久○
　　藤原　朋信
3年　戸川　哲哉久
　　大田　揮佳久
　　今泉　佳
2年　西牟田伸一
　　前田　庸介
　　中村慎一郎
　　金子　晴彦
　　松尾　信孝
　　藤巻　悟
1年　中原　研

（◎CL，○SL）

一昨年の冬合宿は内蔵助平の豪雪に阻まれて失敗した。昨年は唐松から鹿島、さらには針ノ木を目指したが、悪天のため五竜で断念せざるをえなかった。二年続けての冬合宿の失敗の背景として、部員数の減少、新鮮な目標の喪失等々、〝山岳部転換期論〟が幾度も議論された。

春合宿は久方振りに人数の多い六人の新二年生を十分に動かせるべく、広大な立山弥陀ガ原経由剣岳とし、別山乗越で烈風に閉じ込められたものの無事登頂を果たした。しかしその後の反省会では、迫力に乏しく、どこかピッタリこないというのが大勢の意見で、部活動の指針と山を楽しむことについてのやや抽象的な議論が続いた。

根性とか意欲の無さ、意欲をぶつける対象の喪失、こうしたジレンマのなかで、我々は互いにもてるものをよせあって事にあたるというよりは、「登山は個人に属すべきもの」といった手前勝手な理屈を前面に出し、どこそこの山をずかで、むしろ、うまくやればるさという思いを深めらうまくやれるかというままだった。

こうした情況のなかから二つの山行計画が立てられた。一つは新人歓迎山行として穂高に出かけ、西穂独標や大滝山、蝶ガ岳に登り、そのあと上級生だけで東鎌から表銀を縦走するもの、五月の山に選んだこの山をとりあげようと岳に出かけるものだった。鹿島槍ガ岳は前年度一年間とりくみ、喜び、かつ無念の涙をのんだ山でもあり、この一年間こ

【春山】　3月5～23日　俵他11名　弥陀ガ原より剣岳
【連休】　①4月26日～5月2日　宮武他5名　上高地周辺、後②に合流　②4月25日～5月2日　俵他5名　遠見尾根～カクネ里～天狗尾根～鹿島槍往復　下山途中5月1日第一クーロアール付近で二年の中村滑落死亡
【雪訓】　6月1～3日　俵他7名　マチガ沢、芝倉沢
【夏定】　7月25～30日　俵他7名　涸沢周辺、北尾根等
【夏縦】　7月31日～8月8日　白出のコル～笠ガ岳～赤牛岳～平～針ノ木～鹿島槍
【秋山】　①10月18～24日　俵他4名　栂池～五竜～鹿島往復～遠見尾根冬山偵察　②10月18～23日　戸川、金子　大沢渡～赤石岳～荒川三山～転付峠、春山偵察
【氷訓】　11月23～25日　俵他6名　富士山吉田大沢

いう我々の気持の収束を示すものだった。

しかし、後述のとおり、鹿島槍から天狗尾根を下山途中、第一クーロアール付近で二年生の中村慎一郎君が滑落、死亡するという決定的な事故をひきおこしてしまった。

鹿島槍という目標が見えたと思った束の間の事故であった。その後、混乱した状態を立て直すべく谷川雪上訓練、前期合宿、あるいは飯豊縦走と山行を継続し、夏山では涸沢定着後、白出コル経由笠ガ岳～赤牛岳～針ノ木～鹿島槍と長大な縦走をこなし、消えかかった目標をどうにかつなぎ止めようとした。

秋には、冬の後立山と春の南アの偵察を行い、冬山は爺ガ岳南尾根より鹿島槍、針ノ木岳とした。行程は順調に進み、鹿島槍は好天を利して登頂、針ノ木岳は猛烈な吹雪の中をどうにか登頂、三年振りに冬山を成功させることができた。

しかし、死亡事故という決定的な事故の余波はその後も続くこととなった。（俵　昭）



【冬山】12月13～23日　俵他5名　爺ガ岳南尾根より鹿島槍、針ノ木岳往復

1969

（9人）

5年　宮武　幸久◎
4年　戸川　哲哉○
3年　西牟田伸一
　　金子　晴彦
　　藤巻　悟
　　松尾　信孝
2年　井草　長雄
1年　羽部　敏夫
　　勝賀瀬　崇
　　橋本　明

（◎CL，○SL）

昨年五月の事故後、夏山を前に三年二名、二年一名、一年一名の計四名が退部し、現役は四年三名、三年一名、二年四名の八名となった。そして春には四年二名が卒業し現役はわずか六名である。五年前には二十名の現役が山岳部のもとに結集し、穂高を中心に果敢な山行を続けていたことからすればあまりに急激な変化である。一体これで何ができるのか、明瞭な展望のないまま に、赤石、荒川岳を目指す春山合宿で今年は出発した。三月四日から十日間、人影のない山中で過ごしたが、帰京後の感想は意欲減退による安直な登山というものだった。

その後四月になって待望の新人が二年一名、一年三名の四名入り、現役はかろうじて二桁を数えることになった。この新人を伴い、一隊は早川尾根より甲斐駒、もう一隊は甲斐駒、鋸岳へと向かった。振り返ってみると、この二、三年南アルプスへの山行が目立つようになったが、その人気の少なさ、アプローチの短縮、新鮮さといったことがおのずとこうした活動につながってきたものと思われる。

そのうちに大学紛争は過熱の度を加え、国立の本館はバリケード封鎖されるという異常事態となった。

四年生二人という状態で冬山の目標はなかなか決められぬまま五月山行を終え、六月には雪上訓練を例年の谷川岳にかえて涸沢で実施することにした。十日間にわたって存分に穂高を歩くことができたのは収穫で、三年生は岩登りの楽しさを知ったようだった。

【春山】　3月4～14日　宮武他4名
大沢尾根より赤石、荒川岳
【連休】①4月28日～5月2日　宮武他4名　早川尾根～鳳凰三山　②4月28日～5月2日　金子他2名　甲斐駒～鋸岳
【雪訓】　5月6～16日　宮武他8名
涸沢周辺岩登り、四尾根、ドーム中央稜等
【夏山】　7月25日～8月11日　宮武他7名　剣沢定着、チンネ左稜線等、その後、槍へ向かうも豪雨のため五色で断念
【秋山】①10月7～12日　西牟田他3名　茶臼岳～北岳　②10月7～12日　金子、井草　仙丈岳～両股～北岳～農鳥岳
【氷訓】　11月29日～12月3日　金子他6名　富士山吉田大沢



1969. 5
涸沢にて

宮武
勝賀瀬
西牟田
藤巻

井草
小野田
羽部

このため夏山は自然に剣ということになり、定着後は槍ガ岳まで縦走することとした。剣では八ツ峰六峰、チンネ等の岩登りをしたが、縦走に移ると記録的な豪雨のため五色ガ原でその後の縦走を断念せざるを得ず、いかにも不十分な山行となってしまった。

このあたりから、それまでどうにかつなぎ止められていた意欲の低下が顕著となり、決められるべき冬山が決まらず、秋山は春山の偵察を兼ねて南アルプスへ二隊を送るにとどまった。ここで冬山は一応放棄というかたちになるのだが、三年を中心にどう冬山をもってゆくか検討するということで、富士山頂での幕営を含む雪上訓練が十一月二十九日～十二月三日にかけて実施された。しかし、その結果は頂上の突風の凄まじさに圧倒され、一種虚脱状態に陥り、冬山完全見送りという異例の事態となって終った。

鹿島槍の事故後の停滞というにはあまりに安易な、脈絡のない活動に終始してしまったが、部の能力の実態、山へ登る情熱の混乱といった事実からしてやむをえなかったと白状せざるをえない。

（宮武幸久）

1970

（9人）

4年　金子　晴彦◎
　　西牟田伸一○
　　藤巻　悟
3年　井草　長雄
2年　羽部　敏夫
　　勝賀瀬　崇
　　橋本　明
　　西田　研志
1年　神谷　敏行
〔5年　戸川　哲哉〕

（◎CL，○SL）

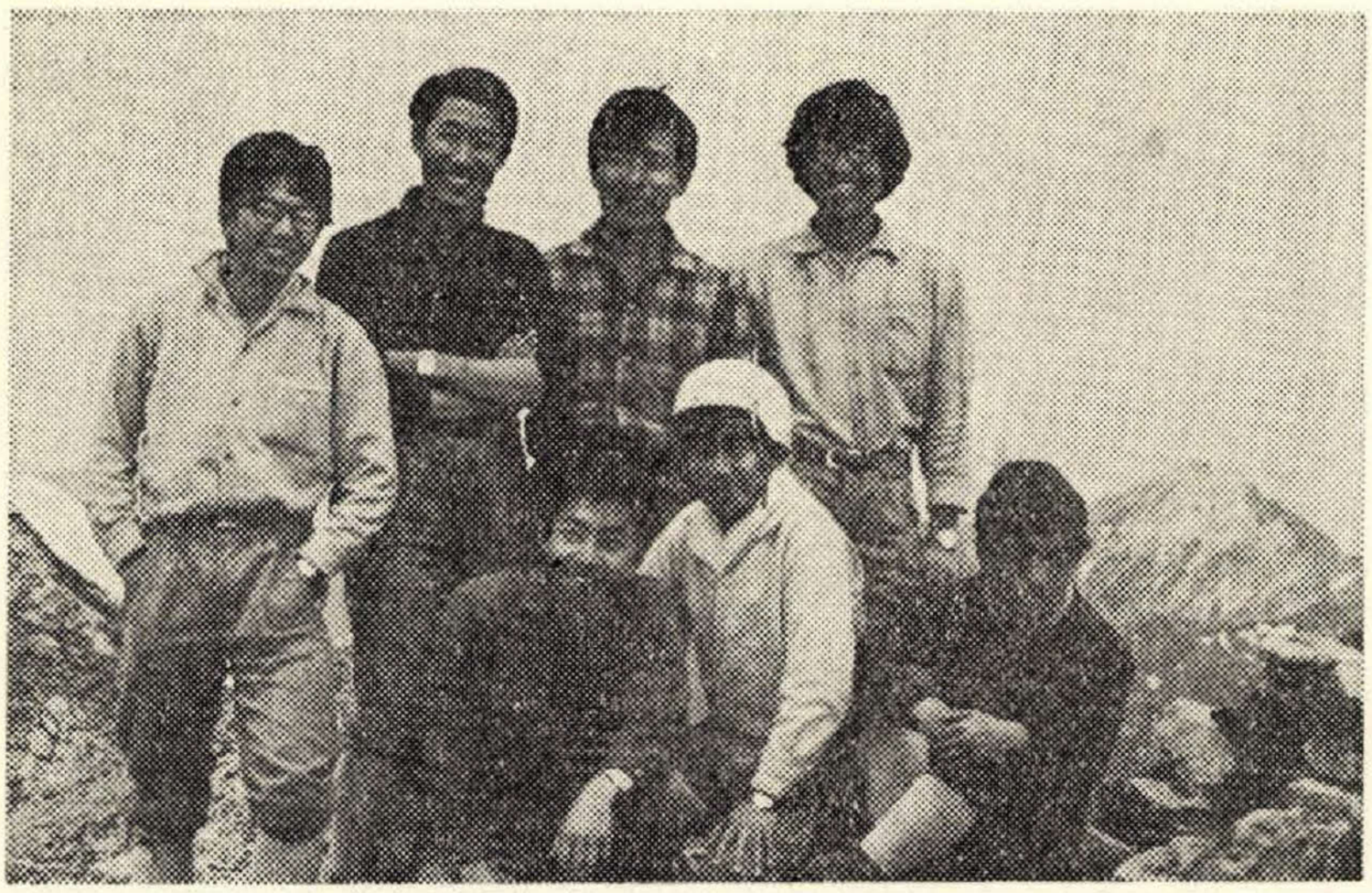
九月二日の甲斐駒での事故は部員の減少、登高意欲の衰退といった芳しからぬ状況の中で、活路を見出しかねていた当部の活動に決定的なものとなってしまった。一体、何故あのような事故にたちいたったのか、以下、各山行を逐次追って当時の状況を報告したい。

前年の冬山は実現しなかった。この経緯については活動概要にふれられているが、一年間の総決算とも言うべき冬山の放棄は、当時たった一人のリーダーよりは三人の準備と並行して「何故登るのか」との難いた我々にこそ責任があったのは明白である。易々とは手に入らない冬山のチャンスを格段惜しいとも思わずにみすみす手放したその衰弱した背景には何より登高意欲の安穏な都会の冬があった。ところが我々は春山では試すことを過ごしながら「何を求めて山に登るのか」「どういう山登りをすれば充実感を得られるのか」との議論に熱中した。登山を前提に人々の集まった山岳部で「何故登るのか」と議論することで登高意欲の衰弱そのものに目をつぶろうとした。

春山は南ア北部縦走と決まっていた。そだが、我々はそうすることで登高意欲の問解決も急がれた。その充実の理由を見た。そして、次第に、面白さと充実の要件といったものを定義付けるようになった。例えば、原始性、フリーのルート、美しさといったもので、それに従って山を選び、登り方を考えれば充実した山行ができるのではないかというのである。

しかし、この要件は春山では試すことが

【春山】　3月26日～4月4日　金子他6名
　戸台～甲斐駒～仙丈～両股～北岳～農鳥岳
【ポスト春山】　4月21～27日　金子他4名
　戸台川本谷～甲斐駒～鋸岳～尾白川本谷、坊主岩
【連休】　5月14～19日　金子他6名
　鳳凰三山～広河原～北岳バットレス岩登り中央稜等
【夏山】　7月27日～8月6日　金子他5名
　針ノ木峠～高天原、黒部上ノ廊下、源流～笠ヶ岳～錫杖岳
【ポスト夏山】　8月31日～9月5日
　金子他3名　甲斐駒黄蓮谷、赤石沢奥壁、9月2日中央壁にて転落、二年の橋本死亡
【冬山】　12月25日～1月2日　金子他5名　栂池スキー合宿



1970. 5
北岳山頂にて

西牟田
藤巻　羽部
金子　神谷
井草　橋本

できなかった。戸台川はアイスハーケンも寄せつけない結氷に阻まれ敗退し、その後の縦走はただ黙々と歩く単調なものになってしまった。このため、四月中旬に再度甲斐駒を中心に山行が組まれ、戸台川本谷、鋸、坊主岩、尾白川本谷といったルートを辿った。その結果は、甲斐駒の原始性と美しさが相俟って、面白さと充実の要件は現実に適用され、実効をあげたように思われた。

しかし、面白さと充実といった価値判断が前面に出すぎ、五月合宿では甲斐駒がいささか重荷に感じられるようになり、結局、北岳バットレスに目が転じられた。これのまま進めば甲斐駒南面の摩利支天、赤石沢奥壁が対象となることは明らかである。しかし、それにしては我々の実力はあまりに低かった。「軽やかに開かれた窓からまず一番に入ってきたのは予測に反して、重苦しい、前に往き後に退くままならぬ風だった」のである。

バットレスでは全員が快適な岩登りを経験し、そこから眺めた甲斐駒への意欲を確認した。

続く夏山は北アルプス高天原にベースを置き黒部上の廊下、源流一周遡行後、錫杖岳にベースを移し若干の岩登りをするという従来からすればきわめて変則的な形をとったが、これも原始性、あるいはフリーのルートを追った揚句の計画であった。

そして八月の末に再び甲斐駒に戻ることとなった。バットレスも夏山もこのためにあり、冬山は甲斐駒のバリエーションルートを辿るという考えが生まれつつあった。しかし、この合宿を前に当初の参加予定者は七名から四名に減り、この中にリーダー会の一名もいた。四月の甲斐駒山行に満足しながらなお面白さと充実を志向してゆくという行き方に懸念を表明したのである。

これに対し残った我々は当初の計画を縮小すれば十分山行はもてると判断して出発した。しかし、赤石沢の登攀ルートは中央稜と中央壁のどちらにするかは決めず、現地での調子を見て決定するという曖昧な形にしてしまった。そして、黄蓮谷右俣を辿った夜、中央壁登攀を決めたのである。そ

の時、赤石沢の岩壁登攀を始めるにあたり最初からいきなり核心部にとりつくこと、ボルト技術が未熟なままにボルト連打の凹角を登ること、についての考慮は、中央壁が甲斐駒集中の一段階であるという合理化であっさり片付けられてしまった。面白さと充実という方向だけで意欲は突出し、足もとは全くついてゆかなかったのである。

「部の力が質量ともに低下した時期に於ては、意欲だけが先走り、足元を見ずに飛躍しようとあせる危険が大きい。この様な時期は意欲を内に秘めつつ、地道に足元を固め、揺るぎない実力と自信を身につけることが肝要である」とのあるOBの指摘が全てを言いあてている。

中央壁の事故の詳細は別稿に詳しいがその後山岳部の活動は完全に破綻を来たすことになり、十二月にかろうじて栂池でスキー合宿をするに止まった。

（金子晴彦）



1971

（7人）

4年　井草　長雄◎
3年　羽部　敏夫○
　　西田　研志
　　上田　伸
1年　前神　直樹
　　高橋　史郎
　　工藤　英夫
5年　西牟田伸一
　　藤巻　悟
　　松尾　信孝

（◎CL，○SL）

甲斐駒赤石沢での遭難のあと、井草がリーダーを引き継いだときには、実質的に活動している部員は四人だった。

内訳をいうと、松尾は山岳部を三年になるまで続け、それからしばらく休部していて七一年正月のスキー合宿から復帰した。三年の井草は二年から部活動歴二年。入学と同時に入部した二年の羽部。七〇年秋に入部した二年の西田。四月に新入生三人を迎えたときには、この四人がいったのであるが、てみればリーダー層となった。実態は上級生の寄り集まりだったといってよい。それまで進行しつつあった部員構成の跛行性が遭難後、さらに決定的になったという感じがした。

遭難の結果、七〇年度の秋、冬、春の合宿は中止となり、わずかにスキー合宿や個人山行が行なわれたのみだった。

具体的な山行計画についてではなく、遭難の反省、今後の部活動の方針といったことが部会での主なテーマとなっていた。会議は空回わりしがちで、もっと簡単明解に山登りができないものかと誰もが一再ならず思ったことだった。まして、人数が少なかったから一人二人出席者が欠けると、まことに寂しいかぎりで、実に意気上がらぬ状態が春まで続いた。いっそのこと廃部にしてしまえとか、休部にしたらどうかという声がOBあたりからも聞こえたりして、通り暗中模索の状態だった。

そうこうしているうちに一九七一年度になり、前神、工藤、高橋の新入部員を迎え、総勢七人になると部にもようやく活気が生まれてきた。冬以降の合宿計画は決めなかったがそれまでは、これら新人を主と

【春山】3月26～29日　松尾、羽部遠見尾根にてスキー
【連休】4月28日～5月2日　井草他5名　鳳凰三山～広河原
【雪訓】6月10～14日　井草他6名　谷川岳マチガ沢、芝倉沢
【夏山】7月26日～8月9日　井草他5名　涸沢定着後剣岳まで縦走
【秋山】①10月6～10日　上田燕～槍～横尾　②10月12～14日　松尾他2名　八方尾根～唐松岳～神城
【氷訓】11月2～3日　前神、高橋、他にOB2名、富士山吉田大沢
【冬山】12月29日～1月6日　上田他3名　栂池スキー合宿



1971.6
谷川岳にて

高橋　工藤
西田　井草
松尾　前神
羽部

した合宿をしていくことにした。

しかし結局、この年は正規の手続きを経た合宿が少なかった。五月連休の新人歓迎山行、六月の谷川訓練、夏の北ア・ダイヤモンドコース縦走、リーダー以下全員が揃って行なった合宿はこの三回だけだった。他は個人山行というかたちで、一年が中心となり、OBの同行を求めて月一、二回山行をしていた。中止になった秋、冬、春の合宿も同じようにして個人山行によって代替していた。

秋以降、正式な合宿が中止になったのは、井草、羽部が活動から退いたことが直接的な理由だったが、年度初めから部活動の最終目標として冬山なり春山を具体的に考えていなかったことも失敗だった。それに、合宿を一年を基準にしたものに徹底すべきであったと今にして思う。

合宿の最終目標が決まらなかったことについて考えるのは、リーダー層が共通に分かち合っている体験があまりにわずかであったことだ。リーダー層内部で意見がくい違い、さまざまな考え方が出てくるというのは当然のことと思うが、数年間、山行を一緒にしてくれれば自ずから、あそこをやろうという互いに了解のできる目標が結晶してくる——そういう条件が可能になるのでは、部員が大学数年間のうちに一年一年と力を積み重ねていく山岳部としての登り方では、学年が欠ける、冬合宿が欠けるといった連続性が断たれることは非常にマイナスの結果を後に残すことになると痛感した。

特に最近では新入部員が少ないのだから、そういうおそれはなくならないだろう。一度入部した者が去っていかないような部、少人数であっても連続性が保たれる部、そのような部のあり方を改めて考える要があるだろう。何も知らない新人が山岳部に入ってくるときに一番期待するであろうことは、部が長年にわたって蓄積してきた経験であるのだから。

（井草長雄）

1972

(11人)

4年　上田　伸◎
　　西田　研志
　　神橋　直樹郎
　　前高　史夫
　　工藤　英史
　　兵藤　元成一
　　藤田　一慎
　　元井　誠
　　増井　博行
　　加藤　実
　　大枝　孝雄
　　松尾　信悟
　　井草　長
2年
1年
6年
5年
（◎CL）

四十七年度の山岳部の状況を書こうと思えば、まずその数カ月前の部の状態から始めねばならない。

赤石沢の遭難以来部内は諸説紛々、志気沈滞で、夏合宿まではどうやら実行できたものの、上級生の退部があいつぎ、放り出された一年生はかつての栄光あるしきたりに従って不相応な合宿計画を立ててはOBに一喝され、しょげかえるといった状況であった。その辺の事情を前期部誌はこう伝えている。

「秋合宿、池山吊尾根から転付峠までの縦走は中止。俵氏によればリーダーシップはもちろんのことメンバーシップもなくリーダーのポリシーもない状態で合宿をやってどんな意味があるのかということらしい」それでもこりず、三月の遠見から八方へのスキー縦走を企て、その結果は、「実にゆううつだ。なぜあんなにOBはうるさいのだろう。こんなことで悩んでみても何の発展性もありはしない。……OBがなんだ!!」といった調子である。

ただ上級生が退部休部していく中で、一年生にはまだ意欲は残っていた。「ぼくは来年については不安も多い反面自分の青春のかなりの部分をそれに費やしても悔いのないような希望をもっている。希望をもつことはすばらしいことだ。」「今の山岳部の危機に直面してなすべきことを知らないというか、なすべきことをやっていない自分にはがゆさを感じるが…今、我々がなすべきことはまず山ふところにとび込むことだと思う。」

四年生の秋、ボート部を引退後、山岳部

【春山】　3月17日～24日　上田他3名
遠見尾根にてスキー
【連休】　4月28日～5月7日　上田他7名、他にOB7名　内蔵助平定着、立山、剣登頂
【雪訓】　5月26日～28日　上田他8名、他にOB4名　谷川岳芝倉沢
【夏山】　7月24日～8月10日　上田他8名　剣沢定着後針ノ木峠～烏帽子岳～槍ガ岳～上高地
【秋山】　①10月3～8日　上田他3名　赤岩尾根～鹿島槍ガ岳～五竜～白馬～大池　②10月9～10日　西田他2名　上州武尊岳　③10月28日～11月1日　上田他5名　三伏峠～塩見岳往復～赤石岳～聖岳～茶臼岳
【氷訓】　11月末　富士山吉田大沢
【冬山】　12月11日～14日　上田他6名　御岳

に入部し、一年留年して本格的な冬山をやってみたいと考えていた私にとっても同感であった。合宿だ、計画書だと言うまえに、山に登りたいという自分自身の意欲に忠実に、行ける山に行くことが先決であった。

四十七年度のリーダーについては問題含みであった。私を含めて現役の四人とも山岳部歴一年足らず、しかも冬山の経験もない。結局最年長ということで私が指名された。山岳部の再建とか、リーダーシップについて、その当時深く考えたこともなく、ただ仲間に意欲が残っていること、そしてなにがなんでも冬山へ、より困難な山へという自分自身の意志だけで引受けた。しかし組織としての登山のむずかしさはその時は想像できなかった。

三月中旬の部会で四十七年度の山行計画の概要を決めた。部誌からひろうと、「まず四月から地味な山歩きを重ねて体力をつける一方、対象とすべき山域の研究をする、その結果夏合宿を終えた時点で部の実力を考慮して今年度の主目標をどこにすべきか決定する。山行計画の概要は次のとおり。

五月連休　OB合同内蔵助平剣合宿
五～六月　谷川岳雪上訓練、三国峠縦走
七～八月　剣～白馬縦走夏合宿
十月　南ア縦走、冬山偵察
十一月　富士山氷雪訓練
十二月　冬山（未定）」

入学式後新入部員が六名加わった。OBの協力を得て計画は着実に実行され、部内もにぎやかになって、やっと陰うつなムードが消えた。内蔵助平合宿はOB加藤氏に計画していただいた。大先輩の山田氏はじめOBとの和気あいあいとした中で、長期の雪上露営を通して食料、気象、医療、仕事の分担等得るところが多かった。おまけに剣の登頂にも成功した。その後個人山行があいつぎ装備も整ってきた。部会への出席、平地でのトレーニングはしつこく強要された。夏合宿はこうした盛り上りの中で一応の成功をおさめたと思われた。しかし反面、この初めての長期の縦走を通じて、一年生の一部に合宿嫌いが生じた。とくに、いわばボート部式ともいえる私の訓練第一主義、目標に向かっての個人的な意向の抑圧に対しての嫌悪感があらわになってきた。単独行、個人山行志向の風潮は一段と強まった。部としては事前調査、計画書の提出、部会での承認さえあれば大いにやるべしとしたが、部会への出席を怠ったまま思いつき登山にあこがれ、部の規制からのがれようとするものが出てきた。この傾向は次第に合宿廃止の論争に発展し、秋合宿をひかえて部内はまとまりのつかない状態となってきた。その混迷の状況を部誌からひろうと、「単に技術的訓練の不足、山行経験の不足という理由でもって合宿形態を強いるならばいつのまにか山岳部を支える個人すなわち山岳部の根底から崩壊するだろう。集団は個人が属するものとしてであるのだから。」「合宿をひとつの山行とみなして、かつ行きたい時、行きたい山へが一致した場合のみ合宿の宿命的にもつ強制はなくなるのだろう。」このような個人のさまざまな意向をすべて盛り込んだ山行計

画を部として組むことは事実上不可能で、夏合宿以降かかげた、秋合宿、富士氷雪訓練、冬山ラッセル訓練を経て磨きあげられた部の総力をもって三月の白馬登頂という年間計画は宙に浮いた形となった。私の描いた部員の総力を結集してより高くより困難な山へという組織登山の方向は、それを要求すればするほど部員個々の山に対するイメージとかけ離れていった。加えて「リーダー層が冬山に固執暴走してぼくらには何の感じもないのである。しかもことあるごとに我々はすべて二年部員であるとひらきなおる」とする批判に対して、私にはかれらを有無を言わさず目標の山に引っぱって行くだけのリーダーシップが欠けていた。何より私には苦しい鍛練を経て困難を克服し、めざす頂きに到達したときの喜びを語る経験がなかった。

次期リーダーの前神は「部員個々は山に行っているのだが、それが部の活発さに結びつかないのは何か大事なものが欠けているからだ。各人がいろいろな山行を行なうのはいい。しかしそのなかにまとまりがほしい。今の部は正直言って『寄り合い』にすぎない。ほんとにバラなのだ。同じ部室にたむろするものとして何とかせねばと思う」となげいたが、年度の山岳部の構成から一年生中心の七二年度は、部として何とかするというより部員しろさがわかってきたばかりだったのだ。こうした雰囲気の中で冬山は木曽御岳往復という形で終わった。

赤石沢以来一旦は壊滅状態となった一橋山岳部は初期のどの山岳部もそうであるように山好きの寄り合いから自然に発生する組織登山のたしかな方向性と結束を持つ時間が必要なのではないかと思われる。

（上田　伸）



1973

（14人）

4年　西田　研志
3年　前神　直樹◎　藤本　敏行○
　　稔　古橋　誠　増井　成行
　　藤田　博　藤加　元史
　　藤兵　井元　慎一　実
　　枝大　藤佐　朗活　明重　之貴　充
2年　田松　林若　浅
1年

（◎CL，○SL）

七三年から七四年にかけての活動は、ある意味で非常に恵まれた環境下にあった。一年前の上田リーダーの下から部内には新しい気持での再出発という雰囲気が生まれつつあったが、七三年になると、七〇年の遭難を知らない部員ばかりとなり、沈滞ムードからかなり解き放たれた新しい考え方ができるようになったのである。

しかし、新時代とは言え、むしろ『針葉樹』一～十三号に現われている部活動に戻したいという志向が強く、活動の基準には「まず第一に山行を」という単純明解な目標を置いた。

春山合宿は栂池から白馬三山往復とした。が三年生一名、二年生四名というアンバランスな構成のうえ、冬山経験がほとんどないという状態で、まさに冬山への展望のった。

五月山行は本来であれば冬山への展望のうえに計画すべきではあったが、漠然と槍ガ岳周辺ということがあり、また五月山行だけで完結してもよかろうという思いもあり、表銀座縦走とした。大天井から槍ガ岳往復には一六時間ほどかかり、決して余裕ある山行ではなかったが、春に引き続いての成功でようやく部活動の方向性が見えるようになってきた。

我々はこれまでの沈滞の原因は「実際の山行不足」にあったと考え、部員が合宿以外にもどしどし個人山行を計画するような雰囲気づくりをした。しかしながら、冬あるいは春の合宿に焦点をあて、一年間の合宿をそれに向けるという方法はとられなかった。数多くの山行はなされるものの、そ

【春山】　3月13～22日　前神他4名
（二年と一年のみ）　栂池～白馬三山往復
【連休】　5月1～5日　前神他3名
燕岳～槍ガ岳～蝶ガ岳
【雪訓】　5月26～28日　前神他9名
谷川岳マチガ沢
【夏定】　7月19～30日　前神他9名
涸沢周辺　ジャン飛驒尾根、滝谷三尾根等
【夏縦】　①7月31日～8月8日　前神他3名　槍ガ岳～東沢～剣岳　②7月31日～8月4日　藤本他3名　槍ガ岳～裏銀～烏帽子岳
【秋山】　①10月20～24日　前神他1名
荒川三山～三伏峠～農鳥岳　②11月1～7日前神他2名　高嵐尾根～水晶岳～槍ガ岳～燕岳
【氷訓】　11月23～25日　前神他6名
富士山
【冬山】　12月16～25日　前神他7名
燕岳～西岳～槍ガ岳をねらうも敗退



1973.7
涸沢にて

藤田（OB）金子
前神　藤本
松田　若林
加藤　兵藤
佐藤

れらがある一点に集中することはなく、むしろ拡散しがちであった。そして、冬・春合宿をどうにかやりについての問題は、夏、結局、訓練的色終えたころから顕在化し、従来彩をもつ合宿（春と冬の雪上訓練および夏合宿）以外は合宿をもたないという、従来とはきわめて様子の異なる結論を出し、冬山を迎えた。

計画は東鎌尾根から槍ガ岳往復という、春山からすればかなりレベルアップしたものであったが、わずかの好天を逃し、水俣乗越の先から撤退するという惨澹たる失敗に終わった。しかし、我々リーダー層がまだ三年であったことから、この失敗をさほど深刻に受け止める雰囲気はなく、次の春合宿で頑張ろうと素直に諦めることができた。

（前神直樹）

1974

（13人）

4年　◎樹　直
　　神　前　○行　敏
　　本　藤　稔
　　橋　古　行　史　一
3年　藤　加　史　博　元
　　井　兵　慎　元　一
　　田　元　成　藤　充
　　田　浅　朗　佐　藤
　　林　松　之　若　近
　　牧　坂　泰　実　利
2年
1年

（◎CL，○SL）

七四年の春山は三俣蓮華岳付近と決まり、一年生も全員参加することから高嵐尾根を登り、ベースキャンプをワリモ乗越に設け、黒部五郎岳および赤牛を目指すこととした。黒部五郎にはスキーを使って行くことにした。好天に恵まれてこの合宿は成功し、四月の初旬には北尾根より前穂、五月は分散形式とし甲斐駒、鋸岳、上越の荒沢岳～八海山、南アの荒川三山～赤石岳と三隊を出すことができた。

活動としては前年の「まず第一に山行を」という方針を一歩進め、合宿を最低限にしぼり個人山行を重視するという方針をとった。しかし冬山については、前年の失敗を繰り返すまいということで前広に計画に入り、厳冬期の槍ガ岳登頂を目指すことで基本的にまとまった。

夏山は前年同様週沢定着とし、後半の縦走は北アルプスに限定せず、新人を連れた裏銀縦走、南アルプスの野呂川右俣～大井川東俣～奥西河内沢～小渋川、北海道日高のコイボクシュシピチャリ川～カムイエクウチカウシ～エサオマントッタベツ～幌尻岳～トッタベツ川の秋には岩登り、沢かなりのパーティーで四年の総決算として穂縦走～横尾尾根下した。この二年間の山かく数多くの山行を区切りの重要な山行を下回らない、より白いということにも行を計画することで何とか部活動を活性

【春山】　3月8～19日　前神他6名
高嵐尾根より黒部源流、雲の平、赤牛岳、黒部五郎
【連休】①藤本他4名　甲斐駒鋸岳
②前神他3名　上越荒沢岳～八海山
③元井他3名　荒川三山～赤石岳
【夏山】　7月19日～8月8日　前神他9名　週沢定着後縦走　①裏銀～鹿島槍ケ岳　②野呂川右俣～奥西河内沢～小渋川　③日高カムイエクウチカウシ
【秋山】①10月9～12日　前神他1名
横尾尾根～槍ガ岳～鏡平　②10月22～27日　前神他3名　茶臼岳～赤石岳～塩見岳～北岳
【氷訓】　11月末　富士山吉田大沢　前神他7名
【冬山】　12月16～25日　前神他7名
弓折岳南尾根～笠ガ岳～槍ガ岳　北穂～横尾南尾根

化できると考えてきたし、事実そうだった。何もない一から始めた我々にとって、この七四年の冬山はかなり高度な山行に思えたが、それまでの上りの調子から何とかやれるような気がしていたのである。

幸いにして天候にも恵まれ、一日の沈滞だけで、北穂には二パーティーを出して冬山は無事終了した。途中問題がなくもなかったが久方振りの冬山成功に我々は素直に喜んだ。

最後の冬山はこうして終わったが、この二年ともすれば山行回数第一主義で、求心的な部活動が展開できず、拡散的な活動に終始した。この間、冬山計画を練る段階で上部リーダー層のなかから退部者が出たが、これはこうした活動の今後についての突きつめた議論ができなかったためであり、今後の課題であろうと思われる。

（前神直樹）

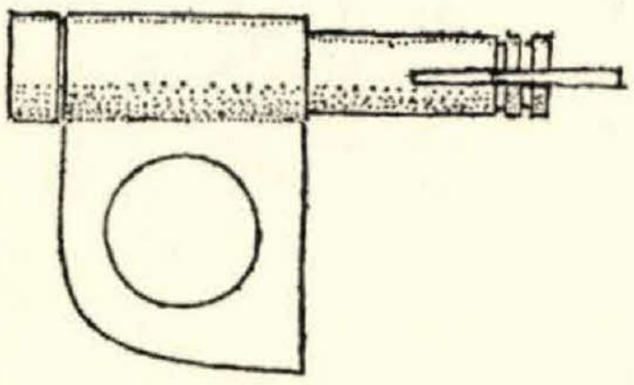
最新登山装備事情（その1）

クライミング・シューズ

一切の人工的手段を排し、自己の肉体のみを駆使して岩を攀じるフリー・クライミングではフラット・ソールが主流。その軽さと岩とのバッグンのフリクションが、より小さなスタンスでのより大胆な動きを可能にした。EB、アゾロなど外国製品は日本人には痛いほどつま先が細いが、最近はモンベル、ゴローから日本人の足型に合ったものも出されている。岩登りがうまくなったのは靴のせいか思わず悩んでしまう。

ナッツ類

岩を極力傷つけずに、というクリーン・クライミングの要請から、従来のハーケン、ボルトに代わって生まれたのがナッツ（チョック）。要するに岩の割れ目にはさんでつくる人工的な支点だが、ハーケン、ボルトとちがって容易に回収できる。最近では、どんな形状のクラックにも合うという画期的なものが出た。その名もフレンズ。しかしこれはひじょうに高価で、我々㊧ではお友達になれない。すぐそばに残置ハーケンがあるのにわざわざナッツを使おうとして、クラックにあったものをさがしているうちに力尽きて墜ちるという場合が多々ある。クリーン・クライミングは㊧でなければできない。



1975

（11人）

4年　◎行　博
　　○史　元
　　　充　朗
　　　活　明
　　　重　之
　　　貴　泰
3年　　実　利
　　　彦　一
　　　隆　周
　　　一　直
2年　　樹　敏
　　　行
1年
5年

加藤
兵藤
浅田
佐藤
松田
若林
近藤
坂牧
永戸
神野
佐藤
前神
本
前藤

（◎CL，○SL）

七十年の遭難以後、部員数は一時増加したものの、最近では十名前後のメンバーとなっている。こうした傾向は他大学でも見られるところであるが当部の場合この影響、部員への負担の重さは最近とみに大きな障害となってきている。しかも、残念なことに小人数であることの利点（部員相互の結束等）ははかられることなく、部員が四散してしまう傾向が拡大している。七五年のリーダーを引き継いだ我々にとっての課題はこうした障害を乗り越え、全部員が結束された形での山行を実践してゆくことであった。

このために、当初の部の実力では困難と思われた冬山の山域を年度初めに設定し、それの実現のために年間の山行計画を組みたてていくという昨年とは異るオーソドックスな手法をとることとした。偵察山行、訓練山行、夏合宿はそれぞれ一応の成果を収め、その積み重ねの上に、当初の目標であった積雪期の後立山（五竜岳～爺ガ岳）も成功のうちに終った。

相次いだ事故、遭難、それに由来する部の断絶、沈滞からぬけ出す為に、ともかくも山行を数多く実践することで、部の技術レベルを高めようという意識的かつ、より意識的な課題はある程度解決されたと思われる。しかし、一定程度の山行が組めるようになったとはいえ、そこには土台の浅さからくるもろさが感じられる。今後空間的拡がりをもつ山行を創造するためには日常的積み重ねによる土台の構築と、それをバネにした質的向上をはからねばならない段階に来ていると言えるのである。そ

【春山】3月10～19日　加藤他6名
光岳～赤石岳～西沢渡
【連休】4月27日～5月2日　加藤他10名　白馬大池～白馬～唐松～五竜～鹿島槍～爺ガ岳
【雪訓】5月23～25日　加藤他9名　谷川岳芝倉沢、マチガ沢
【夏定】7月19～28日　加藤他12名　剣沢周辺、チンネ左稜線等
【夏縦】①7月28日～8月2日　加藤他4名　薬師岳～黒部五郎岳～赤牛岳～東沢出合～針ノ木峠　②8月4～12日　兵藤他3名　日高および大雪山系
【氷訓】11月21～24日　加藤他8名　木曽御岳
【冬山】12月11～21日　加藤他9名遠見尾根～五竜、鹿島槍ガ岳、爺ガ岳
【海外】9月27日　五年生、前神、藤本　インドヒマラヤ、ハヌマンティバ登頂

れがなされないならば復興した当部もやがて部員の少なさも手伝って先細る運命にあるだろう。いかにして内からの強固さを確立し、新しい方向を創造するか、それが今後の課題である。

（加藤博行）

■部誌より

春合宿から帰って以来、ずっと一橋山岳部のこれまでの部誌、山行計画等読み続けた。純技術的、体力的見地から見た時、今の山岳部は、個々人で差はあろうが、それ程ひどいとは思わなかった。問題は精神面の方である。まず部活動への参加の仕方が現在の部においては安易であるように思う。個人の山行への取り組み方、部員としての責任に対する認識等、すべて易きに流れている。（中略）次に、ひとつひとつの山行の積み重ねが過去においては、ある一貫した考えのもとで行われていたということ。そして特に反省や記録を着実に行っていたということ。反省においては、単なる感想ではなく次の目標に向っての創造的な話し合いが展開され、記録面では、山行への取り組む姿勢の記述から始まって、計画書、報告書にいたるまでいいかげんにしていない。それはとりもなおさず、当時の部活動（一九六八年頃まで）の真剣さを表わしていると思う。

（加藤）

＊

冬合宿の反省部会。全体の感想として「充実していたが、沈の連続にはめいった」に代表された。年間の実力がものをいった」に代表されるように厳しいながらも、手応えのある山行であったとの評が多かった。ルートに関しては、全員で登った五竜の途中、深雪の急斜面で、通過に長時間を要した点が、問題点として指摘された。また下山に際しては、昨年度に続いて誤って支尾根に降りた点が批判された。その他、食糧に関しては、デポをすることなしに、超軽量化、簡素化に成功したこと。気象では、完全な晴天は一日もなかったが、日本海低気圧通過に際して発生する疑似好天が、有効であったこと、等が各担当者より指摘された。全体として、事前の準備を充分行ない、山行中も皆の力を結集してやれたとの意見があった。

年間の反省として、年間の計画が滞りなく遂行されたこと。縦走だけでなく、もっとバラエティーに富んだ山行を計画すべきであった。トレーニングを計画的にきちんと行なうべきだった」等々の意見が提起された。本年度の活動も、この日の部会をもって終りとなった。

1976

（13人）

4年　◎明　重　松田
　　○朗　活　佐藤
　　　充　　浅田
　　　泰　近藤
3年　彦　永戸
　　隆　神野
2年　一　佐藤
　　周　落合
1年　一　大慶
　　誠　順　酒井
　　郎　浩　中西
　　三　茂　引地
　　真　裕　米田
〔5年　史〕　篤　元　兵藤

（◎CL，○SL）

七五年ですでにその兆しの現われていた部員数の減少傾向は、七六年にはさらに顕著となり、クラブの中堅層である三年部員の不足をきたした。このため、下級生の養成に上級生の力がそがれ、上級生の登高意欲は充分に満たせなくなり、しかも上級生の不足から、下級生に対しても必要以上の負担を強いることにもなった。

春山は天狗のコルをベースにして、奥穂、前穂をアタックしようとするものであったがメンバーは三年三人、二年二人、一年一人という構成で、一年を加えたのは次期を継ぐ層として、技術、体力の養成を考えたためである。しかし、結果的には西穂の稜線は高度すぎた。一番無理がないと思われる計画は三年、二年だけで縦走することであったが下級生の養成を考えるとそこまで思い切れなかったのは失敗した。

ここで我々は部員の少数化と、それに見合った活動方針を検討すべきであったが、夏山は新人の技術、体力の養成と、上級生が岩登りを楽しむという二つの方針のもとに行なわれた。しかし、この二つの目的は相矛盾するものであり、結局それは上、下級生どちらもが合宿に対して不満を残すことになったのである。

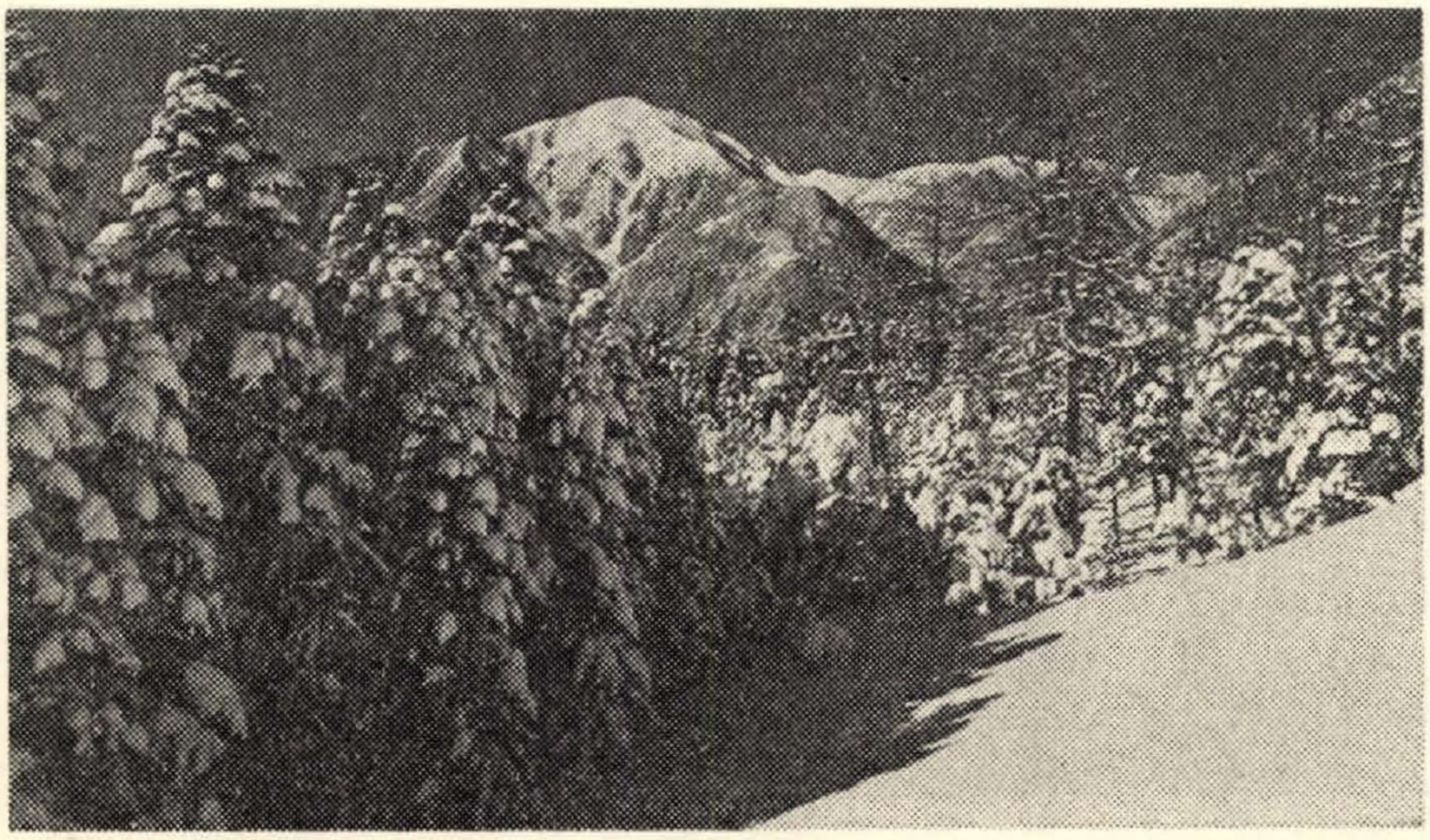
夏合宿後かなりの部員が退部したがこれは上述のような活動方針の混乱と、そのなかで蓄積された部員の不満が一挙にはき出された結果ではなかったかと思う。そして、冬山合宿の直前に部員少数化は行きつく所まで行ってしまった。つまり、三年部員がいなくなってしまったのである。

【春山】3月9～20日　松田他5名
西穂西稜より奥穂、前穂往復を目指すもロバの耳で敗退
【連休】①4月28日～5月2日　松田他14名　北鎌尾根～北穂～横尾　②4月28日～5月2日　浅田他2名　岳沢周辺　③5月1～5日　徳本峠より入山、北穂東稜、蝶ガ岳等
【雪訓】5月21～24日　松田他11名
OB2名　マチガ沢、芝倉沢
【夏定】7月18～30日　松田他12名
涸沢定着、滝谷、クラック・第一尾根等
【夏縦】7月31～8月7日　松田他7名　槍ガ岳～祖父岳～薬師峠～有峰
【秋山】10月22～30日　佐藤（周）他3名　前期合宿、茶臼岳～聖岳～赤石岳～塩見岳～北岳
【氷訓】11月20～23日　松田他7名
富士山吉田大沢
【冬山】12月11～17日　松田他6名
白山

そこで冬山合宿の目標は新人の養成に重点を置き、従来からみれば相当レベルの低いものとした。ところが新人のために立てたつもりの計画は、当の新人たちにとってもいまひとつ物足りないものとなってしまった。上級生が意欲を燃やせない山行は下級生にしても面白くはないのである。

以上を要約すれば、この一年間は、部員の少数化↓下級生の養成と上級生の登高意欲の矛盾↓全部員の不満蓄積↓退部者増加↓部員の少数化、という悪循環の過程であった。これを一体どう打破してゆけばよいのか。我々は従来の水準、方法に固執するあまり、結局あぶはちとらずに終わってしまったが今後はこの問題に正面から取り組んで欲しい。

（松田重明）



1977

（9人）

4年　◎○泰隆　近藤
3年　一史　神野
　　周寛　佐藤
2年　茂真　岡部
　　裕篤　中西
　　美由　引地
　　治雄　米田
1年　石川
　　吉田

（◎CL，○SL）

前年のリーダー層が懸念していたとおり、当年は新四年生一人、三年生二人という形でスタートすることになった。しかも四年生は個人的理由で六月まで休部しており当初は確固たる通年の目標といったものは持ちえなかった。

しかし、若手部員のなかに岩壁登攀を指向する者があり、個人山行としてのゲレンデ通い、岩登り山行が活発に行なわれるようになり、七月に入って冬山は剣岳という合意が生まれた。山岳部の歴史の中で剣岳においては左稜線冬期初登攀等の輝かしい記録があるものの十二月の当山域での諸先輩の足跡を見いだすことはできなかった。また、積雪期入山の記録も十年余も前のもので、我々の目に「真白き剣岳」はとりわけ新鮮に写ったのである。

夏は剣岳真砂沢BCを中心に定着、小縦走で十日、その後穂高まで縦走。さらに北穂南稜テラスをBCとし滝谷を登攀し、全員が基礎的な体力と岩登り技術を習得した。

秋に入り、二回にわたる偵察山行を踏まえ部の実力、構成員等を勘案し、再検討のうえ、御岳山における氷雪訓練を経て冬山を迎えた。

しかし、結果は残念なことに剣御前小屋で七日間風雪に閉じ込められる羽目になり、終に剣の頂上に到達することができなかった。天気が悪すぎたとは弁解にすぎないが習熟に励んだザイル、アイゼンワークを実践できず持てる力を発揮するチャンスのないままに敗退を余儀なくされてしまった。

【春山】3月7～16日　神野他4名
　栂池～白馬岳
【連休】5月2～3日　神野他5名
　鳳凰三山
【雪訓】5月27～29日　神野他5名
　一ノ倉沢、芝倉沢
【三ツ峠岩登り】7月6～8日　近藤他7名
【夏定】7月20～30日　近藤他6名
　剣岳、真砂沢、チンネ北条、新村等
【夏縦】①7月30日～8月5日　近藤他2名　五色ガ原～雲の平～槍ガ岳
　②7月30日～8月5日　神野他2名　平～東沢～雲の平～槍ガ岳
【秋山】①10月18～20日　神野他2名　猿倉～鑓温泉～唐松岳～五竜　②10月22～24日　佐藤他2名　黒四～平蔵コル～剣～早月尾根　③11月6～9日　近藤他3名　奥大日尾根
【氷訓】11月23～26日　近藤他8名　木曽御岳
【冬山】12月10～24日　近藤他6名



1977. 冬合宿

奥大日山頂上にて

岡　米　近　吉
部　田　藤　田
神　野　佐　藤（周）
　　田　中　西

しかし、強烈な剣の風雪を自ら体験したことは今後の部活動に何らかのプラスとなり、また刺激となったものと確信している。

なお、この年には夏山合宿を海外でという意気込みからアフガニスタン、シャー・イ・アンジュマン遠征の計画が検討され、また、佐藤(活)、松田の両OBがアフリカケニヤ山へと向かった。（近藤　泰）

■麻雀沈

剣御前の小屋にもぐり込んでからは、連日の猛吹雪が吹き荒れ、為す術もなく8日間の沈澱生活を強いられた。

初めの2、3日はそれでもとりとめのない話をしたり、二年部員のHが敢えて持参したカセットレコーダーをくり返し聞いたりして暇つぶしに精を出していたが、そのうちに、何とも云えぬ不安感が、全員を押し包んできた。食い延ばしをするために、食糧制限も始められ、空腹感も相伴って、精神的プレッシャーも絶頂に近づいてきた。

奥大日尾根より剣を目指すも剣御前で敗退

【海外】8月13日　五年の松田、佐藤(活)ケニヤ山レナナ峰に登頂

後日、ある人間から〝剣小屋のゴミ箱で手製の紙麻雀を見つけたが、暇な人間もいるものだ〟と嘆息まじりに聞かされたが、近藤リーダー以下全員で計画書を切り刻んだのは、果たして沈澱開始後、何日目だったのか。（神野）

1978

（17人）

4年　神野　隆◎
　　佐藤　周一○
　　岡部　寛史
　　西地　茂真
　　米田　篤裕
3年　小林　修
　　多田　由美
　　吉田　雄治
　　黒田　彰彦介
　　田中　賢幸
　　中村　宜浩士
　　土方　英一郎
　　萬濃　英士
　　八尾草一郎
　　谷津　範之
〔院生　MOITENI CORRADO〕

（◎CL，○SL）

当年の部活動を省みるとき、我々は春と夏に連続して起きた滑落と落石による事故をさけて通ることはできない。そして、今にして思えばこれらの事故を引き起こす素地が活動当初から山岳部をむしばんでいたと考えられる。つまり、部活動を展開するにあたっての実動部員数は、新四年生二名、三年生三名という構成で最低限の部活動を維持するにも心寂しいものであった。また、前年から進めていたアフガニスタンでの夏合宿計画が、資金面、日程等種々の事情から中断するにおよび部内には目標を喪失した無気力感が蔓延していた。

もちろん、これらをそのまま二つの事故の原因に結びつけることは無理があろう。しかし、限られた人数と多くの制約の下、決まりきった合宿をくり返すことは、本来創造的であるべき山登りという行為を面白味のないものにしているのではなかろうか。たとえば昨年の冬にはA山という山をやった。だから今年はB山だ、そしてB山という山が登れなければ今年は実力低下だという評価を受ける……といった一連の指向が部内には古くからある。

しかし、山に対する価値観が、個々において多様化した今、絶対的な尺度をもって、山岳部の活動を定義してゆくのは無意味ではなかろうか。上昇志向をもたない人間、より困難な山を登りたくない人間、そのような者は退部しろ、と言うのはたやすい。しかし、山岳部自体が姿を変え、多様な人間を包み込めるようになることが求められているのである。

【春山】　3月11～15日　神野他4名
転付峠～千枚岳～悪沢岳　14日、悪沢岳西面の斜面で三年中西が滑落、15日に自衛隊ヘリコプターで救出される
【連休】　4月28～29日　神野他15名
渋の湯～白駒池～麦草峠
【雪訓】　5月27日～6月1日　神野他14名
【三ツ峠岩登り】　7月4～6日　神野他12名
【夏山】　7月20～30日　神野他12名
涸沢定着滝谷三尾根等　28日四峰東南面で三年の岡部が落石を受け、29日ヘリコプターで救出
【秋山】　10月14～21日　小林他7名
前期合宿　茶臼岳～聖岳～塩見岳～北岳
【氷訓】　11月25～27日　神野他11名
富士山吉田大沢
【冬山】　12月15～24日　神野他9名
風吹大池～白馬大池～白馬岳往復

山登りという遊びは、本来、自由で、創造的で、自然発生的なものであるはずだ。古い因習を打ち捨てて、原点に立ち戻り、夢を追いかける登山を考えてみる時期だと思う。

（神野　隆）

● 最新登山装備事情（その2）●

新素材（ゴアテックスなど）

防水性と透湿性という相反する機能を兼ね備えた新素材を使った雨具、ヤッケ、シュラフカバーなどが大流行。最新のものは、シームレス加工によって縫い目からの水の浸透をもシャットアウトしている。しかしこれも余りに高い。我々㊐に手が出るのはせいぜいシュラフカバーくらい。

たまに新素材の雨具を買うのがいるとさあ大変。ちょっとでもヤブがかすめると前を歩くやつをののしり、雪訓などやるわけがない。㊎はゴアを使いこなすのだろうが、㊐は悲しいことにゴアに使われてしまうのだ。

テント

登山用品の流行の波から比較的遠く離れている一橋山岳部でも、ビニロン製のウィンパー型テントはもはや完全に前世紀の遺物と化した。今はエスパース、ダンロップなどのフライシートつきドーム型テントの時代だ。

居住性はそれほど変わらないだろうが、防水性は格段の進歩を示し、何よりも設営の簡便さがうれしい。ただし張り綱のないこと、ポールの構造などから、耐風性にやや難がある。最近ではテントにも前述の新素材が生かされ、フライが不要なほどに防水性が向上している。

住居がステータス・シンボルである以上、テントに㊎と㊐があっても何の不思議もないのだろう。

1979

（14人）

4年　◎引地　真史
　　岡部　寛茂
　　中西　裕篤
　　米田　修○
3年　小林　介賢
2年　田中　幸宜
　　中村　浩
　　土方　英士
　　萬濃　範之
　　谷津　克彦
　　宮下　晃和
1年　岡部　敬三
　　竹若　淳一
　　吉田　

（◎CL，○SL）

この年の課題は前年の二度にわたる事故の反省に基づく「地道な山登り」を具体化し、発展させることであった。

そのためにはまず下界における日常活動のあり方に着目し、次を実践することとした。

(1) 「棚おろし合宿」の実施。部室内の資料整理のために二月に行なった。部室で三日間合宿し、図書、他山岳部の計画書、報告書、その他資料の分類整理、索引作成等を行なった。同時に、部室の整理もした。

(2) 山行報告書作成の強化と出欠チェック

(3) 日常トレーニング励行

(4) 救出技術　救急技術の習得

これらは、それまで我々が無関心であったが重要なものであり、今後も着実に継続していってもらいたい。

さて、この年は新一年生二年五名でスタート、四月には若干の新人を迎えた。リーダー層はきわめて薄く下級生を中心とした山行をするしかなく、八〇年以降の飛躍のための基礎を築くことが目的となった。

しかし、八〇年以降の目標が部全体として示されることはなく、個々の山行は場あたり的で、合宿形態は過去の合宿をなぞるだけに終ったように思われる。力量の到達度を計れるような山行も無く、部のレベルに確信が持てず、不安と不満を同時につくり出すことになってしまった。これは冬山、および、八〇年の春山の計画段階での混乱に結びついた。

【春山】　3月12～19日　引地他6名
燕岳～大天井～常念
【連休】①4月28～30日　引地他13名
蝶ガ岳　②5月1～4日　引地他5名　槍、北穂、奥穂
【雪訓】5月26～28日　引地他11名
一の倉沢、芝倉沢
【三ツ峠岩登り】7月9～12日　引地他11名
【夏定】7月21～30日　引地他10名
剣岳、真砂沢、八ツ峰六峰Cフェース
【夏縦】①7月31日～8月8日　小林他3名　五色ガ原～薬師岳～雲ノ平～双六～槍ガ岳～北穂～横尾　②7月31日～8月6日　引地他2名　平～針ノ木～鹿島槍～唐松～白馬～雪倉岳～蓮華温泉　③8月7～12日　土方他4名
富良野岳～十勝岳～美瑛岳～トムラウシ～旭岳
【秋山】①10月27～29日　小林他3名
餓鬼岳、春山偵察　②10月10～13



1979.12
遠見尾根にて

土方　竹若　中村
米田　田中　宮下　小林　引地　吉田

こうした問題の起こった大きな原因として部員相互のコミュニケーション不足があげられよう。部員少数状態がかなり固定化した今の山岳部においては、部としての目標を一方的に特定するとアウトサイダーをつくり、かと言って、なれあい的な山行は七八年三月の事故でみられたとおり、きわめて危険である。

こうした点の解決が八〇年にまわされた課題である。

（引地　真）

日　萬濃他3名　祖母谷温泉～唐松～五竜～遠見尾根、冬山偵察
【氷訓】11月23～27日　引地他9名
OB1名　富士山吉田大沢
【冬山】12月12～19日　引地他9名
遠見尾根～五竜岳～唐松岳往復

1980

（17人）

4年　◎小林　修
3年　○土方　浩
　　中村　宜幸
　　萬宮　英士
　　田谷　克賢
　　中津　範之
　　部岡　晃和
　　田吉　淳一
　　若竹　敬三
　　毛稲　尚之
　　島安　孝和
　　田福　秀和
　　川石　保典
　　内竹　俊雄
2年　佐入　信宏
　　浦滝　剛
　　西中　茂〕
1年

（◎CL，○SL）

八〇年は、三年生を中心とした上級生の充実、多数の新人入部という近年には珍しくバランスのとれた構成で活動を進めることが出来た。

年度当初議論を重ね、今年を連続遭難事故後の低迷からぬけ出す足掛りをさぐる年と位置付け、冬に後立山を縦走することを目標として、春、夏、秋合宿ならびに個人山行が冬に向けて有機的につながるよう配慮した。

三年生の間では海外遠征を目指す気運が盛り上がり、具体的な準備も始められた。しかし、それを部の遠征とすべきか、あるいは個人山行とすべきかについては、現在の部の実力からして、部としての形は困難と思われた。それでは個人山行として、〝今〟やらねばならないのかという点についてのつっこんだ議論はなされないままであった。

プレ冬山の雪上訓練で、海外遠征希望者のためにスケジュールの中に頂上訓練を組み込んだが新人の滑落事故が発生、ここで遠征は個人山行ということが確定したと言ってもよい。

ともあれ、この間、個人の力と部としての総合力にギャップがみられるようになり、この二律背反をどう克服するかについては再び答を見出せぬままに終ってしまった。

（小林　修）

【春山】3月11～20日　小林他6名
夜叉神峠～池山吊尾根～北岳～塩見岳～三伏峠
【連休】①4月29日～5月4日　小林、中村　唐松岳～不帰～白馬鑓～猿倉　②4月29日～5月3日　土方、田中　八方尾根～鹿島槍～赤沢西尾根往復～屏風尾根～扇沢
【雪訓】5月24～26日　小林他14名
谷川岳マチガ沢、芝倉沢
【夏定】7月21～30日　小林他14名
涸沢周辺　ジャン飛驒尾根等
【夏縦】①8月1～13日　小林他3名
槍ガ岳～水晶岳～雲ノ平～黒部源流～黒部五郎岳～薬師岳～折立　②8月1～12日　土方他3名　東沢～針ノ木岳～スバリ西尾根、中尾根
【ポスト夏山】8月28日～9月5日　小林他5名　涸沢周辺岩登り、滝谷四尾根、四峰北条、新村等
【秋山】①10月30日～11月3日　萬



1980. 5　谷川岳にて
安島，滝浦，宮下，原，岡部，小林，石川
竹内，入佐，萬濃
吉田，稲毛

濃、田中　馬場島～東小糸谷～西大谷山　②11月7～9日　小林他2名　遠見尾根～五竜岳、冬山デポ　③11月14～17日　土方、中村　室営～剣往復、春山デポ　④11月16～17日　萬濃他3名　剣御前まで、春山デポ

【氷訓】11月21～25日　小林他13名
富士吉田口、23日訓練中に一年の滝浦約二〇〇㍍滑落、下方にいた九十九山岳会の春川、藤井両氏のストップにより停止するも、滝浦、春川氏は骨折

【冬山】12月26日～1月6日　土方他8名　扇沢～大沢～スバリ岳～赤沢岳～爺ガ岳～鹿島槍、キレット越えを目指すも断念

1981

（13人）

4年　土方　浩◎
　　萬濃　英士○
　　中村　宜幸
　　宮下　克彦
3年　岡部　晃和
　　竹若　敬三
2年　稲毛　尚之
　　安島　孝和
　　石川　保典
　　山本礼二郎
1年　石丸　義男
　　五ケ山　淳
　　寺戸

（◎CL，○SL）

問題を措定することのうちにすでにその解決があるとすれば、我々の措定の仕方がまずかったのか、それとも単に解決を発見できずにいるだけなのだろうか。今、活動をふり返るに当たり、どうもそんな気がしてならない。

一九八一年の一橋山岳部の活動は、まさに事故に始まり事故に終わったと言える。しかしながら皮肉なことに、この間の我々の活動が少なくともここ数年間の活動の大きな流れの中で、一つの興隆期を示していたことは事実であろう。

具体的には、奥大日尾根より剣岳を極め、さらに立山を越えて後立山連峰をも横断する、という春合宿は、計画の完遂は果たせなかったとはいえ、「積雪期に3千M級の岩稜を歩く」といった年頭の課題を克服し、スケール的にも近年希に見るもので あった。また、新歓合宿に続く連休山行、場所を初めて涸沢に移しての雪訓合宿、あるいは、三ツ峠での岩登りトレーニングの本番ルートでの実践と、夏合宿前の最終調整といった意味も込めた、北岳での岩登り合宿等、合宿の形態、場所の選定など意欲的に新しい試みを打ち出していった。

こうした部の活性化の理由としては、第一に、我が部が長らく構造的な弱点として抱え続けていた、リーダー層と下級生層との人員的アンバランスの解消があげられる。第二には、海外遠征のための トレーニングの山登りに対する層が、各合宿を柱とした個々の山行を、遠征の一環として位置づけていたことが、彼等の目的意識を明確化させ、部活動を緊張

【春山】3月9～22日　土方他8名
奥大日尾根～剣岳～雄山東尾根～黒部ダム～扇沢
【連休】4月28日～5月5日　①土方他3名　OB3名　剣岳八ッ峰一峰三稜～八ッ峰縦走　②中村他3名　明神東稜～奥穂南稜～西穂
【雪訓】5月29日～6月7日　土方他10名　涸沢定着、屏風岩東稜、四峰、北条、新村ルート
【三ッ峠岩登り】6月27日～7月1日　土方他12名
【夏定】7月23～30日　宮下他8名
剣沢周辺
【夏縦】8月1～8日　①安島他2名　穂高　②宮下他3名　白馬　③竹若、寺戸～針ノ木
【海外】四年生の土方、中村、萬濃の3名が8月～9月にかけてインドヒマラヤ、ホワイトセール峰に向かうも南東稜上で消息を断った。



1981. 3
立山山頂にて

竹若　岡部
安島　宮下
稲毛　石川
萬濃　中村

感にあふれるものにし、下級生もこうしたリーダー層の目的意識を他律的であるにせよ自分なりに内面化することによって、部活動全体が一つの方向性を持っていたことである。

しかしながら、インドヒマラヤへの遠征が遭難という悲しむべき結果に終わると同時に我々の活動は事実上休止となると同時に、めまぐるしい活動の中で、我々が自らに問いかけることを忘れていた幾つかの問題に直面せざるを得なかった。それは一言でいえば、「多様な山岳志向を持つ諸個人の集合体としての大学山岳部のあり方」ということができる。例えば、合宿にのみ参加していれば山岳部員としての要件を満たすのか。活動領域を限って参加することはできないのか。（夏山・岩登りのみｅｔｃ。）上級生のレベルアップと下級生の育成とを有機的に調和させることはできないのか、等である。

むろん、山登りとは結局、山に登ることの理屈抜きの快感を味わうことにあり、部の活性・不活性度は、つまるところ個々の部員の山への思い入れの深さによるのだから、小賢しい理念などどうでもよいと言えばそれまでかもしれない。しかし次のことだけはいえるような気がする。大学山岳部をとりまく環境は変わったのだと。まず、山登りがかなり高価なスポーツであり、地方から上京して独立した家計を営む学生にとって、山岳活動が経済的に相当な負担であること、山登り以外の領域での活動のための時間的制約、あるいは、より気軽に参加でき、拘束の少ない同好会の隆盛など、実は新しいようで古い問題なのかもしれないが、次代の部員諸氏がこうした普遍的問題に何等かの結論を見出してほしい。

（宮下克彦）

1982

（11人）

4年　岡部　晃和
　　安島　孝和
　　石川　保典
　　稲毛　尚之
　　山本礼二郎
　　辻　日出夫
3年　石丸　義男
　　五ヶ山　淳
2年　高野憲一郎
　　鈴木　雅之
　　百瀬　勝紀
1年

昨年のインド・ヒマラヤでの遭難は部員達に山岳部とは、山登りとはと厳しく問いかけるものであった。

その解答は見出せぬまま連日議論は空転したが、安全第一、山岳部の存続ということでは辛うじて全員一致し、半年ぶりに合宿を再開することとなった。

部員構成は四年一名、三年五名、二年二名で、三年の力量、気力は強いものの、それを引っぱってゆける能力は四年にはなかった。そのため、部内には欲求不満と、抑圧感が漂いがちであった。

春合宿では基礎力の充実ということで八ガ岳を選定したが、その前に奥秩父で二度にわたってプレ合宿を実施した。八ガ岳では一週間の雪訓後、蓼科山まで縦走した。

四月には一年三名を迎え、五月の涸沢、六月の三ツ峠と基礎的技術、体力の向上に努めた。

夏には剣岳周辺での縦走を行った。こうして一見順調に進みはしたが各部員はそれぞれの希望を中途半端に自制することとなっていたため、冬、春合宿の選定についてなかなか合意が得られないこととなった。

当初の目標は体力的にも恵まれ短期間で誠の技術力を必要とするたが結果的には中央アてしまった。

もともと考えの違う集合体である山岳部で完全な合意を得ることは難しい。しかし、その一人一人を結びつける山岳部が存在するのは、個人の希望を実現するための

【春山】　3月15～26日　岡部他7名
阿弥陀岳～硫黄岳～横岳～蓼科山
【連休】　5月　横尾尾根に向かうも雨天のため退却
【夏定】　7月21～31日　岡部他10名
剣沢周辺
【夏縦】　8月1～11日　岡部他4名
五色ガ原～平～鉢ノ木峠～鹿島槍ガ岳～五竜～唐松～白馬～朝日岳～犬ガ岳～親不知
【氷訓】　富士山吉田大沢
【冬山】　12月12～20日　岡部他9名
中央アルプス宝剣～空木岳～マセナミ



1982. 3
八ガ岳にて

山本
石丸　辻
安島　石川
五ヶ山　岡部

修練と、各人の共通項を伸ばすためだと思われる、その両者がうまく実現できないとどうしても安全性と満足に問題が残ってしまう。

この一年間は安全第一をモットーに山行を続けたが今後は個人の希望を満足させ、かつ安全の確保もできるような山岳部になるよう努力したい。

（岡部晃和）

1983

（10人）

4年　石川　保典
　　稲毛　尚之
　　山本礼二郎
　　竹若　敬三
　　安島　孝和
3年　石丸　義男
　　五ヶ山　淳
2年　鈴木　雅之
　　白石　章治
1年　谷口　隼人

【春山】3月20～28日　石川他7名
高山～白川郷～三方岩岳～野谷荘司山
～妙法山～白山～大倉尾根～白水ダム
【連休】4月30日～5月3日　石川他
2名　北鎌尾根
【夏定】7月22～29日　石川8名他
涸沢定着、7月25日東稜にて五ヶ山が
滑落、定着合宿を切りあげる
【夏縦】7月30日～8月7日　石川他
5名　戸台～仙丈～三峰岳～塩見岳
～荒川岳～赤石岳～聖岳～畑薙ダム
【冬山】12月13～25日　石川他6名
神岡～寺地山～北俣岳～三俣～中崎尾
根～槍ガ岳往復～新穂高温泉

冬合宿、十二月二十三日、中崎尾根上部。寺地山から北俣岳にあがり、ほとんど太陽を拝むことなく雪の中を泳ぎつづけ、ようやく昨日千丈乗越を経てたどり着いた。フィナーレの槍アタックを眼前に今日は沈。一度は止みかけた雪も夜の帷に包まれる頃には静かに舞いおりてきていた。不思議と緊張の糸が緩み、すっーと気の抜けたのを覚えている。〝今日アタックすれば明日は下山。皆といっしょにクリスマスを祝うことができる。〟昨日は烈風の中をこんなことを話しながら、無我夢中に歩いたものだから。

夕食の準備をしながら四年の山本が言った。〝昼天気が一時持ち直した時に、僕ら上級生でしの竹をたてるなどすべきでなかったのか。何もせずにテントの中で遊んでいてよかったのだろうか〟石川も稲毛も声がない。〝気力が沈滞している時にこそ上級生は鼓舞するべく行動を起こすべきではないのか〟

まさにそうなのであり、そう思いながらも何もしなかったことが心にひっかかっていた。

ふと四年前の冬合宿のことが思い出された。折しも五六豪雪に見舞われ、鹿島槍アタックを前にして冷池に閉じこめられていた。気も狂わんばかりだったが、不思議と山を降りてしまいたいという気持ちはなかった。むしろラジオから次々と流れてくる遭難の悲報を耳にしながら、自分がその時悲劇的な状況に置かれていることに気持ちの昂ぶりを覚えていた。そして何よりも上級生に全信頼を置いていた。だから下級生も

少しもあたふたせずに落ち着いて、自らのなすべきことに冷静に対処していた。あのとき土方さん、中村さん、万濃さんは何をどう考えていたのだろうか。今は知る由もないが……。

以来私は山にとりつかれた。山のすばらしさも恐さもその他さまざまなことをかみしめてきた。自分の山の登り方に先輩方の与えている影響は大きい。3年前ホワイトセールで3人の先輩が逝ってしまった。以後沈滞したクラブをどのように再建していくか、そして第一義に二度と事故を起こさないためにどうするべきかが最大の課題だった。やがてリーダー層になり、クラブをぐいと引っぱっていく立場になって初めてその難しさを痛感した。

事故は一〇〇%は防ぎようがないといわれるが、時にちょっとした判断のミスが事故を招くことが多い。〝ぜがひでも登られねば〟〝早く降りたい〟などの心理的誘因や、〝まあこれでいいだろう〟という安易な態度が客観的な状況把握を鈍らせてしまう。そしてクラブという活動では、その一人の判断が全ての人にふりかかる。

年の始めにあたり、我々はこうした判断ミスを如何になくすか、そして大らかな気風を残しながらも節目では緊張のある山登りを、また下級生の主体的で積極的な取りくみをいかに引き出すかを目標とした。いわばぴりりと辛しのきいた躍動あふれる山登りを目指したのである。具体的には基礎的な体力と技術の習熟とともに、安全に対する日頃からの学習。判断のプロセスを機会あるごとに下級生に伝えること。そして一つの重要な目標だ。今これをやめて帰れば半分は失敗したことになる。必ず後悔するに決まっている。いや大事なのは成功したか失敗したかの結果ではなく、そこに至る過程をクラブ活動に、ひいては自身の山登りにどのように血や肉としていくかなのだ。降りたいから、じゃあ降りましょうなんていうのは、それは山に対する冒瀆というものだ。まあOBに対してばつが悪いというのもあるけど、合宿の計画の相談にのっていただから、報告する時もなんていう

らない。手前なんぞで登るのではなく、人として行いに一本の背筋を通すことであり、これは礼儀なのだ。正直に言ってしまえばだ、槍に登りたいけど、こんなとこに三日も四日も沈をするのは皆だろうし、上いやだ。だけど登ろうじゃないっしょでいか。〃

彼はきっとわかってくれたろうし、人級生になった時にこの時のことを思い出し、山に登ることの難しさを引っぱっていくことのしんどさを感じるに違いない。

この合宿は一年を締めくくるものとして多くのものを伝えることができたろう。

翌朝、空には希望と喜悦が満ちていた。天使の羽衣のように雪が柔らかく光っていた。槍の頂きが僕らを呼んでいた。

（石川保典）

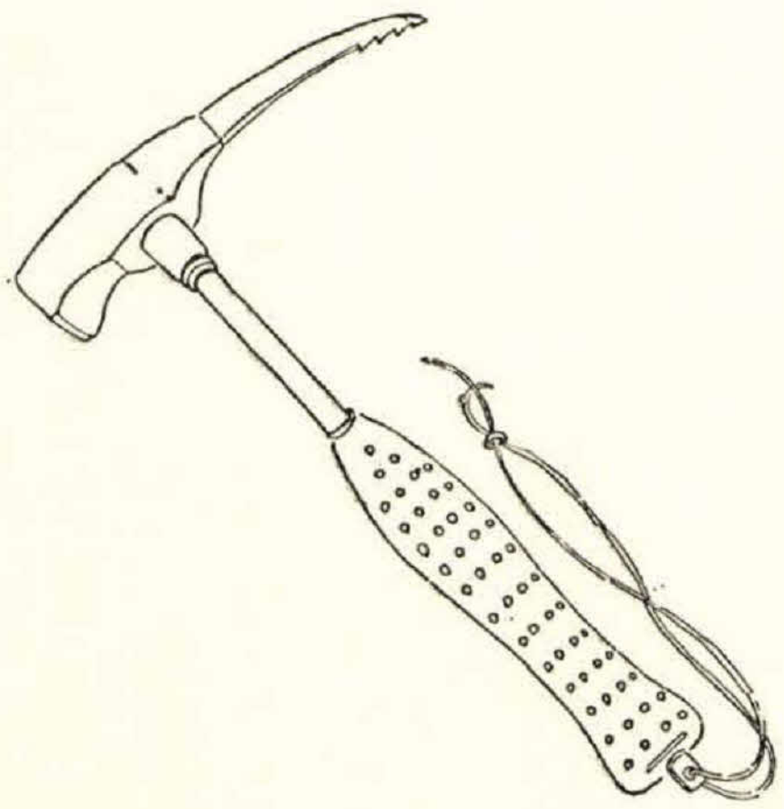
最新登山装備事情（その3）

プラスチック・ブーツ

春の湿雪に対しては、いかに防水クリームを塗りこんだ皮靴でも歯がたたない。そこで現れたのがプラスチック・ブーツ。プラスチックだから防水はバッチリ、ひじょうに軽いしメインテナンスも不要。ただし保温力は皮のダブルに劣るし、通気性がないのでムレやすいという欠点がある。しかしこの点も、新素材を使ったインナー・ブーツの採用などによって解決されつつある。ちなみに我々は、一人を除くすべてが夏季縦走用の皮のシングルでこの冬と春をのりきった。㊐もここまでくるとなかなか見あげたものだ。

ピッケル

氷壁におけるピオレ・トラクション（ダブル・アックス）技術の導入により、ピッケルにも大きな変化が現れた。氷にひっかけやすいように大きくカーブしたピック、極端に短いシャフトなどである。ツラ状の氷にうちこみやすいようにパイプ状になったピックもある。しかし我々㊐クライマーは、縦走用の長いピッケルと縦走・岩登り用の短いツァケのアイゼンで果敢にバーティカル・アイスに挑み、そのたびにあえなく墜ちてきた。㊐ほどよく墜ちるのだ。



1984

（9人）

4年　石丸　義男◎
3年　五ヶ山　淳○
　　白石　章治
　　谷口　隼人
　　鮎沢　政文
　　川名　真理
1年　斉藤　誠
　　外池　武司
　　河野　正
〔4年　石川　保典〕
（オブザーバー）
（◎CL，○SL）

部員の少数化（当初十一名、最終的には九名）、加えて上級生が三名（四年生二名、三年生一名）と少ないため、最初からクラブ活動の目標を新入部員の基礎的技術向上を中心に据えて活動を行なってきた。

このような全体的レベル低下のためか、事故や敗退が多かった。例えば天候不順による春の飯豊山往復（三名参加）の敗退、また夏合宿において、三年生が登攀中に落石を受け（左小指および薬指の複雑骨折）たため、合宿が途中で頓座し、延長縦走（南ア）が二名で遂行されるに過ぎなかった。冬合宿においては、四年生一名の事情による不参加によって当初の予定（突坂尾根～白馬岳～栂池）が春に延期され、新入部員の今後の布石という意味で、クラシック・ルート（後立：爺ガ岳東尾根～鹿島槍ガ岳～赤岩尾根）に変更するなどの活動制限を受けざるをえなかった。

今後も基本的には、スキーテップのクラブ活動進行状況である。ただ、下級生の山登り指向が強いため自分たちの登山スタイルを確立しつつあり、今後の活動には期待できるものがある。

（石丸義男）

【春山】3月20～27日　石丸、白石、谷口　飯豊山往復、切合小屋で二日沈澱後引き返す
【連休】4月31日～5月3日　石丸、五ヶ山、白石　八方～唐松～五竜～遠見、テント破損のため八方で敗退
【雪訓】5月30日～6月4日　石丸、五ヶ山、谷口、川名、鮎沢、斉藤、外池、河野、鮎沢、谷口、川名、鮎沢、斉藤、穂往復、常念、蝶経由中房へ
【夏山】7月22～30日　石丸、五ヶ山、白石、谷口、川名、鮎沢、斉藤、外池、河野　剣定着　②8月2～11日谷口、鮎沢　広河原定着、シレイ沢、鋸岳等往復、両俣経由北岳、農鳥岳へ
【秋山】①10月24～26日　五ヶ山、鮎沢　突坂尾根～白馬～栂池、一四二八m地点より引き返す（冬山偵察）　②10月25～27日　石丸、谷口、斉藤、外池、河野　爺東尾根～鹿島槍～赤岩尾根（春山偵察）
【氷訓】11月30日～12月2日　石丸、



1985・3　阿弥陀岳にて
外池，斉藤，五ヶ山，鮎沢，河野

五ヶ山、谷口、川名、鮎沢、斉藤、外池、河野、富士吉田大沢
【冬山】12月14～21日　石丸他5名
爺岳東尾根より鹿島槍ガ岳～赤岩尾根

主要山行記録

各代が心血を注いだ山行の詳細を記録

1964. 3 湯俣尾根から槍・北穂へ 81
6 三年奥又合宿 85
12 北鎌尾根 88
1965. 9 一ノ倉沢衝立岩正面 92
12 涸沢岳西稜から横尾尾根へ 93
1967. 3 双子尾根から唐松、白馬 95
12 八方尾根よりA沢コルまで 98
12 爺ガ岳南尾根より鹿島槍ガ岳及び岩小屋沢岳 101
1968. 5 鹿島槍天狗尾根での遭難 104
1969. 3 伊那谷側から赤石・荒川へ 109
1970. 9 甲斐駒ガ岳、赤石沢奥壁での遭難 111
1972. 5 黒部内蔵助平での現役・OB合同合宿 115
1974. 3 高嵐尾根より黒部源流 117
12 笠ガ岳から槍ガ岳 120
1975. 3 光岳より赤石岳へ 123
8 北海道日高および大雪山系 124
8 中央高地、クワウンナイ川 125
12 五竜岳より爺ガ岳へ 125
1976. 3 西穂高岳西尾根よりロバの耳手前まで 127
12 白山 130
1978. 3 悪沢岳西面での事故 133
7 前穂四峰での事故 134
1979. 3 燕、大天井、常念 135
1980. 3 北岳より塩見岳へ 136
8 北ア核心部 139
10 奥大日尾根 142
11 富士山雪上訓練中の事故 144
12 スバリ岳から鹿島槍へ 146
1982. 7 真砂沢定着 148
8 後立山より日本海へ 151
1983. 12 北俣岳から槍ガ岳 153
1984. 12 爺ガ岳東尾根より鹿島槍ガ岳 156

湯俣尾根から槍・北穂へ

（一九六四年春山）

一、はじめに

我々が湯俣尾根から槍のコースを、今合宿の地として初めて注目したのは、昨年の五月奥穂において滑落事故が発生し、登山に対する態度までも含めた基礎技術の重視の必要性が認識されて以来である。過去三年間、我々は忌わしい事故を経験しまた。それによる部員への影響はある程度やむを得ぬにしても、過去の反省の結果が前進的な反省として生かされているとは言えない。我々は事故を恐れ、避けねばならない。しかし我々は山に登るのである。これが我々の最も大切な目的である。この点を忘れてしまうと我々は失格である。最初に登山という行為があり、次に事故を防ぐ対策の研究があるのである。かかる考えの下に、我々は畏縮しがちな我々の態度への発展の糸口を与えること、そして若い部員により健全な登山を経験させることが、どうしても必要であると考えた。そして、そのために湯俣→槍をポーラーでやることを考えたのである。しかし六月・十月の偵察を通じ、そしてまた良き先輩の助言を拝聴し、我々の考えをつきつめて行くうちに、我々はポーラーの形式を棄て縦走に変えた。それは、昨年の冬山までの予定で葛を出発する。かなる評価の変化にもよるが、それよりも、我々の登山に対する前記の如き考え方による方が大きい。我々は合宿を成功させねばならない。しかもそれからある程度の発展、あるいはその糸口でもつかむべく春合宿に臨んだ。

二、行動概要

小島(リーダー)、半場(三)、本間(四)、小野、三森、佐藤、山本(三)、高崎、原、池知(二)、岡田、斉藤(一)

▒三月三日　新宿発

▒三月四日　雪後あられ

葛(八・二二五)—濁(一一・三〇〜一二・〇〇)—テントサイト(一七・二一〇)

大町からマイクロバスで葛へ。生憎の雪模様。九〇キロほどの荷を葛に残して、半場以下四名が湯股を目指し、残りの小島以下五名が濁までの予定で葛を出発する。かなり多数のパーティが既に入山しており、道は非常に歩きやすくなっていた。半場のパーティは第五発電所で先発隊二名と合流、よく頑張って明るいうちに湯股に着く。小島のパーティは、濁でテントを設けたのち、三森以下三名が葛に逆ボッカに行く。後から追いついた本間を加え、小島以下三名が第五の先までボッカする。この夜、ボッカで疲れた濁隊において、池知が熱湯を足にかけ、火傷を負うという不祥事が起きた。当人は相当苦しんだが、二時間ほどで大分痛みがなくなる。

▒三月五日　曇のち快晴

湯俣（七・〇〇）—湯俣岳（一三・二

五～一三・五五）―C1（一四・三五～一五・〇〇）―BH（一七・三五）

濁隊は第五発電所からスノーボートを借用、池知を葛に下し、本間が付き添って大町の病院に向かう。半場・小野・原がBHからC1へラッセルとボッカに、山本・高崎・斉藤が濁まで逆ボッカする。BHからC1までは膝下までのラッセルで思ったよりはかどりC1は湯俣のコルから一〇〇㍍ほど南真砂に登った所と決定する。

▒三月六日　快晴のち晴のち曇

BH（七・四〇）―湯俣岳（一四・〇〇～一四・二五）―デポ地（一四・五五～一五・二五）―湯俣（一七・五〇）

BHから半場他三名がC1にボッカ。高崎・斉藤が濁に逆ボッカ。濁隊はBHに入る。これですべての荷および人員がBHに入ったことになる。

▒三月七日　雪

湯俣（六・四〇）―湯俣岳（一一・二〇）―C1（一一・五〇～一三・二〇）―湯俣岳（一三・三五～一三・四五）―C1（一四・一〇）

朝から小雪がちらつく天候となったが、昨日までのラッセルを利用しC1建設に当たるべくBHを発つ。三〇㌔平均の荷であったが、思いの外はかどったので、ボッカ隊五名は湯俣岳で荷を置き、久方振りの快晴で、槍や北鎌尾根の雄姿に励まされてボッカに精を出し裏銀の稜線り、再度途中までボッカに出C1までは樹林帯で特に難所にC2を建設する。樹林帯は切れており、尾根上の雪も昨日の風ですっかりクラストいが最初の一ピッチが雪が不して、アイゼンがよくきいた。鎖場も取付の五、六㍍を除いて、たいして問題にするほどのこともない。

▒三月十一日　雪風強し

①　C1（九・三三）―C2（一二・五〇～一二・一〇）―C1（一〇・三〇）―真砂頂上（一一・三〇）―フィックス工作（一二・一〇）―C1（一〇・四〇）―デポ地（一五・二〇～一五・四〇）―C2（一六・一〇）

②　C2（七・一〇）―C1（九・三三）―C2（一二・五〇）

今日もまた小雪。BHからC1まで昨日のラッセルはほとんど消えてとかたどって進む。C1から逆ボッカ、三名がC2の偵察―C2（一三・〇〇）

昨日の移動高は既に東方海上に去り、山は再び荒れ出す。C1ではC2からのボッカ隊待ちをして出発が遅れる。風雪に、しばしば視界をうばわれるが、赤旗に助けられてC2に無事つく。主稜線は黒部の谷か

▒三月九日　曇時々雪

予定の休養日

ら強い風が吹き上げていた。佐藤・山本・高崎が少量のボッカと赤岳のフィックスに出掛ける。皆本格的な風雪にたたかれて消耗ぎみ。

▒三月十二日　地ふぶき
C2（八・四〇）―C3（一四・四五～一五・二〇）―赤岳―C3（一六・四〇）

昨日にも増して烈しい風が黒部側から吹き前進は消耗する。安全を確保すべく、半場・高崎が先行、赤岳の下にフィックスを加える。ボッカ隊は水晶小屋跡までボッカ。C2にもどり再度悪場までボッカ。赤岳の登りは局所的には悪い所があったが長く続くことはなかった。この日、ワリモの手前にC3を建設する。

▒三月十三日　曇のち雪
C2（八・五〇）―C3（一二・〇〇）

昨日の行動で佐藤が雪盲にやられ、休養する。C3からC2に逆ボッカ。C2から全員C3入り。今日も風が烈しくガスが濃い。明日は低気圧の通過の見込みなので、風の弱い所を選び、ブロックのすばらしい防風壁をつくる。

▒三月十四日　雪
全員の頑張りで予定通り行動できているので低気圧の日本通過の折でもあり休養日とする。午後から天候回復するも、天気図の天候が危ぶまれる。

▒三月十五日　雪のち晴のち曇
多数の低気圧の通過で山は荒れる。烈しい風が終日吹きまわる。C3にて沈澱。

▒三月十六日　地ふぶきのち雪
強烈な南西風が吹き荒れる。持ち上げるのに苦労した大きなブロックが飛び防風壁は見るかげもない。午前九時ごろナイロン天がついに裂け、近くに全員交代で雪洞を掘ったが、思わぬ風向の変化と、強烈な風圧でまもなくつぶされる。目をあけられぬほどの地吹雪で雪洞の位置を誤ったことが原因である。とにかく人間がすっ飛ぶほどの風でもあり、止むなく一一人全員が六人用ビニロン天に入って、悪夢の如き一夜となる。

▒三月十七日　地ふぶきのち雪
風は幾分弱まったが依然として吹雪が続く。今度は良く見定めて六人用の雪洞を二時間ほどで掘るも、テントの方も思わぬ混乱で荒れた。一日中整理にあたる。

▒三月十八日　曇のち晴のち曇
C3（一〇五）―三俣小屋（一二・一五～一五・三五）―双六小屋（一六・〇〇～一四・〇五）―双六岳（一五・一五）―三俣頂上（一四・四〇）―三俣（六・〇〇）―C3（七・三〇～八・一〇）―三俣（九・四五～一一・五五）―C4（一五・一五）

▒三月十九日　快晴
四日間の吹雪との戦いで全員疲れがひどくなる。久し振りに雲間からく行動がにぶく青空がのぞき裂けたままうめてあったテントとつぶれた雪洞の掘起し等で出発が大分遅れる。ガスが濃く風が強かったが六名が双六に入り五名が三俣泊りとなる。予定通り、これといった難所はない。三俣蓮華小屋の頂上直下に四〇㍍ほど雪の不安定な所があった。

ひさかた振りの移動高で入山三度目の快晴。三俣からC3に逆ボッカの後C4へ向かう。全員バテがひどい。日本中の山が見えそうな好天に励まされて頑張る。すべて稜線どうしの行動。双六岳はトラバースも可能とみたが大事をとった。C4から半場他二名で千丈乗越までボッカする。千丈乗越手前に四〇〇㍍フィックスする。双六から見ると笠がなかなか立派な姿である。

▒三月二十日　雪

終日吹雪。雪山である以上吹雪に悩まされるのは当然であるがこれほど悩まされるとは予想しなかった。まったく低気圧の通過はどうしようもない。

▒三月二十一日　雪のち地ふぶきのちガス

またもや吹雪で沈澱。午後から天候は回復に向かう。

▒三月二十二日　曇

C4（六・二五）―千丈乗越（一〇・五〇～一二・〇〇）―槍の肩（一三・三〇）

朝方、天気は悪かったが、移動高が出ているはずなので出発。樅沢岳の下りが雪が不安定で消耗した。西鎌は千丈沢側に信じられぬほど大きな雪庇が出ている。硫黄乗越周辺は特に著しい。その辺は蒲田側を大きくトラバース。他はほとんど稜線ぞいで千丈沢乗越周辺は、ちょっと難所になっている。ボッカの帰りに見た滝谷は青く荘厳であった。

▒三月二十三日　晴

C4（六・四五）―千丈沢乗越（一〇・四五）―槍の肩（一一・五五）

予定した移動高が出ず、高気圧の張り出しに終って、カラッとした天気にならなかったが、それでも安定した天気。昼には全員槍の肩に集結する。午後は半場、三森、佐藤、小野が槍の南壁を愉しむ。一般路から大分東側に任意にルートをとったが、思ったよりもショッパかった。低気圧にかわいがられてつらい縦走となったが、全員無事C5について、ほっとした。

▒三月二十四日　晴のち曇

朝方、ガスが濃かったが行動の予定であった。しかし斉藤の足の痛みがひどく、脹れもひどいので下山を急ぐことにする。出発が遅れ、降雪の翌日であったので、槍沢の雪崩が心配で皆走るようにして下った（一四・四〇～一五・〇〇）―肩（一六・二五）

視界は悪くなく、目指す北穂は間近。フィトは湧くも、連日の疲れのためか、行動が思う様に行かぬ。半場、山本、高崎が北穂往復、三森、佐藤、原がA沢コルまで、小島、小野、斉藤で南岳東南尾根の偵察に当る。南岳の下りはほぼ夏道通り、北穂の登りも夏道が出ており、B沢のコルの手前からはリッヂ沿い。思いの外、消耗する所はなかった。途中3ヶ所ほどザイル使用。

この日、本間、岡田が下山する。

▒三月二十五日　雪

またも低気圧の東進で猛吹雪。C5にて沈とする。縦走中に顔面を凍傷にやられた者も多く、足先が凍傷気味な者も多い。それぞれ苦痛を訴え出す。

▒三月二十六日　快晴

朝方、ガスが濃かったが行動の予定であった。しかし斉藤の足の痛みがひどく、脹れもひどいので下山を急ぐことにする。出発が遅れ、降雪の翌日であったので、槍沢の雪崩が心配で皆走るようにして下った

が、雪は思いの外落ち着いていた。槍沢に入ってから嘘のように風がなく、ヤッケ、セーター、アイゼン、ワッパと休むたびに軽装になり、合宿が終った感が強かった。この夜は木村さんの所のやっかいになり、祝いの酒をいただいて、合宿最後の夜を迎えた。

▒三月二十七日　雪

合宿の最終日であるこの日にも、我々は吹雪に見舞われることとなった。心配された釜トン周辺の雪も、先行者のラッセルがあり、安心して通ることができた。（小島和人）

三年奥又合宿

（一九七四年六月）

当三年六人のうち、これといってすぐれたクライマーはいない。むしろ同好会的雰囲気をもった仲の良い集団である。山岳部生活二年と少し、一つの集団としての成果をあげたことはない。おそる二年間続いた遭難は僕ばかりでなく、遠ざけたので、当世流行の岩登りなどはほとんどやったことがなく、満足を見出のとして受け入れ、そのなかで満足を見出していたのである。安全な個の中にチンおさまり「山登りなどすましている態度も、沈滞気味の部活動に対するイジケた形の抵抗ではあった。さて春になれば自らつぼみ、所詮は自己満足」と出るというもので、さんざん小島チーフに尻をたたかれて動こうとしなかった僕たちではあったが、誰からともなく「奥又で岩登りをやろう」という声が出だしたのは五月初め、たちまちに意見は一致した。とはいえ若干の経験のある高崎を除いては誰もいない。チーフの許可を取るのが問題である。しかしバラエティに富んだ合宿を行うには各人〝何でも屋〟にならねばならない。岩ぐらい登れなければ話にならないのである。おそる意外にスムースに許可がおりた。小島チーフも大いに不安であったろうが、このままではどうにもならないと思ったのであろう。

梅雨シーズンの穂高は意外に晴間があり、必ず晴天にありついたものである。この二年ともいうことで、六月中旬をし、人も少ないと対象の時期としたとり、やさしい所からゆっくり登ることとした。

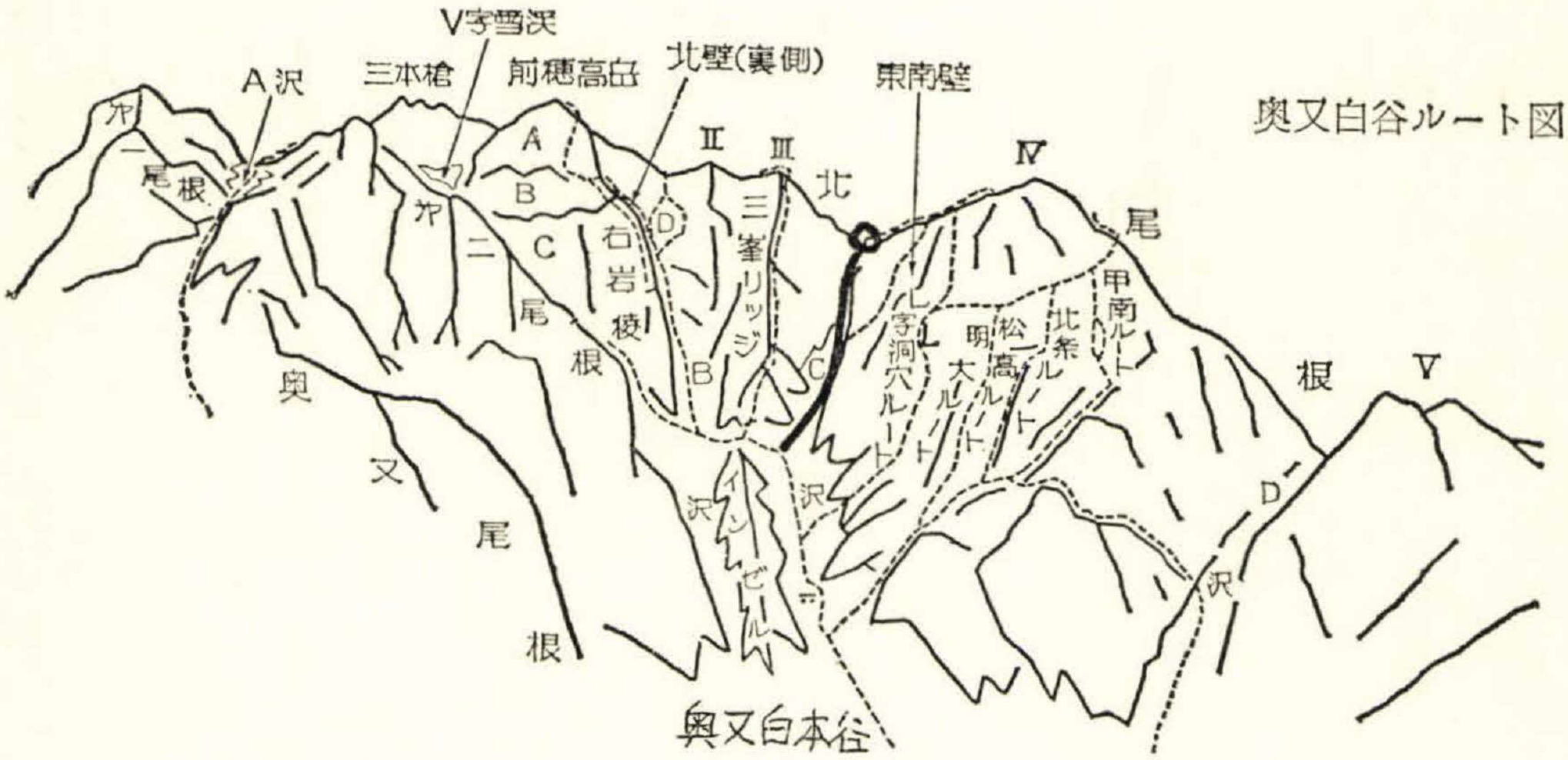
▒六月十一日

夜行列車の僕たちは初めて山に登る子供のように興奮と恐怖感で眠れなかったものである。以下当合宿の記録を列記する。

▒六月十二日

奥又の池へ上る。途中でバテて「ビバークするのだ」と口走るものもいたが、静かな池の畔を僕たちだけで占領し、ガスをま

高崎俊平（リーダー）、原博貞、池知昭洋、石田信隆、佐藤久尚（三）、佐藤之敏、倉知敬（OB）



つわりつかせた四峰を歩み出す。とべてニコニコしていたんに滑って元の位置へ。

六月十三日

三峰リッジ、北尾根の二パーティに分かれ、足ならしをした。A沢のグリセードは快適で前穂頂上からテントまで三〇分とからない。

六月十四日

雨で沈。「東京ブルース」大ヒット。

六月十五日

CBAフェース（池知、原）。霧雨の降るなかを、沈にしようかと迷いながらC沢を上る。もし本格的に降ってきたらV字雪渓から逃げようという事で、一面のガスの中をしゃにむに上に登る。やっとガスの切間から下の雪渓が見え、自分たちのいる高度に驚き、あわててザイルを結び、原をトップにツルツルするスラブからかぶりぎみの岩をよいしょと越し六〜七ピッチ上ると第一テラスであった。ここで三〇分ほどルートを調べ、中央やや左の岩溝を中央岩溝ルートと思いこみとりつく。黒々としたハングがあるのでファイトレスティングに勝った不運でトップで嫌々一歩ビナがなくなり、途中で原が耳に入らなかった。すぐ左手の九分通り浮き出したハーケンについている白い固定ザイルにしゃにむにつかまりハング上に出て右にトラバースを試みるがなかなかできない。指がしびれホールドからはがれてくる。左手のホールドが離れた瞬間、右手をリスにさしこんだ。がグラリとゆれ、落ちた!!と思った。とところが不思議にもこれまでトラバースに苦労したバンドに尻をついて座っていた。右手のバンドでビレーし、原を上げ、上のアブミで越す。スラブはハーケンを打ってはじめて打ち込むハーケンはあっけなく抜け、汗を流して厚刃のハーケンをたたきこみ、おそるおそる乗った。クライマックスは終り、Aフェースは右ルートを楽しんで頂上に抜けた。（池知記）

北壁B・Aフェース（高崎、石田）

▒六月十六日　曇のちアラレ

明大ルート、三峰フェース（石田、原）

Dフェース（倉知敬、佐藤之）

ボッカ及び入山（高崎、池知、佐藤久）

▒六月十七日　晴のち曇

北条新村ルート（佐藤之、石田）

夕食後、紅茶が喉にぐっとつかえる。聞いて驚く意外な計画―北条新村へ行けとのこと。朝起きると快晴、緊張感と湧きだすファイトを感じる。キジを十分に打ち出発。TIでユックリ休み甲南パーティとわかれ登攀開始。僕がトップで明瞭にフミ跡のついたルートを登り、でっかい岩のピンでビレイ。之さん僕とトップに立ち計三ピッチで這松テラスへつく。ハングはアブミが不足したため、中間テラスでビレイし僕がつづく。大ハングをこえる之さんが空中にうきだし、やがて見えなくなり、OKの合図で登りだす。ビナ、アブミを回収するのに手を少々すりむくがそんな事言っていられない。ハング、トラバースカンテと続く二ピッチは高度感が出てまことに快適である。（後日聞くところによると、石田はこの時アブミにのってマタの間から下を見て高い高いと感激の涙をこぼしたそうである。）ホールドを求める岩の割れ目には小さな白い花も咲いている。お昼には終了し嬉々としてはしゃぎながらテントに帰った。

（石田記）

甲南ルート（倉知、原）明大（高崎、池知、佐藤久）甲南（高崎、池知）、北壁コンタクトライン（原、佐藤久）

▒六月十八日　曇のち夕立

北条新村ルート（高崎、池知、原）

甲南ルート（佐藤之、久）　石田下山

▒六月十九日　晴のち曇

北条新村ルート（原、佐藤久）

松高ルート（高崎、池知）

本谷をつめながら、又T1下の台地からルートを念入りに偵察する。ガリーを一ピッチ登った所でアンザイレンする事にしてT1で紫煙をくゆらせている。心の底にある恐怖心が休みを長くする。そしらぬ顔でアンザイレンし池知トップで草付ガリーを左斜めにトラバースし凹角を右上に登る。昨日に較べ草が乾いていて快適だ。つるべでトップを交代しハング帯へ入っていく。次々と現れるピッチは〝穂高の岩場〟の写真で見なれたもので「なるほど写真と実物は似ている」と感心する。ついでに実物に似た写真を数枚とる。「ショルダー」で越す所はアブミで登り急なスラブを石上する。例の樺の木を越えて五ピッチ程でいささかアッケなく四峰正面は終った。

（高崎記）

▒六月二十日　大雨　停滞

目標の全員新村ルートトレースが達成できたのでいたく満足して終日歌をガナっていた。

△

後日この時の日記を読み直してみると何ともいじらしく可愛らしい。初めてハイキングに行く小学生のように緊張したり、感激したりしている。しかし一年の夏、月のこうこうと照る北穂の頂上で聞いた遭難者のうめきは僕たちに岩に対する深い迷信とおそれを植え付けていたのである。このような自分内部のわくから踏み出すのはどん

なささいなことでもおそろしいことだ。しかしそこから展望が持てるようになる。下山していく皆の胸中にはそれぞれ夏から秋、春山までのプランが様々な形でわき出しつつあった。

北鎌尾根

（一九六四年度冬合宿）

一、はじめに

数年前から北鎌尾根は我部の積雪期合宿の対象として我々の頭の中に描かれていた。この意識が、今合宿の対象に北鎌をえらんだ理由といえる。積雪期の合宿をポーラーで行う事は我々も効果の面から言って避けようとしていたわけではあるが、上級生の不足、北鎌の困難さを考慮して、主としてポーラーを採用することとした。

北鎌の末端にBCを設け、末端から四名が、そして本隊は五六コルに突きあげる尾根（仮称一橋ルート）を利用し、両パーティ共に途中にC1を設け、北鎌沢コルにC2、天狗腰掛けにAC（C3）を設け二〇日から二三日にかけ三パーティを槍岳に送りこみ、一二月二六日ひかれる山を対象と軌道で五発まで荷を運び先発隊と会い、しまた部員の技術向上が可能となる方法で全部の荷をもち湯俣より一ピッチの所に設登る事を目的として行われた一七日間の合営。宿は、好天に恵まれ所期の目的を達して無事終了した。

二、行動概要

小島（リーダー）、佐藤（之）（サブリーダー）、山本、△小野、三森（四）、高崎、原（気象）、池知（器具）、佐藤（久）（食料）、石田（薬品）（三）、岡田、斉藤、△吉川、△田沼、△吉沢（二）、加藤、△金成（一一）　△印―一部参加

▒十二月七日

山本、岡田二三時で出発

▒十二月八日　晴

山本、岡田湯俣入

▒十二月九日　晴

山本、岡田ベース予定地点まで偵察。之以下一一名離京

▒十二月十日　快晴

荷を軽くして全員BC入り。之他九名でC1予定地近くまでボッカ、原他三名で逆ボッカ。BCまで雪は少ないがその先は多くP6尾根は腰までである。同日小島離京。

▒十二月十二日　快晴

山本他四名C1入り。

BC（七・四五）―C1（一一・二五）

之他七名ボッカ

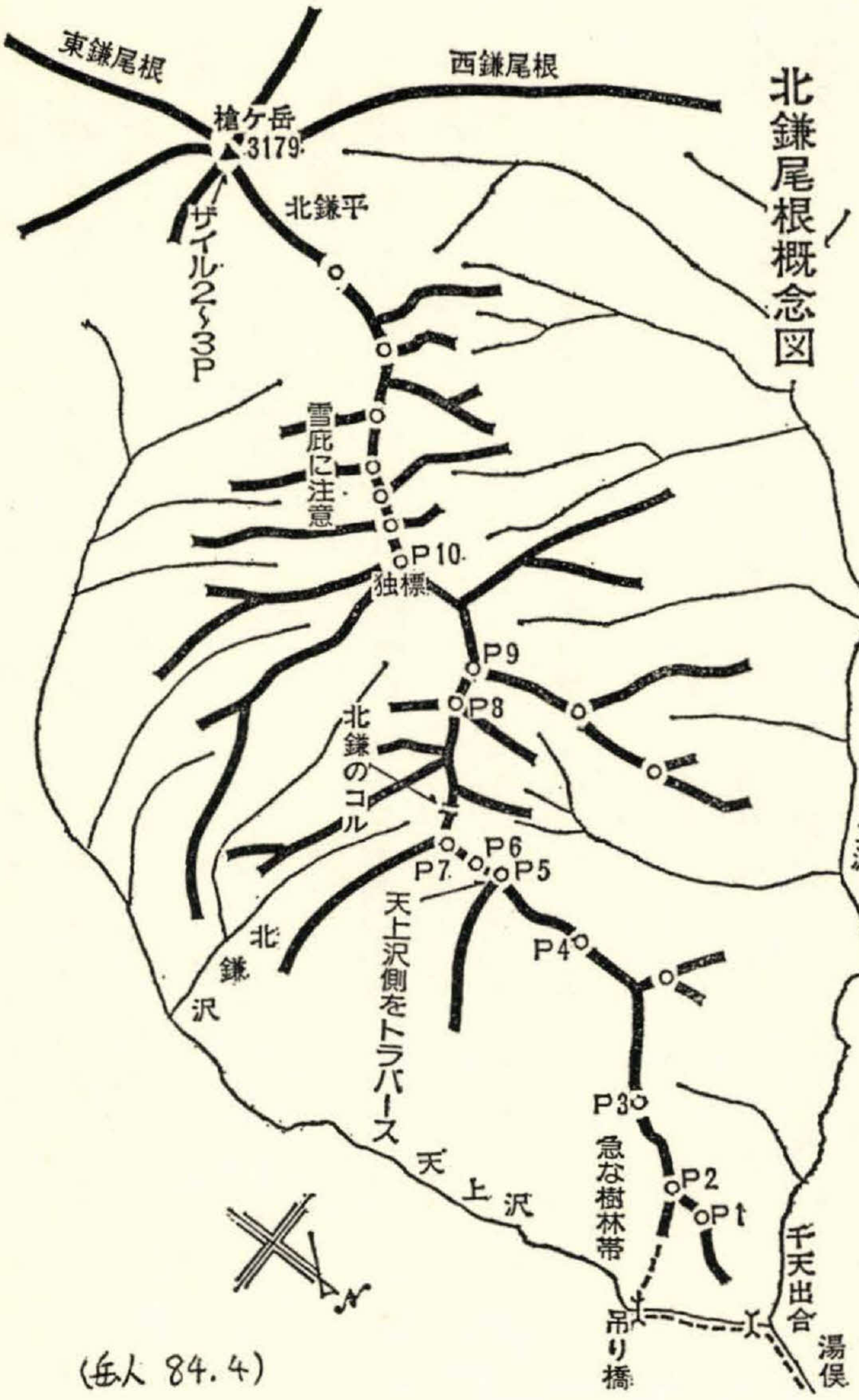
BC（七・四五）―C1（一一・二五

～一三・四五）―BC（一四・三五）

小島BC入り

▒十二月十三日　快晴

小島他四名C1入り。五六コルまでボッカ。



BC（七・〇〇）―C1L（八・一〇～一一・三〇）―五六コル（一四・三〇～一五・三〇）―C1L（一六・〇〇）

山本他五名C2までのルート工作及びボッカ。

之C1Lまでボッカ

原他二名末端からP2までルート工作及び移動高の影響で無風快晴。ボッカもはかどり全荷物がC1Lに集まりC2へのルート工作及びボッカもできる。予想よりハイペースで進み気持がよい。

▒十二月十四日　曇のち雪のち快晴

本隊沈澱―九時頃より晴れたが休養日とする。

分隊―晴れたのでP2まで登る。前日のラッセルが使え快調。

BC（一一・一〇）―C1H（一二・四〇）

▒十二月十五日　曇のち雪

本隊C2へのボッカ

C1L（八・一〇～一一・四〇）―C2（一一・〇〇～一一・三〇）―C1L（一三・一〇）

分隊天候悪化のためクーロアール直上に設営し五峰の手前までのルート工作。風が強くまつ毛が凍り冬山らしくなる。

TS（七・五〇）―C1H2（一〇・一〇）

田沼、吉沢離京

▒十二月十六日　快晴

本隊C2建設後、高崎他二名がC3までルート工作。三森他二名逆ボッカ

C1L（七・四五）―四峰（九・〇〇）―五六コル（一三・五〇）―C2（一五・〇五）

小野他三名BCに下った後分隊の残したフィックスをはずし湯俣まで吉沢、田沼

を出迎える。
　快晴で各パーティともに能率あがり、予定が早いためアタック三パーティを決定する。
▒十二月十七日　曇のち雪
　C2沈殿
　田沼、吉沢C2入り。小野、山本他一名に五六コルで引渡される悪天及びその後の吹き出しで終日吹雪になったり止んだり。天気待ちで遅くなったが予定通りC3建設。之他五名C3入り。C2は夜除雪に悩まされる。
▒十二月十八日　雪
　低気圧に伴う前線による悪天及びその後の吹き出しで終日吹雪になったり止んだり。天気待ちで遅くなったが予定通りC3建設。之他五名C3入り。C2は夜除雪に悩まされる。
　C2（九・三〇）―C3（一一・二〇～一一・五〇）―C2（一三・四〇）
▒十二月十九日
　C2隊朝方吹雪。八時頃より太陽が顔をだしたのでボッカとフィックス補強の為C3を往復。
　C3隊独標迄のルート工作。風がきびしい。
▒十二月二十日　快晴
　C2隊　C2（八・〇〇）―C3（八・五〇～九・二〇）―独標（一〇・三〇～一三・一〇）―C2（一四〇）―C2（一三・一〇）
　アタック隊　C3（六・一五）―槍ガ岳（一一・四五～一二・一五）―C3（一四・一五）―C2（一五・二五）
　移動高の影響で絶好のアタック日和。アタック隊は予想より早くC3へ戻る。C2からは四名が独標往復。
▒十二月二十一日　晴のち雪
　第二次アタック隊は出発したが天候悪化の兆があり引き返す。C2からは三名が独標往復。
▒十二月二十二日　快晴
　第二次アタックが素晴らしい快晴のもとスムースに成功した。
　C2テントの張りかえ整理をして沈。
▒十二月二十三日　曇
　第三次アタックの後独標のフィックスをとりはずす。
　C3（七・二〇）―槍岳（一〇・二〇～五〇）―独標（一二・四〇）―C3（一四・〇〇）
　C2では農大尾根の支稜を使ってトレーニング
▒十二月二十四日　雪
　気圧の谷が通り終日湿雪がふる。全員沈。
▒十二月二十五日　晴
　一橋ルートを利用して天上沢に下る。
▒十二月二十六日
　予定を変更し天上沢にて解散。高崎他五名は東鎌槍経由で上高地に向かい、山本、三森は下山、他は休養日とする。

三、アタック記録

アタック

。第一次アタック
高崎（三）、池知（三）
発（六・一五）―独標（七・〇五～一五）―北鎌平（一〇・二〇～四〇）―
槍岳（一一・四五～一二・一五）―北鎌平（一〇・二〇～四〇）―
標（一四・三五～一三・〇〇）―独
五・二五～四五）―テント（一
朝食を終え、はやる心を抑えて五時四五分起床。サポート隊心づくしの
四時一五分

テントの外に出る。東の空は明るみだした。六時一五分ヘッドランプを頼りに出発。朝日が輝く独標の頂上でサポート隊とわかれる。一〇分も行くと絶好のアタックルを出す。しまうのも面倒だし、安全性も違うだろうとコンテでゆく。風も気になる程でなく雲もふえそうにない。一時間歩いて休む。ック日和と言えよう。二ピッチ目は千丈沢側を大きく捲くがかなり悪いトラバースがある。白い坊主のようなピークから二つ目と三つ目のコルに出、久しぶりに陽が当る。昼メシを食べ出発、そこからはずっと稜線上を行く。北鎌平までACより四時間、ここに不要な荷を置き槍の登りにかかる。頂上直下二〇〇米までノーザイルで行き、余りに簡単なので少し北側のリッジを登る。意外に手古摺って頂上に出る。三〇分休んで登り始める。北鎌平で再び荷が重くなる。なかったフィックスを使いスを忠実にたどればピッチ路に気も重く注意してきたも心配なさそうだ。独標に着き忘れていたテルモスの紅茶を飲み干してテントへ向かう。最後のフィックスをすぎてテントが見えたのと、サポート二人と出会ったのは同時だった。思わず笑みが浮かび安堵し、疲れを感じた。そして胸のポケットにそっとふれた。

（高崎）

○第二次アタック

佐藤之（四）、原（三）、岡田（二）

発（六・〇五）―独標（六・五五～七・〇七）―北鎌平（九・三〇）―槍（一〇・二〇～五〇）―北鎌平（一一・二〇～三〇）―独標（一三・一〇）―テント（一三・五〇）

○第三次アタック

佐藤之（四）、佐藤久（三）、斉藤（二）

発（七・二〇）―独標（八・〇〇～一〇）―北鎌平（九・三五～五〇）―槍岳（一〇・二〇～五〇）―北鎌平（一一・一〇～二〇）―独標（一二・四〇）―テント（一四・〇〇）

四、合宿を顧みて

今合宿は結果的に見ると予定以上の成果があった。だが、この結果は好運に恵まれすぎていたように思われる。こう言う理由は我々は登山の危険を種々知識として知り、云々しながらも、それを実感として身につけていないのではないか。つまり我々が身につけているかいないかはフト「あれは危険ではないか」と感じたことを本当に治しているのかと思うのである。

具体的に例を示そう。フィックスの支点が不安定なのではないかと感じて（感じないかと感じて（感じないかと感じて（感じ

いるので山に行けば普通に動けるのです」
等々ヌケヌケと言うことを恥とすべきである。同じスポーツであるバスケットを例にとろう。同じ技術をもったチームが戦い、最後に勝敗を決するのは体力である。激しい訓練から生れたカンも大切であるが、そのカンを生かせるか否かは結局体力である。後半最後の一分に与えられたフリーをを成功させるかしないかによってすべての努力がむくわれるか否かが決定するのである。表面上勝敗のない登山の中で我々はその点を充分に知っているだろうか。我か？　遭難という複雑さの中でその原因を気象知識の不足や、一般的な技術にかこつけて体力の点を忘れていないのである。

　最後に健康管理について一言。痔は登山者につきものであるが、やはり行動にさしつかえる。他の病と同様、都会で治療しておくべきである。また、山に行って体調がおもわしくないことはありがちであるが、そのことは今回のI君のように申し出てくれなければ困る。多人数のパーティの場合にはどうしても注意が平均的になり、それが特に下級生に向けられるからである。

一ノ倉沢衝立岩正面

（一九六五年九月二七～三〇日）

原博貞、佐藤久尚、池知昭洋、石田信隆

（小島和人）

▒九月二十七日　曇

　前回の如く、前夜に出合の小屋に着くが、衝立はひどく混み合っていたので、天気が悪いのを理由に停滞とする。四人もいてしまい、午後の部では互いにトップをゆずり合う始末となった。ともあれ五時頃には、洞穴のハングをこえ、ザイルを巻いて、頭に向っていた。一仕事すませたという安心感が残ってちょいとしたとりつく。

　時々、石が降ってくるが、全体としてハング気味なので、すぐに二人ともあきさきにHとQが取り付く。前日三パーティ取り付いたのだが、うち二パーティは途中でビバークしている。特にラストは第一ハングのすぐ上に一人でビバークしている。昨日見た時は、第二ハングのすぐ上にはずっと上にいたはずなのに不思議である。ルをかけて聞いてみると、昨日の夕方、なんと四〇㍍以上も墜落したのだそうである。幸運なんだ。けが一つしていない。

　ンドで飛んで行くが、すぐに二人ともあきラユラと高度感を楽しむ事はよくやるが、こうも人工登ハンが続くとうんざりする。はじめのうちこそ「ここをトップで」等と云い合ったものだが、てしまい、午後の部では互いにトップをゆずり合う始末となった。ともあれ五時頃には、洞穴のハングをこえ、ザイルを巻いて、頭に向っていた。一仕事すませたという安心感が残ってちょいとしたとりつく。

▒九月二十八日　曇のち晴

　HとQ、IとN・Iの二パーティに分れ

グの下の外傾テラスでビバーク、僕達は稜線の避難小屋で一夜を明した。)衝立岩は我部としてはそれまでトレースしていなかったので期待を持って向ったのだが、快適な岩登りのルートとは言いかねる。第一に人工登ハンが多すぎること、第二に落ちた場合のダメージが多すぎること……からである。

(原博貞)

涸沢岳西稜から横尾尾根へ

(一九六五年度冬山合宿)

高崎俊平(リーダー)、原博貞、佐藤久尚、石田信隆(四)、吉川晋平(三)、加藤正巳(二)

▒十二月十四日　雪風強し

東京駅二〇・三〇発。OB、現役その他大勢に見送られて出発。

▒十二月十五日　雪

岐阜(五・一三)—高山(一〇・四五)—新穂高温泉(一三・四〇)—BC(一七・二五)

高山で一日一本のバスをちょっとの手違いで逃し、トラックとタクシーをチャーターして入山。槍見で硫黄隊と分かれ、新穂高で車に捨てられ、雪の林道に踏み入る。一時間三ピッチで暗くなり幕営。

▒十二月十六日　雪風強し

BC発(七・〇〇)—白出沢出合(九・五〇)—デポ地(一五・五〇)—BC(一七・五五)

白出沢を標高一八〇〇㍍地点までつめて、右岸の台地に上ると取付点。胸まで(時には首までも)のラッセルに苦労しつつ、二二〇〇㍍くらいの所にデポ。白出沢のトレースは雪に消され、夕暮も手伝って帰幕に手間取る。

▒十二月十七日　雪

BC発(七・一五)—涸沢岳西稜取付(九・五五)—C1(一四・五五)—C1(一五・五〇)—C1(一六・三〇)

撤収して昨日のトレースを追う。白出沢のトレースはやはり消えて無く、消耗する。取付点から上の森林の中はやはり猛烈なラッセル。支尾根らしくなった所で時間切れ。今日も森林限界まで行けず。

▒十二月十八日　雪のち曇

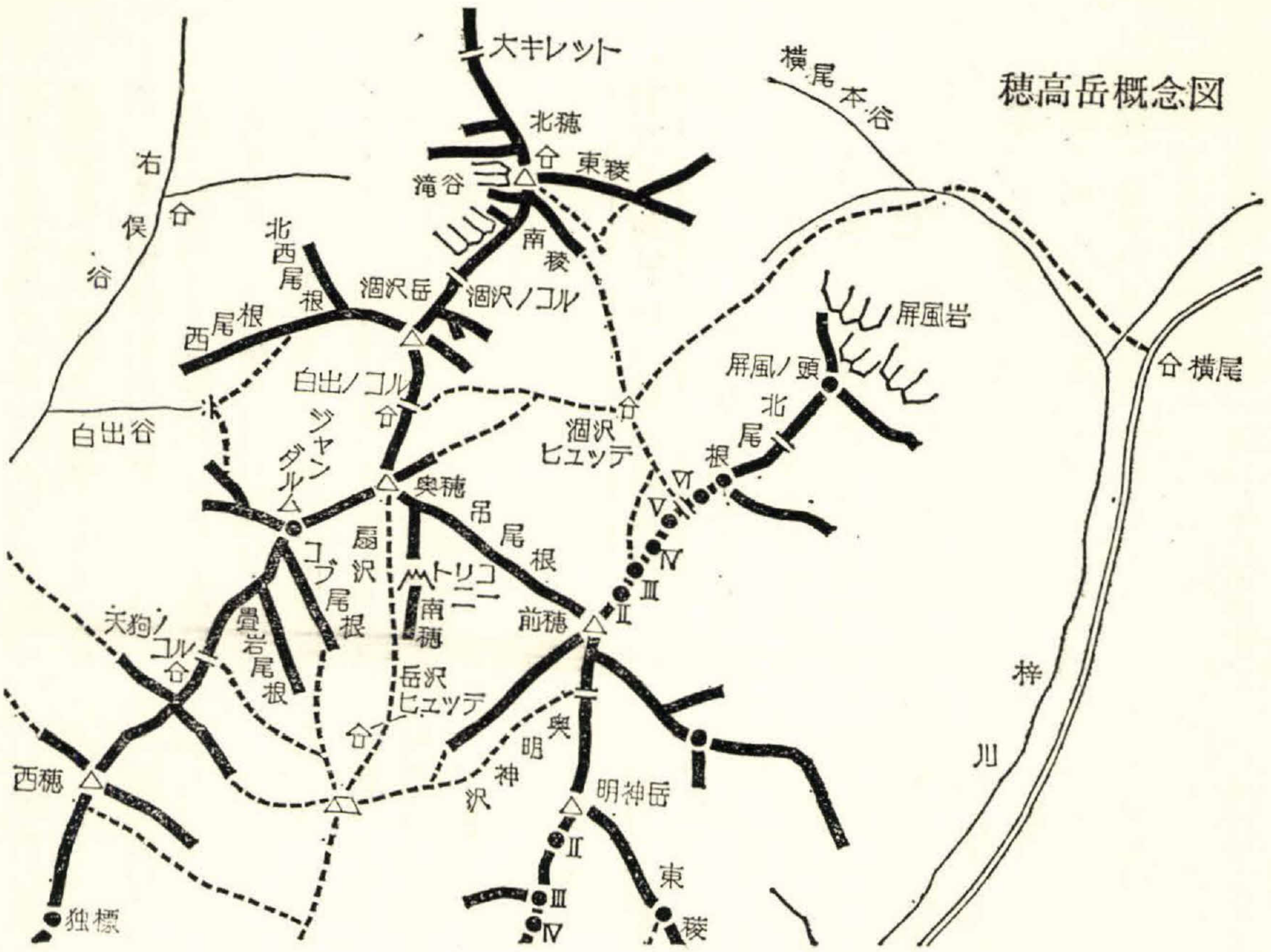
BC発(六・五〇)—C1(八・二〇)—デポ①(七・三〇)—デポ②(一〇・三〇～一四・〇〇)—C1(一四・五五)

涸沢岳への最低鞍部(西尾根のキレット)にテントを移すべくピストン輸送開始。蒲田富士頂上を第一デポとして、その先を偵察中、雪庇が崩れ原が一緒に滑落。四年の残り三人で沢へ下り、登ってくる原に会う。三時間ほどロスしたためテントの移動はあきらめる。

▒十二月十九日　快晴のち雪

C1発(七・一〇)—デポ②(九・一〇)—涸沢岳(一五・〇五)—白出沢コルC2(一五・三五)

昨日の遅れを取り戻すべく勇躍出発。フィックス工作、ピストン輸送と順調に進



む。

が露

涸沢岳の頂上は岩

出して幕営でき

る。

ず、

白出のコルまで下

出す

夕方から雪が降り

十

強

十二月二十一日　砂

沈

ぢ

上った涸沢側の小さなテラスを整地する。

四尾根上部のトラバースルートにフィックスを張る。

十二月二十二日　快晴

C3発（七・〇）―北穂頂上（九・二五）

昨日のフィックスを使って滝谷側は容易に通過。南峰北峰間はC2発（七・三〇）―涸沢岳（七・五バース。二時間弱で北峰の頂上に至り、テント設営。この日は北穂沢の上部をトラす。一日のんびりと過ご

十二月二十三日　雪

沈澱

十二月二十四日　雪

沈澱

十二月二十五日　雪風強し

一度出発するも北穂冬期小屋へはいる。

十二月二十六日　雪

沈澱

十二月二十七日　晴

北穂発（七・三〇）―B沢コル（八・三〇）―A沢コル（一〇・四〇）―南岳小屋（一三・三〇）―天狗コル着

め、穂頂々との多は予の下を待地

（一四・三〇）

朝のうちは弱い地吹雪。甲南大が一尾根に取り付いているのを横に見て、一路我々は南岳へと向かう。キレットの下りは荷も軽くなり、楽に通過。南岳を越えて天狗池のコルまで足をのばす。

▒十二月二十八日　曇のち雪

天狗コル（七・二五）―P5（八・三五）―横尾尾根取付（九・五〇）―横尾（一〇・五〇）―徳沢（一二・二〇）―明神（一三・五〇）―上高地（一四・四〇）

朝のうちの霧と風雪は、P5に着く頃には晴れ上り、汗をかきながら本谷へと下る。横尾、徳沢、明神とスピーディーに通り越して、上高地小梨平で最後のテントを設営。

▒十二月二十九日　曇

上高地発（六・三〇）―中ノ湯（八・二〇）―沢渡（一〇・二〇）

西穂に登る佐藤(久)、加藤を残して下山。

（高崎記）

双子尾根から唐松、白馬

（一九六七年春合宿）

（二）

中村雅明(リーダー)、加藤正己、金成剛（三）、俵昭、宮武幸久、藤原朋信（二）、大田揮久、戸川哲哉、藤浪育夫（一）

後立山連峰山域に大きなテーマを把えつつ鹿島槍周辺に焦点を合わせてきた春合宿の計画は、冬山の挫折により新たに出発点から出直すことになった。冬合宿後の反省会などから出てきた春合宿に対する考えは、合宿経験の不足からくる部員の評価の曖昧さを考え、雪山での基礎技術の習得を目標とし、計画の遂行過程を通じて我々の「力」をはっきりと認識し、それを土台として新しき年度の発展を図ろうとするものであった。そのためには、少々余裕がある形で合宿を終了する必要があった。かくして大きなテーマたる後立山連峰山域から対象として選ばれたのが、杓子岳双子尾根より、唐松岳、白馬三山の登頂となった。

そしてこれをポーラー法で行なうことによって、共同で山に登ることの意味をもう一度考えて見たいと思ったのである。折りしも、ヒンズークシュ遠征の準備が始まり、合宿期日の変更も一時考えられたが、先輩の御好意により、計画通り合宿が行なえることになり、我々は大きな期待と闘志を持って春山へ向かった。

▒三月四日

加藤、俵、宮武、大田の四名、新宿発。

▒三月五日　雨のち雪

四名、二股の発電所に荷物の半分を残して猿倉へ。中村、金成、藤原、戸川、藤浪の五名新宿発。

▒三月六日　曇

中村以下五名は猿倉へ。加藤以下四名は二股往復。これで全員が猿倉に集結した。

▒三月七日　曇のち雪

加藤以下四名が先発し、C1建設に向か

う。入山前の雨のせいか雪はしまり、難なく小日向のコルへ。コルへ登る少し手前にC1を建設。中村以下五名もすぐにC1に着き、テント設営後ボッカに精出し、この日一日で全物資をC1に集結できた。

▒三月八日　快晴

中村、宮武、俵、藤原にルート工作、ボッカを頼み、加藤、金成、大田、戸川、藤原はジャンクション・ピークを越えてC2に前進、テントを設営した。中村以下四名はさらにC1に戻り、食料および石油を樺平までボッカした。金成以下三名がそれをC2まで上げる。まったくの快晴で、白馬岳主稜、杓子岳東壁、八方尾根もあます所なく見える。雪はおちついており、杓子岳双子尾根も、たちまちのうちに頂上近くまでかせぐ。フィックス箇所は一ヶ所。

▒三月九日　晴のち雪

C1に残った中村以下四名はC1を撤収、C2に入る。ジャンクションピーク直下ごろから雪が降り出し、視界がなくなり難渋したが、お昼すぎにC2に到着した。加藤以下五名は樺平の荷物をC2に上げた。これで全物資が稜線まで来たわけである。

▒三月一〇日　雪　沈澱

▒三月十一日　雪　風邪気味の者多し。

▒三月十二日　晴　強風

二日沈澱のあとを受けて、ようやく行動可能となる。一年生三名をC2に残し、加藤、金成、俵、宮武の四名は天狗小屋まで前進、アタックキャンプを建設した。中村、藤原の二名は天狗小屋まで食料をボッカしたあと、C2に戻った。あとはアタック・チャンスを待つのみである。

▒三月十三日　雪　沈澱

終日気象通報を追った。

▒三月十四日　風雪

〈A・C隊〉加藤、俵の二名で唐松岳にアタックを試みたが、天候悪化、烈風のため、不帰二峰にて引返す。

〈C2隊〉中村、藤原の二名で白馬鑓に向うも、視界なく引返す。

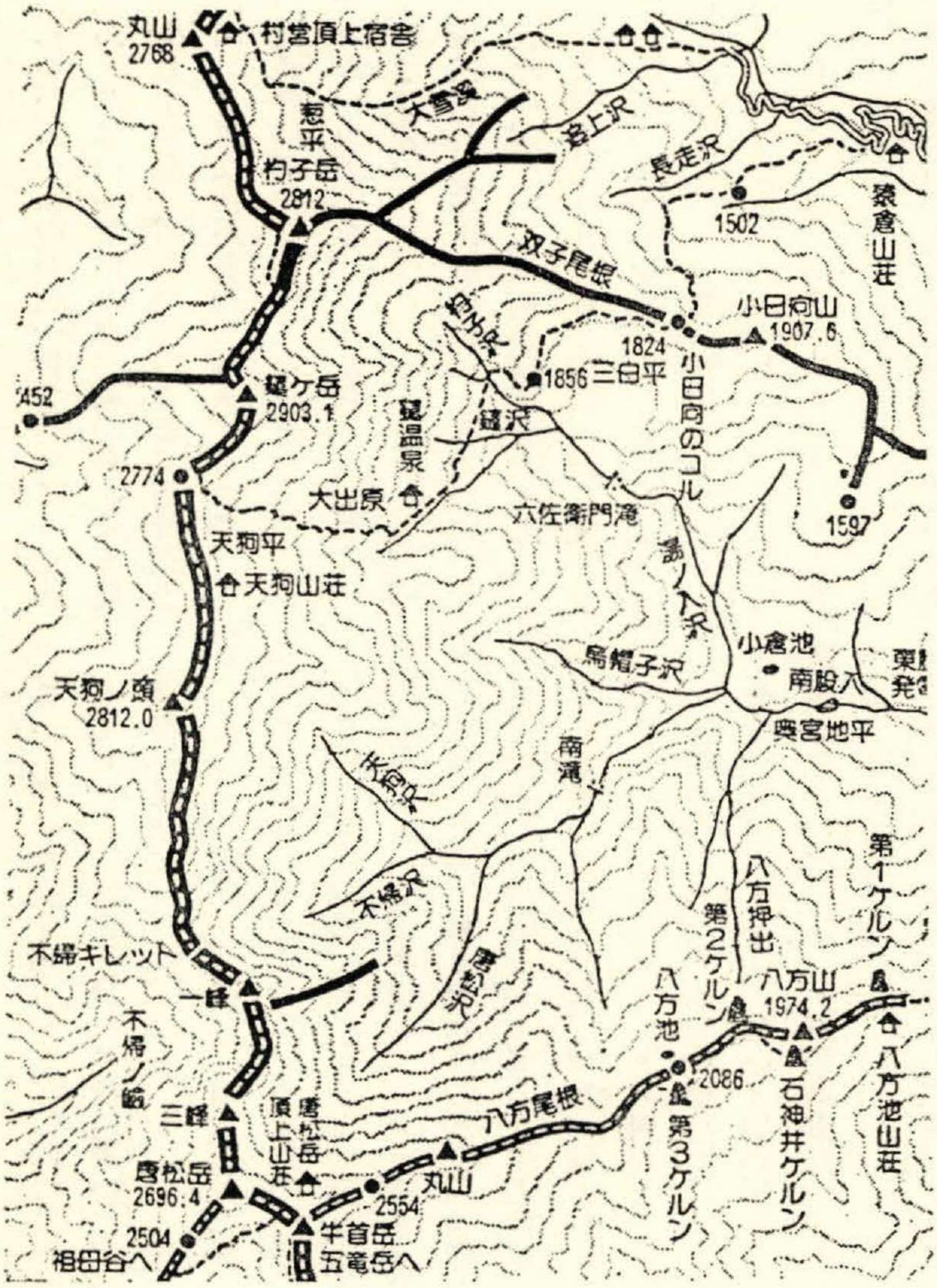
▒三月十五日　風雪

〈A・C隊〉唐松岳アタック。天狗小屋（五・三〇）―不帰一・二峰のコル（七・〇〇）―A・B峰間のコル（八・一五）―唐松岳頂上（一〇・二五）―二峰北峰（一二・〇〇）―不帰一・二峰間のコル（一三・一五）―天狗の鼻（一五・〇五）―天狗小屋（一六・〇〇）

昨日のアタックは失敗に終ったが、僕らの知識は十分充された。雪の状態、時間、ルート……それらの知識は最新のものであった。今日が最終のアタック・チャンスとなるかもしれないのに、天気の女神は決して好意的ではなかった。東の空は朝焼け、西の空は暗く、不安と期待、焦りなどを背負いながら、宮武と僕とは天狗小屋のA・Cを出発した。

天狗の鼻までは軽く三十五分で行った。天狗の大下りは雪が風に吹飛ばされてしまって、夏道が出ていた。下り始めてすぐ、宮武がつまずいたが、岩屑の斜面に雪がついていないのが幸いした。それからは今までの知識に慎重に歩き、一気に不帰一峰の頂上へ登り、二峰の顔をうかがった。昨日より気嫌が良さそうだ。偉容な剣岳が今にも

泣き出しそうになった時、僕らは「関学ルート」の入口である二本のナナカマドの木を目がけて堅雪の斜面をトラバースし始めた。すぐ近くに見えたナナカマドの木まで二〇分もかかってしまった。そこからA峰とB峰間のルンゼに入った。このルンゼは急絶壁では……。僕らは「関学ルート」をあきらめ、ひとまず稜線に出ることにした。



A峰より落ちている稜に出てA・B峰間のルンゼをのぞきこむと、足下は二一―三〇〇㍍もの絶壁だった。「関学ルート」？　それは記録によれば、B峰と北峰との間から落ちているルンゼを登るものである。だがそのルンゼまで行くには、この地点から、A・B峰間のルンゼに入った。このルンゼは急絶壁では……。僕らは「関学ルート」をあきらめ、ひとまず稜線に出ることにした。

A・B峰間のルンゼと、B峰から落ちている稜とを横断せねばならない。それがこのB峰間のルンゼに入った。このルンゼは急ではなかったが、A峰、B峰の岩壁が両側にそそり立っており、トンネルの中を登っている様な感じで、イヤな気持だった。

A・B峰間のコルに着いたら、風が激しかった。夏道通しに信州側に少しまわった所で昼食にした。が、二人ともほとんど食えないので先に行くことにした。B峰は信州側を軽く登り、北峰直下の岩場も僕らをやさしく受け入れた。北峰直下の信州側に非常によいテント場があった。

二峰の南峰は簡単に行けると聞いていたが、夏道がついているのであろう黒部側は急な雪壁となっていて行けそうになかった。そこで南峰直下の岩場を直登する事にした。岩場を途中まで登ってしまうと、行き詰ってしまったが、風が強いので岩にし

がみついているのが精一杯ですわけにはいかなかった。風に少しずつ登り、やっとのことで南峰頂上に出た。唐松岳が真近である。ここで、この南峰の黒部側を巻いている道を発見し、少々ガッカリしたが、唐松岳へ着いた。

かなり強い風に吹きつけられながら、一〇時二五分、遂に唐松岳頂上に着いた。半分だけの握手。もう剣岳は姿をかくしていた。天狗小屋のA・Cと交信方では雨が降っていることを知った。A・Cを出発してから一度も交信をしなかったので、天気が悪かったけれども、ここまで来てしまったのである。帰りを案じながら僕らは頂上のケルンを離れた。

猛烈な風雪のため、目が途方もなく痛く、前方が見えず、何回も立ち往生してしまった。目出帽が凍ってアゴにへばりついてしまう。二峰の南峰は黒部側の雪壁をトラバースし、北峰は岩をピンにしてアップザイレン。B峰は信州側の絶壁に附着しかかっている雪の上を恐る恐る恐る、そのままつるべ式にA峰を巻いた。そこから鎖や針金を利用して、二回のアップザイレンで二峰と一峰のコルに着いた。一三時一五分。

あとはがんばりだけだ。雪で濡れた体、凍傷にやられてしまっているであろう手足の指、アゴは気にならなかった。ほとんど何も見えない天狗尾根を「カン」にまかせて登る。天狗の鼻首一〇時五時〇五分。猛烈な風雪である。何回となく立ち往生したが、遂に最後の赤旗を見たが、今度は強く握手。高くそびえ、合宿も終りに近いことを感じた。テントに入れば、夜は食料の余りをたらふく食って、合茶を飲ませてくれた。宿最後のテント生活を惜しんだ。

ルバイトであった。

〈C2隊〉中村、藤原の二名、A・Cと大部雪のつもった斜面を小屋へ駆けおりの連絡のため、白馬鑓金成と俵が暖かい紅

▒三月十六日　曇

A・C、C2ともに一〇時間三〇分のア

▒三月十七日　晴

久し振りの快晴を利して存分に動いた。

A・C隊の四名がA・Cを撤収して杓子岳頂上に来ると、C2の中村以下五名も杓子岳に登ってきた。ここで六日振りに全員一緒になったわけである。

俵、藤原の二名は白馬岳、旭岳の登頂。中村、金成、藤浪、戸川、大田の五名は白馬鑓ガ岳、白馬岳の登頂。加藤、宮武の二名はルート工作とボッカ。登頂終了後C2に集合、休むいとまもなく、C2のテントも撤収し、一気に双子岩のコルまで下る。コルから見上げると、白馬三山がはるかに高くそびえ、合宿も終りに近いことを感じた。夜は食料の余りをたらふく食って、合宿最後のテント生活を惜しんだ。

▒三月十八日　雪

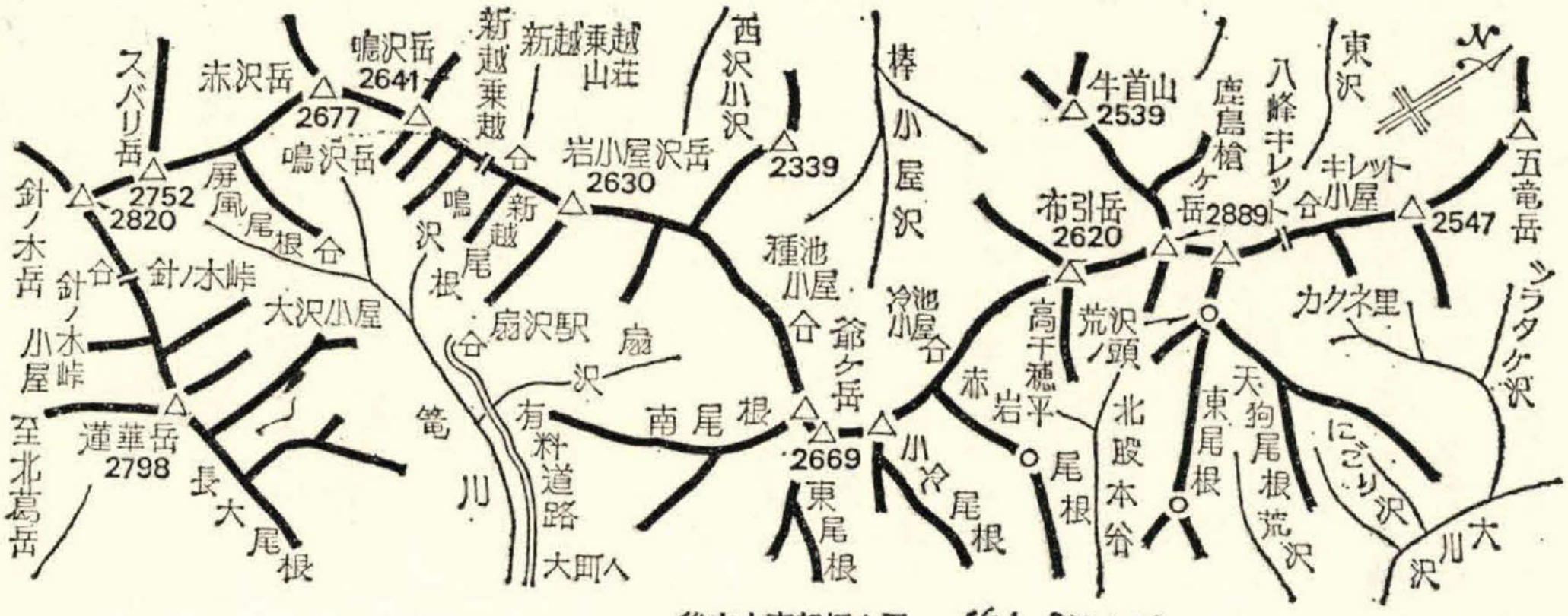
下山。下るに従って雪が少なくなり、春の訪れが感じられ、いかにも春山の下山日らしかった。

（中村雅明）

八方尾根よりA沢のコルまで

（一九六七年冬山合宿）

加藤正己（リーダー）、金成剛（四）、



後立山南部概念図　(岳人 75.12)

宮武幸久（三）、戸川哲哉（二）

■十二月十日　TS－丸山－TS

二三時新宿発　ラッセルはいよ深くなり、積雪量は信濃四谷－細野－黒菱平－第一ケルン三㍍ほどと思われる。四〇㌔の荷物を背負－TS　っての新雪のラッセル（浅い所ベルトまで、深い所頭までは遅々としたものだった。

■十二月十一日　雪　僕たちが来る三日ほど前より降り続いたに唐松小屋をめざす。雪で、八方尾根は積雪がひどかった。登山　天気もよくなり丸山を越し、稜通者は僕たちだけだったが、一〇時半よりリフトを降りてすぐ冬用の装備をまとい、ワカンを着用した。第一ケルンを過ぎ、ようやく尾根らしくなった台地でテントを張る。風は強かった。

■十二月十二日　晴のち雪　沈澱　TS－第三ケルン－TS

午前中は良い天気なので早く上にあがろうとするも、深いラッセルと重い荷物でピッチはかどらず、第三ケルンより左に大きく曲がり、丸山へ直登する途中でストップ。午後からは雪でえなくなってしまった。

■十二月十三日　雪のち快晴　沈澱。一度テントをとび出たが、とてもダメ。

■十二月十四日　吹雪　沈澱　二人で唐松小屋まで行ってみたが、とてもキスリングで歩ける天気ではないので沈澱とする。

■十二月十五日　吹雪　沈澱

■十二月十六日　吹雪　沈澱。一度テントをとび出たが、とても

■十二月十七日　吹雪

沈澱。言うことなし。

▒十二月十八日　快晴

TS—唐松小屋—五龍小屋

明け方は風がひどかったので少々出遅れてしまった。が、唐松小屋まで一時間余で行くことができ、すばらしい景観に初めてお目にかかれた。

小屋直下のトラバースはザイルを使わず、慎重に下った。ここは岩が出ていないのでアイゼンさえ確実にすればそれほど時間をくわずにすむ所だ。そして大黒岳の岩場。岩にそなえられている針金は見えない。トラバースするルンゼは実にいやらしく、雪崩が恐い。僕たちはここで延七〇分のザイルを固定して通過した。それからはおおむね稜線通しに行くことができる。ザイルもほとんど必要ない。ただ、白岳手前の最低鞍部では、樹林帯の中を通るため深いラッセルとなり、方向も見失いそうになった。

それからは楽。五竜小屋まで、夕陽に輝く白銀の尾根の散歩である。冬期小屋には誰もいなかった。

▒十二月十九日　吹雪

沈澱

戸川を残し、三人で五竜岳に登った人はいるらしく、例のトラバースふきんは堅雪の急斜面でアイゼンもなかなか効かない。仕方なく稜通しに行くことに決める。

トラバース手前から約一五〇分登ってみた。何とか行けそうだったが、吹雪が強くなってきたので今日はやめにする。

▒十二月二十日　晴

沈澱

五竜小屋—五竜岳—A沢のコルTS

またもや明け方の天気にごまかされ、約二時間遅れて、九時小屋を出る。僕たちは二二日の昼までしか食料をもっていなかったが、今日調子がよければ、キレット小屋まで行ってしまうつもりだった。

▒十二月二十一日　吹雪

沈澱

▒十二月二十二日　吹雪

沈澱

▒十二月二十三日　吹雪

沈澱

▒十二月二十四日　吹雪

沈澱

遂に、一日中ほとんどテントの外には出られない日が四日続いた。一九日から完全統制を続けていた食料・燃料・ローソクもほとんど底をついてきた。最後の私物を出してささやかでみじめなクリスマス・イブに思われたが、とに角、五竜岳へ登って下降路を見てくることにした。楽だった。下降もたやすく行けそうだった。だが、既に時計は一時を回っているし、剣岳には黒い雲がかかっていた。

僕たちはキレット小屋が射程距離内にある所でテントを張りたかったので、五竜小屋にもどらずに、A沢のコルでがんばることにした。あと一日天気がよくなりさえすれば、うまく行けるのだ。

を祝い、かわかさないためにすっかりぬれてしまったシュラフにもぐり込んだ。

▒十二月二十五日　吹雪後曇

TS―五竜小屋―遠見小屋

僕たちが最後の希望と期待していた東シナ海の低気圧はいっこうに現われず、吹雪は続いた。覚悟を決めて一一時半、テント地を出発した。すぐザイルの固定である。皆、手足は凍傷が痛み、五竜小屋まで二時間半もかかってしまった。小屋の中で最後の昼食二パックを食い、遠見尾根を下る。

午前中に五竜小屋へ登ってきた数パーティの感謝に耐えないラッセル・ワークのため、僕たちはワカンもつけずに雪の上を歩くことができた。

下るに従い雪はやみ、しまなく腹が減ってをつけて歩いたが、とほうもはるか下に見ているため何もしゃべらず、ボンヤリ見える安曇野の部落のあかりもやく遠見小屋だけだった。七時すぎ、ようた米二袋を食に着いた。途中でひろってきまでにかなりおうと思ったが、食欲が出るたふとんにねの時間を要した。小屋にあっかせてもらう。

▒十二月二十六日　雪のち曇

遠見小屋―神城

何はともあれ、もう少し歩きさえすれば、コメが食えるのだと思うと、それだけで僕たちの足は軽くなるのだった。神城に着き、下川さん宅でおしるこを食っていると、爺ガ岳パーティーの俵君が現れた。

（加藤正己）

爺ガ岳南尾根より鹿島槍ガ岳及び岩小屋沢岳

（一九六七年冬合宿）

中村雅明（リーダー）（四）、俵昭、藤原朋信（三）、今泉佳久、大田揮久（二）

本パーティーは冬合宿のサポート隊であった。爺ガ岳南尾根より入山し、爺ガ岳南尾根を下った。以下サポート隊の行動記録を記す。

▒十二月十一日　二三・〇〇急行で離京

▒十二月十二日　雪

大町（六・一〇）―扇沢（六・四五）

BC（八・三〇）―爺ガ岳南尾根二〇〇〇m付デポ地点（一二・三五）―BC（一三・五〇）

大町から予約してあったマイクロバスで扇沢出合まで。尾根取付点にBCを設営後、南尾根二〇〇〇m付近までボッカに行く。積雪量は予想より少く、デポ地点直下まで夏道沿いに行く。おかげでものすごい

ブッシュ帯を省略する事が出来た。

▒十二月十三日　雪のち晴

BC（六・五五）―JP（一四・四五）

きのうのラッセルに助けられて四ピッチでデポ地点。そこからは尾根沿いにジャクション・ピークまで樹林帯の中を行く。途中ところどころブッシュに悩まされたが積雪量が少く思ったより楽にジャン・ピークにC1を設営できた。午後から青空が広がり、針ノ木岳が正面に姿を現わした。

▒十二月十四日　雪

C1（六・三〇）―デポ地点（七・二〇）―C1（八・五〇）―爺ガ岳南峰下デポ地点（一一・一〇）―C1（一三・〇〇）

二〇〇〇㍍附近に残した荷物を回収し、さらにそれを爺ガ岳南峰の一つ下のピークまでボッカに行く。ジャンクションから上は樹林が少なくなり、真横から雪が吹きつけた。

▒十二月十五日　雪のち風雪

C1（七・二〇）―爺ガ岳南峰（九・三〇）

C1を撤収、爺ガ岳南峰にC2を設営する。頂上に着く頃風雪になり、まともに西風を受ける頂上での設営は困難をきわめたが、無事張り終えテントにもぐり込みホッとする。後立山の稜線、しかもピーク故風通しが良く、暖房がきかず寒い事この上もない。

▒十二月十六日　強風時々雪

〔俵、藤原、大田〕　C2（一一・三〇）―種池小屋（一二・五〇）

きょうも強風が吹き荒れテントをバタつかせた。こんな天気なのに元気な（食い意地の張った）三人は種池小屋まで往復して沈澱食を取ってきた。

▒十二月十七日　雪のち曇のち雪

〔俵、藤原、今泉〕　C2（七・三〇）―二〇〇〇㍍デポ地点―C2（一二・一五）

〔中村、大田〕　C2（八・三〇）―爺ガ岳下デポ地点（九・〇〇）―C2（一〇・〇〇）

俵、今泉はおやじさんが入院のため下山する。頂上に着く頃風雪になり、まともに西風を受ける頂上での設営は困難をきわめたが、無事張り終えテントにもぐり込みホッとする。後立山の稜線、しかもピーク故風通しが良く、暖房がきかず寒い事この上もない。

▒十二月十六日　強風時々雪

〔俵、藤原、大田〕　C2（六・五五）―鹿島槍ガ岳南峰―C2（一三・〇五）

〔中村、今泉〕　停滞

すばらしい快晴に恵まれた。剣・穂高はもちろん、八ガ岳、南アルプス、富士山までが見わたせる。大田で鹿島槍の一回目のアタック。中俵、大田で鹿島槍の一頃から風も全く無くなりまるで春山を思わせるような暖かさだった。

▒十二月十九日　曇のち雪

「いざアタックに」と元気良くテントの外へ飛び出したが空はどんよりと暗い。すでに剣は雲に隠れている。しばらくするうちに、後立山の稜線も雪となる。すごくとテントに戻った。停滞。

▒十二月二十日　快晴

〔中村、今泉〕 C2（七・一五）―鹿島槍北峰（一一・三〇）―C2（一五・〇〇）

〔俵、大田〕 C2（七・二〇）―岩小屋沢岳―C2

テントをバタつかせる風にだまされ停滞を決め込んでいたら、空を見て快晴なのを知り、朝食もそこ〳〵にアタックに出かける。中村、今泉で鹿島槍の二回目のアタック。南峰から北の稜線にはトレースが無い。縦走隊の姿も見えず。俵、大田で岩小屋沢岳往復。ラッセルには苦しめられなかった。これでサポート隊はアタック、偵察を終え縦走隊を待つばかりとなった。

▒十二月二十一日 風雪 停滞

再び冬型の吹き出しが始まり、爺ガ岳頂上の我々のテントは風洞の中に投げ込まれたように風に翻弄された。一七時の交信で「五竜下、全員無事。またあした」という縦走隊の声をキャッチしたが、これを最後に縦走隊からの連絡は入らなくなった。

▒十二月二十二日 風雪 停滞

▒十二月二十三日 風雪 停滞

▒十二月二十四日 風雪 停滞

冬型の気圧配置がくずれ出し、明日は行動できそうだ。縦走隊の様子わからず。

▒十二月二十五日 曇のち晴

〔俵、今泉〕 C2（五・四五）―冷池小屋―C2

〔中村、大田〕 C2（六・四〇）―冷池小屋―C2（五・四五）―冷池

池小屋（八・〇〇）―鹿島槍南峰（九・四五）―C2（一四・三〇）

〔俵、今泉〕 C2（五・四五）―冷池小屋―C2

〔全員〕 C2（一六・〇〇）―C1（一七・〇〇）

中村、大田は縦走隊と連絡をとるために鹿島槍南峰に向う。頂上に立ち、五竜岳から鹿島槍ガ岳の国境稜線に縦走隊の姿を捜したが人の姿らしきものは見えない。一二時の交信に最後の望みを託して風の強い頂上で二時間以上も待ち、一二時トランシーバーのスイッチを入れたが、「ガガー……」という音のみ。その時の「もしや」という不安な気持は忘れられない。中村、大田は冷池小屋まで食料、石油をボッカする。帰幕後、すぐC2を撤収しC1まで下りる。下へ行くと嘘のように風が無く天国のようだ。

▒十二月二十六日 曇

C1（七・四〇）―扇沢（一〇・〇〇）―大町―神城

遂に縦走隊と連絡がとれないままやむなく南尾根を下った。一刻も早く下り連絡をとりたい気持と計画を完遂できなかった無念さが入り混り複雑な気持であった。扇沢からトラックーバスと乗りつぎ大町に出る。神城の下川氏宅への電話が通じないため直接神城へ向う。神城駅で一足先に着いた俵より縦走隊が無事下山している事を聞きホッとする。下川氏宅で縦走隊四人と感激の再会をする。食いのばし作戦でやつれた縦走隊と人の分までたらふく食って下山したサポート隊の顔は対照的であった。久しぶりの再会で話がはずんだ。神城で合宿解散。

（中村雅明）

十二月二十七日、早暁。Mウスバ、一人トボトボ部室へ戻って参りました。そして書いております。合宿はと申しますと、縦

走隊はラッセル、ラッセル、荒天、荒天、荒天でコテンパンにやられ、すごすごと退散に至りました。これ、残念の極みなり。愚痴は沢山あれど、言うまい、こぼすまい、それが男の生きる道。しかし、鏡を取ってこの汚れた顔の輪郭をなぞってみたり、この家事雑用に汚れた手を見てみると、やはりやれるだけはやったのかと思う。そしてその結果を不運という安易な2文字に置き換えるとしても、僕としては、抗うまい。要するに敗北には違いないのであるが、その後に「しかし」と続く事の未練がましさ、女々しさも僕としては甘受しよう。そしてやはり最後に思うのである。「やれるだけはやった」と。

（M・ウスバ）

鹿島槍天狗尾根での遭難

（一九六八年五月）

一九六八年度の五月山行は、二つの山行計画がたてられました。一つは、新人歓迎山行として、穂高にでかけ、西穂独標やら大滝山、蝶ガ岳に登り、そのあと上級生だけで東鎌から表銀を縦走するもの。いまひとつが鹿島槍ガ岳にでかけるものでした。鹿島槍ガ岳は私たちにとって前年度一年間の一年間、この山をとりあげようという私たちの気持の収束を示すものでした。

計画は次のようなものでした。

第一日　神城―遠見小屋

第二日　遠見小屋―天狗尾根カクネ里側

第三日　五竜岳往復

第四日　大遠見―天狗の鼻

支稜―天狗尾根下降―大谷原

第五～六日　鹿島槍ガ岳往復（二パーティー）

第七～八日　天狗尾根下降―大谷原

予備日は三日間。

五竜、鹿島槍に登頂するとともに、信州側をトラバースすることをめざしたものでした。天狗の鼻からカクネ里出合にのびる尾根には記録はみあたらず、天狗の鼻下のギャップが問題なことを知るのみでした。

メンバーは、俵昭(四)、藤原朋信(四)、戸川哲哉(三)、松尾信孝(二)の六名でした。

装備は、過去二年の経験から、わかんを除いた冬山装備とし、降雨にそなえて、フライを用意しました。

▒四月二十五日

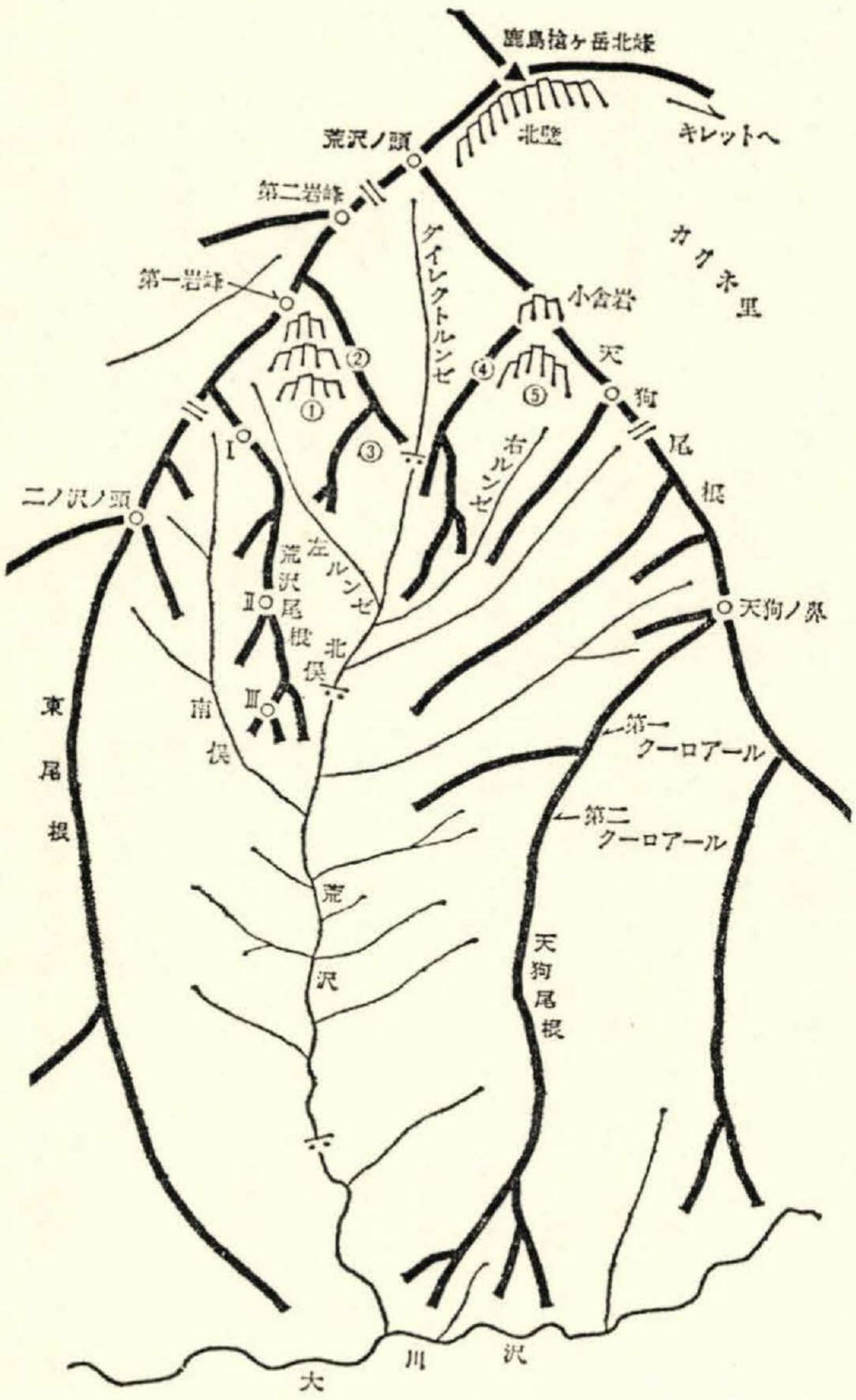
夜の新宿を出発。戸川は後発。

▒四月二十六日

大町で下車。駅舎の2階で食事をとる。

五竜、鹿島槍に登頂するとともに、信州側をトラバースすることをめざしたものでした。天狗の鼻からカクネ里出合にのびる尾根には記録はみあたらず、天狗の鼻下のギャップが問題なことを知るのみでした。

冬山をやる場合は、遠見尾根からの隊と、東尾根または天狗尾根を登るサポート隊というものを考えていましたが、東尾根にテントを移し、下降するという計画は、あまりに過重なものでしたので、五月の山は、五月の山としてまず完結することをねらいました。



時間かけて遠見小屋に着く。残雪は豊富。小屋横で幕営後、すこし雪上訓練をした。十八時、シュラフにもぐりこむ。

▒四月二十七日

昨日の行程が短いのと早く寝たせいで、まだ薄暗い四時に出発。三時間弱で大遠見につく。設営して五竜岳にでかけた。白岳の斜面は昨年五月と違って雪が豊富である。五竜小屋上で、藤原が腹痛を訴えるので、今日は、唐松岳とカクネ里偵察にパーティーを分ける。

で、休ませる。四人で五竜岳に立つ。頂上の岩蔭でうららかな日和を楽しむ。春に登った剣岳や立山をのんびりとした気分でみやる。重い雪に足をとられながら、一二時五分帰幕。シュラフを乾したり、昼寝をしたり、のんびりと午後をすごす。

▒四月二十八日

予定を一日はやくこなしたし、後発の戸川がまだあらわれないので、今日は、唐松岳とカクネ里偵察にパーティーを分ける。藤原、藤巻、松尾の三人は、三時すぎに懐中電燈をもって霧の中にとび出していった。

おくれて俵、中村、四時に出発。幕営地からすぐテント場尾根に入ってカクネ里出合めがけ下る。途中で左に派生する枝尾根に入ってしまい、下部でヤブ漕ぎのトラバースを強いられた。中村がカモシカをみつけた。やがて、ガスがとれ始め、国境稜線に陽光がさす。カクネ里の奥に吃立する北壁は、ガスがまっていて壮観である。天狗尾根支稜の末端は問題なさそうであった。天狗の鼻下のギャップを探るべく、カクネ里の緩斜面を奥に進む。口の沢出合は高さ五～六㍍のデブリであった。逆くの字状ルンゼが落ちてくる手前で一休み。この辺り、ブロックが随分ころがっている。ギャップに突き上げるルンゼを登り四五分で上に立つ。文献に「通過困難」とあったが、なるほどニゴリ沢側は圧倒的に切れて垂壁をなしており、カクネ里側も捲くことはならないナイフリッジを形成していた。稜線

上に大木があり、ブッシュも適当にあるので辿れないことはなさそうだ。のちのためにとザイルをとり出したが、雨がパラついてきたので、「深入りはよそう」と帰り支度。尻セードで下れば、五分でカクネ里に降り立つ。白岳沢出合の岩蔭に雨をさけて、パンとする。五竜岳の北尾根に極地法を想定してみたが、この辺りの冬の雪を思い、地形を観ると気が進まない。それにこの出合では雪崩が心配であるし、滝も埋まっているかどうかわからない。深いガスの中、汗をかきかき一〇時三〇分帰幕。唐松岳のパーティも正午すぎ戻った。雨を避けて二時間ほど唐松小屋にいたとのこと。夕刻、食事の用意をしている頃、戸川がやってきた。にぎやかな夕餉。

▒四月二十九日　朝より雨

フライが重宝。よもやま話に時を過ごす。二年生の間では入山以来、中村が心をひかれた女性のことが話題になっている。鎌倉に合同ハイキングにでかけたとき、知って、その後藤巻にそばにいてもらって二度ばかり電話したそうだが通じなかったという。キリッとしたところのある、女子大生だった。寝袋から這い出し、もぐり込むまで、感心するほど口を動かしている。五竜東面がみえかくれして、温度が高い。九時四〇分撤収出発。暑い暑いを連発しながら逆くの字ルンゼ下に一一時一五分到着。昼パンをとる。北壁蝶型ルンゼは滝のような雪崩で轟音が絶えない。これから登ろうとしているルンゼ内にも小さな表層雪崩の跡がある。そこで向って左の不明瞭な稜を登路に選ぶ。急傾斜で湿雪なので、ラッセルの足が重い。逆ボッカをしながら、雪稜の姿がみえる。荒沢の頭からはトレースを辿る。稜が雪の斜面になってストレートに突き上げたところが天狗の鼻であった。昼すぎから温度が下って、幕営を終えた十五時頃は風も吹き寒くてならなかった。皆で、荒涼たる様の荒沢奥壁や北壁をみつめる。心のそこまでうすら寒くなるような時であった。

▒四月三十日

ピッケルにうっすら白いものがついている。六時二〇分出発。この連休は私たちが初トレースらしい。行くての北壁中央ルンゼが凄絶。ガスが湧き、やがて雪がちらついたので、最低コルで大休止。しかし落ち着く気配なので、登行を再開する。すぐ急な登りだ。藤原と戸川がルートをつけてくれる。ザイルを七〇㍍使って、雪庇をかわした。小舎岩着九時。岩の上で昼食。視界悪く、東尾根の人声がヤケに近い。すぐ上の岩峰は最初カクネ側をトラバース気味に登り、直上したら岩場を三㍍残すだけであった。次の岩壁は容易にノーザイルで通過した。この頃、ガスがとれて、東尾根の人の姿がみえる。荒沢の頭からはトレースがついていて、難なく北峰に。雷鳥が迎えてくれる。頂上直下のスノウリッジは美事なものであった。先行パーティに礼をのべて昼食。ガスで眺望はなし。南峰はとりやめにして一一時三〇分帰路につく。荒沢の頭下の岩壁からザイルを出す。あとはザイルをふんだんに使用した。雪の状態はよく、北壁も静かだ。登ってきた緑山岳会のパーティーに下部の様子を伺う。二つのクーロアール間のスノウリッジに大きな亀裂が入っていていやらしいとのことであっ

た。一五時二〇分帰幕。横にテントを張っているパーティがある。風が出てきてグッと冷え込む。夜は、登頂を祝って随分沢山食べた。明日から下山なので、食糧、燃料を調整する。一九時シュラフに入る。

▒五月一日

二時三〇分起床。明るい星空だ。四時四〇分下山にかかる。出発前、戸川のリュックの紐が二度もはずれて、本人「なにか悪いことがおきますよ」と言っていて、アイゼンが快適にきく。

この山行には三つのポイントがある。天狗の鼻のギャップ、鼻と荒沢の頭、天狗尾根下部の二つのクーロアール、この三つである。逆くの字状ルンゼは逃げ道としていた。登頂も下山もできない場合は、また俵が指揮をとれなくなった場合は、迷わず逆くの字ルンゼから遠見尾根を経由して下山するように藤原に言い含めておいた。これまで、ギャップはかわし、鹿島槍登頂も果してきた。先ず第二クーロアールにフィックスドロープを借用してスムーズに通過。すこし下った例の亀裂のある雪庇の脇で休む。晴れ上って風もなくおだやかな朝だ。後立山は信州側に切れているので里はすぐだと錯覚しやすい。上高地に行くとか、松本で飲もうとか、スキーにでかけようとか、もう下山したようなハシャギようである。気楽になったのか、とんでもないことを言い出す者がいて、それまで黙って聞いていた私もムッとして叱りとばす。ゆっくり休んで、「さあ！しまっていこう」と声をかけて腰をあげる。第一クーロアールにかかる手前に、雪庇をさけてマガリ沢側に降りて雪庇の風蔭側をまわり込むところがあった。藤原が先ず降りて、大丈夫とみ、戸川が続く、次に中村が雪の階段をおりきって、トラバースにかかったその時、「アッ！」という声と同時に前につんのめって、空に飛び出した。まるで人形を放りなげたかのように空中を落下し、途中の樺でリュックをぶつけ、バウンドして、私たちの視界から消えた。五時四五分から五〇分にかけてのことだろう。コールが空しくこだまする。俵と戸川で救助にいくこととし、他の者は待機させ、登山者に救援をたのみ、また、本部、警察への連絡を依頼するようにした。岳樺を支点として、ザイルにつかまりながら、四〇～五〇度の斜面を下る。ザイルは四本、計百四〇㍍ほど下で、雪面に突ずで雪渓に降り立った。途中で私たちは帽子と手袋片方を拾った。雪面には大きな跡がついている。五〇㍍ほど下で、雪面に突きささっているピッケルをみつけた。早稲田岳友会の人たちが下方の尾根上から、コールをかけたが返事がないこと、その雪渓は急で危険だから、歩くのはよせと言って寄こす。私は礼だけのべて、そんなことに構わず、夢中でピッケル二本を使い下り続けた。たまらなくなって、中村が落ちていった跡を尻セードで急いだ。沢が大きく左に曲ったところで、散乱したリュックやテントをみた。それから、まもなく中村をみつけた。中村は、身体を上向きにし頭を雪塊につけ、足を斜めにして倒れていた。こにくるまで、不安はつのる一方だったので、一瞬ギョッとして立ち止り、声をかけてみる。返事はない。私は「ナカムラ、ナカムラ」と大声で呼びかけながら、彼を抱

き上げた。脈をとる。手首では反応がないので、胸を開け、心臓を調べたが、脈うつものはなかった。瞳孔にも反応はみられなかった。時に六時三〇分であった。しばらくは、中村を抱いたまま、顔をさすったり、手を握りしめたりしていた。戸川と二人して、すでに遺体となった中村を安置した頃は、曲り沢には五月の陽光が溢れていた。

（俵　昭）

遺体収容等日誌

▒五月一日

登行中の長崎山岳会石川勝也、東俊昭両氏に大町警察署、東京本部への連絡を依頼。

一三時二〇分　両氏大町署に届出。

一五時四五分　鎌尾根登攀に来ておられた山田亮三、大橋喜治OBらにより大町市郊外エコノミスト村に現地連絡本部設置。救援活動開始。大町市有力者平林氏に関係諸方面への手配で援助して頂く。

同行五名下山、鹿島部落狩野氏宅へ。

二一時二〇分　俵、大町署に出頭。その後穂高より下山した今泉、中原と合流し本部へ。

▒五月二日　快晴

夜半より関恒義部長、甘利仁朗、石和田四郎、中島寛、石弘光、佐藤之敏、高崎俊平OB、高崎OBの弟氏本部着。

中村家御家族も夜半新潟より到着された。協議の上、三日早朝現場より天狗尾根に引き上げ、夕刻まで下山させることを基本的目標として行動計画を決定。

天狗尾根、荒沢隊、本部と三区分し、天狗尾根隊六名は現場に急行して状況などを偵察する。また、出来る限りのメンバーを荒沢出合に動員するとした。

七時三〇分　中島寛、佐藤之敏OB、俵が先発し現場に急行した。夕刻まで遺体を寝袋に納め、右岸（天狗尾根）に移し、ルート工作をした。高崎俊平OB、藤原、今泉が樺平に幕営、合流した。

荒沢出合には、前記OBの方々に、大賀二郎、佐藤久尚OB、藤浪育夫君（元部員）、宮武、大田、戸川、西牟田、前田、松尾、藤巻、金子、中原がつめた。

▒五月三日　晴のち曇雨

尾根上まで天狗尾根隊で引き上げ、その後荒沢隊が中心になって、八時一〇分、樺平へ。

遺体損傷なきよう包みなおし、現役一同、母上から託された水仙を献げる。

長沢道彦、小島和人、山本溢弘、原博貞、石田信隆、斉藤正、加藤正己OBも加わって下山にかかる。同時に天幕も撤収。

一〇時四〇分　少し下ったところで、弟茂君、新潟高校山岳部の飯塚、片岡両先生、先輩の小林氏に迎えられる。その後、中島OB、俵が引き上げ地点まで案内し、状況説明をした。

一二時頃、荒沢出合に到着、姉君や友人に迎えられる。

一三時三〇分　大谷原着。大川沢の川原で、御両親をはじめ御近親多くの友人知人に迎えられた。讃山賦、一橋大学学歌、新潟高校校歌を斉唱。遺体は霊柩車で大町へ。

一五時　市内六角堂に到着。収容にあたった全員も同時に帰着。検死後納棺。死因

は頭部打撲頭蓋内出血。

一七時　御遺族他全員列席のもとに仏僧による読経、ひき続き通夜にうつる。

夜、庭に火を焚き、山の歌など歌って故人をとむらう。

▒五月四日　晴

七時　大町市火葬場にて荼毘に付される。午過ぎ、遺骨は故郷新潟へ向った。

この間東京では平川紀男、池知昭洋OBが連絡本部となり、横川晄一、吉田義則、山本健一郎OBが針葉樹会員の連絡にあたって下さった。

針葉樹会の強力な組織性のもと、OBの皆様の適確な判断、行動により、技術的にも心理的にも、何らとどこおることなく、作業を終えることが出来ました。

茲に改めて深く御礼申し上げます。

猶、五月九日新潟市念仏寺にて、中村家告別式がもたれ、関部長、山田亮三、山元淑弘、中島寛、三股宏各OB、現役十二名が参列した。

伊那谷側から赤石・荒川へ

（一九六九年春山合宿）

宮武幸久（リーダー、二）、金子晴彦、松尾信孝、藤巻悟、西牟田伸一（二）

▒三月四日　晴

前夜発―飯田線平岡―（バス）―梨元―大沢渡

梨元から、直ぐ遠山川沿いのトロッコ道を約二〇キロの道のり。平坦だが単調な道を歩く。大沢渡の一キロ程手前で設営。

▒三月五日　曇

大沢渡―唐松峠

大沢尾根に入った途端、積雪が始まり、段々深くなる。

▒三月六日　曇

唐松峠―大沢尾根の頭

アタック二次

三人で小赤石・大聖寺平を経て荒川へ。残りの三人は前日から始めたイグルー作りで遊ぶ。

▒三月七日　うす曇

大沢尾根の頭―赤石岳

夏道を避け大沢岳を越えて、あくまで尾根伝いに百間平へ。赤石の西面は硬くクラストしており、重荷でもあるので、スタカットで慎重に登る。山頂の普段なら5分以上の高さがある避難小屋がすっぽり雪に埋れているのに驚く。小屋のすぐ横に設営。

▒三月八日　晴

荒川アタック一次

松尾、宮武で中岳・前岳にアタック。残りの三人は前日から始めたイグルー作りで遊ぶ。

▒三月九日　晴

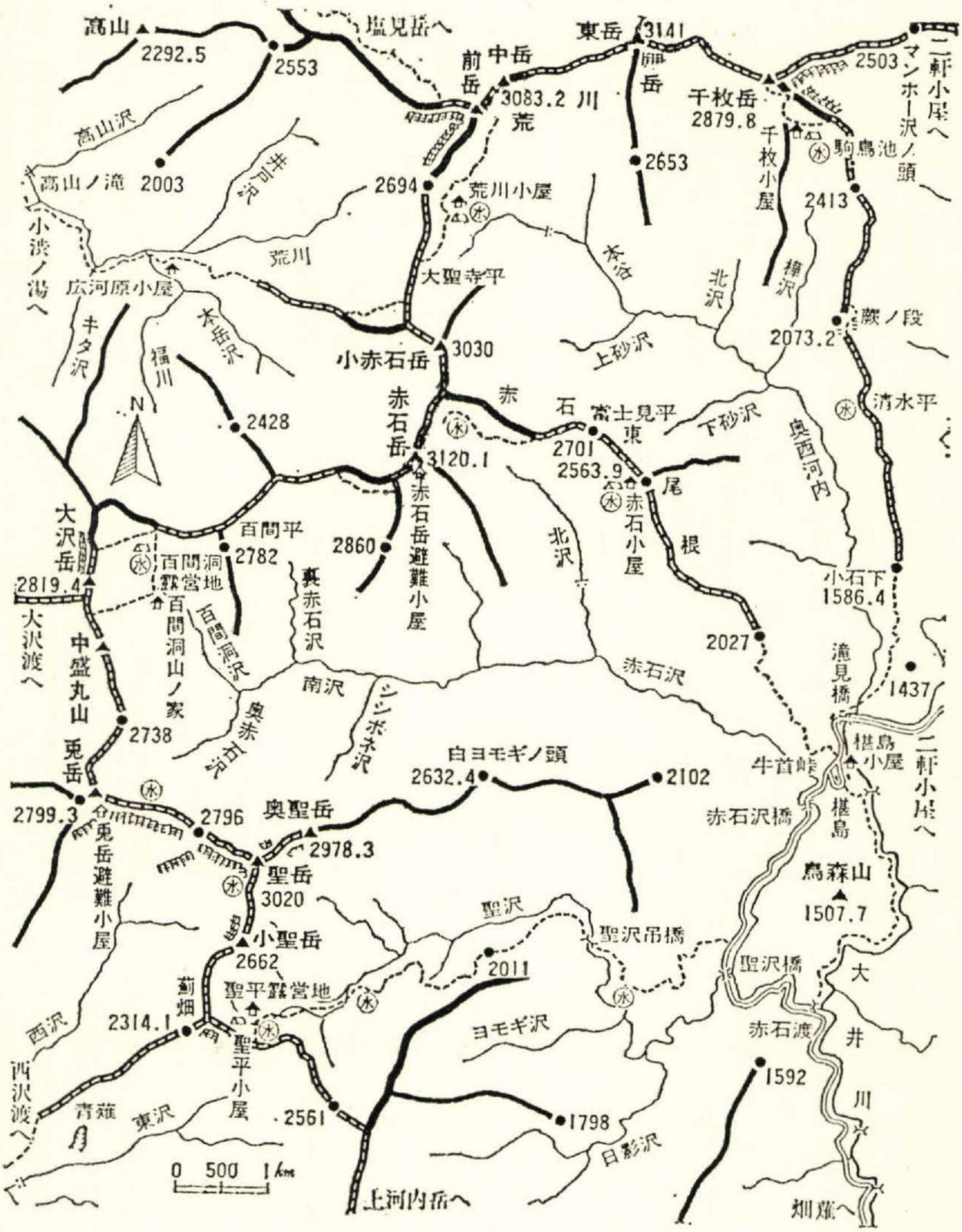
アタック二次

三人で小赤石・大聖寺平を経て荒川へ。大聖寺平のシュカブラが美しい。

▒三月十日　曇

赤石山頂―大沢尾根の頭

三月七日の逆コース。夕方から天候悪化、台湾坊主による豪雪で除雪のため一睡もできず。


高山
2292.5
塩見岳へ
2553
前岳
中岳
3083.2
東岳
3141
荒川岳
2653
千枚岳
2879.8
2503
二軒小屋へ
マンホー沢ノ頭
高山沢
高山ノ滝
2003
2694
荒川小屋
千枚小屋
駒鳥池
2413
小渋ノ湯へ
荒川
大聖寺平
広河原小屋
キタ沢
本岳沢
福川
小赤石岳
3030
北沢
樺沢
蕨ノ段
2073.2
上砂沢
赤石
富士見平東
2701
2563.9
下砂沢
奥西河内
清水平
2428
赤石岳
3120.1
赤石岳避難小屋
尾根
大沢岳
2819.4
百間平
2782
2860
百間洞山ノ家
百間洞沢
真赤石沢
北沢
小石下
1586.4
大沢渡へ
中盛丸山
兎岳
2738
南沢
奥赤石沢
ホッツホネ沢
2027
赤石沢
滝見橋
1437
白ヨモギノ頭
2632.4
2102
牛首峠
二軒小屋へ
2799.3
2796
奥聖岳
2978.3
赤石沢橋
椹島小屋
椹島
兎岳避難小屋
聖岳
3020
小聖岳
2662
聖沢
聖沢吊橋
鳥森山
1507.7
2011
聖沢橋
节畑
聖平露営地
2314.1
聖平小屋
ヨモギ沢
大井川
赤石渡
西沢
西沢渡へ
青薙
東沢
2561
1798
1592
日影沢
0 500 1km
上河内岳へ
畑薙へ

▒三月十一日　雪のち曇　沈澱
午後から雪も上がり、一安心。
▒三月十二日　快晴
中盛丸山から兎岳往復
快適な雪原散歩。聖方面を望むといかにも兎聖のコルがいやらしい。
▒三月十三日
大沢尾根の頭―大沢渡
降り始めは登りの時と状態が変って、一層悪くなっている。何とか乗り切って無事大沢渡へ着く。
▒三月十四日
大沢渡―梨元―平岡―帰京
一〇日前とは里の景色もすっかり変って、平岡で祝杯、辰野でも祝杯、翌朝帰京。
（西牟田伸一）

甲斐駒ガ岳、赤石沢奥壁の遭難

（一九七〇年九月）

六八年五月の鹿島槍の事故から二年余り、山岳部はまた遭難をひきおこした。そして故中村慎一郎君につづいて橋本明君（当時二年）を失なった。その追悼・報告誌「赤石沢」に主によりながらこの山行について述べる。

一、甲斐駒合宿にいたる経緯

鹿島槍遭難後も、六八年度の活動は一応年間計画にそって実行された。俵から宮武へとリーダーをひきついだ六九年度は、三月の春合宿（赤石岳・荒川岳）を最初として活動を開始、四月には橋本君ら新人を迎えた。五月の鳳凰三山～甲斐駒行から一一月の富士山合宿まで、山行記録欄にみるように順調に山行が行なわれた。しかしこの年の冬山合宿は実行されないままにすぎてしまった（計画は、小赤石尾根～三伏峠・

参加者四名というものであったが）。この間の事情は別稿にゆずるとして、七〇年度の活動は、リーダー金子のもと、三月の甲斐駒～仙丈～白根三山縦走から開始された。この合宿は好天にもめぐまれ、縦走は成功をおさめた。しかし、戸本川本谷を登攀するという試みは失敗（F二で退却）した。

この山行後、七〇年度リーダー会はしだいに甲斐駒周辺を対象として考えるようになっていった。四月には、鋸岳往復を含め再度甲斐駒をめざし、戸本川本谷の雪庇戦にも成功した。

夏の甲斐駒合宿という計画は、年間目標とした甲斐駒の集中登山という線から出たものだった。七月になりこの合宿の計画の内容が検討された。そして七月下旬～八月上旬の北アルプス、黒部源流合宿においても縦走と沢登りを主体とすることから、この合宿は岩登りを内容に含めることにしてコースが選ばれた。また、冬山のための偵察という二次目標も含まれていた。夏休み以前の時点での参加者は四年三名、二年四

名、一年一名の計八名であり、予定コースは、黄蓮谷、尾白川本谷、水晶沢、赤石沢奥壁というものであった。

黒部源流合宿後はじめての部会は八月十五日にもたれた。合宿反省ののち、甲斐駒行についての討議を行なったが部会参加者が少なかったため具体的な準備分担等は清富会への参加のあとへ見おくられた。そして八月二九日の部会。ここで参加者は四名に減り（四年二名、二年一名、一年一名）、計画変更を迫られることになった。

そこで、出発するか見あわせるか、出発するとしてコースをどうするかについて討論したが、ともかく予定通り出発し、現地にて部員の調子を見ながらコースの最少限のねりなおしを行なうことにした。

そして翌三〇日、最終の夜行列車で新宿を発った。

二、行動概要と事故発生

▒八月三十一日　ガスと雨

五時三〇分駒ガ岳神社着。黒戸尾根を登り十三時五合幕営地に到着。ゆっくりとしたペースの入山だった。

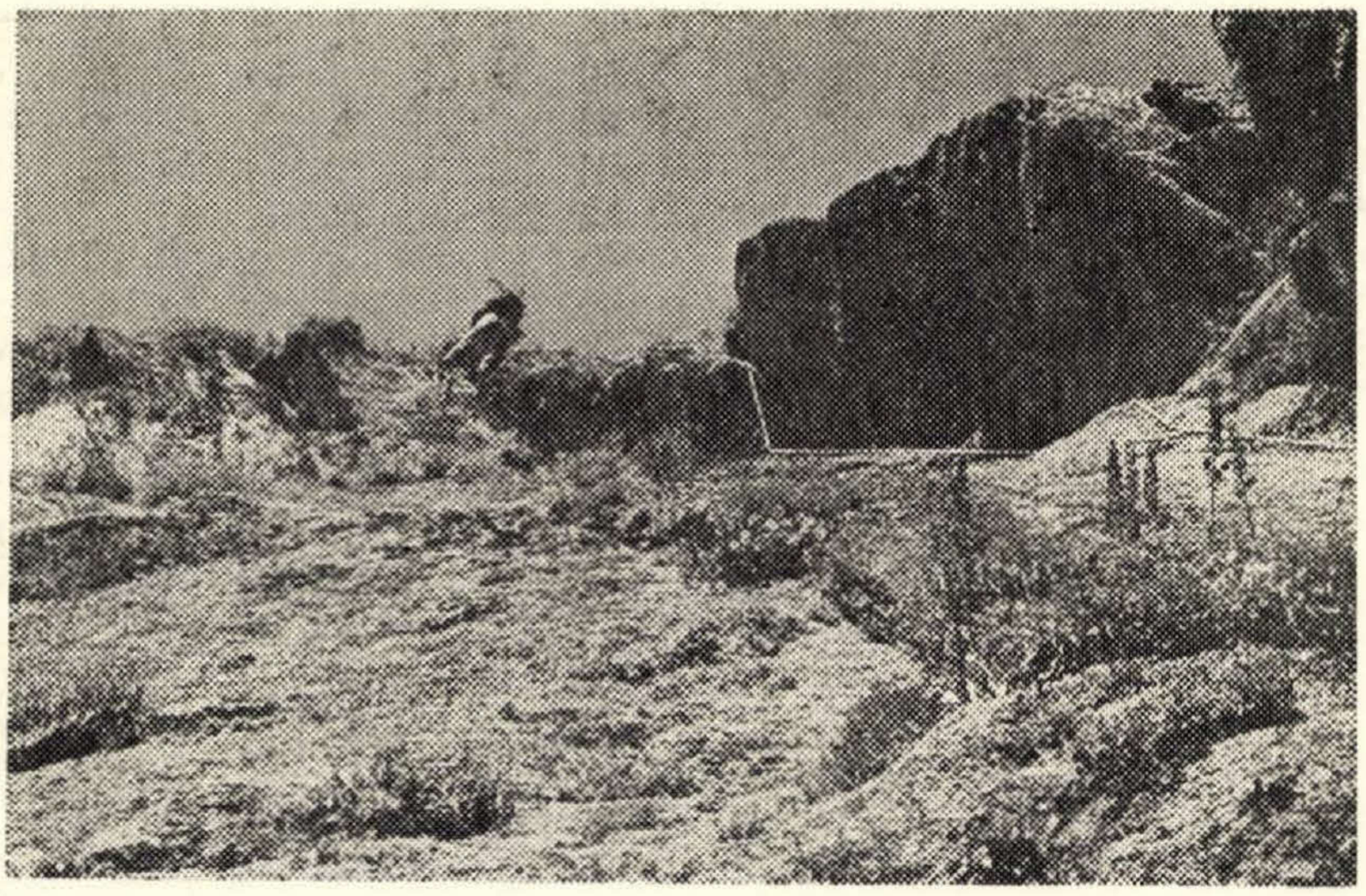
▒九月一日　雨のち晴

全員で黄蓮谷右俣へ向う。五時三〇分五合ベース発。六時三〇分、坊主の滝上から遡行を開始する。天候はしだいに好転し、快適な沢登りを楽しみながら進む。ザイルを使用した所もあったが、最初のピナクルは顕著なものではなかったのでさらに左に登って大きなピナクルに取りついてみた。しかしそこはルートではなく、最初のピナクルに戻り、七時、西牟田、橋本、金子の三名で中央壁へ。神谷はテントキーパーとして残った。まだ暗い四時三〇分に五合を出発した。七合小屋をすぎ、くねくねと続く急登の途中で休んだ。東の地平線には太陽が昇りつつあった。

八合の鳥居をすぎて夏道バンド（トラバースバンド）へと登山道から分かれた。下り始める手前に白稜山岳会の巨大な慰霊碑があって足を止めた。左ルンゼの冬に失われた三名のクライマーのためのものだった。そこから奥壁の全貌を見わたすことができた。中央壁は、白い筋となって頂上へとはいあがる左ルンゼの左に垂直だった。

六時に夏道バンドに着き、そのまま第二バンドへ登った。やや右寄りにトラバースを移動、四日水晶沢右俣へ下降、六日スペアという事に決めた。中央壁のポイントは二ピッチ目の二〇㍍にわたる凹角とハングの通過であると考えられたが、V級・A二というグレーのかたわらを這うようにして登り、そこから草付の斜面に出る。人に踏まれた形跡はわずかで、アザミのとげが足を刺した。

中央壁の取付にはピナクルがあるはずだが、最初のピナクルは顕著なものではなかったのでさらに左に登って大きなピナクルに取りついてみた。しかしそこはルートではなく、最初のピナクルに戻り、七時、西牟田、橋本、金子の三名でアンザイレのオーダーでアンザイレ



1970. 9. 2
赤石沢奥壁
トップをゆく西牟田

ンし、登攀を開始した。

まず西牟田が岩のはがれたハングの下をアブミトラバースし、草付の垂壁に移り、登ったいった。ピナクルの場所からは彼の姿はすぐ見えなくなった。ザイルは三〇㍍ほどのびて西牟田は第一のテラスに着いた。

続いて橋本が登り、暗い庇の下で荒い呼牟田は二ピッチ目の凹角を登り始めた。その途中、摩利支夫の方から登山者の一行が現われ、真下の夏道バンドをゆっくりと八合の方へ歩いていった。登山者を引率していた五合目小屋の中山さんが、「気をつけろよ」と声をかけてくれた。

この頃からザイルののびが遅いのが気になるようになった。西牟田はハーケンを二本打ち、凹角中ほどのピナクル上の第二のテラスでいったん切った。金子が第一テラスへ登った。そこからは垂直の凹角とそのどんづまりのハングが見上げられ、また見下ろすと途中はまったく見えなくて一〇〇㍍下の夏道が細く見えた。

西牟田は三ピッチ目、三台のアブミを使って苦闘した。かなり時間がかかっていた。ハングの下に着く手前で、彼は「アッ」といってアブミ一台を落とした。アブミはどこにもぶつかることなく岩壁と平行にまっすぐ落下し、はるか下の草付の中に見えなくなった。このためにハングの乗越は困難なものとなった。暗い庇の下で荒い呼吸をしながら西牟田は何度もハングの上のボルトに手をのばしては失敗した。一台のアブミにしか乗れないので体がゆれてバランスが保てないのである。「休ませてくれ」といってザイルにぶら下がり、握力のなくなった腕をしきりにふったりした。

橋本と金子は二人がかりでビレイした。五度目ぐらいにやっと上のボルトにアブミがかかり、ハングを越した。ハングの上の第三のテラスが狭いので、さらに左にアブミトラバースをした。

ついで橋本が凹角を登り第三テラスへ。橋本は快調に登ってゆき、ハングを越した。金子からは二人の姿は見えなくなった。金子がコールをかけようとしたとき、橋本がザイルを引きあげ始めたので金子は登る準備をした。ザイルはすっかりあがっ

たがコールはなかった。何かもどかしい時間だった。そのときハングの上で西牟田が動くのがかすかに見えた。突然「ベリッ」という音とともに西牟田が落ちるのが見え、もつれたザイルが空に広がった。西牟田―橋本間のザイルはまたたくまに張り、同時に橋本も墜落した。

西牟田はそのまま七〇㍍下へ約三〇㍍下、橋本は、金子から七㍍ほど下へのショック落ちて動かなくなった。金子は少なく、ザイル末端から脱出後、プルージックをザイルにセットしてへ下降し、一〇時二〇分死亡をついで同じ方法で西牟田の所へが、途中でプルージックのシュき切れ草付に墜落し、しばらくた。覚醒後、西牟田のもとへ行量なるも生存を確認した。胸もボルトのついたアブミがあり、がわかった。

（墜落の前後については西牟失もあって判然としないが、以って推定すると、――西牟田＝橋本間のザイルの余りは西牟田の側にあり、また二人の間（七㍍）にランニングビレーはなかった。さらに橋本のビレーは一本のボルトであったことから、西牟田が体重をかけていたボルトが抜けて落ちた衝撃で橋本のボルトも抜けたものとみられる。）

三、救助活動

生存している西牟田を見つけた金子は、止血剤と鎮静剤を水で飲ませセーターを着せ、ザイルで固定し五合ベースへ向った。途中七合小屋高木氏にも連絡し五合に到着。五合小屋の古屋氏が急拠連絡に下山して下さった。金子と神谷は現場に戻り、十四時に第二バンドに登りついて心配された西牟田の生存を確認した。神谷はビバーク用品を取りに再び五合へ。

一方古屋氏からの連絡は十六時三〇分、東京の加藤正己ＯＢに届き、救助活動が開始されることになった。二二時には現地長坂の旅館に石引光ＯＢにより救援本部がおかれ、深夜にはＯＢ十三名、学生三名が東京を発った。救援隊は三日朝から黒戸尾根を登った。現場にあった金子は朝から搬出のためのボルト工作等をし、八時には救援隊が黒戸尾根中途にあることを知った。

一一時に宮武ＯＢ、藤巻部員が着いたのをはじめとして救援隊現場着。ルート工作をした後一五時から西牟田の搬出にかかる。担架も使ってみたが危険なので主に背負うことにより八合石室に到着した。一八時二〇分。なお東京より警視庁ヘリコプターが一六時甲府に飛来（災害出動の適用を受けた）、待機していた。しかし低高度の雲の発生のため飛行はできず、西牟田は八合石室に収容されたまま四日の朝を迎えた。

四日。六時三〇分、中島寛ＯＢの指揮により中央壁第一テラス五㍍下にある橋本君の遺体引きおろしを開始する。一〇時にトラバースバンド着、一二時には八合へ搬出をおえた。八合で橋本君遺体は検死を受けた。

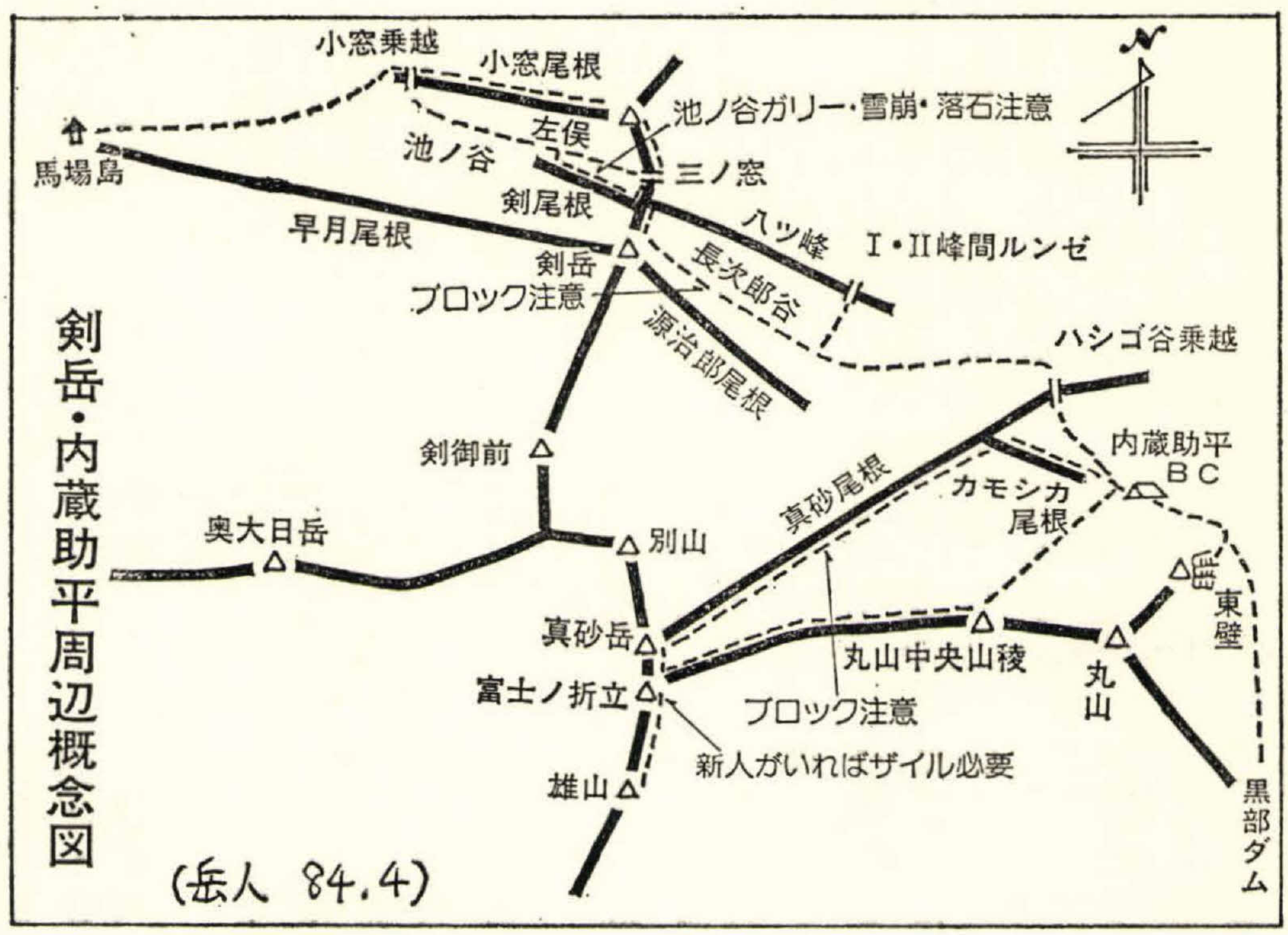
この日夕刻、橋本君の父上、弟君が八合に到着。橋本君と対面された。遺体はこの夜茶毘に付され、五日朝七時父上、弟君、中学時代友人、清富会会員、山本（尚）Ｏ

Bとともに八合を出発、山をおりた。
一方西牟田の救出はうまく進んでいなかった。四日は終日ガスにみまわれ、いったんは飛びたったヘリコプターも飛来はかなわず、西牟田は八合でさらに一日をすごした。
五日朝、八合ではヘリポートを作成し、いた天候はしだいに好転して望的に思われてヘリの飛来にそなえた。絶谷上空からヘリコプターが一〇時、黄蓮リポートに着陸。ロータを回転させたまま西牟田を収容し、甲府へ向かった。残る救援隊も一一時下山開始。西牟田は甲府着後ただちに病院へ収容された。夕刻までに当部関係者全員が下山し、二〇時、救援本部を解散した。
六日。勝田部長、甘利、中島OB、金子部員が、長坂警察署、台ケ原派出所、菅原山岳会、八稜山岳会に挨拶をした後、西牟田を見舞い、帰京。
（金子晴彦）

黒部内蔵助平での現役・OB合同合宿

（一九七二年五月）

▒四月二十九日　晴
新宿発（六・五〇）―大町（一二・一〇）―黒部ダム（一四・二〇）
連休の混雑を避けて昼間の列車にしたがこれもスシズメ。荷は重いが無事ダムの下の河原に設営。新人は初めてスベアを使う。
▒四月三十日　晴
ダム発（九・三〇）―内蔵助平BC（一三・〇〇）
九時に西田、前神が迎えに来る。途中困難なルートはないというが、日電歩道は雪崩でズタズタ。黒部川の雪渓の上を歩くと時折、底がぬけてしまう。内蔵助平の水場近くに冬用四人天、六人天、夏用四人天、アタックテント（装備庫用）を張ってBC設営。夕方から天気崩れる。高崎氏着。
▒五月一日　雨一時晴のち雨
BC発（六・五〇）―ハシゴ谷乗越（七・五〇）―真砂尾根二一〇〇尻付近（八・一五）―帰幕（九・三〇）
前夜来の雨があがりそうなので、真砂尾根に登って剣岳を眺める。沢筋は雪崩の危



剣岳・内蔵助平周辺概念図

険があって近付けず、午後より雨。山本氏着。

に帰り上級生四名は丸山登頂競争。高度差約三〇〇㍍の丸山をBCから一時間以内で往復できれば加藤氏よりビール飲み放題。高橋がこれを四五分で達成し、この賞を獲得した。この後丸山西面斜面で雪上訓練。

▒五月四日　晴のち曇

BC発（八・三〇）―稜線（十一・二〇）―雄山（十三・〇〇）―帰幕（十五・四〇）

入山以来初めての登頂。天気図から、午後は悪化することが予想されたので注意しながら雄山をめざす。稜線は風強く、夏道の出ている部分もあるが雪はクラストしている。下山する頃より天気は悪化。加藤氏下山。

▒五月五日　雨　沈澱

中島氏入山。山田、山本氏下山。

▒五月六日　晴

本隊下山。岡田氏入山。西田、高橋は中島氏と共に長次郎谷より剣岳登頂。

▒五月七日　晴

全員下山

立山・剣の登頂はしたものの、OB合宿の性格上、行動はその日の状況に左右され

ることが多く、当初の計画よりかなり後退した。又計画、技術指導面ともに加藤氏に一任してしまったが、現役としても自力で行ける地域、とOBの同行が必要な地域、予定していたOB不参加の折の対策をねっておく必要があった。こうした検討が不充分だったため、上級生の実力アップという目的は果たせなかった。

OBとの懇親という意味では大変楽しい合宿にできた。（上田伸）

高嵐尾根より黒部源流

（一九七四年春合宿）

前神（リーダー）、藤本（三）、加藤、藤田（二）、若林、松田、浅田（一）

三月八日

葛温泉まで車で入る。高瀬川のダム工事は進行中であって車の通行は多いがデブリ等の除雪もなされており、第五発電所まで快調に入る。高瀬川の水量は秋とさほど変りはない。尾根の取り付きに多少の変化を生じていたがたいしたことはなく、河原に幕営後、二ピッチほどボッカする。三時半頃帰幕すると水量が減少しており、靴を脱がずに渡れた。夕方晴れ間が広がり、北鎌の下半が望見された。

三月九日

いよいよ雪の世界へと歩み始める。昨日のデポまで一ピッチで軽く着く。二ピッチ目間もなくワカンをつける。単調な登りで対岸の発電所の導水管がなかなか低くならない。二〇〇〇㍍付近を二日目の幕営地とし、すぐデポを回収しに前神、藤本、藤田、加藤、松田の五名で下る。身を削られる思いでどんどん下る。登りかえす時は腹が減って大いにしごかれる。

三月十日

湿った雪がちらつくなかを出発。ラッセルは膝下くらいまでだが、やはり辛い。樹林帯ではスキーや竹が猛烈に邪魔になる。一ケ所若林がトップの時、稜線上の樹林を避け右手へ回り込もうとした時、厚さ一五㍍、幅一五㍍程の雪崩を起した。端にいたので何事もなかったが、樹林帯のなかのわずかな隙間に起きた新雪表層雪崩であろうか。若林の話によると、足元から亀裂が走りなだれたという。三ピッチで二四八六㍍ピークの肩に着く。二四八六㍍ピークのコルで設営。午後天候回復し青空も広がった。夕方晴れ間が上部の斜面でスキーに興じる。夜は満天の星空。皆明日の好天を信じて疑わなかった。

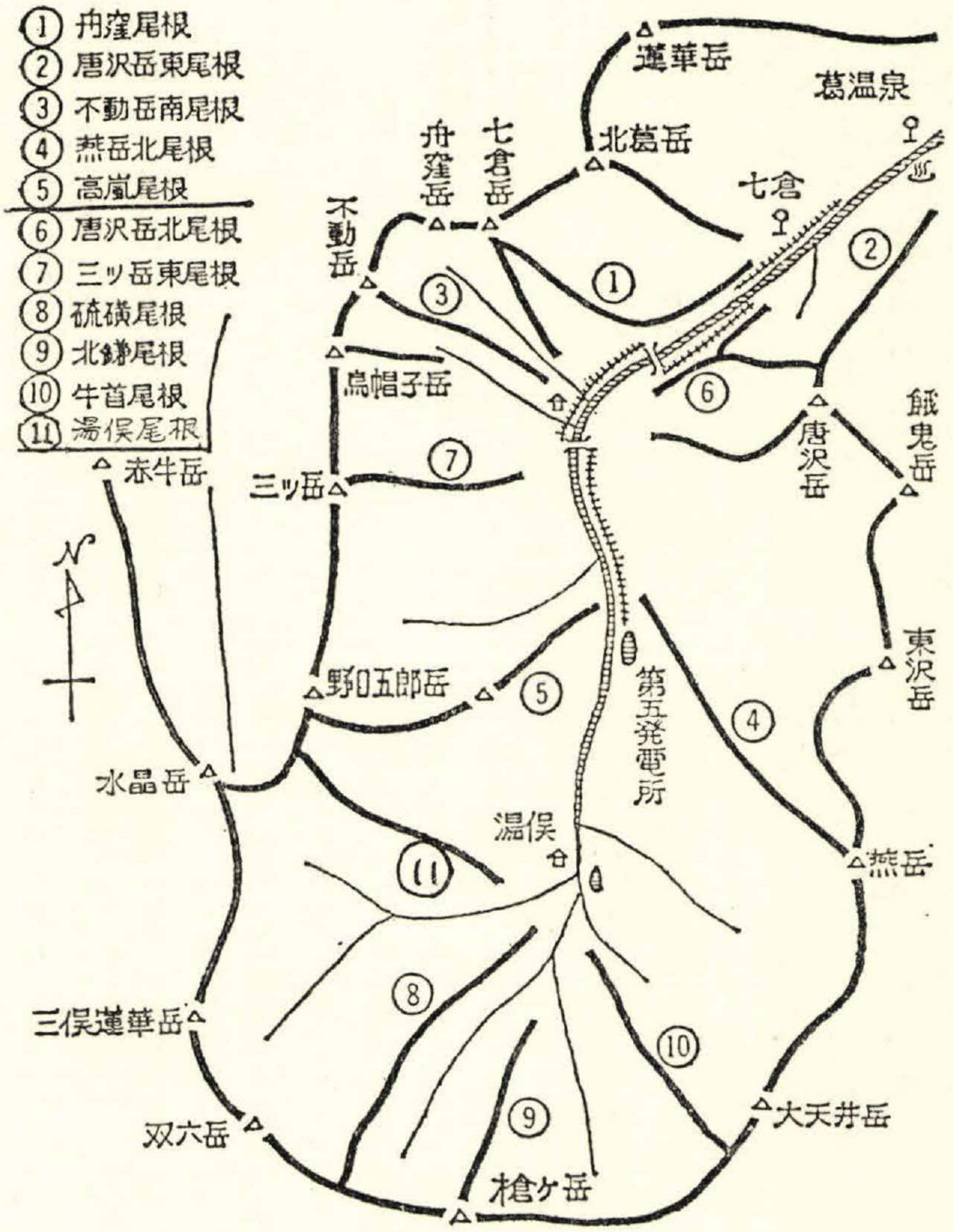
三月十一日

ところが予想がはずれて曇。風はそれほどでもないので出発。三〇分も登ると、アイゼンが効きだす。二六二〇㍍峯八時五〇分着。風が強いので東沢乗越の通過を考え、不要の物をデポしてここはひとまず退却とする。これから先は水晶小屋まで適当なテントサイトがないからである。

三月十二日、一三日　沈澱

三月十四日

いよいよ待ちに待った快晴の日がやってきた。憧れていたベース入りの日である。三日前のデポを回収し、二時間ほどの行程で



1974年 高嵐尾根から黒部源流，1964年 湯俣尾根から槍ケ岳

主稜線に立つ。東沢の谷をはさんで水晶、赤牛が大きい。東沢乗越までは問題なく進む。乗越に若干デポして前神―加藤、藤本―藤田とアンザイレンし、先行パーティーがフィックス工作をしながら進む。水晶小屋直前で藤田がスリップしたが、スのせいもあって大事には至らない。水晶小屋からひと登り眼前に源流一帯が広がる。岩苔小谷の向うには薬師が大きい。祖父岳のまるい、いかにも滑ってくれといわんばかりの姿、そして遠くに黒部五郎！足取りも軽く、ワリモ乗越へと入れるかもしれなった。天気は良いがいつ崩設営のために残いので藤本、松田、浅田をデポ回収にむかし、他はすぐに東沢乗越へう。四時半デポ回収し帰幕。全員無事ベース入り。

▒三月十五日　快晴

TS（六・三〇）―水晶岳（八・三〇）―赤牛岳（一〇・五〇）―水晶岳（一三・二〇）―TS（一五・一〇）

風は強いが天気はよい。一年三名に前神・藤田がついて赤牛岳アタックに出る。黒部五郎に行く藤本・加藤とテント前で別れる。水晶の手前では予想どおり夏道が使えず稜線通しに行く。一ピッチザイルを出す。水晶を過ぎるとかなり夏道が出ていた。危険個所はないが、雪が氷化していて恐い思いをした。赤牛の手前で黒五のパーティーとの連絡を試みるが通じない。北アのど真中にある赤牛からの眺望は素晴しいが風が強くて長くいる気にはなれない。往路を飛ぶように帰る。一年生にとって積雪

期の赤牛登頂は意義あるものと思える。

▒三月十五日　晴・強風

黒部五郎岳アタック（藤本・加藤）スキーをザックにつけ、アイゼンを着け出発。鷲羽岳のひとつ手前のピーク手前のコルより源流へ下る。五〇〇㍍ほど稜線上を進むがいよいよと氷はなくなりスキーをはけるいシュプー源流滑降の開始である。思い思ルを描き滑る。蓮華沢出合一五部で雪が急に重くなり、プルー得なくなる。蓮華沢出合は水が以後所々水が出ており、その間楽な滑走が続いた。祖父沢出合は大休止。殆ど平であり、雪もかてきたのでシールをつける。五すぐ判ったがガスがでていたらい。針葉樹をぬってスキーを滑い所だ。暑いので目出帽もヤッケも脱ぎ、腕まくりをして進む。赤牛を目達からは想像もつかないだろう前でトランシーバー第一回の交が、前神の声が二度ほど聞えたる。ルートは右俣に取る。最後の雪庇が問題だが、いざとなったら黒部五郎から北東へのびている小尾根に取りつくことにして進む。カール内は夏道通りに行くと最後急な雪壁となるので、より容易に思えた主稜線上二六〇〇㍍付近にカールを最後までつめずに取り付いた。途中でアイゼンにはき替る。この三〇分ほどの登りでも加藤が張り切る。稜線に出たところでスキーをデポ、頂上を往復する。目的は果たした。後は安全に帰るだけだが、藤本のシールの調子が悪いので、稜線通しに帰ることにする。黒部五郎小屋までの滑降は、回転こそできなかったが長い斜滑降の連続で気持良い。

三俣蓮華の登りの途中で赤牛パーティーと第二回の交信をしようとしたがうまく行かない。帰幕の遅れることが避けられないので、何とか連絡したかったが駄目であった。三俣連華着一七時。加藤が胃の不調を訴えるが歩くのにそれほどの支障はないようだ。黙々と歩く。鷲羽の登りの途中で黒部五郎に日が沈んだ。頂上直下からリヒトを出す。昼間通ったパーティのトレースがあり助かる。ワリモ岳付近は西側は堅雪の急斜面で、ルートは稜線上を東側に張り出した雪庇に注意してとる。この付近で多少手間どったが、二〇時二〇分やっとベースに帰り着いた。

（藤本敏行）

▒三月十六日　吹雪

TS（六・三〇）―TS（九・三〇）

朝方天候も良さそうであったので源流にスキーをやりに行こうとしたがうかつにも岩苔乗越までワリモの北西斜面をトラバースしかけたため、前神が五㍍ほど滑落した。パーティは一年三名と前神の構成。天気も回復しそうにないので帰幕とする。ワリモに登った藤田と稜線で出合い、帰路スキーを試みるが全く駄目である。帰幕後大きな雪洞を掘る。

▒三月十七日　晴

TS（九・一〇）―祖父岳（一〇・一〇）―TS雲の平でスキー（一四・〇〇）―TS（一五・一〇）

折角運び上げたスキーを楽しまんと雲の平へゆく。ワリモ岳付近は堅雪のルートは稜線上を東側に張り出した雪庇に注意してとる。この付近で多少手間どったが、二〇時二〇分やっとベースに帰り着いた。

（藤本敏行）

▒三月十六日　吹雪

TS（六・三〇）―TS（九・三〇）

朝方天候も良さそうであったので源流にスキーをやりに行こうとしたがうかつにも岩苔乗越までワリモの北西斜面をトラバースしかけたため、前神が五㍍ほど滑落した。パーティは一年三名と前神の構成。天気も回復しそうにないので帰幕とする。ワリモに登った藤田と稜線で出合い、帰路スキーを試みるが全く駄目である。帰幕後大きな雪洞を掘る。

▒三月十七日　晴

TS（九・一〇）―祖父岳（一〇・一〇）―TS雲の平でスキー（一四・〇〇）―TS（一五・一〇）

折角運び上げたスキーを楽しまんと雲の平へゆく。昨日、昨日とうってかわって

風もなく、腰くらいまでしかもぐらない雪を踏んで祖父岳へ向かう。実に良い眺めである。この後このような素晴らしいスキーゲレンデはなかろうと思われるほど強ごす。薄雲があるので日射しはそれほど強くないが、それでも顔がじりじりと焼けるのがわかる。雪の雲の平で過ぎるというもう二度とはないかもしれない経験を満喫して帰幕。

▒三月十八日　晴

TS（七・三〇）—東沢乗越（九・三〇）—高嵐尾根分岐（一二・四〇）—高嵐山上部（一四・四五）

まだ最終下山日まで間があったが、この後冬型が続きそうな気配があったので下山とする。東沢乗越までは風も強く、細い稜線の通過は一年生にとっては相当のアルバイトである。フィックスザイルを回収し、乗越の先の細い雪稜を過ぎると、風がなくなり風呂の如くなる。かなり気があたりで楽になる。入山の時沈澱していた写真を撮りまくる。

▒三月十九日　雪のち曇

TS（八・〇〇）—第五発電所（一一・二〇）—葛温泉（一四・三〇）

雪が降っていたが大したことはなく、ラッセルもほとんどない。下部で少し迷ったほかは何事もなく、やっと無事に第五発電所まで出てきた。高瀬川の渡渉も入山時とはがらりと変って靴のまま渡る。それでも積雪期の山行で、目標のピークを踏んだあとの疲労感は快いものがある。

（前神直樹）

笠ガ岳から槍ガ岳

（一九七四年冬合宿）

前神(リーダー)、藤本、古橋(四)、加藤(三)、佐藤、松田、若林(二)、坂牧

（一）

七四年の冬合宿を迎えた時、一番強く感じたことは「さあ、総決算だ」ということだった。何とか二年間たいした事故も起さずに部活動を続けることができたし、また徐々ではあったが幾らかの山行も積み重ねることができた。その積み重ねを何らかの意味でこの冬合宿に反映させたかった。所詮山登りは単純な運動行為だから、それまでの山行を反映させるといっても限りがある。この合宿の前の冬・春合宿は焦点を槍ガ岳に置いて計画していた。東鎌からの槍は失敗し、春には槍ガ岳そのものまで手をのばすことができなかった。しかもそれらということから、この冬合宿は(1)槍ガ岳登頂、(2)縦走形態の二点に的をしぼり、計画は弓折岳南尾根から笠ガ岳、一年生下山ののち槍ガ岳へ縦走後北穂へ登頂、横尾尾根下山とした。結果的には冬山とは思えないほどの天気に恵まれ、この合宿は二年間の活動総括になりえたのかもしれない。

▒十二月十二日

新穂高温泉（九・〇〇）—弓折岳南尾根取付（一五・四〇）

新穂高を出て一ピッチ行った所でワカン

をつける。坂牧がザックを背負う拍子にギックリ腰となり、以後ダブルボッカを繰り返して進む。

▒十二月十三日　晴のち雪

出発（六・三〇）―鏡平（一五・〇〇）―笠新道分岐（一三・四〇）―秩父平（一二・二〇～一三・三〇）

丸木橋で対岸に渡り、尾根の西側斜面に取り付いたが、灌木の薮に苦労する。ここはむしろ東側の高木帯を登るべきであった。ラッセルは膝くらいまで、二三〇〇Pは翌朝のラッセルのことを考え、いささか手前で雪が舞い始めた。鏡平は皆バテていたものの奥の小屋まで進む。

▒十二月十四日　雪

出発（七・〇〇）―弓折岳（一〇・〇〇）―大ノマ乗越（一一・三〇）―笠ガ岳（一一・三〇）―笠新道分岐（一三・四〇）―秩父平（一四・四〇）

予想通り新雪が積もり、太モモまでのラッセル。二P進んでアイゼンをつける。弓折の頂上は風が強く、縦走用の荷をデポして早々に大ノマ乗越へと下る。

▒十二月十五日　曇

A隊（笠アタック、前神、古橋、加藤、佐藤、松田）出発（七・〇〇）―笠ガ岳（一一・〇〇）―秩父平（一四・〇五）

B隊（笠アタック、藤本以下四名）B隊出発（九・二〇）―笠ガ岳（一二・二〇～一三・〇五）―秩父平上部のルート工作に時間がかかり、また稜線上はガスも濃かったため、アタックは翌日試すことにして引き返した。

A隊五名の宿る秩父平（一四・四〇）―大ノマ乗越（一六・二〇）―大ノマ乗越（一七・〇〇）

フィックス通過の際一瞬だがガスが切れ青空の中に穂高が浮かび上った。わずか二〇〇㍍ほどのリッヂの登りをおりからの青空を喜びながら楽しんだ。後はひたすらまたガスの中を歩き笠ガ岳を往復。トランシーバーは好調である。A隊に秩父平のテントを徹収してもらい、最後まで快調なペースで大ノマ乗越へ帰りついた。

▒十二月十六日　晴

縦走隊（前神、古橋、加藤、佐藤、松田）出発（七・〇〇）―弓折岳（一〇・三〇）―弓折岳（一〇・三〇）～（一一・三〇）―縦沢ル（一四・四五）―二七二〇P東のコ

弓折岳でデポを回収し、下山する若林たちに見送られて縦走の第一歩を踏み出した。双六付近でトレースをみるが人影はみえない。ポクポク歩くく。佐藤がワカンを折り一人苦労する。縦沢の下りでは松田がワ

カンを高瀬川側に流した。どうも事故の前兆的現象とはこうしたことをいうのかも知れない。二七二〇Pの下りで加藤がバランスを崩して転倒、ピックで口腔内を切り、出血が止まらないため、下りきったコルで泊ることにする。傷はかなり深く（親指の先端ほど）血は止まったものの痛むようなのでサルファ剤と鎮痛剤を与える。

▒十二月十八日　雪　沈澱

入山七日目にして初めての沈澱である。加藤の負傷のこともあり、良い休養となった。

▒十二月十九日　晴

出発（一〇・二〇）―硫黄尾根分岐（一一・二〇）―槍の肩（一五・三〇）―槍頂上往復（一五・四五～一六・四〇）―テントをゆさぶる風の音にだまされて出し渋っていたところ、気がつくと青空がみえていた。即出発。天候はみるみる回復し昼にはすっかり晴れ上った。一日の休養が効を奏したのか、皆すこぶる調子がよろしい。快調にアイゼンをきかせて西鎌尾根を登り切った。夕方前神、藤本、松田、佐藤は槍の穂を往復した。厳冬の槍にやっと登れたという感が強い。次の目標は北穂だ。

▒十二月二十日　晴風強しのち吹雪

出発（八・四〇）―中岳（九・四〇）―南岳避難小屋（一〇・五〇）

出発前、古橋、加藤が槍の穂を往復。南岳に着く頃より風が強まり、午後に予定していた偵察は中止した。明日を待つ。

▒十二月二十一日　晴

北穂アタック（藤本、古橋、加藤）出発（八・三五）―A沢手前のコル（九・五〇）―北穂高岳（一三・〇五―一三・一〇）―南岳避難小屋（一七・三五）

吹雪が静まるのを待って出発。A沢のコルから登り始める頃には青空が広がり出してきた。飛騨泣きまでは夏道が明瞭であり、容易。それより上部は、横尾本谷側は一面雪の斜面であり雪崩が恐しいので、滝谷寄りの岩と雪のコンタクト付近をスタカットを交え登る。クラック尾根終了点付近で加藤が氷化した斜面でスリップ、六―七メ滑ったが岩で止まったので事無きを得た。頂上に着く頃には快晴となり、喜びも大きかった。下りは慎重を期して全てスタカット、アップザイレン一回を交えて降りる。A沢のコルに着き、漸くほっとした。南岳直下でリヒトを出して帰る。この日他の四名は横尾尾根の偵察に出掛けた。

▒十二月二十二日　快晴

第二次北穂アタック（前神、古橋）前日のトレースのおかげで楽勝。時間もゆとりがあり北穂の南峰まで往復した。快晴無風、まことに春のような一日であり、残った四名は南岳の岩の上に腰を下し、北穂アタックの二人とコールをかわし、のんびりと休養した。

▒十二月二十三日　快晴

出発（七・五〇）―横尾尾根のむし歯（一〇・三〇～一一・〇〇）―横尾（一八・〇〇）

いよいよ下山の日が来た。むし歯もフィックスが充分にあり容易に通過する。しかし腐った雪と暑さにいや気がさし、下山という安易な気分も手伝って最低コル手前で涸沢谷へ降り出したのは全く失敗だった。

沢は中腹部の岩壁帯で通れず、尾根も急峻な上にすさまじい密藪のラッセルで進退きわまり、四〇以二回のアプザイレンで漸く涸沢谷へ降り立つことができた。暗くなった道を横尾へ向い、入山して以来初めて他の登山者に会う。

▒十二月二十四日　雨

出発(七・四〇)―木村小屋(一一・〇〇～一一・二〇)―沢渡(一五・四〇)

横尾を出ると同時に雨が降り出した。好天の続いた毎日といい、この下山日の雨といい、後半はあまり冬山らしからぬ毎日であった。だが北穂の登降や横尾への下山は未だに強烈な印象となって残っている。

(前神直樹)

〈冬山から帰ってまず一年生の感想〉

十二月十九日「今日無事に冬合宿より帰りました。スキーもできずなんと雨の中の下山とは。全身ぬれねずみのなんとも冬山とはわからんものだ。ぎっくり腰にて始まった初めての冬山もけっこう骨のある内容だった。終ってからも長いこと記憶に残るであろう。」

〈ついで下山した上級生の感想〉

十二月二十五日「無事、一二年間のリーダーが勤まったと思うとなにによりホッとする。あまりごちゃごちゃとはいえない。ただホッとしているだけだけだ。M」

十二月二十六日「……それにしても計画を全て終えてこだわりなく山を下りてゆくという満足感はあたたかく感じられた。本当に天候にめぐまれてよかった。楽しい合宿でした。残念なのは三年生諸氏の顔ぶれがさみしいことでした。佐藤」

十二月二十六日「冬山合宿も成功裡に終了しようやくホッとした気分になりました。新年は新しい気分で山岳部最上級生として部の活動に力を注ぐ覚悟です。加藤」

十二月三十一日「終ったばかりの冬合宿について気になったことを一つだけ書こう。この冬合宿がスムーズにいったのは天気の良さがまず第一。だからこの経験をもとにした冬山の事を考えるとシッペガエシを食うだろう。藤本」

以下上級生が純技術的な問題で下級生に対して思慮のなさすぎたこと、およびそのような場合にリーダーシップが不在となってしまったことの危険性について書かれている。

光岳より赤石岳へ

(一九七五年春合宿)

加藤博行(リーダー)、兵藤元史(三)、松田重明、若林貴之、佐藤活郎(二)、藤田一成(三)、坂牧利実(一)

▒三月十日　雨

平岡―本谷口―諸河内沢出合小屋着(一五・〇〇)

▒三月十一日　曇

小屋発(六・一五)―尾根途中の樹林帯(一二・五〇)

兵藤が膝の痛みを訴え下山、二人上部にデポに行く。

▒三月十二日　晴

出発(六・〇五)―易老岳(一一・三

○）―茶臼との稜線（一二・○○）
四人が北西尾根のデポをとりに、二人は
希望峰基部までデポに向かう。
▒三月十三日　快晴
出発（七・○○）―光岳（九・五五）
―着（一三・○○）
▒三月十四日　晴時々曇
出発（六・三○）―希望峰（八・○○）―
上河内岳往復―聖平小屋（十五・○○）
▒三月十五日　快晴
連日の行動のため停滞。
▒三月十六日　晴・強風
聖岳経由兎岳にAC設置（一五・○○）
▒三月十七日　快晴
出発（五・四五）―赤石岳（一○・○○）
―着（一五・二○）
加藤、若林、松田にてアタック。
▒三月十八日　快晴
出発（六・三○）―岐点（一二・一二・二○）
―諸河内沢出合小屋
▒三月十九日
出発（八・○五）―本谷口（一一・四
五）―平岡

北海道日高および大雪山系

（一九七五年夏）

兵藤（リーダー）、若林、松田、近藤
▒八月四日　晴のち雨
札幌発（一六・四○）―静内（一五・
二○）―サッシピチャリ川飯場（一八・
三○）
小野OB等の見送りをうけて出発。静内
で例によって警察と営林署へ。増水につい
てきかされた。タクシーを降りる頃ふりだ
した雨が本降りとなったが、幸いにも飯場
があり新しい小舎に泊めていただく。
▒八月五日　曇のち雨
出発（五・五○）―ペテガリ西沢出合
（九・三○）―一八三九㍍峰。直登沢
出合（一○・一○）―ペテガリ西沢出合
（一二・二○）
一八三九㍍峰の往復は暗黙のうちにとり
やめとなった。降る雨とやぶからの雨でビ
ショビショになりながら稜線を行く。コイ
カク頂上の二つ先の凸からの降り口が判然
とせず、三○分ほどガスの晴れ間を待つ。
一八二三㍍峰に着いたとたんどしゃ降りと
っている函（ハコ）を左岸よりまいてから、わらじ
をつける。直登沢出合について、偵察をか
ねてイワナ釣りをする。
▒八月六日　曇のち晴のち雨
出発（六・一○）―ルベツネ北面の沢
出合（八・○○）―最低鞍部からの沢
出合の上（九・二五）―稜線（一二・
三○）―ヤオロマップ岳手前のコル（一
五・一○）
川原を徒渉しながら行く。一五㍍の滝は
左岸をまく。ルベツネ北面の沢出合から上
は一枚岩の上を水が流れ楽しい。そこを抜
けると、川が荒れはじめたので、一○㍍の
水をくむ。ガレ沢を忠実につめ、やぶこき
に入る。踏跡も少々あるのでそれ程辛くな
く、ヤオロップ岳手前で幕営。
▒八月七日　雨・霧
一八三九㍍峰の往復は暗黙のうちにとり
やめとなった。降る雨とやぶからの雨でビ
ショビショになりながら稜線を行く。コイ
カク頂上の二つ先の凸からの降り口が判然
とせず、三○分ほどガスの晴れ間を待つ。
一八二三㍍峰に着いたとたんどしゃ降りと

なり幕営。フライ代りのポンチョから数分で5ℓの水がとれた。

▒八月八日　曇一時晴

出発（六・三〇）―カムエク頂上（一一・〇五）―九の沢カール（一三・一五）

ピラミッドの登りで初めて登山者に会う。八の沢カールに熊がいるのを発見。以後一層笛を大きく鳴らしながら行く。カムエク頂上ではペテガリも見えず、ヤブこぎの最中所々に現われる小さなお花畑が我々を歓迎してくれた。一面の草原とお花畑―九の沢カールは少しも変わっていなかった。

▒八月九日　曇

出発（六・二〇）―八の沢出合（一二・一五）―コイカクシュサッナイ川出合（一八・四〇）―中札内（一六・四〇）―中札内（一八・四〇）―稜線（六・四〇）

昼食とイワナ釣りをして休みながらどん九の沢を下る。林道途中で車に便乗させてもらい中札内へ出、山行を終わる。

（兵藤元史）

中央高地、クワウンナイ川

（一九七五年夏）

兵藤（リーダー）、若林、松田、近藤

▒八月十日　晴

天人峡温泉（一一・五〇）―ポン・クワウンナイ川出合（一二・五〇）

▒八月十一日　晴のち曇

出発（六・三〇）―二俣（一一・一〇）―最初の滝（一二・一五）―ナメ終り（一五・三〇）―源頭（一三・五〇）

一〇分ほどまくと、二キロに渡ってナメが続く。三〇分ほどで沢は二つに分れ左本流に入る。大きなナメ滝を最後にナメに別れを告げひたすら源頭をめざし、ぽっかり出た所は三方を丘に囲まれたお花畑。ピンクの花の間の大キジもまた一興。

▒八月十二日　晴のち曇

出発（六・一五）―稜線（六・四〇）―天人峡（一四・三五）

稜線はとてつもなく広い。トムラウシ山頂から大雪、石狩　十勝そしてはるかに夕張の山々が眺望できた。すべての頂にイワイ有。化雲岳を経て、天人峡におりた。

（兵藤元史）

五竜岳より爺ガ岳へ

（一九七五年冬合宿）

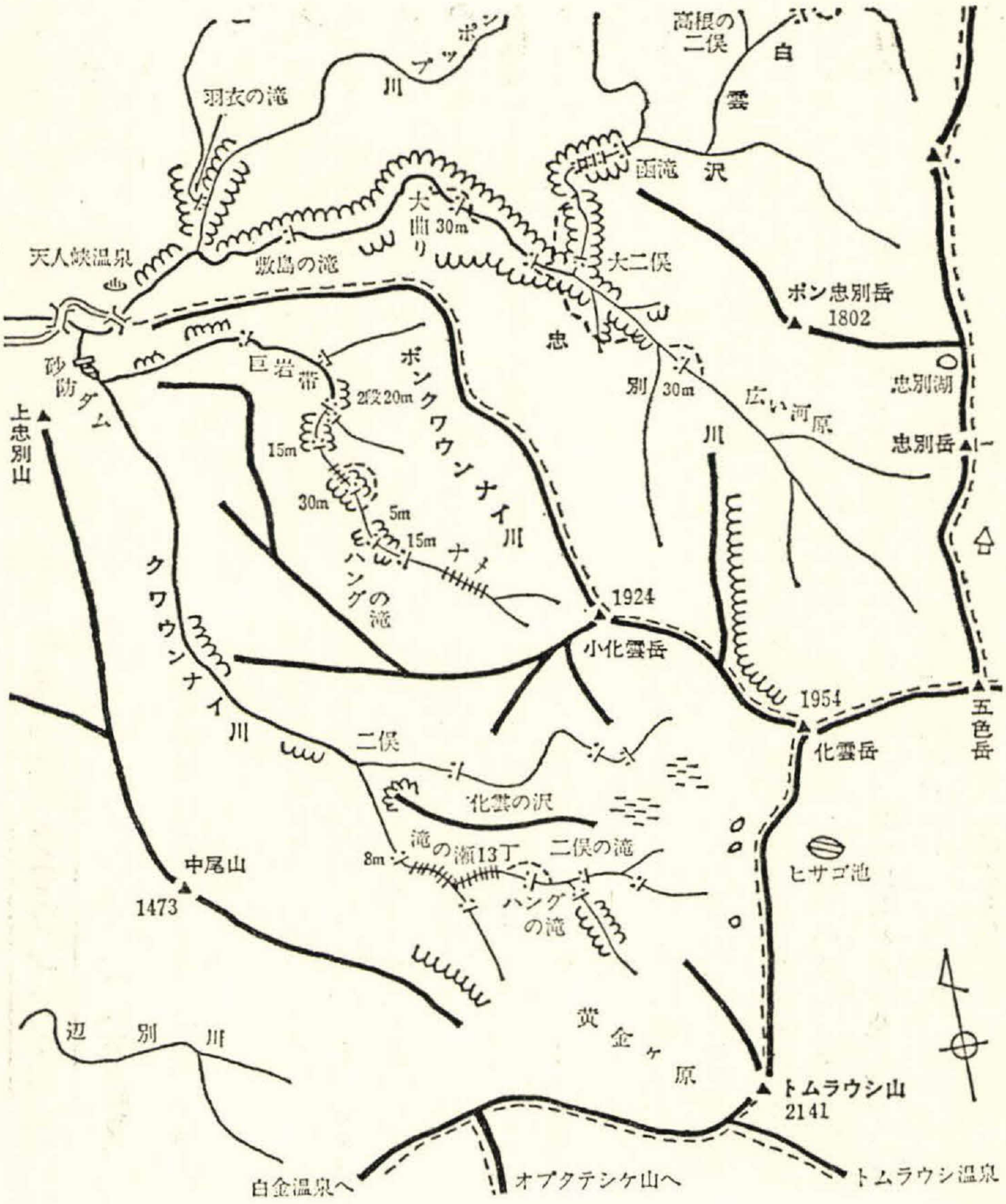
加藤（リーダー）、兵藤（四）、浅田、佐藤、松田（三）、近藤、坂牧、永戸（二）、佐藤（一）

▒十二月十一日　新宿発（二三・四五）

▒十二月十二日　雪

遠見テレキャビン終点（八・五〇）―地蔵の頭（九・二〇）―大遠見（一五・四〇）

例年に比べて雪が少ない。昨日まで晴ていたらしい。入山と同時に降りはじめ



た。小遠見の手前でワカンをつける。大遠見あたりではももくらいまでラッセルがあった。

▒十二月十三日　雪

出発（七・〇〇）―白岳直下（一一・二〇）―五竜小屋（一三・三〇）

白岳直下まで、昨日のごとく風弱く、雪はしんしんと降りつもる。西遠見手前からラッセルが深くなったのでチョーセンボッカをする。白岳直下では、ラッセルが頭まであり、空身で先行するも、あまりはかどらない。主稜線に出るとさすがに風が強い。横なぐりの雪とガスにより視界不良。ボナッティばりに寒暖計を首にぶら下げていた近藤によれば、白岳直下ではマイナス一三度であった。

▒十二月十四日　雪・風強く停滞

▒十二月十五日　雪・風強く停滞

昨日と同様の天気であったが一〇時頃より少し回復したので、三年三名が五竜直下まで偵察をかねルート工作に行きG2の頭でトラバースするルート工作に行き四〇以、頂上直下に四〇以フィックスする。（一〇・二〇～一五・〇〇）

▒十二月十六日　雪・曇のち雪
五竜小屋発（七・四〇）―五竜頂上（一一・二〇～一二・〇〇）―G5手前のコル（一六・〇〇）
日本海低気圧の一時的好天をあてにして、小屋を飛び出す。雪の状態が悪く、アイゼンがきかない。しかし、雪崩は出そうにないので、フィックスのあるトラバースルートをとる、頂上にて下山隊と別れる。頂上よりの下りには慎重を期してザイルを出し、G5手前コルにて幕営。
▒十二月十七日　風雪強く停滞
天気図は強い冬型、今夜半から気圧がゆるむとラジオがいっている。下山隊との交信（一二・一五）によれば西遠見手前との予想の下に、風雪のこと。かなりのラッセルで下りとはいえしごかれたもよう。
▒十二月十八日　曇時々晴のち雪
出発（七・三五）―G2（一〇・〇〇）―北尾根頭手前（一一・〇〇）―G5および北尾根の通過にそれぞれザイルを出す。ロのット小屋（一四・〇〇）―キレいよいよ核心部である。G
沢のコルまでは夏道通し、それ以降は稜線をゆく。アイゼンは相変わらずきかず、かなり苦労する。風は一日中強かったが久しぶりに太陽を見た。兵藤と近藤でキレットまでルート工作（六〇㍍）をする。下フィックス、六〇㍍、四苦しめられ、ようやく神城に下る。
▒十二月十九日　吹雪、停滞
出てくるのは食物の話だけ。
▒十二月二十日　雪のち晴
出発（七・二〇）―キレット通過（九・三〇）―鹿島槍北峰頂上（一四・〇〇）―南峰（一五・一〇）―冷池小屋（一七・〇〇）
天気が好転するとの予想の下に、風雪の中を出発する。キレットの下り口までは一昨日張ったフィックスを掘り出して簡単にパス。キレットへはアップザイレンで下る。そこから北峰までは雪が不安定で、時々表層雪崩が落ちる。ザイル六〇㍍を使って北峰に這いあがる。南峰に着いた途端晴れ始め、今合宿初めて剣を見る。風も弱く、核心部をゆくにはベストコンディションであった。
▒十二月二十一日　晴のち雪
出発（八・二〇）―爺ガ岳南峰（一〇・二〇）―扇沢林道（一六・四〇）
快晴ではあるが強風の中、今日は下山とばかりハイピッチで歩く。他パーティーに初めて出会う。下山に浮かれすぎたせいか、南稜の下りで一本左の支尾根に入ってしまったが、幸い何ということもなく、関電道路に出て無事合宿を終えることができた。
（加藤博行）

西穂高岳西尾根より ロバの耳手前まで

（一九七六年春合宿）

松田重明（リーダー）、佐藤活郎、浅田充（三）、近藤泰、永戸一彦（二）、佐藤周一（一）

▒三月九日　二〇・五一上野発「越前」

▒三月十日　曇のち雪
新穂高温泉（八・二〇）―穂高平（九・五〇～一〇・二〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇～一四・〇五）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク（八・一五）―西穂ピーク（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒三月十一日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒三月十二日　雪、沈澱

▒三月十三日　晴のち曇
ジャンクションピーク（八・四五）―ジャンクションピーク直下のコル（九・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒三月十四日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒三月十五日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒三月十六日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒三月十七日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒三月十八日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒三月十九日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒三月二十日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒三月二十一日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒三月二十二日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒三月二十三日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒三月二十四日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒三月二十五日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒三月二十六日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒三月二十七日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒三月二十八日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒三月二十九日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒三月三十日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒三月三十一日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月一日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月二日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月三日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月四日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月五日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月六日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月七日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月八日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月九日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月十日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月十一日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月十二日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月十三日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月十四日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月十五日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月十六日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月十七日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月十八日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月十九日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月二十日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月二十一日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月二十二日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月二十三日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月二十四日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月二十五日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月二十六日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月二十七日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月二十八日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒四月二十九日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒四月三十日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒五月一日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒五月二日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒五月三日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒五月四日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒五月五日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒五月六日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒五月七日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒五月八日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒五月九日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒五月十日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒五月十一日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒五月十二日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒五月十三日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒五月十四日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒五月十五日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒五月十六日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒五月十七日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒五月十八日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒五月十九日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒五月二十日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒五月二十一日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒五月二十二日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒五月二十三日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒五月二十四日　晴のち曇
西穂ピーク（六・四〇）―P3と間ノ岳のコル（一二・一〇）―西穂ピーク直下のコル（九・一〇）―ジャンクションピーク手前のコル（七・一五）―西穂ピーク（一三・〇〇）―全員で荷上げ―西穂西稜二二〇〇m付にデポ（一三・三〇）―穂高平（一四・四五）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

▒五月二十五日　晴のち曇
六・一〇―デポ地点（八・三〇～九・一〇）―森林限界（一一・三〇）―岩場取付（一一・五〇）―ジャンクションピーク手前のコル（一五・〇〇）

デポ地点までは荷が軽かったので快調に登れたが荷を背負うと急に遅くなった。岩場でザイルを出したがブッシュが出てきて偵察の時はここで苦労するのではと心配していてそれほどでもなかった。岩場から上は急な雪稜で全員疲労の色が濃くなる。西穂ピーク直下のコルまで荷を上げることにする。途中二カ所フィックスを張る。

▒五月二十六日　晴のち


蒲田川右俣谷
チビ谷
ドウ谷
北西尾根
滝谷
滝谷
A沢
B沢
北穂3100
北穂小屋
C沢
北穂高岳
第四尾根
D沢
E沢
F沢
蒲田富士
2860
第五尾根
涸沢槍
涸沢岳
3103
涸沢岳西尾根
白出小屋
白出沢
鉱石沢
岩稜沢
南西尾根
ザイテングラート
白出のコル
穂高岳山荘
直登ルンゼ
第1ルンゼ
第2ルンゼ
白出大滝
天狗沢
天狗尾根
カイホリ谷
西穂沢
セバ谷
奥穂高岳
3190
飛騨尾根
ジャンダルム
ロバの耳
コブの頭
コブ尾根
南稜
吊尾根
滝沢
トリコニー
扇沢
天狗岳
2900
天狗のコル
畳
岩尾根
コブ沢
天狗沢
一枚岩沢
奥明神沢
水呑沢
西穂高北西尾根
難小屋
間ノ岳
2900
西穂高岳
2908
ハイマツ尾根
間ノ沢
岳沢ヒュッテ
2230
ピラミッドピーク
独標
西穂高沢
西穂前沢
岳沢
中明神沢
千石尾根
九山
西穂山荘
2385
かもしか沢
前明神沢

—P3と間ノ岳のコル（一二・三〇）—森林限界（一四・五〇～一五・〇〇）—穂高平（一七・一五）

今日は下山。計画を完遂出来ぬまま下山するのは何とも心残りである。西穂高まであっけなく通過する。一度通ったせいかは岩稜の下降なので西穂からコルへの下りもアップザイレンで慎重に下降、五時には穂高平に着いていた。この夜は避難小屋に泊まり、明日新穂高に下ることにした。

敗退の原因は諸々考えられるが、一番大きな原因は、計画自体に無理があったことである。一年生も含めた六名というメンバー構成で穂高にアタックすることは我々の当時の力量では無理であった。当初から不安はあったが、行くからには残しておいた局失敗してしまい、気ばかりが先行し、結を思い知らされた。

（松田重明）

（六・三五）

近藤、佐藤(活)をテントに残し、奥穂に他の全員でアタックをかける。間ノ岳の下りの前半は偵察隊が残したフィックスを使い問題なく下れたが、後半は垂直の雪壁であるためアップザイレンで下降。天狗のコルの下りもアップザイレンする。ロバの耳についたのが、正午近かったため、これから先の核心部のことを考えて、引き返すことにする。帰路も天狗のコルや間ノ岳の登りで苦労し、帰幕した時には薄暗くなっていた。

▒三月十七日　雪、沈澱

▒三月十八日　雪、沈澱

沈澱が続いて皆の意気の状態が悪いのを考え合わせ、天気回復次第下山することにした。午後になって天気が回復し出したので佐藤(活)、近藤が間ノ岳の下りにフィックスを回収。

▒三月十九日　晴

八・〇五発—西穂高岳（一〇・三〇）

白山

松田(リーダー)、佐藤(周)、神野(二)、中西、引地(一)

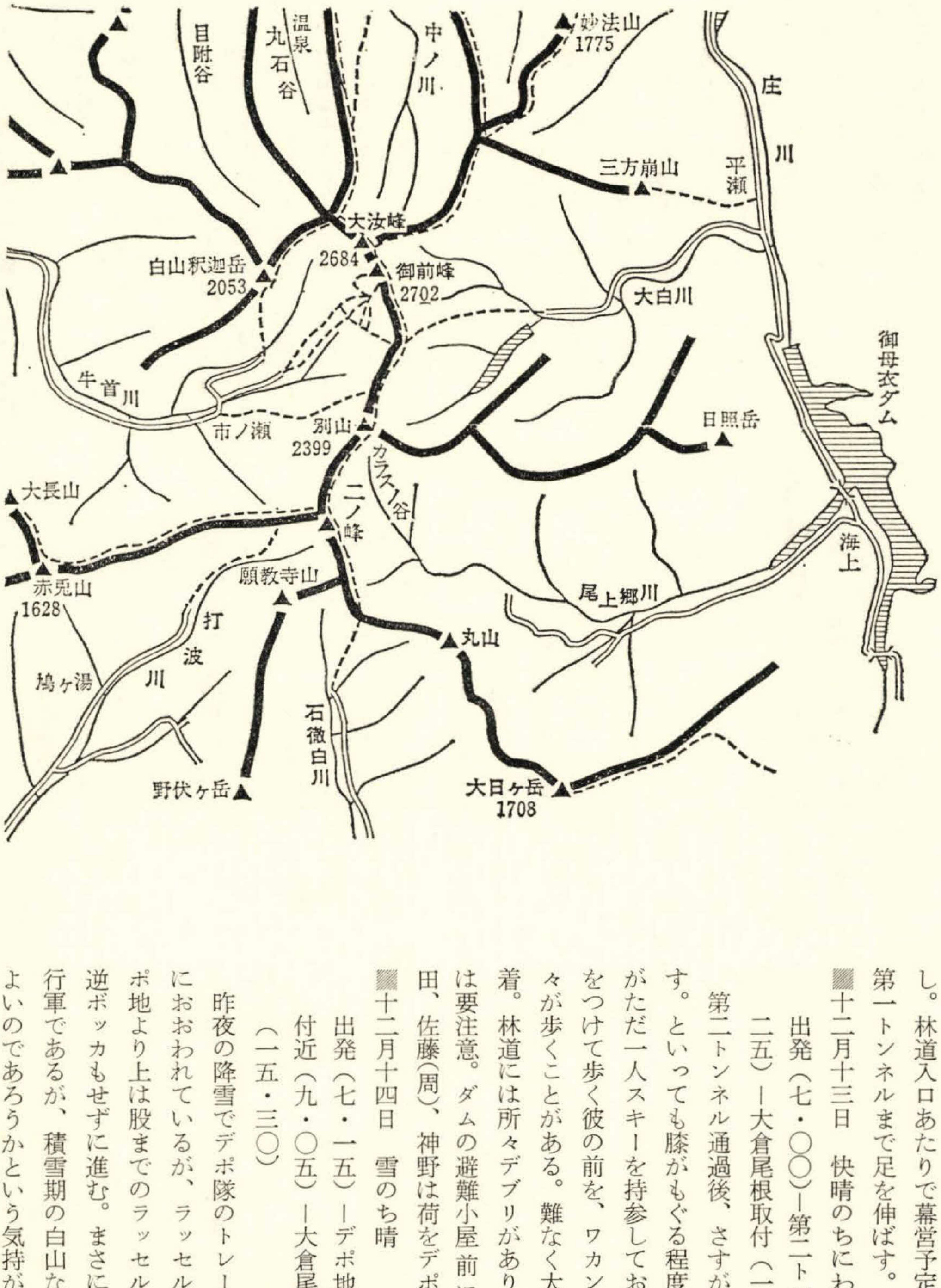
今年の冬山は、新人養成に目標を置き、新人にとって危険性も少なく、しかも日本の冬山の味を楽しめる山域として白山を選んだ。当初、大倉尾根から別山を経て市ノ瀬へ下る計画を立てたが、合宿前になって上級生が不参加となり、大倉尾根より御前峰往復とした。

▒十二月十一日　二三・二八東京発

▒十二月十二日　快晴

平瀬（一三・二五）—第一トンネル（一五・三〇）

平瀬は雪が少ない。山行は楽になろうが、冬山らしくなく拍子抜けする。林道の積雪はくるぶし程度でほとんどラッセルな



し。林道入口あたりで幕営予定だったが、第一トンネルまで足を伸ばす。

▒十二月十三日　快晴のちにわか雪

出発（七・〇〇）―第二トンネル（八・二五）―大倉尾根取付（一二・五五）

第二トンネル通過後、さすがに積雪が増す。といっても膝がもぐる程度。佐藤(活)がただ一人スキーを持参しており、シールをつけて歩くことができる。難なく大白川ダムの前を、ワカンをはいた我々が歩くことである。林道には所々デブリがあり、下山時には要注意。ダムの避難小屋前に幕営。浅着。林道には所田、佐藤(周)、神野は荷をデポに上がる。

▒十二月十四日　雪のち晴

出発（七・一五）―デポ地一六〇〇付近（九・〇五）―大倉尾根避難小屋（一〇・一五・三〇）

昨夜の降雪でデポ隊のトレースは薄く雪におおわれているが、ラッセルは快調。デポ地より上は股までのラッセルであるが、逆ボッカもせずに進む。まさに進め進めの行軍であるが、積雪期の白山なのにこれでよいのであろうかという気持がする。反動

としてのドカ雪が恐い。避難小屋前に幕営。

▒十二月十五日　快晴のち雪

避難小屋―大倉尾根降り口の道標(九・四五)―幕営地(一〇・五〇)

今日は白山アタック。入山四日目にしてもうアタックとはいささか調子が良すぎるが、それでも勇躍としてテントを出る。しかし、白山はそう穏やかな顔ばかり見せてはくれなかった。彼女の表情はまたたく間に変化する。出発する時、御前峰にかすかにかかっていた雲は、我々が尾根を登るにつれ、空一杯に広がっていった。室堂周辺のだだっ広い台地にたどりついた時は、あたりは濃いガスにおわれていた。風も強い。リングワンデルングを恐れて篠竹を視界内に次々と立てて進むが、大倉尾根への降り口を示す道標まで来た頃には、その篠竹も残り少なくなってしまい前進できないこともなかったが、とにかくリングワンデルングが恐いので、今日はアタックを断念してテントに戻ることにする。白山の厳しさをかいま見た一日であった。

▒十二月十六日　快晴のち曇のち雨

避難小屋(七・一〇)―御前峰(九・二五)―避難小屋(一〇・三〇)―大倉尾根取付(一三・四〇)

出発の時は昨日と同様晴天であったが、これがいつまでもってくれるか不安であった。しかし、その不安を笑うかのように晴天が続いてくれた。昨日苦労した所もあっという間に過ぎ、二時間ほどで御前峰に立つ。周囲は三六〇度の大パノラマ。自衛隊の練習機が飛んでおり、皆無邪気に手を振る。テントに戻った頃まで出て来た雲が、時間が早いので行ける所まで降りることにする。昨日と同様どんどん表情を変えていく白山を後にして、転がるように下山。ダムサイトには、何とブルドーザーが上がっており、弁当をもったオッサン達が歩き回っている。何となくシラケつつも幕営。設営時チラつく程度だった雪は夜に入ってからどしゃ降りの雨に変わり、避難小屋へ逃げこむ。全く白山の天気は見当がつかない。

▒十二月十七日　快晴

大倉尾根取付点(七・四五)―平瀬(一一・四〇)

昨日ブルがラッセルしてくれたので、ほとんどラッセルなしで平瀬へ下る。松田、佐藤(活)の二人はのんびりと旅館に一泊した。

(松田重明)

悪沢岳西面での事故

（一九七八年春合宿）

神野（リーダー）、佐藤（三）、岡部、中西、引地（二）

▒三月十一日　曇

田代入口―転付峠

▒三月十二日　雲

転付峠―二軒小屋―二〇〇〇㍍付近

▒三月十三日　晴

二〇〇〇㍍付近―マンボー沢の頭―千枚岳

▒三月十四日　快晴

出発（七・〇五）―悪沢岳（九・〇〇）―コルに幕営・―事故発生（九・四〇）―（一一・〇七）―国立浜松病院へ

中西収容（一四・〇〇）―（佐藤・引地）―前岳（一五・三〇）―広河原（一九・〇〇）―林道でビバーク（二三・三〇）―釜沢（七・二〇）―車に便乗して大鹿村駐在所へ―ヘリコプターに中西と残る二名収容

事故の概要

三月十四日、事故は悪沢岳と中岳のコルへの下降斜面において発生した。オーダーは中西、引地、岡部、佐藤、神野の順。先頭の中西は下降にかかった時バランスを失い、アイスバーンの急斜面を滑落した。二度露出した岩にぶつかり、コルまで約一〇〇㍍、さらに奥西河内本谷右股（稜線の南）側の柔らかい雪の斜面を一〇〇㍍滑り、停止した。

残る四名は直ちにあとを追い中西をコルまで引きあげ、テントを張り、収容した。佐藤、引地は救助依頼に小渋の湯へ出発。神野、岡部が中西に付き添う。

小渋に向かった二名は翌朝大鹿村駐在所に到着、そこから長野、静岡両県警を通して、自衛隊の出動を要請した。自衛隊のヘリコプターはただちに出動、一一・〇七コルに残った三名を収容した。

事故の原因

この遭難の直接原因は、計画段階から最難所と予想されていた場所であるにもかかわらず、ザイルを出さず、滑落を最小限にくい止められなかった点にあるが、さらに、そのほかに、①一年生を含まない上級生同士のパーティーであることからくる「なれあい」ムード　②ザイルワークについての消極性などの間接的原因も考えられる。

事後対策

山行中は原則としてサブ・リーダーがトップに立ち、危険箇所では必ずザイルを出す。クラブの日常活動を重視する。まず、最低週三回のトレーニングを定着させ、そのメニューも確立する。また、山行記録の整理、報告書の作成により記録の整理、蓄積をはかり、今後の山行に十分に活かす。

中西の状態

中西は国立浜松病院に収容され、三月十

七日には聖隷浜松病院へ移ったが、左大腿骨顆上骨折と診断され、最終的には九月に膝上からの切断手術を余儀なくされ、十月十三日に退院した。関節部分が油圧で動く義足を装着、日常生活に支障はないまでに回復した。

前穂四峰での事故

（一九七八年夏合宿）

神野(リーダー)、佐藤(四)、岡部、引地、米田(三)、小林、多田(二)、黒田、田中、中村、土方、萬濃、八尾、谷津(一)、コラード(院生)

七月二十日　曇
上高地―涸沢

七月二十一日　曇
雪上訓練

七月二十二日　雨のち晴

七月二十三日　晴のち曇

七月二十四日　曇

七月二十五日　快晴

七月二十六日　晴のちヒョウのち晴
（二十二日～二十六日）

・北穂東稜、四峰東南面、ジャンダルム飛騨尾根、滝谷二尾根北山稜、三尾根など
・（小縦走）北尾根～コブ尾根、北鎌尾根など

七月二十七日　晴
他パーティーの遭難者の搬出の手伝い。

七月二十八日　晴
四峰東南面で落石事故―又白池に幕営。

七月二十九日　晴
岡部をヘリコプターで救出、他は涸沢へ。

七月三十日　晴
涸沢―上高地

事故の概要

七月二十八日、夏山合宿中、岡部、田中、中村のパーティーが、前穂高北尾根四峰東南面明大ルートにおいて事故を起こした。同パーティーは、同日五時一五分涸沢BCを出発、七時四五分ルート取付点に着いた。そして、八時三〇分三ピッチ目を登攀中に事故が発生した。トップを登っていた中村の右足のスタンスの岩がくずれ落下した。その岩は、途中四散して、その一部が、一〇m程下のテラスで確保中の岡部の左足首及び左大腿部にあたった。

即座に中村、田中の両名は、遭難のコールをかけ、付近のパーティーに援助を求めた。

岡部は、修道大、早大、京大の各パーティー、および県警隊、更に一橋佐藤パーティー（以下、小林、八尾、谷津）の手により、奥又白池に収容された（一九時二〇分）。

翌二十九日朝、神津パーティー（以下、引地、黒田、土方、萬濃）が、又白池に到着し、協議の結果、ヘリコプターの要請を決定した。

一六時三〇分、岡部は民間ヘリにより上高地に運ばれ、さらにタクシーで松本の病院に向かった。

事故の原因

事故の直接原因は、落石を起こした中村

および経験の少ない一年生をトップに立たせたパーティーのリーダーであった岡部にある。しかし、それよりも、計画自体の影響の重要性が論じられるべきである。

今回の合宿は、上級生（三、四年生）四名に、新人八名という構成であった。この形式（小人数パーティーの分散）をとったため、上級生一名に二名というパーティーが多くなった。新人二名をつれて毎日岩登りのルートに行くことは、上級生にとっては、想像以上の負担となっていた。実際、二十七日は計画を変更して、全員休養の日となっていたが、幾徳工大の遭難の遺体収容作業に全員で協力したため、休養をとることができなかった。そして翌日、事故が起こったのである。

したがって計画の段階で、われわれは、上級生の力量を過信しており、計画自体に無理があったと言えよう。

事故対策

今回の事故は、それまで、われわれが無頓着であった問題を現出させた。

㈠連絡システム…従来の小人数パーティーの分散という形式をとるならば、トランシーバー等を活用して、各パーティー間の連絡を十分にとる必要がある。また、アクシデントがあった場合、早く全員が現場に急行できるよう、同時に入る山域をこれまで以上に近接したものにし、BCをキーステーションとして、トランシーバーを積極的に利用することを決めた。これに関しては、七九年夏合宿において実践されたが、またそこから、いくつかの問題が現われた。それについては後述参照。

㈡救助法・救急処置法…それまで、岩場での救出法、救急処置法の研究は、ほとんど我々の間ではなされていなかった。そこで、部会において学習会を行ない、ゲレンデで実際に練習を行なった。また、全員に三角巾の携行を義務づけたことは、役に立った。

岡部の治療経過

岡部は、右足関節脱臼骨折、左大腿部裂傷。彼の郷里の新潟県で入院治療した。そして、十月には退院することができた。

現在、普段の生活には支障はないが、関節の軟骨の回復が不十分のため、足首の動きが悪く、足首にあまり負担をかけられなくなっている。したがって、ハードな山行はできなくなっている。

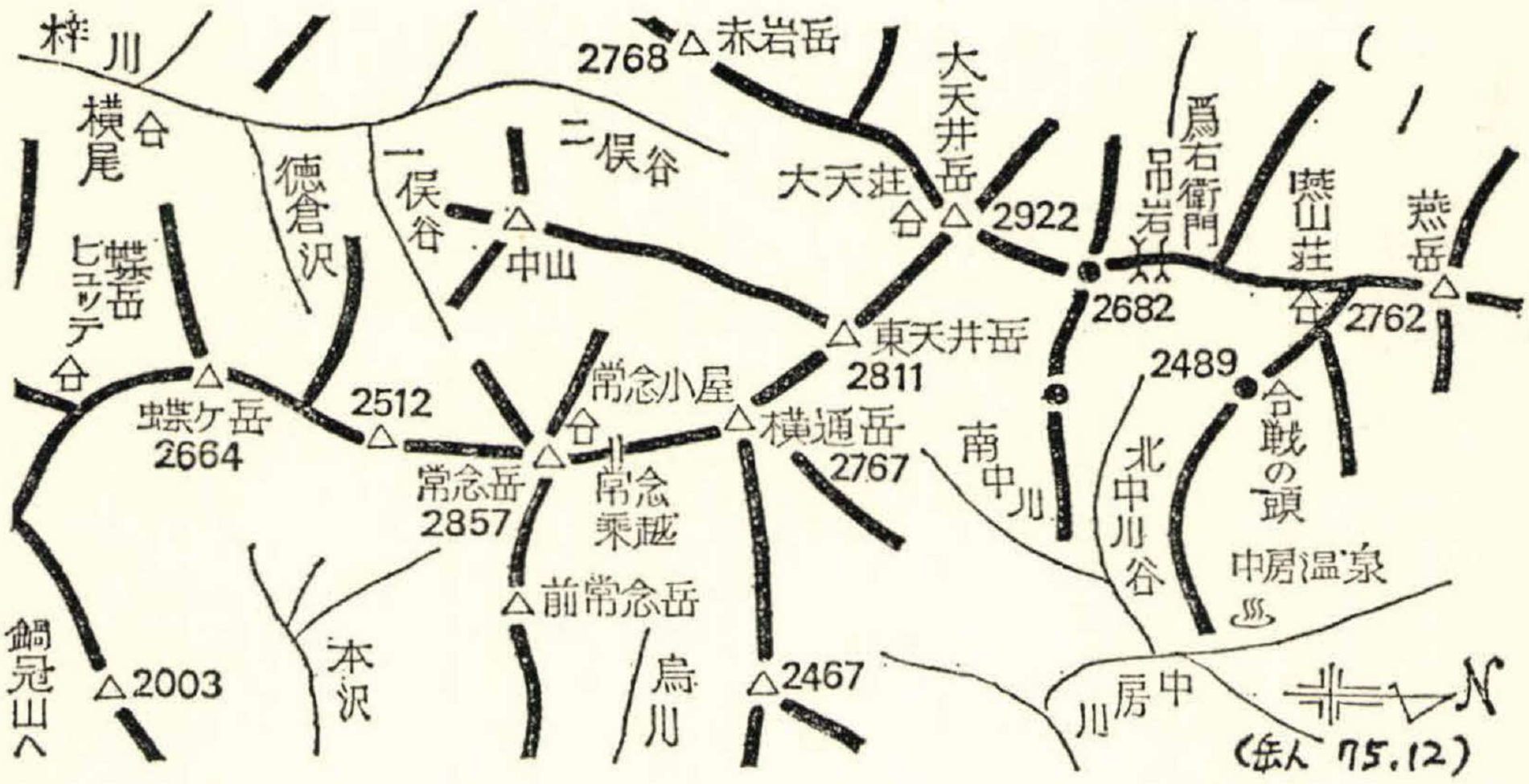
燕、大天井、常念

（一九七九年春合宿）

引地真（リーダー、四）、小林修（三）、田中賢介、中村宜幸、土方浩、萬濃英士、谷津範之（二）

▒三月十二日　曇
有明駅―一ノ瀬（七・二五）―中房温泉（一〇・三〇）―第二ベンチ（一二・四五）

▒三月十三日　雪
第二ベンチ（六・一五）―合戦小屋（八・三五）―燕山荘（一〇・五〇）



常念山脈概念図

—燕山（一二・〇〇）—燕山荘（一二・三〇）

今年は雪が少なく、合戦尾根にはトレースがついており、楽に登れた。しかし、燕山往復は吹雪の中だった。

▒三月十四日　曇

燕山荘（六・二五）—蛙岩（七・一〇）—大天井岳（一一・四〇）—大天荘（一一・四五）

蛙岩の南側で約八〆の雪壁の登りにザイルを出す。大天荘本館そばにテントを張る。

▒三月十五日　雪、停滞

▒三月十六日　快晴

大天荘（五・二五）—常念小屋（七・三五）—常念岳（八・三〇）—常念小屋（九・〇五）—大天荘（一二・二〇）

快晴微風の好天。出発してすぐ田中のアイゼンがこわれるが針金で処置する。一日中好天に恵まれる。

▒三月十七日　雪、停滞

▒三月十八日　雪のち晴

大天荘（一二・〇〇）—蛙岩（一五・〇〇）—燕山荘（一六・〇〇）

朝、テントを撤収し天候が回復するまで、冬期小屋で待機。予定通り晴れてきたので出発。大天井岳の下りで約一五〆、蛙岩で約八〆ザイルを出す。中村滑落するが無事。

▒三月十九日　快晴

燕山荘（六・二五）—合戦小屋（六・五〇）—中房温泉（七・二〇）—一ノ瀬（一一・〇〇）

すばらしい快晴で汗だくになって下る。暖冬と先行者ラッセルのためワカン使用せず。天候に恵まれ、体力的にも余裕があり楽しい山行であった。しかし、ザイル操作、悪天時の行動力、中村の滑落などの課題を残した。

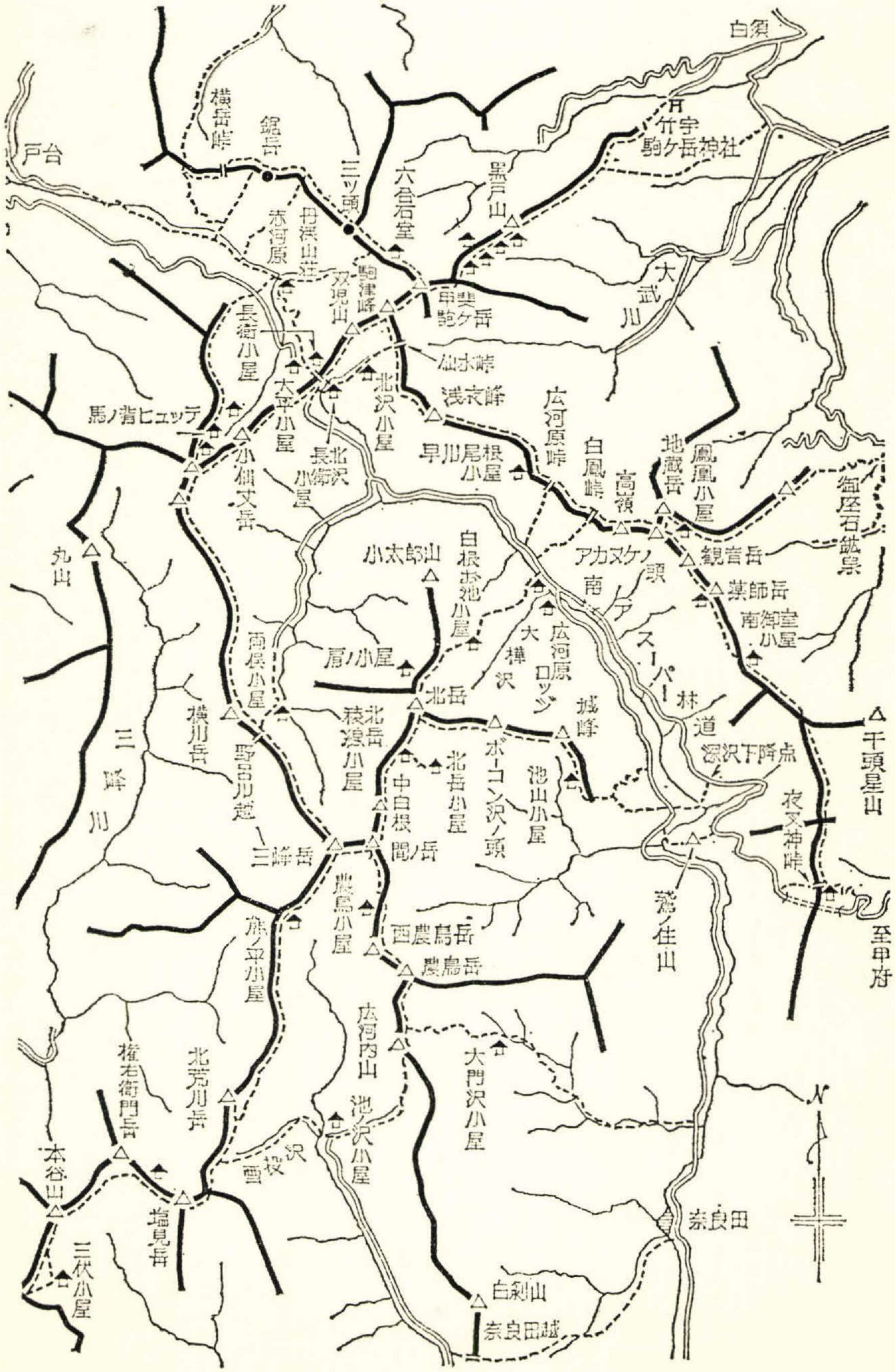
（引地真）

北岳より塩見岳へ

（一九八〇年春合宿）

小林修（リーダー、三）、中村宜幸、田中賢介、萬濃英士、宮下克彦、竹若敬

▒三月十一日　新宿発
甲府で仮眠
▒三月十二日
夜叉神トンネル出口（六・三〇）—河原（九・五
沢下降点（八・五五）—池山
五）—尾根取付（一〇・四〇）—
御池（一五・三〇）
タクシー、マイクロバスを乗り継いで夜
叉神トンネルの出口まで。重荷に苦しみな
がら林道を二ピッチで深沢河原に下り義盛
転がるようにして野呂川の河原に下降点。急坂を
新道に取り付く。雪は少ないが気の狂いそ
うなジグザグの道を登っていると後から福
島大の連中が現われ、前になり、後になり
して登る。尾根に上りきったところで岡部
が足にケイレンを起こしバテたように見え
たがレーションをむさぼり食うので本当は
バテていない。尾根上の木をよけながら九
時間目に池山御池に着いた。
▒三月十三日　晴
出発（六・四五）—城峰（八・三〇）—展望台（一〇・五〇
（一二・五〇）—幕営地（一三・一〇）
出発が少し遅れて福島大の連中を追う形
となる。樹林をぬって進むが、とにかく左
手の尾根に上がればよいことはなく、ボーコンの頭
たことはなく、ラッセルは大し
れているので少し先の凹地に幕営。
▒三月十四日　曇、強風
風強く、キスリングでの八本歯越えは気
が進まない。そこで、小林、中村、萬濃の
三名で偵察、コル手前まで行きピンを打ち
残して戻る。
▒三月十五日　晴
出発（六・二〇）—ボーコンの頭
一〇）—八本歯のコル（九・四〇）—
北岳分岐（一〇・三〇）—北岳（一一・
〇五）—分岐（一一・三〇）—北岳山
荘（一二・一五）
朝の内地吹雪のため撤収に手間どり、テ
ントマットを飛ばす。八本歯の頭には福島
大の連中がいた。そこからコルまでの四ピ
ッチ、ほぼ全面にフィックスを張りコルか
らは北岳分岐まで一気に直登。しんどい上
に分岐は突風、空身で北岳往復後北岳山荘
へ。
▒三月十六日　晴のち曇
出発（六・〇〇）—間ノ岳（七・五〇
～八・三五）—農鳥小屋（九・一五）
—西農鳥岳（一〇・〇五）—農鳥岳（一
〇・四八）—西農鳥岳（一一・三〇）
—農鳥小屋（一二・〇〇）—間ノ岳（一
三・三〇）
二ピッチで間ノ岳。頂上に幕営後農鳥岳
往復。西農鳥の登り頃より風が強まり、雪
が顔にあたって痛い。西農鳥は通過。農鳥
で少し休んで帰路へつく。農鳥小屋への下
りで宮下のアイゼンが竹若の頭を軽くけり
ヒヤリとする。農鳥小屋—間ノ岳間に立て
たシノ竹を追って帰幕。田中、萬濃、岡部
が軽い顔面凍傷。
▒三月十七日　晴のち曇
出発（七・〇〇）—三峰岳（七・三〇）
—熊の平（九・〇〇）—新蛇抜山（一
二・〇〇）—北荒川岳登り口（一三・
一五）
三峰岳の岩稜は難なく通過したが田中の


白須
竹宇駒ケ岳神社
横岳峠
鉾岳
戸台
三ツ頭
六合石室
黒戸山
大武川
赤河原
丹渓山荘
駒津峰
双児山
甲斐ケ岳
長衛小屋
仙水峠
北沢小屋
浅尾峰
馬ノ背ヒュッテ
大平小屋
広河原峠
早川尾根小屋
長北沢小屋
小屋
小屋文岳
白鳳峠
高嶺
地蔵岳
鳳凰小屋
御座石鉱泉
観音岳
アカヌケノ頭
南アルプス
薬師岳
南御室小屋
小太郎山
白根お池小屋
丸山
肩ノ小屋
広河原ロッジ
大樺沢
林道
点沢下降
夜叉神峠
千頭星山
至甲府
両俣小屋
横川岳
北岳
北岳肩ノ小屋
城峰
ボーコン沢ノ頭
池山小屋
三伏峠
野呂川越
中白根間ノ岳
北岳山荘
三伏峠小屋
農鳥小屋
西農鳥岳
農鳥岳
荒ノ平小屋
広河内岳
大門沢小屋
権右衛門岳
北荒川岳
池ノ沢小屋
雪投沢
本谷山
塩見岳
三伏小屋
白剣山
奈良田越
奈良田
N

アイゼンがこわれる。熊の平より樹林帯を少しラッセルして尾根上へ出る。トレースのおかげで何なく進んだが無ければやや分りにくい。岡部のワカンもこわれる。

▒三月十八日　曇のち晴

出発（六・〇〇）―北俣分岐（九・〇〇）―コーモリ岳（一一・四五）―帰幕（一三・一五）

樹林帯をぬけると風が強い。北荒川岳を稜通しにぬけ、北俣分岐へ。日程も余っているので今日はここでストップ、コーモリ岳往復。

▒三月十九日　曇のち晴

出発（六・一五）―塩見岳（六・五二）―本谷山（一一・一二）―三伏峠小屋（一二・三四）

今日も好天、塩見へは一ピッチで着く。下りはいやらしく、ザイル一ピッチフィックス、時間をくう。塩見小屋の先で他パーティーとすれ違う。大変暑くなり、途中でヤッケをぬぐ。トレースを黙々と追うが雪はくさり、アイゼンがダンゴになる。三伏峠には今日から小屋番が入っていた。

▒三月二十日　晴

出発（六・五七）―樺沢小屋（九・二〇・二二）

樺沢小屋（一〇・五五）―塩川小屋（九・二五）―三伏分岐（一一・五八）―三伏（一三・〇〇）

いよいよ下山。登ればしんどそうな道をかけ下る。塩川小屋あたりはもうほとんど雪がない。樺沢小屋より夕クシーで伊那大島へ。

（小林修）

北ア核心部

（一九八〇年夏合宿）

小林修（リーダー、四）、萬濃英士（三）、石川保典（二）

▒八月一日　曇

横尾（五・一〇）―一の俣（六・〇〇）―槍沢ロッジ（六・五二）―殺生分岐（一二・二〇）―槍肩（一四・〇〇）―槍穂（一五・〇五）

涸沢定着を終え三時に起床早立ち。殺生で肩のテント場のスペースがあるかどうか、萬濃空身で往復、二〇番の札をもらって来る。テント場代一人一日二〇〇円、水一リットル八〇円也。

▒八月二日　曇

槍（五・一五―九・〇五）―双六小屋（九・四〇）―三俣分岐（一一・五八）―三俣（一三・〇〇）

西鎌を快調に下り、双六小屋でにぎりめしを二つひろう。うまい。三俣までノッソリ、ノッソリと歩くが腹が減って困る。レーションもすぐ無くなり、わらじが納豆のにおいがする。いよいよ困ったらわらじをおかずにメシが食えそうだ。

小林の煙草二本とポリタンのガス用ジョーゴを隣りのテントのおっさんと交換。

▒八月三日　曇のち小雨

出発（四・四五）―鷲羽岳（六・〇五）―野口五郎（一一・一二）―烏帽子岳（一三・三五）

野口五郎を越えたあたりから小雨がポツポツ。フランスパン二本ひろった。

横尾を出てまだ三日。ということはあと一四日。ほんまやろか。考えただけでもおぞましい。我が肉体はもうガタガタ。足の

まめは肉がえぐれ、歩くたびに激痛が脳天まで走る。肩は破れ、手の指はレモンをしぼっただけでピクンとつってしまう。この先どうなるのか。やはり、山は一週間から一〇日が限度。一カ月とは何事か。重いキスリングのせいで、小林、萬濃両氏のシャツの背中はビリビリ、ジャージのケツの破れはひどくなる一方。昨日、三俣で若い女連れが「針と糸貸してあげましょうか」だって。それに、小屋でゼンザイとかミルクを豪華に飲んでる奴がいた。うらやましい、殺してやりたいぐらいねたましい。

▒八月四日　霧のち雨

出発（五・〇五）―烏帽子岳（五・五〇）―南沢岳（七・〇五）―不動岳（八・二〇）―船窪（一三・二五）

―船窪（一三・二五）―船窪分岐（一二・三五）―烏帽子小屋（四〇〇円）

烏帽子小屋で水を四リットル買い出発。頂上を往復するが人一人しか立てない花崗岩のピーク。そこからは今日の終点船窪が間近に見えたが不動岳を過ぎ樹林帯に入るとズルズル、ヌルヌルの登り降りが気が遠くなるほど続く。針ノ木谷への分岐に至る頃より雨は大粒、突然、旧小屋跡のテント場に着いた。それにしても荷が軽くならない。着実に減っているのにその気がしない。

▒八月五日　曇

出発（五・三〇）―蓮華岳（一〇・二〇）―北葛岳（七・二五）―針ノ木峠（一一・三〇）

昨日の疲れがまだ残っていたが時間的には割と楽に蓮華を越えた。ただし、最初の鎖場はキスリングではエラかった。

▒八月六日　晴

出発（四・四五）―針ノ木谷出合（六・二〇）―南沢出合（八・二八）―奥黒部ヒュッテ（一一・〇七）―東沢（一六・四三）

針ノ木谷を下るにつれ谷は開けてくる。おまけに久方振りの晴れ、セミの声、ウグイスのさえずり、時折の爽風、しんどいながらもうれしくなる。奥黒部ヒュッテで登山届を出しいよいよ東沢へ入る。一ピッチ半でストップ、カンカン照りの中で干し物、洗髪、水泳に興じる。萬濃は自生のキをとってきてショーユとサトウで煮つけをつくる。これが結構いけて、萬濃のサバイバル術の奥義に脱帽。

▒八月七日　晴

一の沢を過ぎて一度行きづまる。右岸をへつってみるとケンスイのピンがあったがグラグラ、左岸へ徒渉、腰までつかる。さらに進むと流木の丸木橋があり、容易に右岸へ。あとは右岸を時折踏跡に入りつつ進む。カールの底で上をみるとキャンプサイトは無さそうなのでストップ。萬濃は釣り、小林は拾ったモリで魚を獲ろうとするがいかんせん上部にすぎたか魚はいない。石川は胃の調子が悪く元気がない。

▒八月八日　晴

出発（五・二五）―東沢乗越（六・四四）―水晶岳（八・一七）―水晶小屋（九・〇五）―祖父岳（一〇・〇五）―雲の平（一〇・四五）

昨夜の冷えこみはきつく、今朝は快晴。一ピッチで五日ぶりの東沢乗越へ。水晶岳を往復すると、雲海の上に富士、御岳、南ア、白山が見事に望まれる。更に一ピッチ

で祖父岳へ。その直下がテント場。まわりまわって雲ノ平へ実に九日間の入山期間である。大キスリングからも解放され、明日からはサブザックで黒部の源流をかけ回れる。

今、隣の大阪の女の子のテントからスパゲッティ三袋もらいました。メチャメチャウレシイ。お返しに溝掘りをしたわざざ聞こえるように、「ひもじいよー」と繰り返した甲斐がありました。それにしても昨日の東沢は素晴らしかった。かっと照りつける太陽、山の緑が美しい。木々を飛びまわる鳥たち。そして今日は槍がたくまく見える。と、突然、小林氏が「かつおのたたきが食いたい」と叫び、すかさず萬濃氏が「カリフラワーが食べたい」とのたまう。すると小林氏が……もう限りない。明日からはレトルト食品が待っている。おぞましいー。

▒八月九日　晴のち曇

出発（四・五六）—薬師沢出合（六・四五）—赤木沢出合（八・三〇）—大滝上（九・五〇）—赤木平（一〇・四二）—薬師沢出合（一一・〇四）—魚止めの滝（一二・三〇）—薬師沢小屋（一三・五四）—天場（一四・二五）

今日からサブザック！地下足袋の軽装でゲッティをたてつづけに食う。隣へガヤガヤ、ワイワイ言いながら国立音大ＷＶの連中がやってきた。昔ソフトボールを一緒にやった顔もある。今夜の晩メシはα米＋クレシチュー＋鶏肉、ネギ・ホーレン草入りコンソメスープ、こんなにうまいメシは生まれてこのかた食ったことがない。

▒八月十一日　晴

出発（五・二五）—黒部源流（八・〇四）—五郎沢出合（八・一四）—五郎沢二俣（八・五五）—黒部乗越（一〇・〇〇）

黒部五郎のカールは雲ノ平なんぞ足元にも及ばぬくらい絶景。

▒八月十二日　曇のちガス

出発（四・五二）—黒部五郎岳（六・四〇）—赤木岳（八・四〇）—北ノ俣岳（九・一〇）—薬師峠（一〇・三四—薬師岳（一一・四八）—薬師峠（一二・四四）—祖父岳（一一・〇〇）—雲の平（一一・二〇）

ようやくベースに戻り、ソーメン、スパゲッティをたてつづけに食う。隣へガヤガヤ、ワイワイ言いながら国立音大ＷＶの連中がやってきた。昔ソフトボールを一緒にやった顔もある。今夜の晩メシはα米＋クレシチュー＋鶏肉、ネギ・ホーレン草入りコンソメスープ、こんなにうまいメシは生まれてこのかた食ったことがない。

▒八月十一日　晴

出発（五・二五）—黒部源流（八・〇四）—五郎沢出合（八・一四）—五郎沢二俣（八・五五）—黒部乗越（一〇・〇〇）

黒部五郎のカールは雲ノ平なんぞ足元にも及ばぬくらい絶景。

▒八月十二日　曇のちガス

出発（四・五二）—黒部五郎岳（六・四〇）—赤木岳（八・四〇）—北ノ俣岳（九・一〇）—薬師峠（一〇・三四—薬師岳（一一・四八）—薬師峠（一二・四四）—祖父岳（一一・〇〇）—雲の平（一一・二〇）

太郎の小屋でビールを仕入れ、薬師峠のテント場へ。ＦＭで石川優子のＤＪを聞き

ながら乾杯。長い長い第一次夏合宿も終りをつげようとしている。一回の沈澱もなく、事故もなくひと仕事やり終えた感がする。いよいよ明日はうまいメシと、化粧した女のいる文化生活の中に還俗する。最後の夜明けは我々の合宿のフィナーレを祝うかの如くペルセウス座大流星群が北東の空に炸烈した。

（小林修）

奥大日尾根

（一九八〇年十月）

田中、萬濃(三)

▒十月三十日　快晴のち曇時々ガス・夜から雪

馬場島（七・五〇）―東小糸谷出合（八・一〇）―一六三〇㍍地点（一三・四〇）―クズバ山頂（一五・三〇）

馬場島は快晴。付近に雪なし。東小糸谷出合は明瞭で付近は広い河原。水流すぐ左手の踏跡より入る。二、三回の渡渉後、流れは二つに分かれる。中山の細い沢を支沢と思いこみて登ってしまう。途中まち山腹の急なかん木帯をトラバース気味に右上方へ登る。傾斜がゆるみ始めると雪が見えるようになる。くるぶしの雪だが、ササや木に積もった雪がヤブをこぐと降りかかり、全身ビショぬれとなる。コルへは直接あがらず、左の沢に沿って行く。途中先行者（大阪工大）のトレールを見つけ、それに従う。稜線からは、ヤブは減ったものの、雪量が増し、傾斜もきつくなり、苦しい登高が続く。クズバ山頂まで三カ所ほど古いフィックスがある。一六三〇㍍付近は幕営可。そのほかはだいたいが狭い尾根で、立山川側にササの急斜面がおちこんでいて、雪の状態によっては危険か。クズバ山頂は狭いピークだが、四〇㍍くらい先にくぼ地がある。夕方雲がはれて、剣から奥大日への大パノラマが展開する。

▒十月三十一日　雪・やや風強し

出発（八・四〇）―一八八五㍍P（一一・〇〇）―西大谷山手前一九六〇㍍付近（一二・三〇）

前夜からの風雪で、新雪二〇～三〇㌢。明るくなってもやまず、沈の雰囲気もあったが、完全装備で出発。すぐに太モモまでのラッセルとなり、ワカンのないことを嘆く。大阪工大が先行していたが、すぐに追いつきラッセルを替わる。小さなコブが多く、ラッセルは苦しい。稜線の右に大木多く、左は少ないが雪が吹きだまって深い。一八八五㍍Pで稜線は急に左折しており要注意。しばらく行くと大きなクボ地となる。右手の尾根に沿って行けばよいところを、誤って左尾根に迂回し、苦労する。その先は急登となり、尾根の小広くなったところで幕営。

▒十一月一日　曇のち雪

出発（七・〇〇）―西大谷山先（一五・二〇）

また前夜からの雪で、ラッセルは腰までとなり、時に胸まで没する。途中で大阪工大の四人（やはりワカンなし）とジョイン



トし、六人一パーティーとなってラッセルするもなかなか進まない。西大谷山に近づくにつれて尾根は狭まり、幕営適地は少ない。西大谷山のピークははっきりせず、支尾根とのジャンクションになって尾根が右折しているのでそれとわかる。小さなコブを越えたところで時間切れとなり、狭い稜線上の雪を切って、なんとか幕営。

▒十一月二日　雪

出発（六・三〇）―退却決定（七・一五）―西大谷山（七・三〇）―立山川東大谷出合上流一〇〇㍍付近（一一・一五）―毛勝谷出合（一五・三〇）

またまた雪が増える。三〇分のラッセルで二〇～三〇㌢の前進。そこで状況判断。

①この分では今日はせいぜいプラトーどまり。

②そうなるとあと残り二日で奥大日岳を登り切ってとにかくにしても、室堂乗越や雷鳥沢は雪崩がこわいので、立山まで回り込まねばならないかもしれない。

③室堂へ下るにしても、室堂へ下らねばならない。

④今までのような天気では主稜線で行動可

能か不明。

ということで、西大谷山から支尾根を立山川にエスケープして馬場島に戻ることに決定。大阪工大は食糧が十分なのでまだ行くというが、こちらはガソリンが不十分なのと、最終下山日を十一月四日としてあったことから、未練を残しつつ彼らと別れる。トレールをたどってすぐに西大谷山に着き、右手の支尾根へと入る。地図を頼りに深いラッセルをしつつ慎重に下る。二〇〇〇㍍付近からは、下るのに容易と思われたのに薄く氷をのせた所があり、約一〇㍍のアプザイレン。谷底に近づくにつれ雪は重くなる。すぐ右岸に渡り、立山川に沿って行くが、東大谷出合で夏道の橋をさがすも見つからず、毛勝谷出合で時間切れとなる。

▒十一月三日　雪のち時々晴

出発（六・四〇）―林道終点の堰堤（一〇・三〇）―馬場島（一一・三〇）

夜中に強風とともに雪が吹きつけ、朝になっても視界が悪い。依然として太モモまでのラッセル。三回ほど股までの渡渉。ようやく堰堤につき、帰ったという実感が湧く。馬場島の積雪は一〇㌢だった。

◇総括

奥大日尾根は全体として迷うようなところもないが、コブなく、さして危険なところもないが、ラッセルに苦しが多く木のはえ方が複雑でラッセルに苦しむ。下山ルートはあの時点での最善手であると思うが、やはり雪の谷を下るのはゾッとしない。偵察山行というよりは、完全に冬山山行であった。

（萬濃英士）

富士山雪上訓練中の事故

（一九八〇年十一月）

①頂上隊　土方浩、中村宜幸、田中賢介(二)

②雪訓隊　小林修(四)、萬濃英士、宮下克彦(二)、岡部晃和、竹若敬三(二)、安島孝和、石川保典、稲毛尚之、入佐信宏、滝浦剛、福田孝和(一)

▒十一月二十一日　夜　富士吉田集合

▒十一月二十二日　雨時々曇

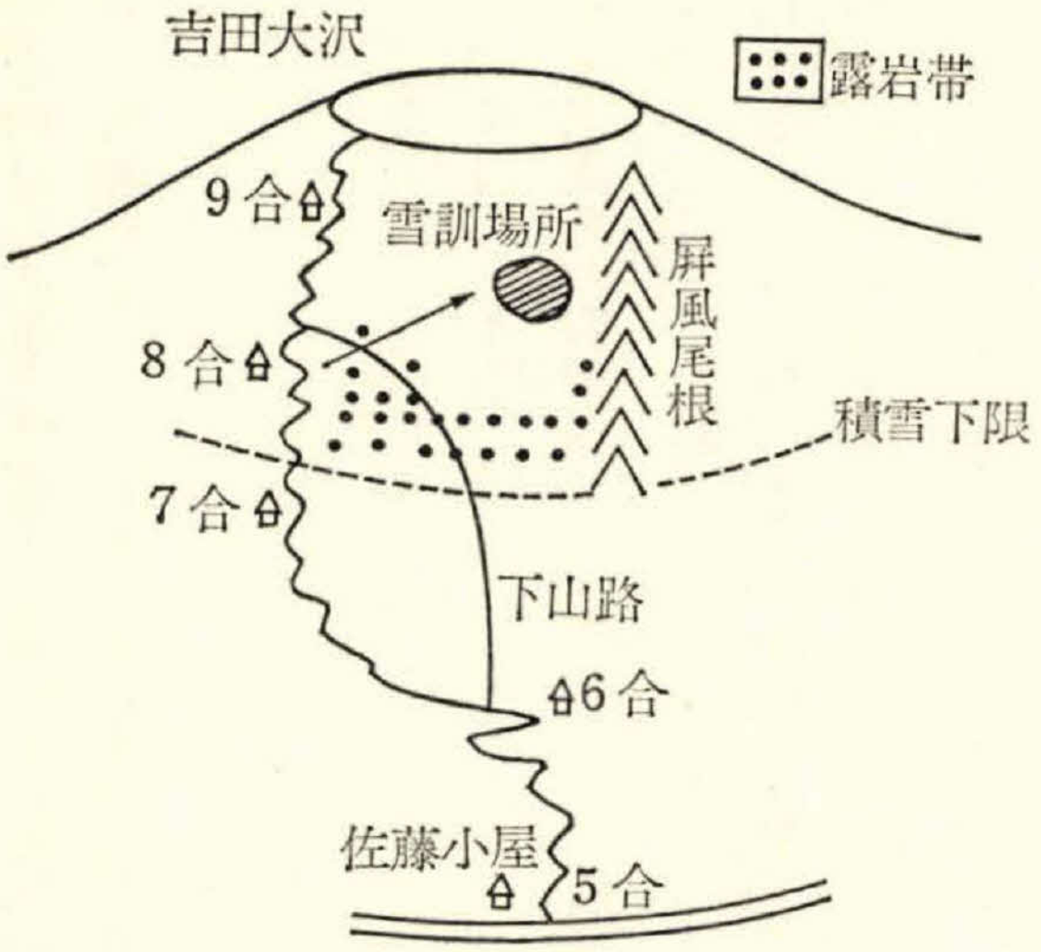
出発（六・五五）―馬返し（九・三〇）―五合目（一二・四〇）

▒十一月二十三日　晴

出発（五・四五）―雪訓場所（九・〇五）

バケツを掘り、ザイルをダブルにして停止用にフィックス。一人がストッパーとしてバケツの中に立ち安全を期した。まずアイゼン歩行。次いでうつぶせ、あお向け滑りによるピッケルストップ。あお向け滑りでは個人差があり、特に滝浦については上からのザイル確保をして個人指導をした。一四時終了。その夜は六名が三隊に分かれてビバーク訓練。

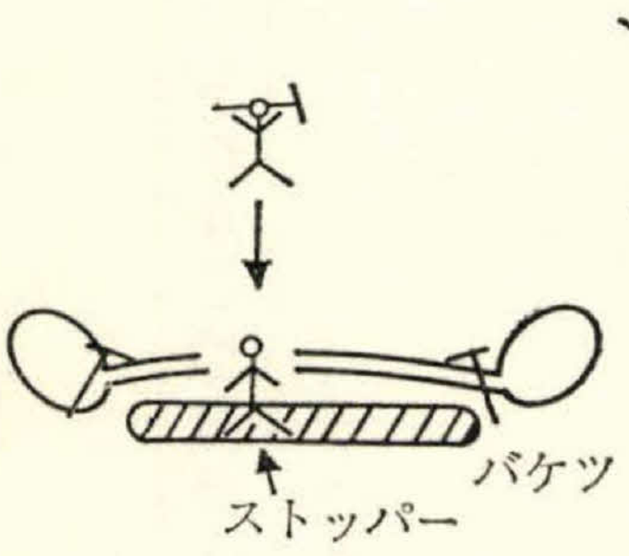
▒十二月二十四日　晴

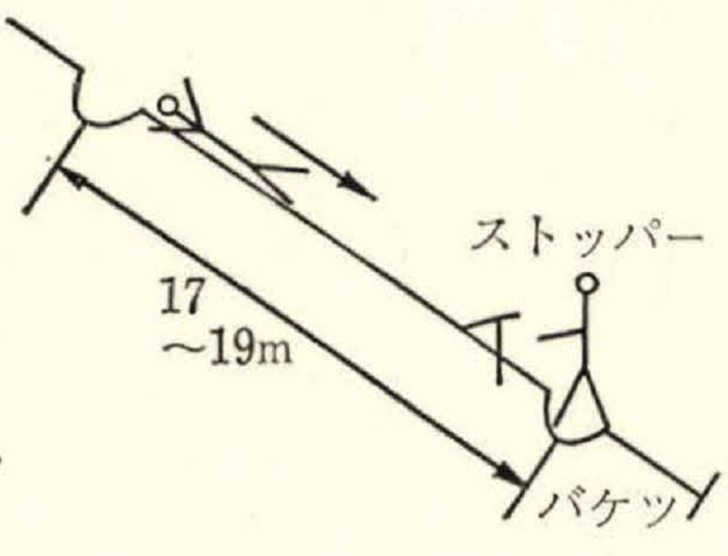


ビバーク隊帰幕（五・〇〇）―出発（六・三〇）―雪訓場所（一〇・〇〇）

ピッケルストップ訓練再開。あお向け滑りの三日目で一〇時四五分滝浦が止めきれず二人のストッパーがザイルを足にかけて止めようとしたがザイルの下をぬけて滑落。途中、ピッケルを手放し、頭を屏風尾根側にして回転、他パーティーの間をぬけて約二〇〇〇㍍下にいた九十九山の会パーティーの所まで滑落、同会の春川氏がピッケルを打ち込み、耐風姿勢のような形をとり、右肩で滝浦を受け止める。滝浦はなおも右下方に落ちるがこれを同藤井氏が受けとめようやく停止した。

滝浦は頭を右下方にうつぶせ。右腕を背中へ「くの字」に曲げる。目は開いており、右上腕部の痛みを訴える。鼻血が出る。

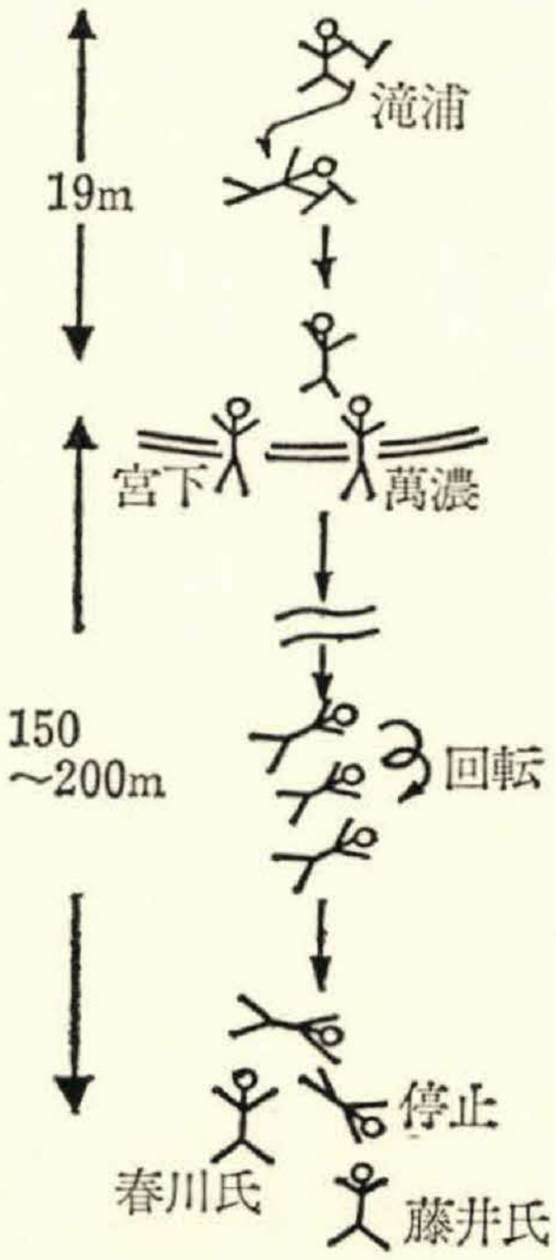




春川氏は受け止めた時に軽い貧血と吐気を感じる。

このため直ちに救助作業に移り、滝浦は一六時に五合目着、富士吉田署の車に収容され病院へ向かった。また春川、藤井両氏は一三時三〇分、五合目より自家用車で下山した。

その後、滝浦は右上腕骨複雑骨折、春川氏は右手首脱臼骨折と判明、前者は十二月



二十四日に北里大学病院を退院、後者はギブス装着後、リハビリーテーションに入った。

事故の反省としては、冬、春合宿の偵察、検討にとりまぎれ、また上級生にとっては三度目の富士山ということから楽観視していたことがあげられる。このため、現地においても、他パーティーによる落石等をさけるために、最初から往復四時間もかかる最上部の急峻な場所を訓練場所に選んだ。

今後の対策として、一人しかいないリーダー層が何から何まで気を配らねばならず、注意散漫になりがちな体制を変更し、また緩傾斜から急傾斜、或は個人差対応といった練習方法についての意見交換を深めることとした。

スバリ岳から鹿島槍へ

（一九八〇年冬合宿）

土方浩(リーダー)、萬濃英士、中村宜幸、宮下克彦(三)、岡部晃和、竹若敬三(二)、石川保典、安島孝和、稲毛尚之(一)

▒十二月二十六日　雪

日向山ゲート（六・三〇）―林道終点（一二・〇〇）―鳴沢と赤沢の中間の台地（一四・四〇）

大町に降り立った時から雪の多さに前途多難が予想された。マイクロバスでゲートまで三千五百円也。

車中で朝飯を食べているとフロントガラスに雪がビュンビュン吹きつけて来る。

完全装備で出発、扇沢を越えると股までのラッセルが始まる。ラッセル御三家の萬濃はさすがに早いが、二番手の石川以下、一年生は苦しそうだ。川原へ降りることも考えたがえん堤を迂回するのが面倒だったのでほぼ夏道伝いに行く。ラッセルが一巡したところでダブルボッカに切り替える。沢を渡るところが急で厳しく、今日中に大沢小屋へ入るのは無理と判断、手前で幕営。

▒十二月二十七日　雪

出発（九・五〇）―大沢小屋（一六七〇㍍）（一一・三〇～一二・三〇）―屏風尾根二〇〇〇㍍までボッカ（一五・三〇）

全員寝過ごし七時近くやっと起き出す。テントはかなり雪に埋まり、朝からダブルボッカ、中村、萬濃、土方をリーダーに三グループに分け三人ずつで進む。大沢小屋へは一時間四〇分で到着。この先、屏風尾根を登るのだが、五月の偵察時には二三〇〇㍍までテント場がなかったのでとりあえず一日分の食糧だけ置いてあとはデポに向かった。

のっけから急峻なラッセルとなり、ピッケルで雪をかき落とさないと進めない。雪崩テストをしてみたが、そうはっきりと面

が出なかったし、ブッシュもあったので危険はさほどでもないと判断した。シノ竹を立てつつ二〇〇〇㍍くらいまで進み、ツェルトをかぶせてデポ、この先大木はなくなり、雪面にはクラックが走っており非常に不安。

▒十二月二十八日　雪

出発（六・五〇）―デポ（一一・三〇）―二〇七〇㍍（一五・〇〇～一七・三〇）　設営完了

明け方、ダンロップテントが埋まり除雪する。テント割は三人グループで毎日交代した。昨日のトレースは完全に埋まり、シノ竹を目当に、ピッケルで底の堅いところをさぐりながらダブルボッカで進む。デポ地は広げればテントが張れそうだったが時間も早いのでもう少し進むことにした。土方が先行して先を見、駄目ならデポ地幕営の予定だったが、下から鵬翔山岳会が登って来て我々は上へ行かねばならなくなった。中村がラッセルしていると雪がドサリと落ち小雪崩が起きる。急傾斜の上、右手の雪面にはクラックが走っているので大変恐ろしい。適当なテント場にくとまだすぐ近くで、雪面を大きく切り、フカフカの雪をどうにかこうにかして設営する。終了後、稲毛のピッケル紛失に気付く。

▒十二月二十九日　雪のち曇

出発（七・〇〇）―二二〇〇㍍（八・五〇～九・〇〇）―二三〇〇㍍（八・四〇）―スバリ岳（一二・三〇）―テント場（一六・四〇）

雪が小降りとなり、ラッセル中で程なく追い付き交代を申し入れるが、二三〇〇㍍までは行くというので大休止とする。テルモスが凍ってなかなかあかない。

二三〇〇㍍は広くテントが張れるが鵬翔はそこでストップ、我々が先に立つ。そこからは四〇度近い急傾斜でスコップを使って進んだ。この付近から雲が切れはじめて薄陽が射す。稜線直下五㍍が絶好のテント場となっており、三張のテントを張る。

このあと土方、中村でスバリ岳往復、氷結しておらず歩きづらい。頂上直下は急な雪壁、展望がきかない。

▒十二月三十一日　晴

出発（七・四〇）―赤沢岳（八・四五～九・〇〇）―鳴沢岳（一〇・三〇～一一・三〇）―新越乗越（一二・三〇）

やっと太陽が現われた、アイゼンケースってからゾンデをし、ピッケルでこわす者さえで出発。まず稲毛のピッケル探し、雪を掘れ目が稜線まで達してやっとようやく見つける。

さほどもぐらずに進めたが、途中雪の切が凍って開かず、ピッケルでこわす者さえいた。稜線はさほど難しくはないが西風が強く、手足が痛い、剣岳が迫って見える。鵬翔の八人組が先行したので雪庇の心配

なく進めた。新越乗越の手前からラッセルが始まり、乗越で八人組に追い付いた。我々は明日が冷池なのでここで新年を迎えることとした。非常に景色が良い。

▒一月一日　快晴

出発（七・二〇）―岩小屋沢岳（八・三五）―種池（一〇・三〇）―爺ガ岳（一二・〇〇）―冷池（一三・三〇）

無事初日の出を拝み、今年も良い年であるよう祈願する。昨日のトレースは飛雪で隠れていたので少しワカンで進む。岩小屋沢を過ぎると人が多くなり、絶好の天気となる。

爺の主峰は荷をおいて往復、赤岩尾根の下り口を確認、シノ竹を立てておく。冷池の小屋の周辺はテント村になっていたので小屋の上部の通路の左側の斜面を崩して設営した。

▒一月二～四日　雪　沈澱

▒一月五日　雪

出発（一〇・〇〇）―鹿島槍ガ岳（一一・二〇）―冷池（一二・二五～一三・〇〇）―赤岩尾根下り口（一三・三〇）―高千穂平（一五・三〇）

風はあまりないが視界不良。気象通報、高層気象共に冬型で寒気は居座ったまま。往復下山の中村パーティーは登頂できると判断、六・三〇に出発。

残るキレット隊は残日数七日、今日中にキレットに行けたとしても閉じ込められる可能性が大いにあり、どうしたものか逡巡しつつラジオに耳を傾けた。

九時一〇分の天気図を作製、好転の見込みは薄いと判断、最終的に下山と決定、鹿島槍へ向かう。

樹林をぬけると風が強く視界は五〇㍍、猛スピードで登頂、赤岩尾根の下り口でザイルを出している先行中村パーティーに追いつく。

二ピッチ程急峻な雪壁なのでザイルを出しあとは所々くぼんでいるトレースらしきものを追い、一散に下る。

▒一月六日　雪のち曇

出発（八・一〇）―西股出合（九・四五）―大谷原（一一・一〇）―鹿島ロッジ（一二・一〇）―大町（一三・三〇）

下りではあるが雪が深く難渋、西股出合からはトレースがあり、やっと肩の力をぬくことができた。

（土方浩）

真砂沢定着

（一九八二年夏合宿）

岡部（リーダー、四）、安島、石川、稲毛、山本、辻（三）、石丸、五ヶ山（二）、高野、鈴木、百瀬（一）、宮下（五七年卒）

▒七月二十一日　晴

室堂（九・四〇）―別山乗越（一三・四五）―真砂（一六・四〇）

急行能登で入山。上野駅では、たくさんのOBの方々に見送っていただき、差し入れもいただいた。駒沢大パーティーと一緒の入山。ザックの重さは四四～五〇㌔と大きな差が出た。最高は鈴木君。雷鳥沢まで

一ピッチ。そこから四ピッチとを組んで登る。途中鈴木君が遅れただけで、一年生の強さに驚いた。乗越から岡部、稲毛、石丸、五ケ山は、雪渓で盆やトタンを用いてザックをすべらせ者はかついで降りた。結局辻、安島、稲毛、岡部……の順で到着。真砂は期待に反して混雑していて左岸の高い所に幕営する。

▒七月二十二日　晴時々曇

出発（六・二五）―雪訓場（八・四〇～一四・四〇）―BC（一五・五五）―左俣コル（一一・二〇）―雪渓（一二・〇〇～一四・〇〇）―BC（一五・一〇）

朝の準備が非常に遅い。長次郎を登る。一年生は初めての雪渓だが、まあまあしっかり歩いている。八ツ峰四峰下の斜面で練習する。ここは傾斜、雪質とも良好。まずキック・ステップとピッケルストップをする。ザイルを下に張って岡部が確保。一年生は三人共、バランスが良くて優秀。ピッケルストップは始め百瀬が半身になっていたが他は皆うまい。スタカットも合格点。

▒七月二十三日　晴のち曇のち雨

出発（六・一〇）―頂上（九・五五）―左俣コル（一〇）―平蔵コル（九・〇〇～一一・二〇）―BC（一五・一〇）

今日は最初からピークを目指して出発。安島、稲毛、石丸、五ケ山は、雪渓で盆やトタンを用いてザックをすべらせ者はかついで降りた。結局辻、岡部……の順で到着。真砂は期待に反して混雑していて左岸の高い所に幕営する。

▒七月二十二日　晴時々曇

出発（六・二五）―雪訓場（八・四〇～一四・四〇）―BC（一五・五五）

朝の準備が非常に遅い。長次郎を登る。一年生は初めての雪渓だが、まあまあしっかり歩いている。八ツ峰四峰下の斜面で練習する。ここは傾斜、雪質とも良好。まずキック・ステップとピッケルストップをする。ザイルを下に張って岡部が確保。一年生は三人共、バランスが良くて優秀。ピッケルストップは始め百瀬が半身になっていたが他は皆うまい。スタカットも合格点。

▒七月二十三日　晴のち曇のち雨

出発（六・一〇）―頂上（九・五五）―左俣コル（一〇）―平蔵コル（九・〇〇～一一・二〇）―尾根上（一五・一〇）―BC（一五・一〇）

今日は最初からピークを目指して出発。安島、稲毛、石丸、五ケ山は、雪渓で盆やトタンを用いてザックをすべらせ者はかついで降りた。結局辻、岡部……の順で到着。真砂は期待に反して混雑していて左岸の高い所に幕営する。

▒七月二十四日　雨時々曇

〈源治郎隊〉岡部、石川、稲毛、五ケ山、高野、百瀬

〈八ツ峰隊〉安島、山本　辻、石丸、鈴木

出発（六・二〇）―平蔵コル（九・〇〇～一一・二〇）―左俣コル（一一・四〇）―ルンゼ（九・〇〇）―尾根上（一一・四〇）―二峰（一二・〇〇）―頂上（一四・一〇）―平蔵コル（一五・一〇）―BC（一五・五五）

取付の雪渓は堅く危険。右岸の階段上の岩場一〇米弱を石川がノーザイルで登る。二番目の高野は行きつまるうち足場が崩れてぶらさがってしまい、石川にザイルを垂らしてもらって登る。途中、一度落ちて五ケ山にぶつかる。百瀬もつまってしまい、この部分に一時間もかかった。棚どおしにルンゼに入れそうにないので尾根をめざして進む。フィックスで一ピッチ登ったり、スタカット、脱ザイレンも一年生が後、木登り三〇分で尾根上に出る。雨は降る。スラブ帯で二ピッチ、一年生を確保して登攀し、ようやく尾根上に到着する。下り心。やっとのことで頂上に到着する。下り

は長次郎をやめ視界のきく平蔵谷にする。岡部がシーバーを忘れたため交信できず、心配した山本、石丸が迎えに来た。

〈八ツ峰隊〉　不明

▒七月二十五日　雨のため停滞

▒七月二十六日　雨時々曇・停滞

▒七月二十七日　曇・ガス深し

〈八ツ峰上半隊〉　岡部、石川、稲毛、五ヶ山、高野、百瀬

〈源治郎隊〉　安島、山本、辻、石丸、鈴木

〈八ツ峰上半隊〉　出発（五・四五）―五・六コル（八・〇五）―八ツ峰チンネの頭コル（一〇・三〇）―右俣コル（一一・一〇）―六峰フェース下（一一・五〇）―Bフェース取付（一二・四五　但し、石川、五ヶ山、高野はCフェース剣稜会へ）―終了（一六・〇〇）―六峰フェース下（一七・三〇）―BC（一八・〇〇）

八ツ峰は雨の降った後なので上半に変更。一〇㍍ほどの視界の中を登る。途中六峰の下りに一〇㍍ほど懸垂する。雪渓は軟らかくて簡単だったが、池ノ谷側へ降りる所は岩がもろくて難しかった。天気の持っているうちに少しでも多く登ろうと、二隊に分かれてBフェース京大ルートとCフェース剣稜会を登る。

〈源治郎隊〉　不明

▒七月二十八日　曇のち雷雨

〈六峰フェース隊〉　岡部、山本、鈴木(C―RCC)、石川、五ヶ山、百瀬（A―魚高）

〈本峰南壁隊〉　安島、石丸、高野(A1)、辻、稲毛（A2）

〈六峰フェース隊〉　出発(六・一〇)―六峰フェース下（六・四五）―チンネ八ツ峰の頭のコル（九・三〇）―右俣コル（九・五〇）―終了（一一・一〇）―六峰フェース下（一二・三〇）―（宮下、山本(D)、稲毛、五ヶ山、百瀬（C―剣）

〈八ツ峰上半隊〉　出発（四・三〇）―六峰フェース下（六・四五）―チンネ八ツ峰の頭のコル（九・三〇）―右俣コル（一一・一〇）―六峰フェース下（一二・三〇）―（宮下、山本(D)、安島、石丸、高野(C)、石川、辻、鈴木(A―魚高)、稲毛、五ヶ山（A―中大）、岡部、百瀬(下山)

今日も雨が降りそうなので小縦走を中止して、二十四日に八ツ峰下半を引き返したメンバーを岡部が連れてゆく。ガスで何も見えない中をひたすら登る。右俣の下りはでDフェースへ向かう。OBの宮下さんが来ていらっしゃった。生ダル3ℓの差し入れで楽しい夜を過ごす。

〈本峰南峰隊〉　不明

▒七月二十九日　曇のち雷雨

〈八ツ峰上半隊〉　岡部、辻、石丸、鈴木

〈六峰フェース隊〉　安島、石川、五ヶ山、稲毛、百瀬（C―剣）

〈八ツ峰上半隊〉　出発（四・三〇）―六峰フェース下（六・四五）―チンネ八ツ峰の頭のコル（九・三〇）―右俣コル（一一・一〇）―六峰フェース下（一二・三〇）―（宮下、山本(D)、安島、石丸、高野(C)、石川、辻、鈴木(A―魚高)、稲毛、五ヶ山（A―中大）、岡部、百瀬(下山)

今日も雨が降りそうなので小縦走を中止して、二十四日に八ツ峰下半を引き返したメンバーを岡部が連れてゆく。ガスで何も見えない中をひたすら登る。右俣の下りは

ガチガチの固い雪でバックステップで下る。途中、右側を誰かが落ちてゆく音が聞こえ、リーダーらしき人の「ピッケル！ピッケル！」という声がひびく。皆、ガスの中でその音にビビる。皆一本登った後、百瀬と岡部だけ下山。

〈六峰フェース隊〉　不明

▒七月三十日　曇のち晴、夕方雷雨

出発（六・三五）―別山直下（九・五五）―BC（一二・三〇）

今日は天気が昨日より悪そうだったので、一年生、特に鈴木の疲労が激しいことも考えて沈にしようという意見と、一日休んだところで疲れは変わらないから一日分を半日ずつに分けて歩けばよいという意見が分かれた。討論の結果、後者がもっともだということになり、別山往復をすることになった。別山は天気も持ちなおして良かった。帰りは鈴木の靴ずれが悪化し、上級生が付き添って二時間半遅れて帰着。宮下OBは長次郎谷から本峰を登って下山。

▒七月三十一日　晴時々曇

〈小窓・三ノ窓隊〉　岡部、石川、稲毛、山本、辻、五ヶ山、石丸

〈テント・キーパー〉　安島、高野

鈴木、百瀬

〈小窓・三ノ窓隊〉　出発（五・三五）―小窓（八・三五）―三ノ窓出合（六・三五）―三ノ窓（一〇・三〇）―BC（一三・一〇）

いよいよ縦走出発。今日は剣沢までの計画だったが、台風の通過による暴風雨山域概念の把握のために小窓から三ノ窓に行く。石丸、五ヶ山、辻にルート選定、ピッチの区切り方すべてを任せる。五ヶ山、石丸ともに何度か間違えたがなんとかこなした。三ノ窓雪渓も登れば長いが下れば三〇分で快適だ。二十二日以来の晴天に恵まれ、一年生が抜けた分パーティーの速さがアップしたので、シンドイながら充実した一日となった。

（岡部晃和）

後立山より日本海へ

（一九八二年夏合宿）

岡部（リーダー、四）、辻（三）、石丸（二）、高野、百瀬（一）

▒八月一日　台風の通過による暴風雨

真砂BC（八・三〇）―別山乗越（一一・三五）―室堂ターミナル（一三・三〇）

いよいよ縦走出発。今日は剣沢までの計画だったが、台風の通過による暴風雨から避難するために室堂ターミナルに向けて出発。全身ズブ濡れになりながら、ほうほうの体で、室堂ターミナルに到着。ターミナル内、火気厳禁のため、ブスが使えず、レーションで夕食をとる。夜になって避難してくる登山者多数。

▒八月二日　雨のち曇風強く停滞。

室堂ターミナル（一〇・〇〇）―雷鳥沢（一〇・三〇）

雨がやんできたので雷鳥沢まで移動するが風強く沈滞。防衛大パーティーが頭に岩を受けた怪我人を運んでくる。

▒八月三日　曇のち雨

雷鳥沢（六・二五）―一ノ越（八・一〇）―雄山往復（九・二〇）―鬼ガ岳（一〇・三五）―五色ガ原（一二・五

五）―刈安峠（一四・五〇）―ヌクイ谷出合（一八・〇〇）

本日も強風。雄山の頂上でさっそく弁当をひろい、五色までは意外に順調に進む。あと一Pで平ノ渡というところで、道に迷い、沢に入りこみザイルを出す。他の登山者にもザイルを貸したりして時間を喰い、雨も降り出すなか、ようやく六時に天場に到着。

▒八月四日　雨のち曇

ヌクイ谷出合（五・四〇）―平ノ渡（六・二〇）―南沢出合（八・〇五）―針ノ木峠（一二俣（一二・三〇）―針ノ木谷を行く。六・四五）

台風で荒れてしまった針ノ木谷を行く。徒渉に手間取り渡場から二俣まで6Pかかる。途中、一年の高野が二年の五ヶ山が残していった排泄物をつかみ大騒ぎになる。一年生はバテたため、昨日に続き一二時間行動。

▒八月五日　晴

針ノ木峠（五・五〇）―針ノ木岳（六・五〇）―赤沢岳（一〇・〇〇）―新越乗越（一二・〇五）―種池（一五・〇〇）

七月二十二日以来の晴れである。針ノ木岳では、眺望の素晴しさに時間を忘れて大休止。朝の出発の際、百瀬が雪渓にハムを落して約一時間の自主トレ。稜線歩きは気持がよいが、連日の一二時間行動のため、体がゆうことをきかず種池どまり。しばし夕日にみとれる。

▒八月六日　晴

種池（五・五〇）―冷池（七・四五）―キレット小屋（一八・四〇）―五竜岳（一八・〇〇）

鹿島槍までは順調に進むが、吊尾根にかかる頃からペースダウン。岩場では一年生がいると時間がかかる。昼近くから猛暑は厳しくなり、高野の様子がおかしくなる。小屋手前のクサリ場で高野が足に怪我をし、小屋から2P半行った頃また手首に怪我をする。応急手当をして小休止し、高野を空身にするために荷分し、上級生が分担する。はうようにして、日の暮れかかる五竜岳到着。五竜山荘に着いた時は真暗で、天場は満杯のため、小屋の敷地に張る。

▒八月七日　晴

五竜山荘（七・五〇）―唐松山荘（一〇・五五）

小屋の仕事の邪魔になるため、早朝三時にテントを撤収。今日は休養日として唐松まで。

▒八月八日　雨のち曇のち雷雨

唐松山荘（六・四〇）―不帰1峰（八・五五）―不帰の頭（一一・一〇）―白馬（一四・〇〇）

朝方雨が降り様子をみるが、小雨となったので出発。不帰は意外に整備されていて安心。あと一Pで白馬の天場というところで、激しい雷雨。

▒八月九日　晴のち雷雨

天場（六・〇〇）―白馬岳（六・四五）―雪倉岳（九・〇〇）―朝日岳（十二・五〇）

今日もあと一Pというところで雷雨にあ

▒八月十日　晴時々曇
朝日岳（五・一五〇）―長栂山（六・〇〇）―さわがに山（九・五五）―黒岩平（八・〇〇）―犬ガ岳（一一・四〇）
蓮華温泉との分岐点から道が悪くなり、枝の張り出す泥沢の中をヤブこぎ。下も見えないくらいのヤブだが、尾根そのものは両側に切れ落ち、やせている。犬ガ岳の小屋は立派で最後の一夜を過すため、大事に持ってきた酒を飲む。

▒八月十一日　晴
犬ガ岳（五・四〇）―菊石山（七・一〇）―白鳥山（九・一五）―ツキ割（一〇・一五）―坂田峠（一一・一〇）―二本松（一二・二〇）―栂海新道入口（一三・四〇）
今日は最終下山日、ヤブは昨日よりひどくなる。白鳥山の水場がみつからず、一時は水無しで下山かと思ったが、ツキ割の水場は豊富であった。風波川の道は二、三年前の台風の後修復されていないため、入道山まで登りそこから下山。海風が、疲れた体を、そっといたわってくれた。

総　評

一年生はよくがんばった。一一日間のうち雨にふられなかったのは四日だけ。よく歩き通した。初めての本格的合宿で二二日の計画を完遂できたことは冬、春に向けての大きな自信となるだろう。

（岡部晃和）

北俣岳から槍ガ岳

（一九八三年冬合宿）

石川保典（リーダー）、稲毛尚之、山本礼二郎（四）、石丸義男（三）、鈴木雅之、白石章治（二）、谷口隼人（一）

〈コース〉神岡―寺地山―北俣岳―黒部五郎岳―三俣蓮華岳―西鎌尾根―槍ガ岳―中崎尾根―新穂高温泉

▒十二月十三日　曇のち晴
神岡の駅に降りたつ。寒々とした空気にマイクロの運ちゃんの威勢のよい声が響きわたり、体が引き締まる。例年より雪が早く多いとのこと。車で一時間ばかり、雪の打保村は人の気配がない。どんよりと曇った空はまるで灰色の海のようで、重たく沈んでいる。いざ出発！久方ぶりの雪の感触は、おせじにも気持ちよいとはいえない。膝下のラッセルが続く。それでも林道を歩いているうちに青空が顔を出し始めた。気持ちのよい汗が背中をつたわる。「ああ、冬山に来たんだなあ」。実感が体中を浸して、皆の顔がやっと綻んだ。こんな時はレーションがうまい。一一時過ぎようやく取り付きに。雪が深くなってきてダブルボッカが始まった。

今回の冬山は、二度の偵察が失敗に終わったため、赤布もデポもない。過去の記録とあとは自らの判断と気力と体力が頼みの綱だ。慎重なうえに慎重なまでの行動が要求される。

なかなか進まず、予定より若干下の一四〇〇㍍くらいの尾根上に時間切れで幕営。

▒十二月十四日　曇

起きてみたら外は風が吹いて雪が舞っていた。六時一五分、ヘッドランプの明かりを頼りに出発。急登を登りつめたら、昨日幕営予定の水の平に出た。雪は止んだが、ガスのあい間に時折見える山は、なぜか息苦しく迫ってくる。雪はだいたい膝上。一四時過ぎに一八四二㍍地点に幕営。多少青空が見え視界がだいぶ効くようになったので、石川・稲毛でルート工作に出発。一九一八㍍まで偵察。木々の間から寺地山が垣間見え、その先の北俣岳へのだだっ広い斜面が見えた。雪崩がチョットいやだ。予定より少しずつ遅れぎみ。

▒十二月十五日　快晴のち雪

朝雲がちぎれ、澄みきった青空が心を弾ませる。前日の踏み跡を頼りに一九一八㍍までは快調。なかなかすがしい。九時寺地山に着くあたりからまた空模様がおかしくなってきて、谷から吹きつける風が痛い。北俣への斜面の基部でテントをはる。

▒十二月十六日　曇、風強し

昨晩からの雪が一〇㌢ほど積もっている。強風にとばされる雪に視界は妨げられ、赤旗をたてながら地図とにらめっこして、ひたすら登る。途中アイゼン装着。稜線は近い、それを心の支えとして一歩また一歩と踏み出しているうちに突然斜面が消えた。そこが北俣岳だった。強風の中テント設営。一四時半頃風も弱まり、かなり視界が良くなったので偵察に石川・山本が出発。赤木岳手前のヨルまで夏道どおしに赤旗をたてる。雪は飛ばされており、アイゼンの音が小気味よい。

▒十二月十七日　吹雪　停滞

▒十二月十八日　曇時々晴のち雪

朝起きた時、外は昨日と変わらなかった。いつでも出発できる用意をして待機するが、期待空しく一日中雪、視界悪し。

▒十二月二十日　ガス

昨日と何も様子は変わらない。ちょっぴりがっかり。一〇時頃気のせいか霧が少し晴れたようなので、石川、稲毛、山本の三人で偵察に出る。下りながらも猛烈なラッセルを一時間ほどしたところで、視界が一〇〇㍍ぐらいきくようになった。これならいける！と判断。すぐさま戻って、一二時過ぎ出発。

ラッセルは時に胸まで。何度もそれこそ文字どおり雪の中を泳いだ。三時一〇分、へとへとになって黒部五郎小屋に到着。図と磁石を頼りに黒部五郎小屋へと尾根を下り始めたが、風下のため雪が如何ともしがたく深い。一時間程雪と格闘した揚句、二七〇〇㍍付近の岩陰の斜面に幕営。

▒十二月十九日　雪、停滞

昨日の低気圧とともに大陸の高気圧の一部がちぎれ、日本付近は冬型なるも等圧線の間隔があき、天気予報によると山間部は雪がちらつくも、平野部は時々青空がのぞくとのこと。が、期待空しく一日中雪、視界悪し。

▒十二月二十日　ガス

昨日と何も様子は変わらない。ちょっぴりがっかり。一〇時頃気のせいか霧が少し晴れたようなので、石川、稲毛、山本の三人で偵察に出る。下りながらも猛烈なラッセルを一時間ほどしたところで、視界が一〇〇㍍ぐらいきくようになった。これならいける！と判断。すぐさま戻って、一二時過ぎ出発。

ラッセルは時に胸まで。何度もそれこそ文字どおり雪の中を泳いだ。三時一〇分、へとへとになって黒部五郎小屋に到着。

濡れた体をふるわせながら、粗末な夕食を摂っていた。下級生が泣き事を言い始めた。彼らの痛みはよくわかるが耐えてもらうしかない。ろうそくの炎が不気味にゆらめいていた。と、何やら外が明るいので出てみた。驚いた。世界が青く光っていた。満月に照らし出され、黒部五郎が、笠が、薬師がくっきりとその威容を浮かびあがらせ、神秘なまでに美しいその姿はまるで宇宙そのものだ。ふと、宇宙から青い地球を見た宇宙飛行士が、地球へ帰還してから神父になる人が多いという話を思い出した。壮麗で神々しくもある山々に、わけもなく湧き衝き動かされ、震えた心はただ叫えていた。

▒十二月二十一日　快晴

やっぱりど・快晴。心新たにいざ出発。小屋裏の急登のあと尾根上はアイゼン。知らず知らず足が軽い。一一時一五分、三蓮の頂きへ。忽然と現れた槍は、まっすぐに天に突きあげ誇らしげだ。僕らが挑むにふさわしい威厳をもって彼はそこにいた。いてもたってもいられず、一人が走り出したら皆わあーと走り出した。一三時半双六小屋に。沈みゆく陽に干物をして、身を清める。

▒十二月二十二日　曇のち雪

朝たか曇り、晴天は一日ともたなかった。北西風がごうごうと鳴っていたが、視界は悪くない。西鎌尾根は予想に反してあまりアイゼンがきかず、けっこうきつかった。天気予報だと午後から崩れるといってたが、九時頃から西から低く黒い雲がこちらに向かってくるのが見えた。ためにザイルは出さず。一一時突然ガスに包まれる。吹きあげる風は容赦なく僕らをたたきのめし、顔の右半分は痛さを通り越えて感覚がない。どうにか一二時四〇分、風が怒り狂っている千丈乗越に着いた。満足に休憩もとれず中崎尾根を下り、尾根上部に設営。

▒十二月二十三日　雪、停滞

天気予報はクリスマス寒波の来襲を告げていた。明日以降が不安だ。

▒十二月二十四日　快晴のち曇のち雪

クリスマス・イヴ。天は我らに味方しもたってもいられず、一人が走り出したら皆わあーと走り出した。一三時半双六小屋に。沈みゆく陽に干物をして、身を清める。

▒十二月二十二日　曇のち雪

朝たか曇り、晴天は一日ともたなかった。北西風がごうごうと鳴っていたが、視界は悪くない。西鎌尾根は予想に反してあまりアイゼンがきかず、けっこうきつかった。天気予報だと午後から崩れるといってたが、九時頃から西から低く黒い雲がこちらに向かってくるのが見えた。ためにザイルは出さず。一一時突然ガスに包まれる。吹きあげる風は容赦なく僕らをたたきのめし、顔の右半分は痛さを通り越えて感覚がない。どうにか一二時四〇分、風が怒り狂っている千丈乗越に着いた。満足に休憩もとれず中崎尾根を下り、尾根上部に設営。

▒十二月二十三日　雪、停滞

天気予報はクリスマス寒波の来襲を告げていた。明日以降が不安だ。

▒十二月二十四日　快晴のち曇のち雪

クリスマス・イヴ。天は我らに味方し

た。抜けるような青い空がどこまでもひろがっていた。きらめく雪が眩しい。一〇時に。一五分槍の肩着。穂先はかなり雪がついている。快調に登る。先に登りついたやつが上で、この世に二つとない至福といわんばかりにはしゃぎ狂っている。ああ俺ももうすぐあそこに行けるんだと思うと手が震える。半年ぶりの頂きはなつかしかった。万才三唱ののち讃山賦を唱する。青山学院がすぐ登ってきて、エール交換をした。今までの軌跡が一望のもとに足もとにひろがっており、ひときわ感慨深い。慎重に下り、一時半テントに、すぐさま撤収して槍平へ。

▒十二月二十五日　曇

昨晩はホワイトクリスマス。新穂までの踏み跡は全部埋まってしまった。それでもラクちんとたかをくくっていたら、大いにはまった。二時間どころか六時間もかかり青学の人達と共同でラッセルをしなかったらどうなっていたことやら。あと味をかみしめる間もなく疲れきって新穂高温泉に着いた。

（石川保典）

爺ガ岳東尾根より鹿島槍ガ岳

（一九八四年冬合宿）

石丸（リーダー、四）、谷口、鮎沢（二）、斎藤、外池、河野（一）

▒十二月十四日　新宿、夜発

▒十二月十五日　曇　ガスやや濃し

鹿島山荘発（六・五〇）―一七六七㍍地点（一〇・四五）―一八〇〇㍍地点（一一・一〇）

幕営（一一・一〇）

狩野氏宅（山荘）で計画書を提出。山の積雪具合を教わり、お茶と野沢菜をごちそうになる。一八〇〇㍍地点で、これより上に良い天場がなさそうだ、という判断から、時間は早いが幕営する。今年の雪の少なさには驚かされた。

▒十二月十六日　曇のち晴、夕方より雪

出発（六・四〇）―二一九八㍍付近（八・四五）―ジャンクションピーク・二四一一㍍（一一・三〇）―二四三〇㍍付近幕営（一一・四五）

二一九八㍍付近から少々尾根が細くなっており、雪が少なく危険は少ないとはいえ、万全を期してザイルを一本張る。これよりようやく雪量が増す。やや急な所を登ってジャンクションピークにつく。やはり上にでると風も強い。アイゼンは全く必要なし。少々行くと天気が悪くなり、あたりはガスってきた。ひとまず先を偵察したが適当な幕営地がないので二四三〇㍍付近に設営する。ブロック塀を作り風よけとする。夜から雪が降り、明日にはあたりの景色が雪山らしくなるのではと心が踊る。

▒十二月十七日

出発（八・二〇）―爺ガ岳山頂（一〇・二〇）―冷池小屋着幕営（一・二〇）

夜通し降った雪は五〇～一〇〇㌢積もり、あたりが雪山らしくなった。最初天気が良くないので様子を見てから出発する。爺ガ岳頂上へ向けてラッセルするうち、青空が広がり絶好の登頂日となった。一〇・二〇、爺ガ岳の頂上につく。稜線はさすがに風が強い。剣、立山、槍、鹿島と広がる三六〇度のパノラマは言葉では表現できないほどの美しさであった。この景観に見入っている中、NBSのヘリコプターが飛来し、頭上を旋回していった。素晴しい景観に部員の士気も上がり、冷池小屋へ向かう。稜線には雪庇が発達しており越中寄りの斜面を慎重に進む。アイゼン不要、ワカンで充分であった。冷乗越付近では、腰までのラッセルがあった。冷池小屋には、すでに一パーティーいた。天気の崩れる気配を感じた。

▒十二月十八日　雪、停滞

▒十二月十九日　雪、停滞

猛烈に雪が降り、何度も雪かきを行った。さすがにこのあたりは、雪がいったん降るとドカ雪になるということを体験できた。

▒十二月二十日　晴のち曇のち雪

出発（六・四五）―布引山（八・五〇）―鹿島槍ガ岳南峰（九・四五）―BC（一一・四五）―下山（一二・二〇）―赤岩の頭（一二・五五）―高千穂平手前幕営（一六・五〇）

この二日間で積った雪はテントをおおいかくすほどであった。アイゼンにワカンを着装して出発する。時おり胸までのラッセルに悩まされながら南峰に立つ。明日から天気が崩れそうなので、今日中に赤岩尾根の核心部を通過すべく、北峰登頂を断念してひき返す。テントを手早くたたみ赤岩尾根を下る。ザイルは計四回張った。思ったより傾斜はきつい。しかし、気温は低かったので、雪崩の危険はなさそうだった。高千穂平手前に幕営した後、雪が降りはじめる。

▒十二月二十一日　雪

出発（八・〇五）―西俣出合（一〇・三〇―養魚場（一二・四五）―タクシーで大町へ

雪の降る中を出発する。ラッセルはかなりきつかったが、途中、入山する女子パーティーと出会い、ラッセルから解放される。西俣出合からは林道が続く、養魚場からタクシーで一路、信濃大町へ。

今回は、ラッキーな山行だった。最初は雪が少なかったので心配したが、途中から雪がたくさん降り雪山らしくなって、なんとか冬山合宿という体裁を保てた。加えて、好天の中、爺ガ岳、鹿島槍に登れたし、大寒波群が襲来する前に下山できたことはよかった。

（石丸義和）

部　誌

部誌に残る山岳部論争

▶遭難後の第一歩　160

▶分散合宿か全体合宿か　161

▶山岳部沈滞如何論争　163

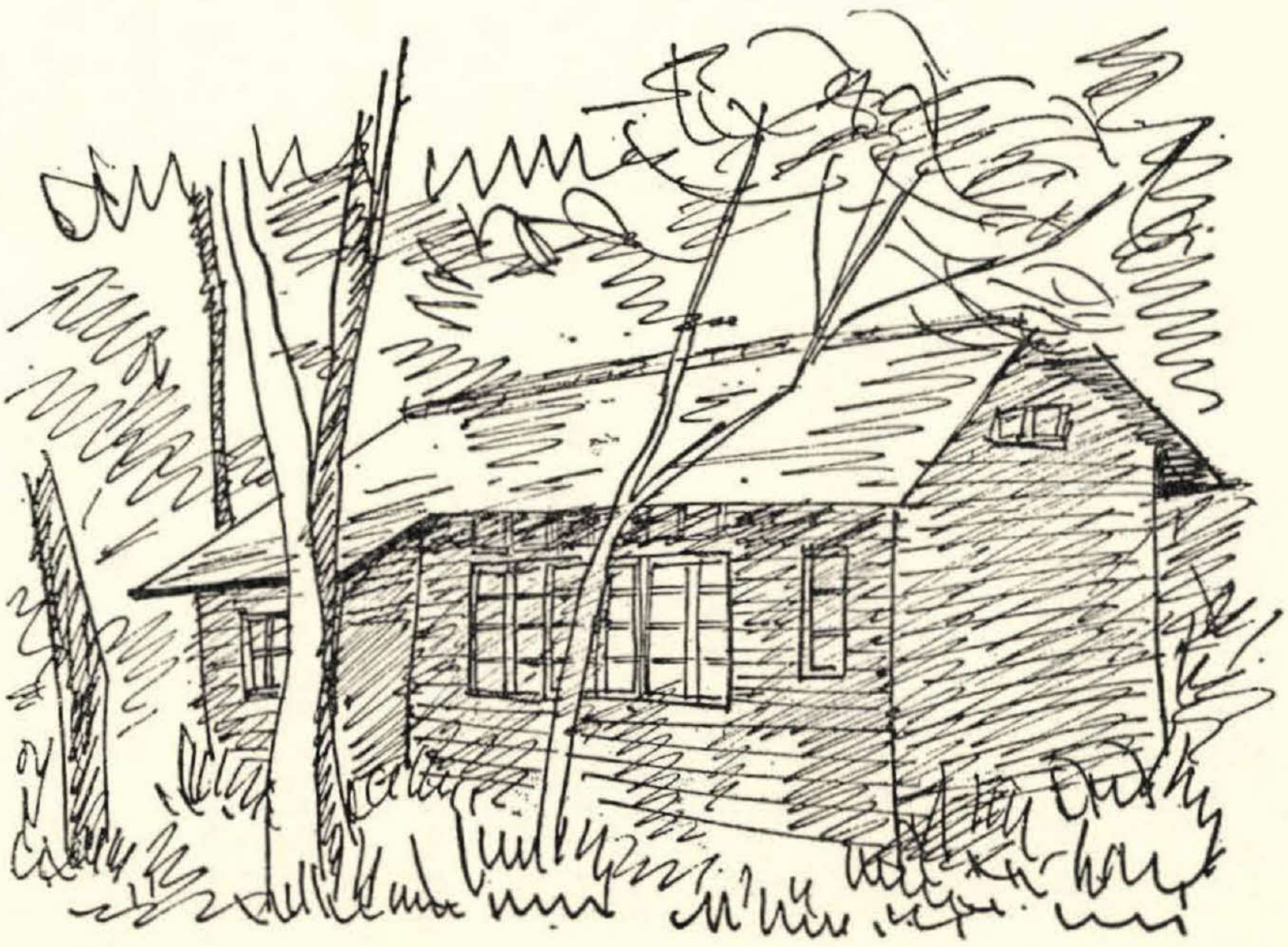
▶個人山行と合宿　164

▶登高意欲よ何処へ　168

▶山行方針をめぐって　171

▶山の原価計算　173

▶ホワイトセールへ向けて　173



▼遭難後の第一歩——遭難後

一九六四年——奥穂滑落後

十二月五日

三年間続いた事故、それによって畏縮しがちな態度の克服、これを我々の活動の基礎として来た。

活動は大きく分けて二つが考えられる。ひとつは畏縮しがちな我々の態度を克服する為に山行にある程度積極性をとり入れると同時に、基礎技術を重視し、山に対する謙虚な態度を身につけることとした。

又、いま一つの大きな目的として、部の体制の確立がある。遭難によって露呈された組織の弱点の補強である。この為、昨年来、部則の制定を検討、既に規約は出来上がり、細則部分を検討している。又、遭難対策基金は部員の積立てにより少しずつ増加しており、今夏の富士山清掃の報酬により大分その体裁を整えてきている。しかし、まだ、ちょっとした事故でも無くなるような額であり、今後とも充実に努力したい。

（小島）

一九七一年——甲斐駒遭難後

五月八日。

雪にたたられて早川尾根をラッセル。北岳は登れなかったが、おもしろかった。今後の山行が期待できる等の発言があった。

五月十日

結局、昨年と同じ「おもしろかった。つまらなかった。」というレベルの反省会ではなかったか？　リーダー層には「遭難をおこさぬ山登り」をめざしてその対策をとるということを本当にしていたかを考えてもらいたい。自分については、僕の実力はあんなものでしかないということがわかったから今の所、それをよく知ったうえで山行を続けていきたい。

（羽部）

五月二十五日

去年の遭難に関して今回の追悼集（注、「赤石沢」）が反省を打ちだせなかったのは、あの遭難の背後にある問題が早急に解決がつかないと判断したからであり、今後の部活動において、くりかえし議論を重ね続けることが不可欠です。われわれが、「上級生の意欲と下級生の指導のジレンマ」、と呼んだ個人と組織の問題、その解決としてあのような山行が生まれたのです。そこにあの陥穽が潜んでいたことは御承知の通りです。（中略）自分たちの意志の不純さを棚上げしておいての論議にはどうしても危険が待ち伏せるはずです。結局なすべきことは、どんな山行であれ、いかにそれをしたいのかという自己点検を深くなすことです。

（金子）

六月一日

僕等はどうして山岳部に入り、そしてかかわりつづけているのだろうか？

部員間でこの問いが納得されるまで、少なくとも知りあうまで、

話し合われる必要があるだろう。それをしないで展望〳〵とさわいでみてもソラゾラしいのではないか。Nも言うように、そういった話しあいから互いの共感が生まれるのだ。

七月一日

橋本の追悼集ができて、久しぶりに事件のあったことを思いだした。ここでおこってくる感情はあまりゲンのいいものではない。僕は事態を憂慮している。根の張っていない、これからの行方に基礎をすえる何ものかが欠けている。……だいたい、僕の処方せんは、もっと伝統指向になるべきだ、ということである。技術体系というのは、伝統の代替物ないしは速成栽培としての一面があるが、技術体系自身が、伝統と切りはなしえないものだし、それ自身で有効に機能しえないという点は絶対に銘記すべきだろう。

（藤巻）

七月二十一日

十九日のコーチャー会でまたまたOBにしごかれた。これは部の力が弱いことを端的に示すとともに、リーダー層の見通しがなっていないことにもよる。一年生は二年後の自分達のコトを思って今から鍛えてほしい。最初の夏合宿、しかも二週間以上にわたる合宿の思い出はそれがつらくても楽しいものになると思う。

（井草）

▼分散合宿か全体合宿か

一九六五年

三月

合宿を分散形態で行なおうということは、久しく議論され、ある程度までは統一的な見解となって来た。しかし今までは、危険を避けるためにそれをとろうという発想に基づいてはいなかった。すなわち、合宿を数パーティーに分けた場合、そのメンバーはある程度自分の好みを活かすように構成され、各パーティーは、個性の強く出た山行を行ない、バラエティーに富んだ部にしていこう。より小規模な団体において、リーダーシップ、メンバーシップの重要性を良く認識し、その上で部としての一つのより高度のまとまりを求めようというものだった。

我々の指向する「山岳部」は、登山学校的に、優秀なメンバーもそうでないメンバーも、それぞれの好みを無視して一緒くたに育てる機関ではない。かと言って、自分勝手に好きな山を登るメンバーに器具貸出しをするだけの機関でもないのだ。

去年の冬、北鎌尾根において絶好のコンディションの下に展開された冬合宿の成功(?)の裏に、計らずも我々の持つ別の面の弱さ（むしろより重要な面での弱さ）があからさまにされた。我々は果たして真摯な態度をもって山に向かっていただろうか、という疑問が表面化された。冬合宿の反省会で行なわれた諸々の反省

の中で、最も肝要な点はここにある。

かつて三年にわたって連続した事故は、その連続性ゆえに一つの事故の反省が的を得ていなかったと言えよう。その後今日まで、さしたる事故もなく一年半の期間が経過したが、その間常に、事故を起こさないだけの慎重さ、真面目さがあったとは言い難い。現実のきびしさを直視できず、幸運にも大事に至らなかったという場合が多分にあった。

特にこの三～四年、冬春の合宿が常に全員一諸の形で行なわれ、その結果、合宿の運営に直接タッチしない部員が、岳人として未成熟のままリーダーシップをとらざるを得ない学年にまで達してしまうという欠陥、合宿におけるマンネリズムが大きな問題となっていた。かかるマンネリズムを廃せず、無批判に伝統を引継ぐような態度は許されない。逆に、早急なレベルアップを目ざした安易な分散形態をとることもまた危険である。

安全の確保に基礎を置く分散形態をとることによって、山行が多様化するのは必然である。しかしそれはバラバラのものであってはならず、より高度の統一性の下での多様化でなければならない。

これらのことは、あくまでも安全性を徹底的に追求するという反省に立った志向に基づいてとられる形態であり、事故を直接に体験した我々の年代がとらねば、またまたマンネリズムに陥り、事故を繰り返す危険性が残存することになる。

かくして我々は、山岳部を根本的に改革し、それは安易に変更されるべき性格のものであってはならないと考える。

以上のような考えの下に、その第一段階、出発点として、我々は、春合宿計画を実行していく。

（高崎）

一九六六年

三月

分散形態で合宿を行うことに関しては様々な議論を呼び長所短所が問われてきた。或る程度メンバーの好みを入れることが出来、個性を反映させた山行を行うことが出来るという様な山行の中で、各自がその立場をより一層認識することによって積極的により高度な山行を目指すことが出来る、という点で分散合宿は非常に意義のある合宿形態であると考えられる。

昨年度は春合宿以来、早急なレベルアップを目指した安易な分散形態はとらぬという前提の下に、安全の確保に基礎をおく分散合宿形態がとられてきた。この様な山行における安易な妥協こそは、スポーツアルピニズムを目指すとではないだろうか？

（岡田）

一九六七年

十二月

かつて合宿形態について分散か全体かが議論された事があった。しかし、対象となる山とメンバーによって自ずとその形態も決定される。少ない上級生の力を最大限に発揮させると共に、下・中堅部員もその個性に応じて存分動く事が出来るように今合宿は工夫した積りである。

合宿の成否を左右するものは、確実な技術と強い体力という裏づけを持った各人の登攀意欲と、それらを一つの目的に有機的に統一させるチームワークである。また、我々の年代が遭難というものを直接的に体験した事がない事を銘記し、形だけの「安全の確保」にならぬよう、より一層山に対して謙虚で真摯な態度で取り組んできたいものである。

（中村）

▼山岳部沈滞如何論争

一九六五年

五月六日

現役の諸君が大いに山へ出発すること。結構。諸君がどんな山登りをするかそれに対して積極的な希望は持たない（一般的なことにする）。どんな山行をするとしかないから積極的ではないことにする）。どんな山行をするかを希望するのは俺自身に対して持てばよいのである。これはまだ俺の内心は山行を持ちたい強い欲望があるからだ。それ故俺個人の希望を現役の諸君にしいる程、又諸君に転化して自分の出来ない希望を実現させようとする程、俺も老いぼれていないだろう。

六月二十日

確かに、体で感じることだが部は沈滞している。遭難のおそれが多分にある。沈滞＝怠慢＝遭難というのは結びつける方がおかしいのか？

蛭川さんの頃の中橋さんの遭難後の反省はどこへ行ったのか？トレーニングは？

部員が獅子であるかどうかは知らないが「眠れる獅子よ立て！」と叫びたい。

三年がリーダーシップを取る今夏前半の合宿に十分の準備をしようじゃないか。

六月三十日

イヨイヨ六月も終わりだ。石田の言うように、変態的就職戦線に完全に振り回された月だった。山行はと言えば、四年は屏風を延期せざるを得ず、三年は奥又白の合宿の成果が三峰リッヂの み、前期は横尾の定着に終わった様だし、沈滞と言えば言えないこともなかろう。しかし、そんな表面的な事で沈滞云々を言っているのではないだろうし、やはりいつも言われている様に「根は深い所にある」のかもしれない。それを体で感じているとはどう言うことであろうか。

しかし、今になって沈滞→怠慢を云々されるとは、我々にとっ

（SHORTY）

て心外なことだ。我々は確かに暴走↓事故は恐れており、それに対する処置を講じようとしてきた。それが個人山行の奨励であり合宿の分散化であった。すなわち登山は、究極的には個人の行為に還元されるものであり、従って個人の意識の高揚を求めたわけである。このような経過が沈滞と感じられるならば、我々はもっと深く反省せねばならない。

七月一日

「個人意識の高揚を求める」という場合には、求める方が第三者的な立場で「ただ求める」という態度ではやはり非難を受けるのは当然であろう。いやしくも「個人意識の高揚」というような高尚なものを求めるかぎりは、求める方も「求めるに足る十分な態度」を示すことが要求されるだろう。

（高崎）

高崎氏はリーダーとして「求めるに足る十分な態度」を示して来たということは同じ四年の仲間として良く感じられるが、自分はリーダー層の一員としてどうであったろうかと思う時、反省の念がムラムラと湧いて来るのである。私は従来育ちの良いせいか、問題意識も低く、精神構造も単純な方で、二つの事を同時に考えることが出来ないたちなのです。そのためゼミのレポーターだ就職だなどと考えると、つい山や部活動に対する配慮が欠けてしまいがちでした。こうした態度は三年生いや誰が見ても沈滞であるということは間違いありません。

こういった意味で岡田氏の指摘は強力なる強心剤でもあり酔いざましの水でもあると思った次第です。

（佐藤久）

▼個人山行と合宿——一九六七年——三年部員の滝谷行をめぐって

十月六日

個人山行についてはいつもなにかスッキリしないものがあるようだ。そのようなものが部員の中にどのように蓄積されて今後どのような形であらわれてくるか興味深いが、ともかく現在の俺達の登り方からは、絶対に松高ルートは出てこない。自分の踏みしめている大地にしっかりと立ち、一歩一歩、高さをかちとっていくのが地道な山登りだ。それがヤロー会卒業のあと三年間続いた遭難を高価な代償をして得た一橋山岳部の山登りではないかと思う。

十月七日

松高ルート行がさっぱりわからんなどという人は、他人をリードしようなどと考えないことだ。そんなことだから、こうも心配していなければならないことになる。責任ある人間が組織のメンバーの考えていることもわからないのでは、責任のとりようがないであろう。此度の山行計画書は、九月中に書き、チーフリーダーに検討して欲しい旨、口頭でのべたはずである。出発当日になって、こんなことでは困ると云われるのはこちらの計画の不備があるとしても随分困ることである。部員の可能性を伸ばし拡げていこうと考える人のやることではない。山に行かなければ山で事

故が起こることもないのは確実である。これほど確かな事故防止策もまたとないであろう。まさか指導者の責任はそんなところにはあるまい。」

十月十二日　（俵）

さて俵君。君は勿論自分の力を可成り信じているでしょうね。それならばスネていないで、自分の力をリーダー層に示したらいいでしょう。一緒にゲレンデでも良いから一日楽しみに行き、納得されねばいいでしょう。それでどうしても了解点に達しないなら、サヨウナラですね。もし自らの力の到らざるを悟ったら、根気良く山歴を積み重ねて下さい（自分が判断されるのは山歴からだよ）。

所で中村君達へ。個人山行届が出た時、だめだめだでは統制と云われても仕方がない。駄目ならば、話し合って修正を加えて、少しでも創意を生かしてやる様にしなければならない。個人山行の創意をどれだけ生かして、ましてクライマーを育てるかは君達の判断にかかっている訳です。まあガンバッテ下さい。

（原）

一九七二年

六月二日

ついに一年生が「単独行をやりたいと言いだした。たいした実力もないのに、一年生に対してあれこれ言わなくてはならない立場はいかんともしがたい。まだ一年生の体力・実力などほとんど知らず、自分自身のことさえ責任が持てない現状なのに、何やかやと言う資格があるのか。せっかくの山への憧れをつみとってしまっては何にもならない。本人の山に対する個性の伸長と、遭難の防止とのジレンマはあらゆる山岳団体が持つ宿命なのかも知れない。

十月四日　（前神）

……単に技術的訓練の不足、経験の不足という理由をもって合宿形態を強いるならば、いつか山岳部は個人が属するものとして山岳部の根底から崩壊するだろう。集団は個人をささえる個人、すなわち集団は個人が属するものとしてでなく、形成するものとしてあるのだろう。本来、山とは「個人」というものを通じてのみ生きてくるのではないだろうか。だとしたら、山岳部においては個人の意志は最大限尊重されねばならない。……現在山岳部には、「一年生行きたがらない。それでは技術・体力がつかないから、『合宿』にして連れてゆこう」というような傾向があるが、以上のような理由からこれに反対する。

十月六日　（藤田）

藤田氏の文について、意見を述べておく。

どんな動機からにせよ、山岳部という集団に属した以上、その集団が個々人から成っているとはいえ少なからず個々の意志を超越したところで回転しだすのは当然のことであって、世の中すべてがそうではないか。問題はその中にあって個と集団とをいかに調節し、またいかに自分なりのものを作っていくかである。……

もし藤田氏が真剣に本当にそう考えているのなら、それを態度に示せばよい。それなのに何ら態度を示さず、山岳部内で「破壊的意見」を述べるとはどういうわけか。（元井）

十月十日

個人個人にはそれぞれ山に対する取組み方や考え方があるのだろうが、一番困るのは机上の思考にふけるあまり山に行かなくなることである。四季おりおりの山へ行っていないと行きたいときに行きたい山に行く実力が養われない。登りはじめて一年にもならない時期はなおさらである。おもしろくない、行く気のおこらない山行計画を組むのは上級生の責任でもあるが、かといって一年生の思うままにまかせておいてはますますおさまりがつかなくなる。山と個人、山と山岳部と個人といった問題は、縦走力をつけてゆくなかで考えてもらいたい。（上田）

十月十二日

……二十歳前後の若者がたむろしていながら、覇気というものがまったく感じられないのはどうしたわけか（反省も含めて）。思うように、部の中身なるもの（非具体的だが）がなんら存在しないのに、やたら山にさえ登っていたらその中身なるものがどこから出てくると盲信しているからだろうか。

部員各人は山に行っているのだが、それが部の活発さに結びつかないのは、何かだいじなものが欠けているからだ。まとまりが必要だ。今の部は正直いって「寄り合い」に他ならない。同じ部室にて、何とかしなくてはと感じる。（前神）

十一月二十八日

「組織と個人」の問題はまだ何か判然としない。より現実的に合宿への参加について書いてみる。合宿への参加は最終的に（訓練合宿を除いて）個人の意志にまかされるが、参加しない場合には、やはり参加者からなぜ参加しないのかの質問が出るのは当然だろう。「いきません」「ああ、そう」ではすまない。われわれはそれほどクールでドライになれるだろうか。また合宿は純粋な登山意欲を第一条件とし、それなしには成立しえないけれども、他にかなりの要素を認めざるをえないのだ。（前神）

一九七三年

六月六日

「行きたいから行くですまされるであろうか、それでいいような気もするし、やはり何か慎重さが欠如しているような気もする。オレはあいまいさが嫌いだ。部として単独行というものを一度じっくり考え話し合ってみる必要があるだろう。」（前神）

一九七四年

一月十一日

「自由意志尊重の路線はこの一年堅持したとしても年に一度は全員で頑張る『合宿』を持ちたい。マイナス要因と各メンバーが感じるのではない、プラス要因と心から思う真の『合宿』を。Ⓜ」（合宿はできうる限り減らすべきだという方針が打ち出されたあ

との文章）

五月六日

「今後の僕の山登りを変えてゆかねば、計画を主体的につくりあげなければと考えると、そして単独行というものが浮かぶ。しかしもちろん計画に主体的にとりくんだといってもさまざまな点が克服できるとは思わない。ただそうすることでさまざまな点がしだいに僕の眼前に明らかに浮かびあがってきはしないか？」

（若林）

五月十八日

「最近のクラブの状態を見ていると個人の志向性尊重ということがメンバーの間に遠心性的傾向を生じさせている。クラブを組織している根本理念は『山が好きで登りたい』というただ個人的視点からの理念だけでは不足である。なぜならそのような前提ではクラブを組織する必然性がないからである。クラブには組織としての視点からの理念が必要である。単に『個人の志向性』と言ってすんでいる時期は終った。部員数も又一段とふえた現在特にその様に感じられる。

（元井）

五月二十一日

「部の中で遠心的なものを感じているのは確かだろう。しかし合宿制の単純な復活はあまりに安易すぎる。それに替わるものを明確にここに出すことはできないのだが、ただ形態だけを手直しても問題は解決しないように思う。部にいて遠心的な気持を持つのはたまらないが、それに対してどんな方法が考えられるだろうか。

（前神）

一九七五年

三月十一日

（合宿に不参加で、個人山行で滝谷を目指す一年生の弁）

「滝谷へはどうしても行きたい。高田直樹が良いことを言っています。『クライマーは輝きを持った生を求めて攀る。そして死が最も明確に知覚される時、彼の生も最も鮮烈に認識される』と。山では、山には『死』があるということ、僕にとっての山は、そのモロモロの楽しさ、美しさと共に死もあった。しかし、それを敢えて否定しなくてもよいと思うようになってきた。（中略）すべては滝谷の後……。追伸、絶体に死にません。」（近藤）

三月三十日

（現役の春合宿と平行して、北海道の知床及び十勝連峰へ行ってきた四年生前神氏の発言）

「（前略）春合宿は無事下山できて良かったですね。それはそれとしても、やはり、もっともっと、元気溌剌とした前進を部に期待するのみです。近藤の四尾根トレースは、やはりやったという感じが。あまり皮相的なとらえ方はしまい。ただ卒直によくやったと言ってやってもいいように思う。」

一九七八年

六月四日

わりと自由に山に行け、下界での山に関する雑務にも束縛されない一、二年生の時に、自らのかけるものを山以外に見い出すならばそれでよし。が、それで、山に登ることが楽しく、クラブ活動を続ける気があるならば、それから国立二年間は、なにがなんでも、やるしかないのではないか。……（中略）……。一、二年の時に、自由に山に登れて、蓄えた活力を、今度は、クラブ全体の為に大きく使っていくべきではないか。「無私」とか「滅私奉行」とかいった大時代めいたものや、個人の自由の中には、責任というわくがあるはずである。

我々は、「同好会」でもなければ「同人」でもない。あくまでも、「山岳部」であるということを自覚しなければならぬ。

（神野）

六月六日

（前略）。クラブが、個々の人から成りたつものを、遂にクラブが、個々人を規定するとしたら、これは循環論証にして撞着は避けがたい。

（岡部寛史）

六月八日

大学のクラブというのは人間としての個々人の関係を土台にしていると思う。高校時代のクラブ仲間が、大学卒業後、社会の中で、つづいて関係を持っている様な例はあまり知らない。それ故、大学では、人間としての個々人の自覚が要求される。（中略）これは、むしろ、おたがいの尊重（これは絶対的に個人に帰結するはずの円環的な人格だ）そのものを意味している。僕のいう「自覚」は、与えも受けもしない人間の関係なんだ。

（岡部寛史）

十月二十日

（前略）「システム化された登山」に対する彼らのＰＲＯＴＥＳＴには何となく意気に感ずるところ有り。パイオニアワークを志向しない山岳部なんて……とひと昔前に真剣に考えた時期があったことを思い出しつつ、寒くなってきたので帰る。

（佐藤周一）

▼登行意欲よ何処へ

一九七〇年

五月十五日

四月合宿を終えてすぐに五月合宿の計画をあげ、考える余裕をもってみた。その結果、北岳バットレスに変わった。尾白川、黄蓮谷という目標は何か不自由な気分をもよおさせたのである。

満足のゆく山行を実践する為に、その手法を検討することを始めて以来、様々な考えが浮かび、その肉付けとして山行計画がたてられた。しかし、それは実践のたびに姿を変えた。薄弱だと言われるかもしれぬ。しかし、僕等はある程度のフィードバック機構をもてたのではないか。

登山の目的を「歓喜」におき、その源泉を、原始、単純、創造、美とし、その達成の手段を考え、実践する。揚句、フィードバッ

クをしてみる。目的はこの手段で達成されたのかと。それが活発になればなる程、一年間の山行計画等という固定的なものは失われ、外見的には薄弱になるを得ない。ところが、その事と反比例して、僕等の感性は登山をめぐって躍動するのだ。

結果、バットレス山行というものが自ずと生まれてきた。それがかつての登山計画からは外れているとしても、僕等の感性にとっては自然であることを重視しよう。

だからといって方針が不要なわけではない。それこそは原点であって、それの無い限り、支離滅裂はまぬがれない。甲斐駒集中という計画は原点としてある。但し、かつてはこの一年、これに執着しようとしたがそれは不要だ、執着出来るものならする。出来ぬものならしない。僕等の感性の動きに、どれだけ従順であるかによってそれは決まるのだ。計画が決めるのではない。

（金子）

六月六日

五月山行（北岳バットレス）反省会　一、四尾根、中央稜等のトレースをした合宿。岩登りのことから部の理念、目標がないことが〝斜陽〟の因ではないかとの声があった。新鮮な山域としての北海道等の話が出た。

六月八日

第一に気になるのは、心情的な沈滞感をただそのままに吐露するという驚くべき怠惰である。「クラブ自体が落ち目」といった発想はいったい何事なのか。山岳部に関してそういう発想はまったく不可能なはずである。これは求の道すじをあらかじめ断ってしまうようになるのは、目標がないということか外部にあって従えるものだというウルトラ級に面倒なものを他人のくれる安手な目標・理念に従って実行できるのかどうか疑問だ。

（金子）

一九七六年

五月七日

八日間も東京を留守にしている間に、国立はすっかり緑に覆われてしまった。もう初夏の雰囲気がほのかに漂っている。北鎌尾根の霙の冷たさを思うと、正に別世界だ。大学通りの並木の下に立っているだけで嬉しくなってしまう。……（略）……他のパーティーは所期の計画を完遂せずに終わってしまった。特に、岳沢隊はせめてコブ尾根位は登って欲しかった。浅田は、岳沢定着の意義の理解が不足だったと書いているが、事は意欲に関わる問題ではなかろうか。（略）そもそも連休の山行計画を立てる段階で、浅田にもっと意欲的に計画を出して欲しかった。（松田）

では私に岳沢で残ってやれと言っているのか。コブ尾根に登るなら登らないという問題ではないのではなかろうか。私のこれまでの部に対する関わりについての批判は甘受するけれども。（浅田）

五月十日

四月二十九日から三日連続で雨が降り、御承知のように岳沢の

本流、雪の上に水が流れたような状況で「意欲」だけで「コブ尾根」位にでかけられないのは明らかであろう。松田は以下のように書くべきだ。「我慢できないからこそ、奥明神沢を移動日に登って来た。それだけじゃ、ウップンが晴れないだろうが、他日を期してエネルギーにしようと。

確かに、五月の連休の山行計画をみても、「意欲」というか、そういったものが不足しているように思えるし、今後、短期的にみれば冬山まで、長期的には新一年が四年になる頃までを考えるだろう。

時、それが大きな問題となるだろう。

しかし、そういったことを部員に喚起しようとしたことは認めるが、今回の岳沢の行動（表面的な）と、「意欲」を結びつけるのは、いささか牽強付会の嫌いがあると思うが、どうだろうか。

（活朗）

僕が具体的に念頭に浮かべていたのは、五月二日の行動に対してである。雨の日に無理に動くべきだという意味で書いたのではない。

（松田）

単なる不満の羅列によって部は発展しないというのは一つのお題目にすぎない。

いろいろな人間の欲求・不満がうずまいている。本来三年目の僕等が為すべき仕事には違いない。しかし僕は逃亡を決めこんだ。心理的に部は今の僕にとって桎梏だ。大勢の新人をむかえて部はかわりうる状況にはある。少なくとも条件はそろった。ここで莫大なエネルギーを費やせば、組織は変わるかもしれない。そして変えるのは一人一人だ。その一人一人の中から僕は逃げ出すことにしたのだ。組織が苦痛だ。組織が苦痛だということは、その内部が苦痛だということだ。居心地をよくすることは、それ自体として可能だ。……（略）……。

（永戸）

永戸さんによって提起された問題、もちろん個人的なものでなく、部全体の問題として、水曜日にじっくりと、話し合ったらどうでしょう。僕も書こうと思えば、何かしら書けるのですが、やっぱり話の方が面白いし、筋も通るでしょうし。僕も含めて、山岳部の中には文章の旨い人がいないようですし。……。とにかく、混乱状況のまま、コンパにぶつかったら、大荒れとなることは、目に見えておりますので……。

（周一）

周一に山岳部には文章のうまい人がいないと書かれてしまって、その後にまただらだらと、下手な文章を書くのも気が進まないが、（略）浅田と周一であれば登ハンは可能であったと思うのである。五月二日を念頭に入れてであるが…。とにかく晴天ならば、一番おいしい所をつまみ食いしてもよかったのだ。

（松田）

私としては可能であったろうが、危険（多くのデブリ、くさった雪、周一の技術に対する私の判断）が高すぎると考えたのである。「一番おいしい所……」といった考え方には賛成し難い。この文章以後、私は浅田と名のることにしました。

（浅田）

五月十一日

永戸の「逃走」論について。〝逃げる〟といって本当に逃げるところが、イヤラシイところだ。だが、彼も複雑な人間ではある

が、バカではないのでまた帰ってくるでしょう。重々束縛、桎梏の山岳部組織であろうとも、彼も組織の一翼を担っていたのだから。

要は、山岳部という組織を過度に意識することなく、好きな山登りを一緒に目指していく人々の集まりだと考え、山岳部組織を合理的なものにしよう。「山」以外のやりたいことに、もっと余裕をもって臨めるようになればいいのではないか。もっともその人の能力にもよるが。

（近藤）

九月二十八日

……（略）……〝やめます〟、〝はい、そうですか〟、そんな簡単な応答ですむものかねえ。一体、今までなんのために、一緒に飯くらい、酒のんで、バカ騒ぎしてきたんや。出て行く者は寂しかろう。けど残された者も寂しいわ。ほいでもってまた寂しくなって、また出て行くわ。

（神野）

▼山行方針をめぐって

一九七五年

四月十日

春合宿の反省と、年間の活動方針、連休山行等について部会が開かれた。

春合宿の反省では、冬山行が全体的に質、量共不足であり、あっさりと終ってしまった感があるとの意見が多勢を占めた。そして、直前になり、不参加者が三人も現われた点、半数の部員のトレーニングの不足等が、問題点として指摘された。

年間の活動方針では、冬、後立山の核心部縦走を本年度の目標とし、それを実現するために、連休山行（白馬～爺までの縦走）、雪上訓練（谷川岳）、夏合宿（剣岳定着及び縦走）、冬山偵察（冬合宿でのコース通り）、氷雪訓練（御岳または富士山）の以上の山行を今まで以上に、冬山を目標として、内容を充実させていくことに、ほぼ部員の賛成をみた。リーダー層の考えとしては、冬の対象山域を現在の実力よりやや困難な目標を既に、この時点で明確にしておくことにより、個々の部の山行の意義を鮮明にし、部員の実力の向上と部全体の結束を図ることが目的であった。

従って、連休山行は、新人歓迎山行と合同して、白馬から爺までのトレースと決定された。しかしながら一部の部員より、年間の活動を今の段階から絞るのは、不満であるとの意見、また、現在の部の実力からして、冬の五竜～鹿島槍はかなり無理で、そこまでは同意できないとの意見もあった。

四月十二日

「（前略）今の山岳部について一言。部のビジョンと個人のビジョンの食い違いがあまりに大きい。部の方針が、現在のリーダークラスの人間によって大きく左右されざるを得ないのは仕方ない。しかしながら、それが何の事前議論もなく我々の知らぬ間にその方向づけがなされているということは問題である。勿論全員

の一致したビジョンが打ち出されるなどということを僕は望んでいるのではないが、自分の行きたくもない処へ行けなどと突然言われて、それが決まったらどうにも不満が残るというほどの利己心は人間誰でも持っているだろう。」（坂牧）

八月一日

（夏合宿定着を終えての五年生前神氏の感想）

「定着は、剣が岩登りとしては初めての入山だっただけに面白くはあったが、もう一つ味に欠けたように思っている。一口で言ってしまえば、一番安い『剣岳定着定食』を食べたような感じなのである。真砂沢で、ごく当り前の岩をごく当り前に登ってただそれだけという感が強い。（中略）どうも部活動そのものがマンネリ化して、部の緊張性が弛緩しているように感じられる。旧態依然たることをしていては事故もないだろうが、それ以上のなにものも出てこない。（後略）」

九月十七日

「登るルートにノルマがあり、面白くなかった。行く前に、徹底的に検討する必要があった」と言う意見に代表されるように、岩登りのコースを、日を換え、メンバーを換えて一定量をこなすというやり方に対して、不満があり、又、全体的に積極性がなく惰性的な面があったことが厳しく指摘された。

九月十九日

冬合宿の展望について、各自の率直な意見が部会で交わされた。リーダー層より、冬合宿は、年度当初の目標通り、爺ガ岳南尾根より五竜岳までの縦走としたい旨提案があった。これに対し三年の若林は「冬は行かないつもりである。冬全員でやるならば、頑張らなければ行けないようないい加減な気持ちでは行けない所をやるべきだと思う。今冬の計画に関しては、いささか荷が勝ちすぎると思う。」と発言、また二年の近藤は「山域的には鹿島までならやれるのではないか。縦走は恐ろしい。」と。他の二、三年は、大方賛成であったがもう少し具体的に、山域について検討することが必要であるとの意見が多く、それをこの秋の時期に、詰めることとなった。

九月二十日

（来年度のリーダーを三年四人の中で誰がやるか、意見がまとまらない状況に対してのリーダーの意見）

「（前略）遭難以前、山岳部のリーダーは学年が進むにつれ、自分達の仲間から、自然に生まれていたと、よくOBは言う。もし、それが掛値なしに本当ならば、以前の一橋山岳部の体質には今日ないものがあったに違いない。勿論、時代の移り変わりによる個々人への様々な影響は否めないが、少なくともかつての部にはより求心的なものがあったのであろう。（中略）今の山岳部は、部員の参加の仕方がまさに『ノルマ主義的』である。週一度の部会に参加しさえすれば山岳部員であり続けることは可能である。それ以外は、あらゆる点で自由な時間であり、別な生活をそこに持つことができるのだ。だが、我々は週たった一度の接触によって、どれだけのものを獲得してきただろうか。（中略）山へ

登る時間が惜しいならもっと勉強しよう。クラブに参加していることの充実感がないのなら、もっと積極的に参加しよう。（後略）」

九月二十七日

次期リーダー候補であった三年の若林、退部。

「山に対する情熱が以前に比べ薄らいだ。自分は他にやりたいことがあり、また、上級生である以上、いい加減なクラブとの関わり方はできない。」

▼山の原価計算

一九七七年

五月八日

「金がかかりすぎ」かどうかは、自己の想像力にも大きく負っているのである。山は我々が投入した意志だけのものは確実に返してくれると、「信じて」いるのだが。

（佐藤活）

五月九日

…（略）…「金がなくとも登れる」という論理が「金さえあれば登れる＝金がなければ登れない」という論理によって侵食されてきたのは歴史的事実ではないのか。否、前者の論理は観念上の存在にすぎないと考えるべきか。

（周一）

五月十日

…（略）…周一は僕の言ったことをとり違えている。「想像＝空想」でなくて、イマジネーションという意味だ。つまり、貧しい想像（＝手を抜いた山登り）からは貧しい山行しか生まれない、ということだ。

さらに山登りが、他の社会的行為と全く同位にあるということは当然である。こんなことは山登りのイロハのイであって、そんなことくらい登山者は先刻承知なのではあるまいか。このことと「山が好き」ということは何ら矛盾しないと思うが。

周一の言ったことは、多分に観念遊戯的。おそらく登山の「資本主義化」について述べていると受けとるが、一体君の山登りはどこにあるのかね（皮肉でなく）。

（佐藤活）

五月十一日

山登り＝社会的行為という認識論にケチをつけるわけではありませんが、僕の言いたいのは各自の解釈論を展開せよという意味です。社会現象としての山登りは神野の言うように、暴走族と全く同じであります。

（周一）

▼ホワイトセールへ向けて

一九八〇年

六月十五日

なんか、人にそそのかされた？ こともあるけど、このごろ切実に海外の山へ行きたくなった。田中は今の時点で本当のところどう思っているのだろう。親とか人に借金をしまくって外へ行く、

というのはどんなものだろうか、事務的に?可能だとしても観念的に……こうやって考えるうちにズルズルと時が過ぎてTIME・LIMITを越えてしまう後悔しないような気もするのだろうけど、そうなってもあまりきたいと思おうとしているのだけど。後悔先に立たずとはいうが、実は行さらに時は流れゆくのだった。国内での様々な繁雑な手続きがめんどうで誰かがホイッとレールに乗せてくれればいいなとは、心から行きたいと思うような人は、やっぱり思わないのだろうか。

（萬濃）

一九八一年

五月十六日

昨晩、日航会議室859にてホワイトセール隊のOB諮問会がありました。中島、T中、倉知・金子・藤本・加藤・小林・松田・中西の諸氏が出席され、七時頃から十時過ぎまで、主に計画の説明、スライド上映、質問などを行いました。私はOB諸氏から好感を得られたと判断しています。その後、中西・小林両氏と新宿ザイルで二時近くまで飲みまして、中村・万濃は我家へ向い、今朝七時半に起きました。本日は自主トレで、トラック六周、ケンスイ三〇回、サーキット二回を行いました。皆も頑張って下さい。それから、これは重要ですが、部員をツンボさじきに置いてはいけないが、こういう忙しいときにとかく心のスキが出来がちだもっと重要なことは、今後事故を起したら我々の計画は水泡に帰すので、ぜひ気をつけて下さい。普段でも事故は絶対に起してはと思うので、念のため。

（土方）

山小屋

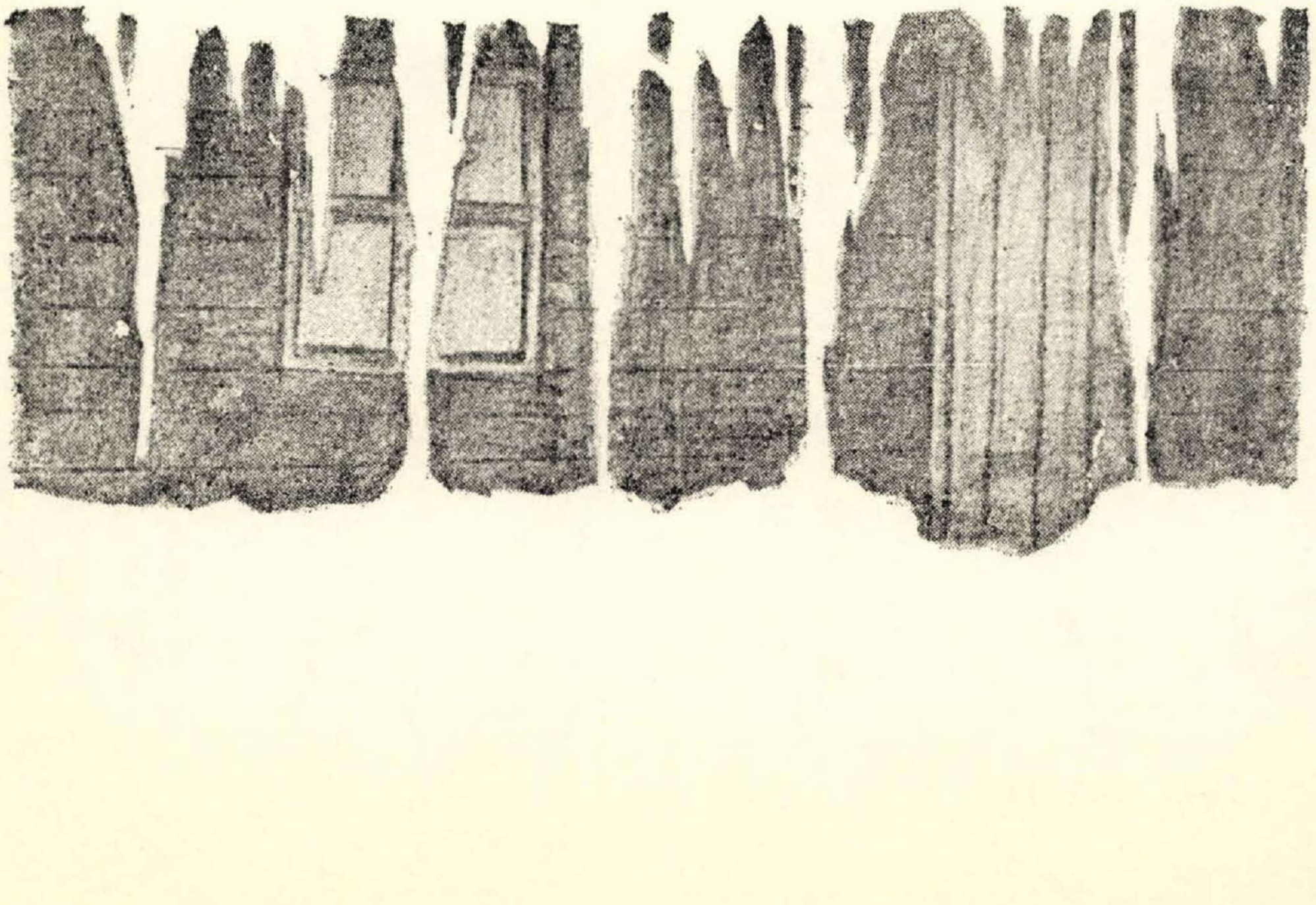
■ 山小屋往来　176

部誌上に残された山岳部の日常生活

■ 最新合宿装備一覧　183

■ 座談会『現在只今の一橋山岳部』　186

時代を担う現役部員が現在只今を赤裸々に訴える



部誌上に残された
山岳部の日常生活

一九六五

四月十七日　新入部員歓迎コンパ

国立部室にて。「ただ今一時半。佐藤君がうんうんとうなり始めた。昨年の僕と同じだ。大いに同情するもどうしようもないのでそのまま眠ってもらう。去年、一晩中うなっていた僕が、一年たって今度は一年生のめんどうを見るようになったとは。感無量であります。」

（中村）

石先輩新婚旅行より御帰還

五月　緑の美しいシーズンになった。昨夜、旅行（注、新婚旅行だぞ！）より御帰還。本日はさっそく登校。甘いムードをふり払い学問の道に精進する精神よ、とくとごらんあれ。

新婚第一日にして、悪い奴竹中と会う。同じ汽車とは、まさについてないの一言につきる。やむをえず無理して昼飯をおごる。ウチのカーチャンのトンカツまで彼はたいらげた。

（石）

二つの出発

七月二十日　今日は雨が降ってハダ寒い天気だが、我が一橋大学山岳部からは二つのパーティーが山岳部いや大日本登山界全体の栄誉をになって勇躍山へ向う予定である。片や羽田から（編者注、カラコルム遠征先遣隊）片や上野から（注、日高パーティー）青春の夢と希望に充ち充ちて出発することだろう。一橋パイオニアスピリットの名にかけても立派な山行、山旅を遂げられんことを祈ります。

（Q）

一九六六

新入生歓迎コンパ

四月十六日　可さん、長沢、小島、池知、吉田ＯＢ多数

「国立は本当に遠いが、部屋に一歩足を踏み入れた途端、丸十年若返ったような気がする。新しい仲間を迎えることは、我々老トルにも本当に嬉しく、我部の行末にも、頼もしさと希望を感じさせてくれる。一人一人見ると本当にバカヤローばかりの集まりだが、一つの部として四十年の歴史の流れを見る時、これで一本の芯が通って、棺桶に足を入れる時まで抜け切れずにこの仲間の中に生きることが、まんざら無意味で無いような気になる。

（吉田ＯＢ）

可さん来室

十月二十日　寝ながら煙草をプカプカやっていたら、〃今日は〃という声がする。何気なく出てみるとそこに粋な着流しの可さんが立っておられた。開口一番〃きれいになったねえ部室が〃と例

のいつもの調子で話され、秋山の件を話すと〝気を付けて行ってこいよ〟と言われた。ついでに月見の宴の事に話がはずみ、また例のようにヒョウヒョウと部室を出ていかれ、こんどは中村と外で話をしている。〝あんたは山岳部か〟と。また僕には静寂と冥想の時がめぐり来、一人で煙草をふかす。

（金成）

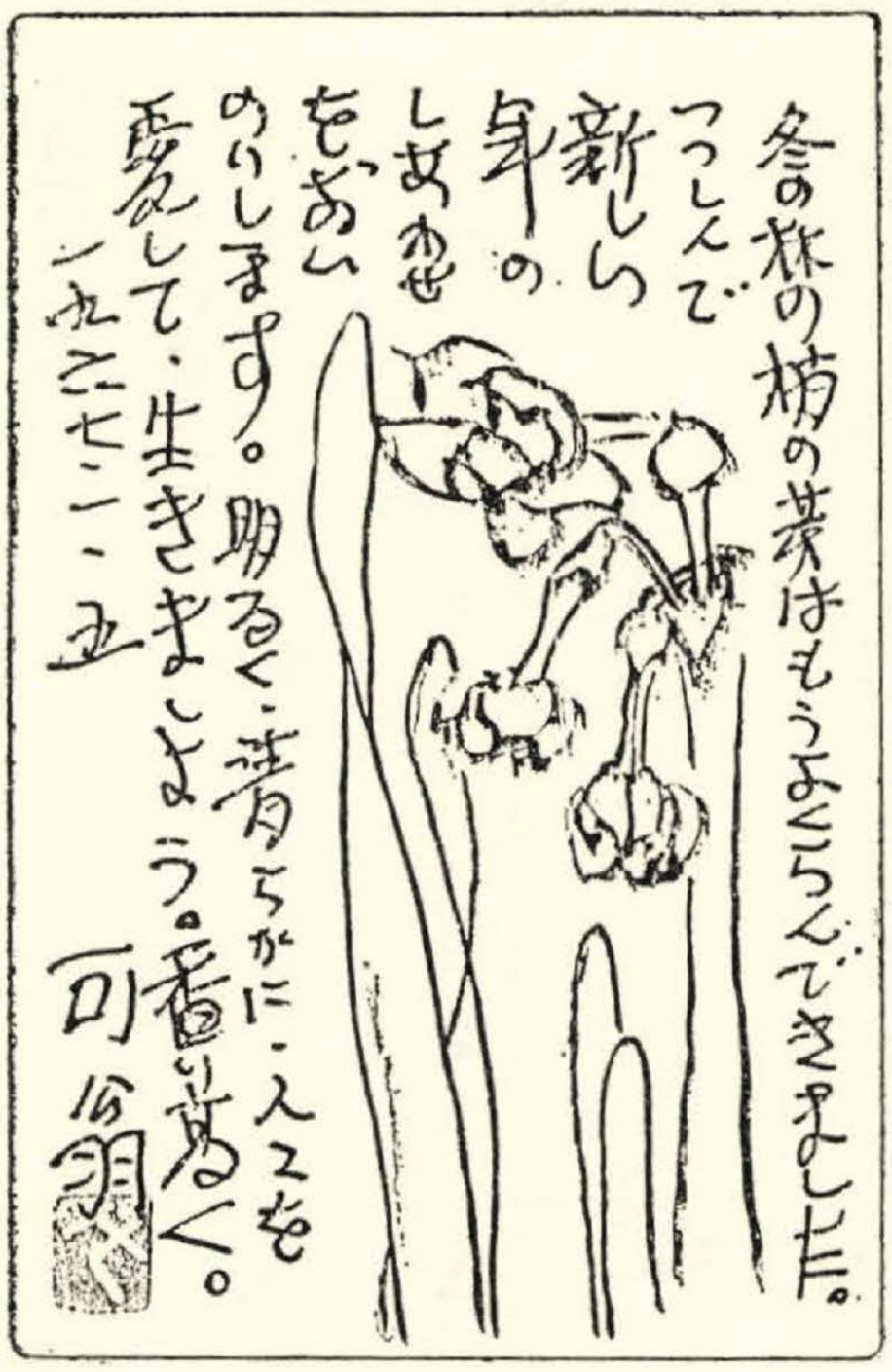
一九六七

新人歓迎コンパ

四月十五日　於国立部室、新人二名、宴たけなわの頃太田顧問御臨席。部員紹介を行い顧問より垂訓。十時前散会。

可さん逝く

七月四日



太田可夫先生の年賀状

七月二十九日　「部室には誰もいない。可さんも居ない。学生時代、此の部室に来ることは山へ行くことは勿論、山仲間の毒舌やまずい面をみる為だけが目的でなかった。山という縦糸と、可という横糸が適当にからみあって独特のムードがあった。その可がいない。」

（三十六年卒ＳＨＯＲＴＹ）

部室改修成る

十月五日　懸案であった部室の床の修理がこの日終った。「木の香も新しい白木の床に坐っていると何となく嬉しさがこみ上げてくる。」

（中村）

9対0でW・V部をくだす

十一月七日　加藤投手は次の如く語る「好守に助けられてこのノーヒットノーランという大記録を立てられ非常にうれしく思っております。」

宮武主将の話。「言うことなし、胸が一杯です……。」

金成総監督の話。「皆がよく動いてくれた。投手の起用と打線の組み方が図に当ったと言うべきで、これで我々のチームは他のチームから追いかけられるので、なお一層がんばらねばならぬ。」

一九六八

可さん宅に集う

一月七日　亡き太田先生を偲び、又奥さまはじめご家族が、この「部室となりの可さん宅」を去られる日近く、今後旧懐の思い出の場所となるべき可さん宅に集う。

（オーション会一同）

一九六九

「大学紛争」続く

国立では本館のバリケード封鎖、小平ではストライキ等となる。

「五月二十日　ここ二、三日学内は大きく揺れ動いている。山岳部としては何らまとまってはするつもりはない。体育会幹部の意見もそうだ。好きな奴らが集まって山へ登る団体なのだ。」

（宮武）

「松の木ハング」単独登攀！

二月四日　松の木ハング第二登を単独で試みる。夕方取付き、途中で日没となり、壁はたんに本物めいてくる。懸念していたハーケンをうちかえ、そこからアプザイレン。夜の冬の岩壁登攀がいかばかりおそろしきものかと思う。

（金子）

一九七〇

新人部員募集

四月三十日　チラシを配って奮闘するも、一名を得るに終わる。

平川ＯＢ前穂高岳にて遭難

七月一日　「ドシャ降りの中、ＯＢ平川氏前穂Ａ沢にて遭難の由。部室に来たら何か分るかと思いきや、ヘルメット二個がころがっているばかり。」

七月二日　夜行にて学生五名も上高地へ。ＯＢ諸氏らの捜索の結果、平川氏は富士フィルム山岳部員二氏とともにＡ沢のシュルンドにて遺体で発見された。

原ＯＢ来室

七月三十一日　平川遭難の時にはいろいろお世話になりました。御多忙の所多勢集まってもらい、お礼のことばもありませんでした。北岳バットレスに行くためテントを借用に来ました。（原）

甲斐駒ガ岳にて遭難

九月二日　合宿で八月三十一日から甲斐駒に入っていた金子以下四名のうち、赤石沢奥壁中央壁（同志会ルート）の登攀に向った三名が事故をおこし、橋本明君（二年）は死亡、西牟田伸一君（四年）が重傷を負った。同日夕刻、在京連絡先加藤ＯＢに連絡が入り、救助活動が開始された。橋本君の遺体は四日八丈まで搬出され荼毘にふされた。西牟田は五日へリコプターによって八合目から甲府へ収容された。（詳細は追悼集「赤石沢」参照）

故橋本君告別式は九日、小平市小川町の橋本家にてとりおこなわれ、ＯＢ、学生が参列した。また学内では、体育会葬が十六日、本館にておこなわれた。

「コーチャー会」――ＯＢを迎えて

九月二十二日　出席者　ＯＢ池知、高崎(俊)、中村、加藤(正)。学生四名

若手ＯＢを迎えて今回の遭難の反省、検討がなされた。これまでの登りかたについて種々の批判が出た。それとともに確保がで

きなかったこと、ルート選定の問題等の指摘あり。部会においても反省と今後の課題を求めて討論が開始された。

西牟田退院

九月二六日　甲府中央外科病院に入院していた西牟田が退院、帰京した。経過は良好であるが、しばらくの間安静を医師より指示された。

針葉樹会評議員会開かれる

九月二十九日　如水会館にて、臨時評議員会が開かれ、遭難の経過報告、会計報告等がなされた。望月達夫会長他ＯＢ諸氏、学生が出席。今後の部のありかたについて、ＯＢと学生の結びつきを強化する必要があるとの声があった。

山行再開――奥秩父縦走

十一月二日―八日にかけ、下級生を中心として四名で行なわれた。

橋本明君追悼会

十一月十四日　部室にて。出席者、橋本君父上、中学高校時代の友人五名、山岳部員。

一九七一

甲斐駒ガ岳追悼山行

八月二十八日から九月一日にかけて、橋本明君追悼山行が行なわれた。御家族、ＯＢ、友人、現役学生が参加し、遭難現場まで行った。

高崎（治）ＯＢ来室

十一月二十三日　五年半ぶりに部室を訪ねる。可さんの所に寄り、学校祭を見て、これから甘利が来たら可の墓参りもしたい。一橋祭も踊りやジャズばかりが盛んでだいぶ変ったような気がする。以前はも少しアカデミックなものもあったと思うが。

中川孫一ＯＢ丹沢にて行方不明

十二月十四日　当山岳部創立者のひとりである中川孫一氏（大正十五年卒）が丹沢の大野山（七二三㍍）へ出かけたまま帰らないということで、山岳部からも、中島ＯＢの指示により、捜索に参加する。数日間の捜索にもかかわらず、依然として行方不明。（残念なことに、氏は翌年三月遺体となって発見された）

中川孫一氏遺体発見さる

三月二十五日の部会にて、氏が二十二日、大野山西面ザワン沢において発見されたことが報告された。一同謹んで冥福を祈った。（同日、西牟田の追い出しコンパが開かれた。）

一九七二

部員勧誘

四月十一日　入学式。正門前に冬用6人テントを張って待つ。山岳部の存在を見せつけるのには効果絶大。六人も記名する。

（上田）

一九七三

新人獲得に頑張る

四月十日　入学式。ノートには九名ほど名前を書いた一年生がいたが、結局入部は四名であった。（前神）

ワンゲルより部誌「狼」をもらって一言

五月十九日　「このような充実した部誌を発行されているワンゲルの活動に対し敬意を表したいと思います。又、当山岳部がなんとか針葉樹十四号を自然に創りあげられる位の実力をはやくもてれば良いと思っています。」（M^2）

昭和三十年卒のOB来室

六月十四日　「現役の諸君、今日は、いや、恐らくは始めまして……でしょう。三十年卒の石原です。……此処に座っていると二〇年前の様々な声が聞こえて来てもう一時間も座っています。その間に当部誌を読ませて貰いました。八ガ岳の正月の混雑ぶりを除けば下川又寛の名前迄、二〇年前の部誌と入れ替えても全く変らぬ内容にびっくりしました。当時も山行を論じ、反省し、またあげ足をとり、ある時は一人だけになりたくなり、また無闇に仲間やこの雰囲気が好きになったりしたものでした。（石原修）

一九七五

部室修理始まる

八月七日　六月の針葉樹総会で、賛同を得た山岳部の部室の修理が始まる。屋根板の傷んだ個所を取り換え、スレートを張り直し、換気扇を取り付けるのが第一期工事の概要。

甘利OB来室

九月二日　（アンデス遠征の際、リマのサン・フランシスコ寺院より若気のいたりで拝借してきたシャレコーベを引きとりに来室）

「久しぶりの海外山行、それも『遠征』なんて意気ごまずに『修学旅行的山行』とか、時代の移りをつくづく感じます。（中略）長いこと置き去りにしましたこと、山岳部、及びシャレコーベ氏に申し訳ないことでした。彼もこれからは仏寺の地中で安らかに眠ることでしょう。（後略）」

前神、藤本両名（五年）ヒマラヤへ

九月四日　（パンジャブヒマラヤへの個人山行出発を前にして）「（前略）こんなに簡単な準備で一応はヒマラヤに行けるとしたら素晴しいことだ。計画も、もっと前からたて、調査をし、期間も長くとれば、小さいながらも、テラ・インコグニタに入ることは夢でない。真剣に、現実問題として考えるなら実現は必ずある。強烈な目的意識は絶対必要なことであり、それはすべてを明るくする。（中略）それでは皆さん行って参ります。」（前神）

十月二十八日　インド・ビルマより五年生帰国し、前神氏来室。筋無力症と覚しき奇病に侵され、歩行が、かなり困難をきたし、ペンを持つこともままならないようである。

改装なった部室にて「月見の宴」

十一月三日
出席者　近藤恒雄氏、久保孝一郎氏、中村幸正氏他数名のOB
部室は、大工の工事に加えて、現役により外板及び内板の塗装が施され、カーペットが敷かれ、かなり一新された。

坂牧氏のアマゾン遠征参加

十一月十一日　二年の坂牧が、以前より属していた探険部の計画で南米の奥アマゾンに来年遠征することが確定的となった。
「いざ行くとなってみると、自分ながら大変な事に手を出したと思わざるを得ない。しかし探険と山岳とは何も相対立するものでもない。山あり谷あり、平野ありでもよいではないか。」
（坂牧）

一九七六

津田塾娘の手紙

八月四日　山岳部の皆さんへ
お帰りなさい!!　合宿はいかがでしたか？　7月20日の見送りに行けなくて本当に申し訳ありませんでした。数日前から見送りに行くと言って騒いでいたのに、肝心な日に、午後ずっと留守をしていて、連絡を知った時には、もうすでに遅かったのです。このうめ合わせは、いつかきっと致しますから次回に御期待あれ!!
それでは、楽しい夏休みを!!
津田塾大　旅の会一同
（山岳部の歴史に残る文書だ。）

一九七七

二月九日　装備庫の錠がこわされかかれか？　上の人が怪しい。
この件に関して、M氏をきつくしかっておきましょう。
（兵藤）

最大にして最高の失敗

二月十三日　……（略）……最大にして最高の失敗、近藤さん本当にすいません。なんということか、あなたにピッケル折るなと注意されておりましたのに、夢中のうちにピッケルがまがっておりました。こいつはやばいと思い、反対に力を入れますと、なんとポッキリと先（2㎝）が折れてしまいました。近々、おわびにあがります。
伊藤氏へ、アイスハンマーのカバーは、バスの中では確かにございましたのに、駅では四次元の世界へ消えうせてしまいました。
これからは、運命がすべてにわたって僕の意志に逆らう以上、先輩諸氏の私物は借りないことに致します。
そんなバカなことがあっていいものだろうか！　長い間、つれそっていた女房を傷ものにされたみたいだ。
この表現はおかしい。「乙女→傷もの」ならわかるが、「古女房→傷もの」とは？
（近藤）

坂牧氏退部

三月二日　……（略）……1・2年を部で活動し、学んだあらゆる技術を僕はジャングルで駆使することができたのだと思うとき、この山岳部での経験なしに、僕のペルー行もあり得なかったことと思う。細々とした旅を一歩一歩進めるための技術、ある程度の地理的、地形的判断も、そしてまたあの美しき平和なジャングルの自然を自分自身の内にいかに強烈に、そしてできる限りの問題意識を持って印象づけるかも、僕は山を通して学べたと率直に感じる。

しかし、山はいまだに僕には焼けきらぬ丸太のようなものだ。……（略）……その決して捨て去ることのできない丸太を自分の中にかかえて部を去っていこうと考えている。……（略）……。

（坂牧）

やっぱりそうですか！　坂牧さんは帰って来ても、山岳部に戻るのではなくて、そのまま探険部を創るんじゃないかと思っていたのです。それが現実になったんですね。……（略）……。

（神野）

三月三日　……（略）……坂牧が退部を表明した。彼の入部以来のことを思うと、比較的に理解できるような気もする。しかしあの山岳部のほかの人間とはちょっと違ったユニークな面がある坂牧を失うのは限りなく残念だ。

おそらく彼は南米で新たな地平線を見つけたのであろう。……（略）……

（佐藤活）

一九七八

エスパース談義

五月二十五日　第一講、エスパースに使うべきではない。その理由としては次のことが挙げられよう。まず、合宿に使うべきウィンパー4天は3張程度、現在山岳部は所有しており、それを合宿において使用することは、山岳部所有の装備を有効に使わないことになる。……（略）第二に、6天2、4天1の中に1つエスパースをおくことはクラブ合宿として迫力にかける。第三に荷を安易に軽くしようとする意識の背後には事故へとつながる何者かが存在している。この点は根本的に考慮すべきことであって、つまり、我々の山岳部への態度そのものに、つながってくる問題でもある。すなわちエスパースの安易さが、山登りの安易で軽薄な我々の態度へとつながってゆくものだというのである。

（岡部）

最新合宿装備一覧

かつての合宿では一斗缶を何個も荷造りして〝チッキ〟で前送しておくのが常識だった。これは登るルートの違いない。軽薄短小時代を反映して、合宿の装備もグーンとコンパクトになっている。

それにしても、それにしても一九六六年と一九八四年の冬山装備は食糧を除いて、片や一一〇キロ、片や三八キロ、とあまりにも違うのである。さて、その相違やいかに(表1参照)。

第一に指摘されるのは燃料事情であろう。石油がガソリンに変わり、一人、一日あたりの消費重量は半分以下となった。ぬれにくい衣服のせいで〝コタツ〟と称して衣類を乾す必要が減り、天幕そのものの防水性も格段に進歩し、炊事以外のいわば〝無駄〟な消費が減ったことも一因であろう。

次いで繊維革命である。軽く、強く、ぬれず、保温性が高い素材によるテントはきわめて快適で、〝山小屋往来〟にある如く、一九七八年にはその使用の是非が議論されたほどである。凍ってカサバルようなことも全くなく、小さなザックにスッポリ納まる。また、これに伴うペグも従来は竹を組み合わせた膨大な量となったがごく簡単なジュラペグで良くなった。

その他、ザイルに大きな差があるが、これは登るルートの違いによるものであろう。ラジオ、トランシーバーは無論、軽く高性能になっている。

こうして、基本的な重量が軽量化した結果、断熱マット、テルモス等、生活を一層快適にするものも装備に加えられ、冬山生活は向上している。

さらに、個人装備も大幅に進歩しているが、その様子は一九六三年の概況報告と、一九八四年のそれにある部員の写真を比べれば歴然としている。片や、ぬれて凍りつくビニロン、片や、スベスベのエントラント、あるいはゴアテックスである。個人装備の重量も軽くなり、この時の冬の個人あたり総重量は入山時二八キロ、一九六六年には四八キロであったという。

食料については乾燥ヤサイ等が増えているものの未だオーソドックスなものが多い。御参考までに、最新食料計画を掲出する(表3)。

表1　冬山装備――今昔比較

	1966年		1984年	
予定コース	内蔵助平より真砂尾根経由剣岳		爺ガ岳東尾根より鹿島槍，赤岩尾根下山	
予定日数	12月9日～30日		12月14日～25日	
参加人員	9人		6人	
燃料	石油	46ℓ＝37kg	ガソリン	7ℓ＝5kg
	(0.24ℓ＝0.2kg／人.日)		(0.11ℓ＝0.08kg／人.日)	
テント	6人用ナイロン天×2	24kg	エスパース×1	7kg
炊事用具	スベア×4	6kg	ホエーブス×2	3kg
ザイル	行動用×2	6kg	行動用×2	5kg
	FIX用×300m	15kg		
ラジオ，トランシーバー		5kg		2kg
ペグ	竹ペグ×100本	5kg	ジュラペグ×15本	0.5kg
その他		10.9kg		15.5kg
装備総重量	108.9kg（12.1kg／人）		38kg（6.3kg／人）	

表2　1983年冬山医療品

内服薬	外傷薬
ベンザ（風邪）	湿布
ユベラ（血行促進）	サロメチール
正露丸（下痢，腹痛）	メンソレータム
yy―02（解熱，鎮痛）	ベナセS軟こう（かゆみ止め）
ブスコパン（鎮痛）	クロマイシン（化膿止め）
ナルジクス（腎臓，尿道，膀胱疾患）	キシロA軟こう（切り傷）
QPゴールド（ビタミン）	マキロン（消毒）
トローチ（のどあれ）	ユベラ軟こう（血行促進）
	目薬
	その他

表3　最新食糧計画

＼	12／15	16	17	18	19	20	21	22	23
朝	／	B_1	B_2	B_3	B_1	B_2	B_3	B_1	B_2
昼	L_1	L_2	L_3	L_1	L_2	L_3	L_1	沈A	沈B
晩	S_1	S_2	S_3	S_4	／	S_5	S_6	S_7	S_5

担当：鮎沢
（　）内は1人当りグラム数

朝	B_1 ワカメラーメン	マルタイラーメン(85)，ワカメ(0.8)，ゴマ(4)，にんにく(2)，紅茶セット｛紅茶(2.5)，サトウ(20)，粉ミルク(5)，以下同じ｝
	B_2 雑　炊	α米(80)，切干大根(5)，干しいたけ(5)，高野ドーフ(2.5)，トロロコブ(4)，煮干(5)，ミソ(20)，だしの素(0.8)，紅茶セット
	B_3 もちラーメン	マルタイラーメン(85)，もち(25)，七味唐辛子，紅茶セット
昼 ビスケット 〈行〉100g 〈沈〉 70g （1人1日）	L_1	ビスケ，チョコ(25)，チーズ(30)，バウムクーヘン(15)，甘納豆(30)，干ブドウ(10)，紅茶セット
	L_2	ビスケ，カリントウ(30)，ソーセージ(25)，ヨーカン(25)，キャンディー(10)，プルーン(30)，紅茶セット
	L_3	ビスケ，チョコスティック(12)，ピーナツ(15)，バウムクーヘン(15)，ヨーカン(25)，キャンディー(10)，紅茶セット
晩 α米 〈行〉120g 〈沈〉 90g （1人1日） ペミカン 豚肉　30g （1人1日）	S_1 カレー	ペミカン，ジフィーズ｛玉ネギ(1.05)，人参(1.5)，ジャガイモ(2.43)，以下同じ｝，ルー(20)，コンソメ(1.5)，福神漬(20)，緑茶(2)
	S_2 マーボーハルサメ＋スープ	ペミカン，ジフィーズ，干しいたけ(5)，ハルサメ(25)，マーボーの素(9)，スープの素(16)，紅茶セット
	S_3 ビーフシチュー釜　飯	ペミカン，ジフィーズ，ルー(20)，コンソメ(1.5)，釜飯の素(40)，緑茶(2)
	S_4 豚　汁	ペミカン，ジフィーズ，切干大根(5)，干しいたけ(5)，高野ドーフ(2.5)，ミソ(20)，だしの素(0.8)，紅茶セット
	S_5 洋風雑炊	α米(90)，ワカメ(0.8)，切干大根(5)，干しいたけ(5)，高野ドーフ(2.5)，干魚(5)，コンソメ(1.5)，緑茶(2)
	S_6 和風雑炊	α米(90)，トロロコブ(4)，切干大根(5)，干しいたけ(5)，高野ドーフ(2.5)，煮干(5)，ミソ(20)，ダシの素(0.8)，紅茶セット
	S_7 華風雑炊	α米(90)，ワカメ(0.8)，切干大根(5)，干しいたけ(5)，高野ドーフ(2.5)，干魚(5)，中華スープの素(7.5)緑茶(2)

沈澱食	A：ホットケーキ＋ココア	B：焼ソバ＋スープ
	ホットケーキの素(65)，干ブドウ(10)，バター(10)，ジャム(15)，ココア(20)	インスタント焼ソバ(90)，ソーセージ(15)，スープ(16)

座談会

現在只今の一橋山岳部

実施　一九八五年三月二日部室にて
出席者　司会　安島（OB）
　　オブザーバー　石部長
　　（現役の出席者は写真の面々）

四年間をふりかえって

――四年生の感想

「とにかく山が好きだったが、大きな目標ということになると模索のうちに終わった」

司会　四年生から山岳部での四年間の感想を。

石丸　さほど深い考えで入部したわけではなく、これこれこういうことをしたいという山登りは指向せず、伝統的な合宿を繰り返してゆく中から自分の山登りが生まれてきた。山は好きだから登っているが、昔の人がいろいろ考えたような確立された目標はできなかった。これは今後の課題だ。

五ケ山　山が好きで入った。ビジョンはなかったが、当時は四年生がヒマラヤへ行くということで、クラブにビジョンがあった。ところが遭難し、沈滞し、そこからどうすべきかとやって来て、四年になってしまった。ようやく一、二年生の間から様々な指向が生まれてきたが、クラブとして大きな目標があるのは魅力的だ。「ヒマラヤとはすごいな」と思った。

石丸　当時は人数も多く、四年生は一生懸命やっていた。入部前はそう大したことはないだろうと思っていたが、エライことをしているなと驚いた。こういう中で自分もやってゆけるのかと思ったが、大目標があるのはともかく良いことだ。クラブというのは、ある一人のできる人間が全体をグイグイ引っぱってゆく必要があるのかもしれない。僕らの場合大してできなかったが、来年は自分の山登りを確立しつつある人間―活性化分子がいるので、クラブ全体も活性化するのではないかと期待している。

司会　クラブに入ってよかった点は。

五ケ山　山に行ったこと。あまりハヤリではないクラブであること。長期にわたり皆と一緒に生活できたこと。

現在の問題点

――昔との比較において

「今は本当にモノを考えなくなった」
「文章がダメでも口がある」



司会　三年生は今のクラブをどう思うか。

白石　活性化は分かるが、クラブの現状で、指向通りの登山ができるかというと難しい。その辺を現実的にどう解決してゆくかを考えなければならない。また昔の部誌などから比較してみると今は本当にモノを考えなくなったと思う。たとえば、僕や五ヶ山さんの事故があったが、昔ならなぜこういうことが起こったかトコトン追求して明文化しようとしているのに、僕らはコレを言ったらブチコワシになるということで何となく曖昧にして、結局反省はまったくなされなかったようだ。これがこのままクラブの体質になってしまうと、非常に問題だと思う。

石丸　OBからよく、今の若い者は文章を書かなくなったと言われる。しかし、実際は書くよりも口でコミュニケートしている場合もあるし、それで同じことなら何も書く必要はないだろう。OBが書け書けとばかり言うのはあまり感心しない。書きたくない人間が無理して書く必要もないし、ここにOBと僕らの思考回路のギャップがあると思う。

河野(1)
石丸(4)、斎藤(1)、五ヶ山(4)
鮎沢(2)、白石(3)、谷口(2)
外池(1)、川名(2)

合宿と個人山行

――そのあり方をめぐって

「合宿を組んで共同で実行すること自体が目標」（共同体説）なのか、「合宿は訓練の場、個人山行でやりたいことをやる」（機関説）のか。

司会　個人の指向と部の現状に関して、合宿と個人山行のあり方についてはどうか。

石丸　現在のクラブでは、合宿を組んで実行するということ自体困難な目標となっている。個人の指向という前に、合宿を成功

させることがまずクラブの大目標である。それでも事故があったりして、それが個人の責任なのか、一橋山岳部の構造的問題なのか、あるいは登山の宿命なのか、四年やっただけではわからないがはっきりつかみたい。

谷口　合宿は基礎的技術の訓練の場として、個人山行でやりたいことをやりたい。

司会　山岳部に期待するものは。

谷口　街ではない場所で生き抜いてゆくためのサバイバル技術が欲しい。従って山に限らないわけだが、たとえばインドヒマラヤのWHMIでイカダ下りなどの講習をしているが、大変面白そうだ。北アのどこか決まった所にばかり行っていたら、自ずと限度をつくってしまい、こういう技術は必要だが、これは不要ということになってしまうのではないだろうか。今までの山の概念を越えたところでの基礎力が身につけられればいい。

司会　ではなぜ大学山岳部なのか。

谷口　山岳部はそうした活動に一番近い。合宿もワーワー言うほどではないにしても、それなりに面白い。

司会　社会人山岳会はどうか。

谷口　岩なら岩、雪なら雪しかしないようで、そういうものからは遠い。それだけが自然ではない。色んなことを、春夏秋冬自然の中でやって行きたい。

司会　その場合のヒマとカネは。

谷口　やりたければできる。気の持ち様だ。

鮎沢　入る時はあまり考えていなかったとやりたいことが見えてきた。しかし、できるかというと、無理な気がする。従って、合宿は訓練の場として、個人山行でやりたいことをやりたい。限られた期間であるから目標もしぼることになるが、岩と雪の登攀をしたい。

なぜ山岳部にいるかと言えば、やはり、道具がいっぱいあって、パートナーを見つけられるからで、合宿で皆と生活するのも楽しいは楽しいが、どちらかというと機関論だ。

司会　社会人山岳会は。

鮎沢　考えたが、谷口が行くなというので止めた。従って、やりたいことができるようにクラブの体質を変えてゆきたい。

合宿では皆のレベルを最低限必要なところまで持ってゆくことを目標にし、それで個々に自分の力が分ってくるだろうから、その上で個人山行で自分の力に合わせた山行をすればよい。

石丸　個人山行と言うが、谷口なんかを見ていると、個々の技術はうまくても、トータルな判断力は不足しており、闇雲に突っ走る傾向が恐い。クラブとしては、してゆく体制が必要だが、合宿で技術的な基礎を何度も繰り返してゆけば応用力もつくし、また、できる人をバックアップを教育すること自体ためになると思う。

司会　唯一の女性の眼からはどうか。

川合　山に行きたいが女子一人ではどうにもならないし、技術も知識もないので入った。他のワンゲルや同好会と比べて、訓練

はやはり山岳部が一番しっかりしているので選んだ。今年は甘える一方だったので、今後は一年の女子を入れて一緒に登りたい。

司会　一年生は。

斎藤　入ったのはイイカゲン。今まではイイカゲン。今もイイカゲン。楽しいからいるのであって、大学山岳部がどうのこうのと考えたことはない。ただ、普段の生活ではストイックではないが、山ではそうならざるをえず、いくらかでも自分の可能性が広がるのがうれしい。今は合宿をどうにか消化している。

河野　山が好きだし、クラブに所属して皆と共同体的に一緒にやってゆくことで帰属感が欲しかった。鮎沢さんが共同の目標は持ちにくいと言っていたが、共同体として同じ目標を持てたらベストだろう。

外池　大学の間は何かサークルに入るのがいいだろうと思って入った。入るときは漠然としか考えていなかったので、岩とか雪をやるのに気付いてビックリした。今でもコワイ。体力が弱くていつも迷惑をかけており、合宿のレベルをさげて申し訳ないと思っている。

谷口　レベルを下げるなんてことはない。やろうと思ってもできないことがあれば、そのギャップを埋めるために合宿がある。十人十色の差が生まれるのは事実だ。また、合宿がなくなった場合、クラブの共同体的面白さはなくなってしまうから、そういう意味でも合宿は必要だ。

ただ、山が普通のスポーツと違うのは、自由ということで、サッカーみたいにボールをめがけて皆が一緒に動くようなことがないのがいい。それから、事故を起こしてはいけないのはもちろんだが、山の中で危なさがなくなったら、いてもしょうがない気がする。たとえばルートを誤ってどこかの沢で岩を登らなければならなくなった時、逃げようはない。それに対応できるぐらいの能力は持っていなければならない。したがって、最低のレベルといってもかなり幅が広いが、合宿で技術を身につける必要はあるだろう。

司会　最低限の要件を充足するためのトレーニングのカリキュラムをはっきりさせるということはどうか。

白石　勿論そうだが、今の部員はそれを嫌うのではないか。

谷口　嫌うとは言っても、やらなければ危いと思えばやるだろう。

司会　四年間、チャンスがなければ雪洞も掘らずに済んでしまうケースもある。それなら、そういうことも含んだカリキュラムを作っておいて効率的にマスターする。必要とあれば、文登研等、外部の訓練も利用する。そういう時代になったのではないか。それさえ息苦しいというなら、もう仕方ない。

谷口　山に登る限り、そうは言えない。外部に出てゆくことは刺激にもなる。

これからの山と山岳部

――多様化する価値観の中で

「山＝青春、山岳部＝人生道場」から「山＝ワン・オブ・ゼム、山岳部＝サークル」へ

オブザーバー　石教授　君達の話を聞いていてチョット違和感を覚えるのは、僕らの時の山岳部は純然たる山好きの集団だったせいだろう。今ではそんなバカみたいなのはいなくなったんだな。「青春ないし人生イコール山」みたいな者ばかりで、入学すると一目散に山岳部の部室に来るというのが十人も十五人もいたんだよ。当時はワンゲルも山友会もなくて、せいぜいスキー部ができた位で、山に登るとと言えば山岳部しかなかったということもあるんだろうがね。

高度成長の前で、山しか青春をぶつけるものはなかった。夏山なんかは、三十日位入っていないと時間が余ってしまって、丸二ケ月位入っている奴もいたね。

本当の山バカがいたんだけれど、今では山はワン・オブ・ゼムというスケジュールを合わせていたが、今ではまったくあいつバテないかなんて思われる奴のもいた。色々な価値観がうまく共存していた。

しかし、合宿だけは随分あって一年に百日はあった。これに個人山行を加えると百二十日は越えたろう。今では全部で七十日位だろう。昔は、合宿のスケジュールが決まっていて、それに個人のスケジュールを合わせていたが、今ではまったく逆の様だ。

価値観は変わったろうが、その中で頑張ってやっていって欲しい。

ただし、僕は「クラブ」というのは麻雀クラブや仲良しクラブみたいで違和感がある。僕らの時の山岳部はいわば人生道場という感じがあった。自らしごき、自ら鍛えるために部があった。

それが、社会に出ても今もって我々を支えている。中島とニューヨークで話したが、今でもそう言っている。あの頃鍛えたから、南米でも生きられたというわけだ。そういった遺産はとても大きい。

部員の個性ということだが、当時は山岳部を登るのは山岳部だけだったわけで、色んなのがいた。合宿に行くたびにバテて、皆に早くあいつバテないかなんて思われる奴もいた。岩も雪もやらないのもいた。色々な価値観がうまく共存していた。

しかし、合宿だけは随分あって一年に百日はあった。これに個人山行を加えると百二十日は越えたろう。今では全部で七十日位だろう。昔は、合宿のスケジュールが決まっていて、それに個人のスケジュールを合わせていたが、今ではまったく逆の様だ。

価値観は変わったろうが、その中で頑張ってやっていって欲しい。

地域別、年代別全山行記録

1963～1984年の間の山々に残る足跡

▲北アルプス南部　192

▲北アルプス――後立山周辺　198

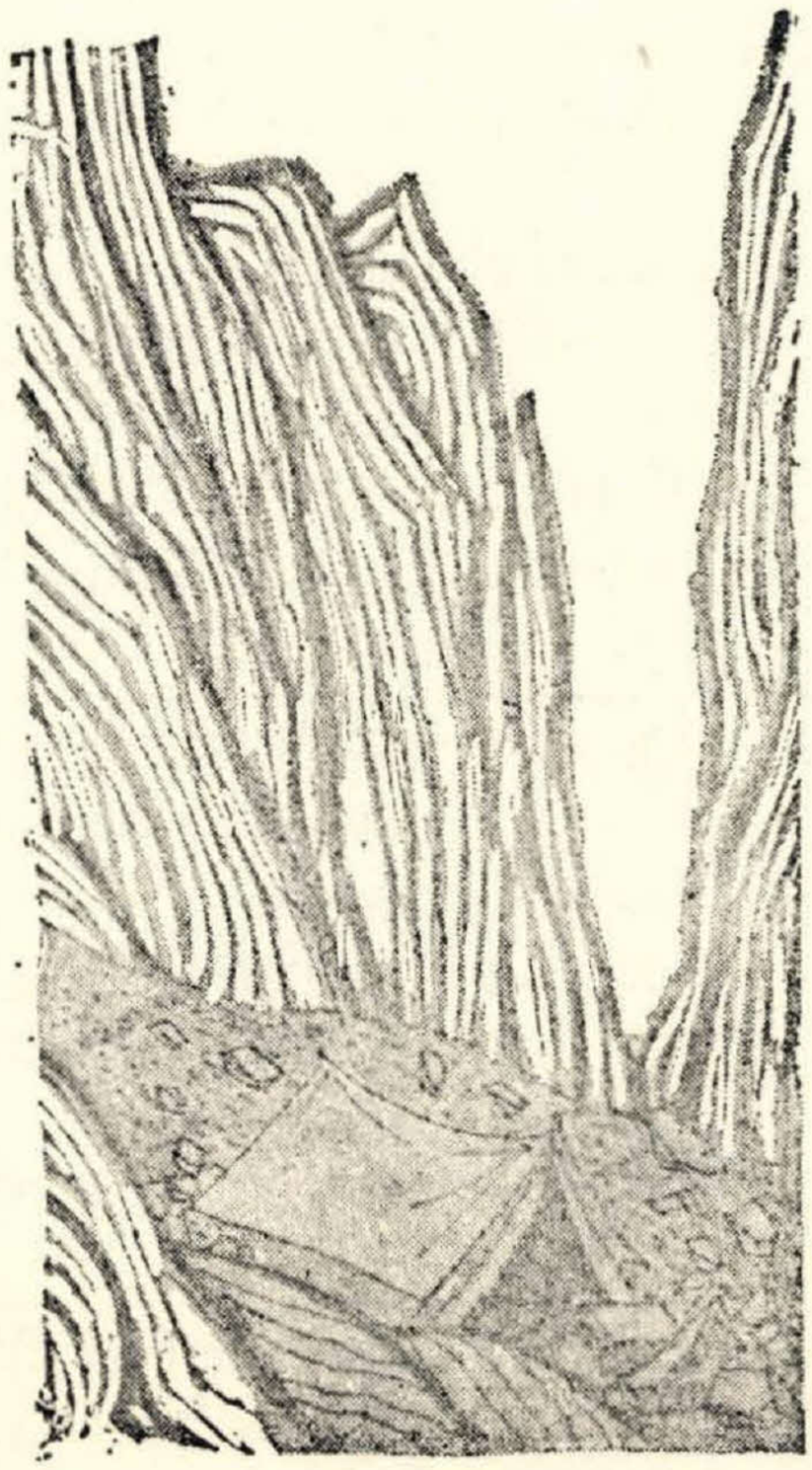
▲北アルプス北部――剣岳周辺　202

▲南アルプス　205

▲上越・尾瀬等　209

▲八ガ岳・戸隠・中央アルプス等　213

▲北海道・東北　215



北アルプス南部

1963	2.28～3.25 （春合宿）	横尾尾根～奥穂高岳，槍ガ岳往復 （詳細『針葉樹』13号参照）	ＣＬ蛭川，竹中，村上，長沢，本間，小島，佐藤(力)，半場，小野，佐藤(之)，高崎，池知，石田，原
	4.24～30	西穂～奥穂 （27日奥穂の下りで中橋スリップ翌朝救出，30日上高地着）	ＣＬ竹中，中橋，半場，佐藤(力)
	6. 1～ 6	湯俣尾根～双六～槍～上高地（その後明神合宿に合流）	半場，山本，小野
	6. 6～ 9	明神東稜，東南尾根 （雪上訓練，冬山偵察）	ＣＬ蛭川，吉川，斉藤，伊東，高崎，平川，原，池知，石田，佐藤(力，之，２)，小野，山本，小島，本間，長沢，竹中
	6.10～15	徳沢～槍～赤岳～烏帽子	高崎，原，池知，石田，佐藤(久)
	6. 9～13	徳沢～一ノ俣～大天井～燕岳～餓鬼岳～信濃常盤	蛭川，斉藤，岡田，吉川，平川
	8. 7～11	明神（中央フェース等をねらうが雨で中止）	蛭川，佐藤(之)，（ＯＢ）大橋，大賀，高橋
	9. 8～13	奥又白（東壁，四峰を登る）	小倉，山本，佐藤(久)
	10.16～22	高瀬～槍～涸沢（春山偵察兼荷上げ）	小島，半場，三森，石田，高崎，池和，岡田，斉藤
	10.26～29	北鎌尾根	村上他一名
	11. 9～11	明神（五峰東南尾根往復，冬山偵察）	村上，小島
	12.14～27 （冬合宿）	明神主峰東稜～前穂往復（詳細「1963概況報告」）	ＣＬ蛭川，小島，山本，佐藤(之，久)，原，石田，池知，岡田
1964	3. 3～27	葛～湯俣～湯俣岳～真砂岳～水晶岳～三俣～双六～槍ガ岳～北穂往復～槍沢下山	ＣＬ小島，半場，本間，小野，三森，佐藤(之)，山本，高崎，原，池知，岡田，斉藤
	5. 1～ 5	明神主稜～前穂～西穂(春山偵察)	ＣＬ高崎，池知，石田，斉藤
	5. 3～ 8	北鎌尾根（冬山偵察，槍南壁，小槍，小槍尾根等）	ＣＬ本間，佐藤(之)，原
	6.12～21	奥又白３年合宿（詳細85ページ）	高崎，原，池知，石田，佐藤(久，之)，ＯＢ倉知
	7.16～29 （夏定）	涸沢定着（当初横尾本谷を予定していたが悪天の為涸沢に変更，涸	ＣＬ小島，半場，本間，佐藤(之，久)，山本，小野，三森，

		沢槍東稜，１，２，３，４，クラック尾根，ドーム中央稜,北尾根，東稜，北鎌，コブ尾根）	高崎，石田，原，池知,斉藤，岡田，吉川，吉沢，田沼，中村，加藤，金成
	7.31～8.6（夏縦）	涸沢～横尾本谷～中岳～槍～双六～打込谷下降～金木戸川～双六～三俣～湯俣	ＣＬ原，池知，佐藤(久)，斉藤
	7.30～8.8（夏縦）	涸沢～槍～三俣～薬師～剣	ＣＬ小島，三森，本間,中村，加藤
	8.17～9.1	滝谷，奥又白周辺	原，池知，高崎，石田，佐藤(之)，田沼，ＯＢ石
	9.18～24	明神～前穂～西穂（春山偵察）	高崎，池知，佐藤(久),石田，平川
	10.17～26	北鎌（冬山偵察，荷上）	小島，佐藤(之)，山本,岡田，吉川，田沼
	11.21～24	北鎌（冬山偵察）	佐藤(之)，山本
	12. 7～26（冬合宿）	北鎌（詳細88ページ）	ＣＬ小島，佐藤(之，久)，山本，小野，三森，高崎，原，池知，石田，岡田，斉藤，吉川，田沼，吉沢，加藤，金成
	12.26～29	天上沢～水俣乗越～槍～槍沢	高崎，池田，佐藤(久),吉沢，田沼
1965	3. 2～24（春合宿）	①西穂～奥穂～前穂～明神②と合流	ＣＬ原，佐藤(之，久)，岡田
		②明神最南峰主稜～前穂往復，明神東面，二峰東稜，四峰東稜	ＣＬ高崎，池知，石田,平川，斉藤，田沼，吉沢，中村，金成
	4.30～5.6	東鎌縦走（金成，西岳へ向かう途中，槍沢側へ150m 滑落，怪我無し）	ＣＬ池知，斉藤，吉川，金成
	5. 4～11	硫黄尾根（石田，赤岳の下りで足を痛め，中山乗越より下山，冬山偵察）	ＣＬ原，石田
	4.30～5.4	涸沢岳西尾根（冬山偵察）	ＣＬ佐藤(久)，吉沢
	6.15～22	奥又３年合宿（三峰リッジ，雨の為19～21沈澱）	ＣＬ岡田，斉藤，吉川,吉沢，田沼
	6.14～18	涸沢周辺岩登り	ＣＬ高崎，原，池知，佐藤(久)，石田，平川
	6.22～27	横尾前期合宿　島々～徳本峠～横尾～槍，奥穂往復（表銀座縦走を予定していたが雨の為中止）	ＣＬ中村，加藤，宮武，賀川

	8.24～30 （夏縦）	黒四～五色ヶ原～薬師～槍～横尾（定着合流）	ＣＬ池知，佐藤(久)，中村，賀川，宮武
	8.24～9.6 （夏定）	涸沢定着(滝谷，奥又，屏風岩等)	ＣＩ高崎，原，石田，平川，岡田，斉藤
	9. 2～4	横尾～槍～大天井～燕岳～中房温泉	ＣＬ岡田，田沼，宮武
	10	笠～硫黄尾根	ＣＬ池知，平川，斉藤，吉川
	12.15～29 （冬合宿）	①涸沢岳西稜～北穂～横尾尾根 ②笠ガ岳～硫黄尾根	ＣＬ高崎，原，佐藤(久)，石田，吉川，加藤 ＣＬ池知，佐藤(之)，平川，岡田，斉藤
1966	6.21～28	西穂，前穂，槍ガ岳，奥穂往復，雪訓	ＣＬ俵，宮武，藤原，戸川，大田他２名
1967	6.26～27	穂高ＯＢ合宿（滝谷溯行，奥又よりＣ沢，Ｄ沢，中又白溯行）	俵，戸川，ＯＢ多数
	8.22～9.4 （夏定）	涸沢定着（滝谷，１，２，３，４尾根，ドーム北壁，中央稜４峰甲南ルート）	ＣＬ中村，加藤，金成，藤原，今泉，戸川，大田，前田，西牟田，ＯＢ高崎
	10.6～12	滝谷４尾根	俵，ＯＢ中島
1968	4.26～5.2	西穂，大滝山，槍往復（鹿島槍遭難の為東鎌途中より下山）	ＣＬ宮武，今泉，大田，西牟田，前田，中原
	7.25～30 （夏定）	涸沢定着（滝谷２，３，４尾根，北尾根等）	ＣＬ俵，宮武，藤原，戸川，西牟田，金子，藤巻，松尾
	7.31～8.8 （夏縦）	白出のコル～新穂高～笠ガ岳～三俣～赤牛岳～針ノ木峠～鹿島槍	同上
1969	5. 6～16	涸沢定着（滝谷１，２，３，４，５尾根，ドーム中央稜，北壁，北尾根，雪上訓練，槍，蝶ケ岳往復）	ＣＬ宮武，戸川，金子，藤巻，西牟田，勝賀瀬，橋本，井草，羽部
1971	7.26～29 （夏定）	涸沢定着（7.28，工藤が涸沢吊尾根にて負傷の為定着を切り上げ縦走）	ＣＬ井草，羽部，西田，高橋，工藤，前神
	7.30～8.8 （夏縦）	槍ガ岳～薬師～剣	同上
1973	4. 1～8	槍ケ岳，蝶，西穂往復（スキー，雪洞等の経験もつむ）	前神，藤本，元井
	5. 1～5	燕～槍～蝶～上高地	前神，藤本，加藤，藤田
	6.13～18	槍～双六～笠	前神，若林
	7.19～30	涸沢定着（北鎌，明神主稜，西	ＣＬ前神，藤本，加藤，増井，

	（夏定）	穂，コブ尾根，横尾本谷，北稜，東稜，北尾根，ジャン飛驒尾根，奥又Ａ沢，滝谷２，３尾根）	兵藤，元井，藤田，松田，若林，佐藤，ＯＢ金子
	7.31～8.8（夏縦）	槍～東沢～剣	前神，元井，松田，若林
	7.31～8.4（夏縦）	槍～烏帽子（途中，黒部源流にて沢登り定着を予定するも雨の為断念）	藤本，増井，加藤，佐藤
	9.22～25	北鎌並びに岳沢～滝谷４尾根（岩登りらしい岩登りを初めて実践）	前神，藤本，加藤，ＯＢ上田
	11.1～7	高嵐尾根～水晶岳～槍～燕岳（春山偵察）	前神，藤本，兵藤
	12.16～25（冬合宿）	燕岳～水俣乗越（西岳にＡＣをおき槍をねらうも悪天の為水俣乗越までで断念）	ＣＬ前神，藤本，古橋，加藤，兵藤，佐藤，松田，若林
1974	3. 8～20	高嵐尾根より野口五郎～黒部五郎，赤牛岳，雲ノ平往復（詳細117ページ）	ＣＬ前神，藤本，加藤，藤田，若林，松田，浅田
	3.17～21	明神東稜～岳沢	古橋他２名
	4. 2～10	北尾根～前穂往復	前神，藤本，他１名
	4.12～13	鉢盛山	藤本，兵藤
	5.24～28	涸沢（雪上訓練）	前神，藤本，古橋，加藤，藤田，増井，元井，大枝，佐藤，若林，松田，近藤，永戸，坂牧
	5.29～31	滝谷第四尾根（雪上訓練延長戦）	前神，藤本，古橋，佐藤
	7.20～29（夏定）	涸沢定着	ＣＬ前神他９名
	7.30～8.5（夏縦）	裏銀～鹿島槍	同上
	8.15～17	常念岳	永戸他３名
	9. 4～6	北穂，前穂	藤本他１名
	9. 7～13	涸沢定着，滝谷	前神，藤本他３名
	9.14～16	コブ尾根，ジャンダルム飛驒尾根	同上
	10.9～12	横尾尾根～槍ガ岳～鏡平（冬山第１次偵察，デポ）	前神，佐藤
	11.6～9	西穂～北穂～槍ガ岳～笠ガ岳（冬山第２次偵察）	前神，藤本，兵藤，浅田
	12.11～24（冬合宿）	弓折岳南尾根～笠ガ岳～槍～北穂往復～横尾南尾根	ＣＬ前神，藤本，古橋，加藤，佐藤，松田，若林，坂牧

1975	7.29～8.6	涸沢（滝谷４，１尾根，４峰正面，ドーム中央稜，ジャンダルムＴ１フランケ）	佐藤他４名
1976	3. 9～20（春合宿）	西穂西稜よりロバの耳手前まで（奥穂，前穂を目指すも敗退）	ＣＬ松田，佐藤(活)，浅田，近藤，永戸，佐藤(周)
	4.28～5.2	北鎌～北穂	松田，近藤
	4.28	葛7：00～9：30東沢山荘10：05～12：05湯俣12：20～14：00千天出合	
	29	6：10～6：25丸木橋～7：50Ｐ3～9：10Ｐ4～10：25 Ｐ6～11：05北鎌コル11：20～13：20独標	
	30	沈澱	
	5. 1	12：10～16：05槍～16：45肩の小屋	
	2	7：00～8.30南岳～10：00キレットコル10：15～11：45北穂～13：00涸沢13：45～15：50横尾	
	4.28～5.2	奥明神沢～前穂往復(4.29～5.1雨の為沈澱)	浅田，佐藤(周)
	5. 1～5	徳本峠～横尾～北穂東稜，蝶ケ岳（新人歓迎）	上記＋坂牧，永戸，神野，兵藤
	7.18～30（夏定）	涸沢定着（滝谷３・１・２・クラック尾根，涸沢槍東稜，飛騨尾根，北穂東稜，北尾根，４峰中大ルート屏風岩東稜，明神主峰東稜等）	ＣＬ松田，佐藤(周)，神野，兵藤，佐藤(活)，浅田，大慶，米田，落合，酒井，中西，引地，近藤
	7.30	5：05～7：20Ｔ4尾根取付8：00～9：10Ｔ4～9：45屏風東稜登攀開始～14：15終了点14：35～屏風の頭15：15～16：35（ボルトとハーケンを伝ってゆくのはそれ程難しくはないが高度感はすごい）	佐藤(活)，近藤
	7.31～8.7（夏縦）	涸沢～横尾～槍～三俣～租父谷源頭～薬師峠～有峰（雨ひどく薬師往復ならず）	ＣＬ松田，佐藤(活，周)，落合，大慶，中西，米田，酒井
	9. 4～7	屏風岩	近藤他１名
	9. 5	(１ルンゼ)横尾7：50～取付8：30～終了13：05～14：00～横尾16：00	

	9. 6	(東壁ルンゼ) 6：00～取付7：40～横断バンドT310：20～ 終了 17：05～20：30	
1977	8. 5～7 (夏合宿)	滝谷（グレポン，ドーム北壁）	近藤，引地
	6. 4～8	北鎌～北穂～涸沢	神野，岡部，中西，引地
	9.22～27	涸沢（北穂往復，滝谷4尾根）～蝶ケ岳～須砂渡	中西，引地他八名
1978	7.20～30 (夏定)	涸沢定着（北穂東稜．4峰東南面，飛騨尾根，滝谷2，3尾根，北鎌，コブ尾根等，7月28日，四峰東南面で落石岡部負傷，29日ヘリコプターで救出，詳細134ページ）	CL神野，佐藤，岡部，引地，小林，黒田，田中，中村，土方，萬濃，八尾，谷津，コラード
	10.31～11.2	燕～常念～蝶	引地，小林，多田
1979	3.12～19	燕～大天井～常念（詳細135ページ）	引地，小林，田中，中村，土方，萬濃，谷津
	4.28～30	蝶ケ岳	引地，小林，田中，中村，土方，萬濃，宮下，谷津，吉田(淳)，岡部，竹若，池田，中丸，吉田(雄)
	5. 1～4	横尾～槍，奥穂往復（西鎌～笠の縦走を目指すも装備不備の為断念）	引地，小林，田中，中村，土方，萬濃
	10.6～9	餓鬼～東沢岳～燕岳（春山偵察）	土方，中村，岡部，OB佐藤(周)
	10.26～29	唐松～餓鬼～東沢乗越～中房	小林，宮下，田中，大出
1980	7.21～31 (夏定)	涸沢定着（北尾根，北穂，東稜，明神主稜，滝谷2尾根，ジャン飛騨尾根，北鎌，明神主峰東稜，西壁）	CL小林，中村，萬濃，土方，宮下，田中，岡部，福田，滝浦，安島，石川，吉田，竹若，入佐，稲毛，OB神野
	7.28	(明神西壁) 岳沢ヒュッテ5.30～二俣6：15～三俣7：00～取付7：40～1P目9：25～BC尾根稜線11～40～明神二峰14：00～一峰15：00～前穂16：20奥穂17：34～BC19：20	土方，岡部，安島
	8. 1～12 (夏縦)	横尾～槍～烏帽子～針ノ木岳～黒部湖～東沢出合～雨の平，源流～	小林，岡部，石川

		黒部五郎～薬師岳～有峰(詳細141ページ)	
	8. 1～12 (夏縦)	東沢下降～針ノ木岳～スバリ西尾根・中尾根	土方他4名
	8.28～9.5	涸沢（ドーム西北壁，中央稜，右岩稜，4尾根，松高ルンゼ，4峰北条，新村ルート）	小林，土方，中村，引地，宮下，田中
1981	4.28～5.2 5.29～6.7	明神東稜～岳沢～奥穂南稜～西穂 涸沢定着（雪訓，屏風岩東稜，四峰北条新村ルート等）	中村，宮下，岡部，安島 土方，中村，萬濃，岡部，安島，稲毛，石川，山本，五ケ山，石丸，寺戸
	6. 3～5	蝶～常念～大天井～燕～中房温泉	ＣＬ岡部，稲毛，山本,石丸,寺戸
1983	12.12～27	神岡～打保～北俣岳南尾根～黒部五郎～千丈沢乗越～槍往復～新穂高	石川，稲毛，山本，石丸，五ケ山，鈴木，白石，谷口
1984	5.30～6.4	涸沢～常念～燕～中房(雪上訓練)	ＣＬ石丸，五ケ山，谷口，川名，鮎沢，斉藤，外池,河野,岡本，藤田
	9.28～30	槍～北穂	川名

北アルプス——後立山周辺

1963	6.10～15	赤岩尾根～鹿島槍往復～針ノ木～烏帽子～野口五郎～湯俣	ＣＬ小島，佐藤(之，力)
1964	5. 1～ 5	八方尾根～五竜～鹿島槍～種池	ＣＬ半場，山本，小野，佐藤(久)吉沢，田沼
	11.21～25	八方尾根～五竜～遠見尾根	ＣＬ原，池知，平川，岡田
1965	7.22～28	黒薙温泉～北又～雪倉～白馬岳（雨の為柳又谷は断念）	ＣＬ岡田，斉藤，吉沢，中村
1966	5. 1～13	神城～中遠見（五竜Ｇ２中央稜，北尾根，鹿島槍北壁主稜等）	斎藤，俵，宮武,(ＯＢ)藤島，村尾(金，智)，望月，山田，山本健，大橋，山元，中島，長沢，小島，佐藤(之)，平川
	5.25～28	猿倉～小日向のコル～杓子岳往復，小蓮華尾根往復（白馬東面偵察）	ＣＬ中村，金成，賀川

	6. 5～12	宇奈月～黒薙～笹平～突坂尾根～猫又山～清水岳～白馬～猿倉（竹の他，石楠花等のヤブコギに苦しめられ，おまけに落雷，新雪有り）	ＣＬ岡田，俵
	6.29～7.1	大谷原～荒沢溯行～天狗尾根～鹿島槍～赤岩尾根～黒沢峠～篠場	俵
	10.22～28	八方尾根～唐松～五竜～鹿島槍～天狗尾根～大谷原（金成が石油で右腕をやられた）	ＣＬ中村，金成，俵
	11.17～21	遠見尾根～五竜往復（春山偵察）	ＣＬ加藤，金成，宮武
1967	3. 4～18	猿倉～双子尾根～白馬旭岳，唐松往復	ＣＬ中村，加藤，金成，俵，宮武，藤原，戸川，大田，藤波
	4.28～5.6	遠見尾根～五竜～鹿島槍～針ノ木～蓮華～七倉（キレットから鹿島槍の登りに手こずる）	ＣＬ中村，俵，大田，戸川
	8.15～21	針ノ木～烏帽子～槍～北穂～涸沢	ＣＬ中村，藤原，大田，西牟田，前田
	10.21～28	八方尾根～五竜～鹿島槍～岩小屋沢～新越乗越～扇沢（入山時紅葉，下山時白銀）	ＣＬ加藤，宮武，藤原，今泉，大田
	11.10～14	扇沢～爺岳～鹿島槍往復（風雪にたたかれあわただしい登山）	ＣＬ中村，金成，今泉
	12.10～26（冬山）	八方尾根～唐松～五竜～Ａ沢のコル～五竜～遠見尾根（詳細98ページ）	ＣＬ加藤，金成，宮武，戸川
	12.11～26（冬山）	爺ガ岳南尾根～鹿島槍，岩小屋沢往復（詳細101ページ）	ＣＬ中村，俵，藤原，今泉，大田
1968	4.25～5.4	遠見尾根～大遠見～五竜往復～カクネ里側支稜～天狗の鼻～鹿島槍往復～天狗尾根～大谷原（5. 1天狗尾根第一クーロアールにて中村滑落死亡，詳細104ページ）	ＣＬ俵，藤原，戸川，中村，藤巻，松尾
	10.18～24	栂池～白馬～唐松～五竜～Ａ沢のコル，鹿島槍往復～遠見尾根（冬山偵察）	ＣＬ俵，宮武，藤原，西牟田，藤巻
	12.13～23	爺岳南尾根～鹿島槍往復～新越乗越～針ノ木往復～扇沢	ＣＬ俵，宮武，藤原，戸川，金子，西牟田，松尾
1970	7.27～8.6	針ノ木～東沢出合～赤牛～高天原	ＣＬ金子，西牟田，藤巻，井

	（夏山）	～黒部上廊下，赤木沢～双六～笠ガ岳～錫杖岳三本槍	草，橋本，羽部
	12.25～1.2	栂池スキー合宿	ＣＬ金子，西牟田，藤巻，井草，西田，羽部
1971	3.26～29	遠見尾根スキー合宿	松尾，羽部，ＯＢ加藤
	10.12～14	八方尾根～唐松～五竜～遠見尾根	松尾，高橋，前神
	12.29～1.6	栂池スキー合宿	前神，西田，上田，松尾
1972	3.17～24	八方尾根スキー合宿	上田，松尾，西田，前神
	10.3～8	赤岩尾根～鹿島槍～五竜～白馬～大池～栂池	上田，前神，元井，大枝
	12.29～1.1	遠見尾根～五竜往復	上田，増井，ＯＢ俵，金子
1973	2.24～27	天狗原スキー	前神
	3. 3～5	八方尾根スキー	松尾，増井
	3.13～22	栂池～白馬三山往復（２年と１年だけの合宿，スピーディーとは言えなかったが白馬鑓まで行け，その後に好影響）	前神，加藤，増井，藤田，兵藤
	6.13～17	後立山縦走	２名
1974	6.27～29	白馬岳～唐松岳～八方尾根	２名
1975	4.27～5.2	白馬大池～白馬～唐松～五竜～鹿島槍～爺岳～扇沢（１年生隊は29日縦走隊と杓子手前で分れ白馬大池に戻る）	ＣＬ加藤，松田，浅田，若林，近藤，坂牧，／１年隊ＣＬ兵藤，佐藤（活），永戸，佐藤（周），神野
	6.28～30	遠見尾根～大遠見～白岳沢下降～五竜北尾根～北尾根主稜～キレット～鹿島槍～天狗ノ頭往復～冷池～赤岩尾根（荒沢奥壁北稜は断念）	加藤，前神
	12.11～21（冬合宿）	遠見尾根～五竜～鹿島槍～爺ガ岳～南尾根～扇沢（詳細125ページ）	ＣＬ加藤，兵藤，浅田，佐藤（活，周），松田，近藤，坂牧，永戸
1976	11.7～9	白馬大池～小蓮華尾根～白馬尻～猿倉	近藤，佐藤（周）
1977	3. 7～16（春合宿）	栂池～三国境～雪倉岳，白馬，白馬鑓往復，スキー練習	ＣＬ佐藤，神野，中西，引地，米田
	6.24～26	赤岩尾根～鹿島槍往復～新越乗越～針ノ木	岡部，中西
	10.18～20	猿倉～鑓温泉～唐松～五竜～遠見尾根	神野，引地，米田

1978	8.25～30	赤岩尾根～鹿島槍～五竜～白馬～雪倉～犬ガ岳～白鳥山～親不知	萬濃
	10.7～9	北小谷～風吹大池～白馬大池～小蓮華～白馬～猿倉（冬山偵察）	引地，萬濃，中村，土方
	11.9～11	北小谷～風吹大池～白馬大池～三国境往復（冬山偵察）	神野，佐藤，田中，八尾
	12.15～24（冬合宿）	北小谷～風吹大池～白馬大池，白馬岳，小蓮華岳往復，スキー練習	ＣＬ神野，佐藤，引地，小林，田中，中村，土方，萬濃，八尾，谷津
1979	10.10～13	唐松，五竜	ＣＬ萬濃，田中，竹若，吉田
	10	欅平～祖母谷温泉	
	11	～稜線～南越付近（ヤブコギに終始）	
	12	～唐松山荘	
	13	～五竜～遠見尾根（冬山偵察）	
	11.10～11	南神城～天狗風切地蔵～小遠見山～五竜往復（冬山偵察）	引地，米田，土方，萬濃
	12.12～19（冬合宿）	南神城～天狗風切地蔵～小遠見山～五竜往復	引地，小林，米田，田中，中村，土方，萬濃，宮下，竹若，吉田
1980	4.29～5.4	唐松～不帰～白馬鑓～猿倉	小林，中村
	4.29～5.3	八方尾根～五竜～鹿島槍～赤沢西尾根往復～屏風尾根～扇沢	土方，田中
	5.16～19	白馬主稜	小林，萬濃
	17	猿倉～白馬尻	
	18	5：20～白馬頂上 13：40～猿倉 15：55	
	11.7～9	遠見尾根～五竜往復	小林，竹若，岡部
	12.26～1.6	扇沢～大沢～屏風尾根～スバリ岳～赤沢岳～爺ガ岳～鹿島槍往復～赤岩尾根（詳細146ページ）	ＣＬ土方，萬濃，中村，宮下，岡部，竹若，石川，安島，稲毛
1984	4.31～5.3	八方～唐松～五竜～遠見	石丸，五ヶ山，白石
	10.24～26	突坂尾根～白馬～栂池	五ヶ山，鮎沢
	10.25～27	爺東尾根～鹿島槍～赤岩尾根（春山偵察）	石丸，谷口，斎藤，外池，河野
	12.15～21	爺東尾根～鹿島槍～赤岩尾根（冬山）	石丸，谷口，鮎沢，斉藤，外池，河野

1963	7.18～31 （夏定）	剣沢二俣定着	蛭川，村上，吉川，斉藤，加藤，高崎，平川，原，池知，石田，佐藤(久，力，之)，山本，小島，本間，長沢，竹中，半場，岡田，三森，ＯＢ石
	8. 1～7 （夏縦）	二俣～内蔵助平～タンボ平～五色～薬師～雲ノ平～鷲羽～湯俣	蛭川，長沢，本間，山本，佐藤(之，久)，石田，岡田，斉藤，吉川，加藤
	8. 1～4 （夏縦）	二俣～内蔵助平～棒小屋沢～爺ガ岳～針ノ木岳	竹中，村上，池知，原
	8. 1～7 （夏縦）	二俣～黒薙～柳又谷～雪倉～白馬～唐松	小島，半場，佐藤(力)，高崎
1966	8. 1～15 （夏定）	剣沢定着	ＣＬ岡田，斉藤，吉川，田沼，中村，加藤，宮武，俵，戸川，大田他３名
	10. 19～30	内蔵助平～インゼル状台地～真砂尾根第２岩峰尾根～立山往復下山（冬山偵察，荷上げ）	ＣＬ岡田，斉藤，吉川，田沼，加藤，宮武，藤原，戸川，大田
	12. 10～15 （冬合宿）	内蔵助平往復（真砂尾根より剣岳をねらうも豪雪の為断念）	ＣＬ岡田，田沼，吉川，中村，加藤，俵，宮武
1967	5. 1～6	内蔵助平	加藤，今泉，賀川
	6. 1～6	内蔵助平～立山～剣～馬場島（鳴沢岳西尾根立山東面中央稜，南稜）	俵，藤原，戸川，大田
	8. 1～7 （夏縦）	黒部源流～薬師沢～薬師岳	加藤，今泉，戸川
	11. 11～16	弥陀ヶ原～立山～剣岳往復（風雪きつく，前剣で表層雪崩，春山偵察）	俵，宮武，大田
1968	3. 5～23 （春合宿）	弥陀ヶ原～室堂～雄山～剣，大汝峰往復	ＣＬ俵，宮武，藤原，戸川，今泉，大田，西牟田，金子，松尾，藤巻，中村，前田
1970	11. 20～29	立山（文登研，他大学との交流，山スキー等得るところ大）	井草，羽部
1972	4. 28～5. 7	内蔵助平現役ＯＢ合同合宿（詳細115ページ参照）	上田，前神，西田，増井，高橋，藤田，元井，兵藤，ＯＢ山崎，高崎，山本，加藤，山

			田，中島，岡田
	7.24～29 （夏定）	剣沢定着（長次郎，平蔵谷，三ノ窓，源治郎尾根等，7.25に増井足首骨折ショイコで26日室堂へ）	ＣＬ上田，西田，前神，高橋，増井，元井，加藤，藤田，兵藤
	7.30～8.10 （夏縦）	～五色～平～針ノ木峠～船窪～烏帽子～祖父沢～黒部五郎～三俣～双六～笠往復～槍～上高地	同上
1975	7.18～28 （夏定）	剣岳真砂沢定着（八ツ峰，源治郎尾根，南壁，６峰Ａフェース中大ルート，ＣフェースＲＣＣルート，剣稜会ルート，ジャンダルム，チンネ，中央チムニー，Ｇチムニー，Ｃクラック，左稜線，剣尾根，小窓尾根，内蔵助平，下廊下等）	ＣＬ加藤，兵藤，前神，藤本，若林，松田，佐藤(活)，浅田，近藤，坂牧，永戸，神野，佐藤(周)
	7.29～8.2	五色～薬師～黒部五郎～祖父岳～赤牛岳～東沢出合～針ノ木峠～大町	ＣＬ加藤，坂牧，永戸，神野，佐藤(周)
1976	10.24～27	白山 高山～大白川ダム～御前峰往復	松田，佐藤
	11.13～17	白山	兵藤，浅田
	12.11～17	大倉尾根より白山，御前峰往復（詳細130ページ）	松田，佐藤(活)，浅田，佐藤(周)，神野，中西，引地
1977	7.20～30 （夏定）	剣真砂沢定着（八ツ峰，源治郎，北壁，南壁，チンネ北条・新村，剣尾根，北方稜線等）	ＣＬ近藤，神野，佐藤，岡部，中西，引地，米田
	7.31～8.5 （夏縦）	～五色～間山～太郎兵衛平～雲ノ平～双六～槍	ＣＬ近藤，引地，石川
	7.30～8.5 （夏縦）	～平～東沢～乗越～雲ノ平～双六～槍	ＣＬ神野，中西，岡部
	10.22～24	黒四～丸山への尾根途中～平蔵コル～剣～早月～馬場島	佐藤，中西，岡部
	11. 6～9	馬場島～クズハ山～プラトー～室堂（冬山偵察）	ＣＬ近藤，引地，米田，吉田
	12.10～24 （冬合宿）	馬場島～中山のコル～クズハ山手前～1885のピーク～プラトー～奥大日岳の先～剣御前～馬場島（16～21日吹雪の為沈，剣アタック断念）	ＣＬ近藤，神野，佐藤，岡部，中西，平田，吉田
1979	7.21～30	剣真砂沢定着(本峰南壁，源治郎尾	ＣＬ引地，小林，田中，中村，

	（夏定）	根，八ツ峰，６峰Ａフェース魚高ルート，Ｃフェース剣稜会ルート，白荻川，北方稜線，7.25Ｃフェース登攀中小林がメロン大の石を落とし上智大パーティーにあたり救出作業にあたる）	土方，萬濃，宮下，谷津，岡部，竹若，吉田
	7.31～8.8	～五色～間山～薬師峠～雲ノ平～双六～中岳～北穂～横尾	ＣＬ小林，田中，宮下，岡部
	7.31～8.6	～針ノ木谷出合～針ノ木峠～冷池～鹿島槍～五竜～唐松～白馬～雪倉～蓮華温泉（日本海をめざすも悪天の為断念）	ＣＬ引地，米田，竹若
1980	10.30～11.3	馬場島～東小糸谷出合～クズハ山～西大谷山手前～東大谷出合～毛勝谷出合～馬場島（春山偵察，詳細142ページ）	田中，萬濃
	11.14～17	室堂より剣往復(春山偵察，荷上)	土方，中村
	11.16～17	剣御前まで（春山荷上）	萬濃他３名
1981	3. 9～22（春合宿）	奥大日尾根～剣～雄山東尾根～黒部ダム（スバリ西稜経由屏風尾根下山を予定するも断念）	ＣＬ土方，中村，萬濃，宮下，岡部，竹若，安島，稲毛，石川
	4.28～5.5	剣岳八ツ峰一峰三稜より八ツ峰縦走	土方，萬濃，石川，稲毛，ＯＢ藤本，加藤，兵藤
1982	7.21～31（夏定）	剣真砂沢定着（源治郎，八ツ峰，６峰Ｂフェース，Ｃフェース，剣稜会ルート，Ｄフェース，本峰南壁，三ノ窓等，詳細148ページ）	ＣＬ岡部，安島，石川，稲毛，山本，辻，石丸，五ケ山，高野，鈴木，百瀬，ＯＢ宮下
	8. 1～11	～五色～平～針ノ木～鹿島～五竜～白馬～朝日～犬ガ岳～親不知（詳細151ページ）	ＣＬ岡部，石丸，辻，高野，百瀬
1984	５月上旬	剣	文部省登山研修会，谷口
	7.22～30	剣真砂沢定着，源治郎，八ツ峰下半，Ⅵ峰Ｂフェースにて白石が落石で左手薬指，小指を骨折，合宿中止	石丸，五ケ山，白石，谷川，川名，鮎沢，斉藤，外池，河野
	8.23～29	剣	文部省登山研修会，谷口
	10.13～16	魚津～大明神沢出合～毛勝山～釜谷山～猫又山～ブナクラ谷下降～馬場島	石丸，鮎沢，斉藤，河野

南アルプス

1963	5.15～19	転付峠～千枚岳	高崎，原
	8.17～18	笊ガ岳	半場他２名
	10.17～21	夜叉神峠～深沢吊橋～荒川出合～荒川本谷～アスナロ沢～農鳥岳～間ノ岳～北岳，バットレス３，４尾根	蛭川，小野，平川
	10.15～21	横岳峠～鋸岳～甲斐駒～仙丈往復～早川尾根～鳳凰三山～北岳で上記と合流	本間，佐藤(之，久)，伊藤，吉沢，吉川
	10.16～23	赤石沢源流帯，百間洞沢～赤石沢本谷下降～奥赤石沢遡行	長沢，山本，原
1964	5. 1～ 5	夜叉神峠～鳳凰三山～早川尾根～北沢～戸台	小島，三森，吉川，加藤，中村，金成
	5. 5～ 7	北沢～野呂川～両俣～白峰三山	小島，三森
	6.12～17	三伏～塩見～北岳～両俣～仙丈～北沢～戸台	斉藤，岡田，吉沢，田沼，金成，加藤，中村
	11.23～26	広河原～白峰三山～奈良田	小島，小野，高崎，吉川，田沼
1965	5. 2～ 5	小太郎尾根	岡田，田沼
	5. 1～ 5	鳳凰三山	高崎，平川，加藤
	7.22～26	北岳バットレス(４尾根中央稜等)	原，佐藤(久)
	10.17～24	南ア南部縦走，三伏峠～光岳～寸又峡温泉	岡田，田沼，金成，俵，賀川，佐藤
	10.17～21	南ア北部縦走	高崎，佐藤(久)，加藤，宮武，千田
1966	3. 6～23	三伏峠～塩見岳～間ノ岳～北岳～池山吊尾根～荒川（八本歯で強風のため加藤転落，足首骨折）	岡田，斉藤，吉川，中村，加藤，宮武，俵
	4.29～5.4	夜叉神峠～鳳凰三山～早川尾根～甲斐駒往復～戸台	岡田，中村，藤原，戸川他４名
	9.15～20	北岳バットレス３，４尾根	岡田，中村，藤島，田沼，加藤，宮武，ＯＢ９名
1967	4.28～5.1	鳳凰三山（雨と雪の為早川尾根は断念）	金成，西牟田，藤原他２名
	7.25～26	北岳バットレス４尾根（中央稜は中村滑落で敗退）	中村，加藤

	8. 4～7	北沢峠～仙丈，甲斐駒往復	中村，藤原，西牟田，前田
	10.18～24	転付峠～西俣沢～塩見岳～間ノ岳～北岳	中村，戸川，西牟田，前田，金子，松尾，藤巻
1968	10.18～23	大沢渡～赤石～荒川三山～二軒小屋～転付峠（春山偵察）	戸川，金子
1969	3. 4～14	大沢渡～大沢岳，赤石荒川岳往復	宮武，藤巻，金子，松尾，西牟田
	4.28～5.2	鳳凰三山～早川尾根～北沢～甲斐駒往復～戸台	宮武，羽部，松尾，橋本，井草
	4.28～5.2	黒戸尾根～甲斐駒～鋸岳往復	金子，西牟田，藤巻
	10. 7～12	畑薙～茶臼岳～聖岳～赤石岳～荒川岳～塩見岳～間ノ岳～北岳	西牟田，藤巻，羽部，橋本
	10. 7～10	戸台～北沢～仙丈往復～野呂川～二股～北岳～間ノ岳～農鳥岳～奈良田（春山偵察）	金子，井草
1970	3.26～4.4（春合宿）	戸台～北沢～仙丈，甲斐駒往復～野呂川～二股～北岳～間ノ岳～農鳥岳～奈良田（戸台川本谷はＦ２で敗退）	金子，藤巻，西牟田，羽部，橋本，勝賀瀬
	4.21～27	戸台～戸台川本谷～甲斐駒～鋸岳往復～五合～黄蓮谷出合～坊主岩往復～尾白川下降（戸台川本谷はワンビバークでぬける）	金子，藤巻，西牟田，橋本，羽部
	5.14～19	鳳凰三山～広河原～二俣定着，北岳バットレス１，３，４尾根，中央稜	金子，藤巻，西牟田，井草，橋本，羽部，神谷
	8.31～9.2	甲斐駒黄蓮谷右俣，赤石沢奥壁中央壁(9.2中央壁にて西牟田，橋本墜落，橋本死亡，詳細111ページ)	金子，西牟田，橋本，神谷
1971	4.28～5.2	夜叉神峠～鳳凰三山～広河原峠～広河原（北岳は雪の為中止）	井草，羽部，松尾，西田，前神，高橋
	8. 8～9.1	竹宇より甲斐駒往復（橋本の追悼山行）	井草，前神，工藤，ＯＢ多数
1972	2.11～13	戸台～北沢峠～駒津峰（大雪の為甲斐駒断念）	上田，前神，ＯＢ金子
	4. 5～7	夜叉神峠～鳳凰三山～御座石	上田，前神，西田
	10.28～30	黒戸尾根～甲斐駒～鋸岳～角兵衛沢～戸台	西田，増井

	10.24 ～11.1	三伏峠～塩見往復～赤石～聖～茶臼岳～畑薙	上田，前神，藤田，元井，加藤，大枝
1973	9.22～24	シレイ沢～地蔵岳～御座石	古橋，兵藤，佐藤
	10. 6～10	北岳バットレス1，3，4尾根	前神，藤本，古橋，加藤，中村，ＯＢ金子
	10.10～14	甲斐駒～三伏峠	藤田，若林
	10.20～24	荒川三山～三伏峠～農鳥岳	前神，松田
	12. 1～ 2	櫛形山	前神，若林，佐藤，浅田
1974	4.28～5.2	赤石東尾根～聖岳～畑薙ダム	元井，松田，若林
	5. 2～ 6	熊穴沢～鋸岳～甲斐駒ガ岳	藤本，加藤，兵藤，佐藤
	5. 5～ 7	甲斐駒ガ岳（新人歓迎）	前神，永戸，近藤
	6.28～7.3	甲斐駒ガ岳～仙丈岳～北岳	前神，藤田
	8. 4～ 9	野呂川右俣～大井川東俣～奥西河内沢～小渋川	藤田，若林，西田
	8.15～18	北岳バットレス	佐藤他２名
	10.10～15	転付峠～荒川三山～赤石岳～光岳	若林
	10.22～27	茶臼岳～赤石岳～塩見岳～北岳	前神，若林，永戸，坂牧
	11. 6～10	易老渡～易老岳～光岳～聖岳～赤石岳～西沢渡（春山偵察）	加藤，佐藤
1975	2.26～31	甲斐駒	加藤，藤田，坂牧，永戸
	3.10～19	光岳～赤石岳～西沢渡（詳細123ページ参照）	ＣＬ加藤，兵藤，松田，若林，佐藤，藤田，坂牧
	6.20～28	南ア全山縦走，黒戸尾根～両俣～光岳～信濃俣～千頭	坂牧
	6.21～25	塩見～北岳	松田，佐藤
1976	10.23～30	畑薙～茶臼～赤石岳～荒川～塩見～間ノ岳～北岳～深沢下降点	佐藤(活)，神野，中西，引地
	6.27～29	黒戸尾根～甲斐駒～北沢～仙丈往復～戸台	佐藤(活)，神野，酒井，引地
	9. 1～ 4	甲斐駒追悼山行（レリーフ作製）	佐藤(周)，大慶，ＯＢ金子，西牟田
	9.23～25	甲斐駒黄蓮谷左俣	兵藤，浅田，近藤，佐藤(周)
	10. 9～11	北岳バットレス，Ｄガリー～４尾根中央稜，１尾根	佐藤(活)，近藤，ＯＢ前神
1977	5. 2～ 3	鳳凰三山	神野，佐藤，岡部，中西，引地，川端
	4.30～5.2	黒戸尾根～甲斐駒～早川尾根～鳳凰三山	岡部，中西

	8.31～9.5	黒戸尾根～7合までレリーフ材料ボッカ 北岳バットレス4尾根	岡部，中西，引地
	10. 3～6	夜叉神～鳳凰三山～北沢小屋～甲斐駒～黒戸尾根	石川他1名
1978	3.11～15（春合宿）	転付峠～千枚岳～悪沢岳～中岳～荒川岳～大聖寺平～広河原（14日悪沢の下りで中西滑落足を骨折，翌日，自衛隊ヘリコプターにて救出，詳細134ページ）	神野，佐藤，岡部，中西，引地
	4. 6～9	悪沢岳春合宿の装備回収	神野，佐藤，岡部，引地，米田
	10.14～21	畑薙～茶臼岳～聖岳～赤石岳～三伏峠～塩見岳～北岳～広河原	小林，黒田，田中，中村，土方，萬濃，八尾，谷津
1979	6.15～17	黒戸尾根～甲斐駒～北沢～仙丈往復～戸台	中村，田中，吉田
	6.15～18	転付峠～千枚岳～悪沢岳～大聖寺平～東尾根分岐～赤石岳～富士見平～赤石小屋～椹島	萬濃，竹若
	8.30～9.7	寸又峡～光岳～聖岳～赤石岳～悪沢岳～転付峠	田中
	11.10～13	池山吊尾根～北岳～間ノ岳～塩見岳～三伏峠～鹿塩（春山偵察）	小林，田中，岡部
1980	3.11～20	池山吊尾根～北岳～間ノ岳～農鳥往復～塩見岳～三伏峠（詳細 136ページ）	小林，中村，田中，萬濃，宮下，竹若，岡部
	6.20～24	転付峠～荒川三山～赤石岳～大沢岳～大沢渡～北又渡～平岡	岡部，安島，石川
	9.20～24	黄蓮谷右俣，尾白川本谷	中村，萬濃，稲毛，入佐，OB引地
	10.4～6	北岳～間ノ岳～農鳥岳～塩見岳～三伏峠	入佐，原
	10.4～5	北岳バットレス4尾根～中央稜	引地，中村
1981	7.11～15	北岳バットレス4尾根～中央稜	土方，中村，萬濃，宮下，岡部，安島，稲毛，石川，山本，OB引地，佐藤(活)
1984	8. 2～11	広河原～シレイ沢，早川尾根，戸台，川本谷，鋸岳，仙丈～両俣小屋，北岳～農鳥岳～奈良田	谷口，鮎沢

	9. 1～2	黄蓮谷右俣	金子，戸川ＯＢ，五ヶ山，鮎沢
1985	1. 1～3	鋸岳	倉知ＯＢ，谷口，鮎沢

上越・尾瀬等

1963	8.25	谷川堅炭岩ＫⅢフェース	佐藤(之)，ＯＢ倉知
	8.30～9.1	北秩父双子山南面フェース右稜，谷川一ノ倉，１ルンゼ，Ｂルンゼ	蛭川，佐藤(之)
	9.27～29	谷川一ノ倉2.3 ルンゼ，一ノ沢	蛭川，竹中，小島，佐藤(之)，ＯＢ多数
1964	5.23～25	谷川，マチガ沢，幽ノ沢，一ノ倉沢雪訓	小島，半場，山本，小野，佐藤(之)，三森，高崎，石田，平川，佐藤(久)，斉藤，岡田，吉沢，吉川，金成，中村，加藤，ＯＢ大，倉知
	5.25～28	尾瀬至仏岳	吉川，加藤，中村，金成
1965	1. 9～13	谷川天神平スキー合宿	高崎，平川，加藤，中村
	5.29～31	谷川マチガ沢，芝倉沢雪訓，一ノ倉沢４ルンゼ	高崎他13名
	9.27～30	谷川衝立正面（詳細92ページ）	原，佐藤(久)，池知，石田
1966	5.28～31	谷川マチガ沢，芝倉沢雪訓	岡田他９名，ＯＢ原，高崎
	5.30～31	沼田～長蔵小屋～山ノ鼻～鳩待峠～沼田	宮武，藤浪，山口
	8.29～31	谷川南稜登攀	岡田，加藤，宮武
1967	5.26～29	谷川マチガ沢雪訓	中村他８名
1968	6. 1～3	〃	俵他７名
1971	6.10～14	〃	井草他６名，ＯＢ加藤，中村，宮武
1972	5.19～21	白毛門～巻機山～清水（巻機山で迷いビバーク，翌日ルートを発見）	前神，工藤，増井
	5.26～28	谷川芝倉沢雪訓（加藤がピッケルで頭部を負傷）	上田他８名，ＯＢ俵，中村，加藤，宮武
	5.29～30	～谷川岳～万太郎山～仙ノ倉～平標山～大源太山～三国峠	西田，前神，藤田
	10.9～10	水上～上ノ原～武尊岳	西田，加藤，藤田

	10.17～18	大清水～燧岳～至仏山～鳩待峠～戸倉	前神，藤田
1973	1.13～16	三国峠～平標～仙ノ倉（新雪のラッセルに苦しめられる）	西田，前神
	3. 8	妙義山	西田，前神，藤
	5.26～28	谷川マチガ沢雪訓	前神以下９名
	5.29～6.2	谷川岳～一ノ倉岳～茂倉岳～武能岳～清水峠～巻機山・駒ガ岳（藤田の負傷があり，巻機山＝中ノ岳は省略）	前神，藤田，大枝
	6. 7～8	巻機山	増井
	6.21～24	八海山～中ノ岳～兎岳～荒沢岳～前嵓尾根～銀山湖	藤田，増井，松田，佐藤
	8.21～23	後閑～猿ヶ京温泉～赤谷川～金山沢～笹穴沢～平標山～三国峠（滝が連続している上に雨で気がぬけない，最後の草原が素晴しい）	前神，ＯＢ井草
	9. 1～2	六日町～清水～米子沢～巻機山	前神，松田
	9. 9～11	水上～洞元湖～楢俣川～沢種沢～スズガ峰～白沢山～平ケ岳～池ノ岳～大倉山～鷹ノ巣（沢種沢は明るくきれいだがつめの藪は猛烈）	前神，藤本，兵藤
	9.22～24	荒沢岳～越後駒ケ岳	藤田
	9.22～24	土樽～蓬峠～清水峠～涸沢山～巻機山～清水	元井，若林，松田
	11.17～19	丹後沢山～越後沢山（雪の為巻機山への縦走は断念，所によっては腰までのラッセル）	藤本他２名
	11.17～22	越後三山中ノ岳（大雪の為中ノ岳頂上でテントが埋まり，日向尾根下山に２日かかる）	藤田，加藤，佐藤
1974	2.20～22	上州武尊岳（スキー山行）	藤本他１名
	4.27～5.2	荒沢岳～中ノ岳～八海山	前神，古橋，藤田
	6.23～25	越後駒ケ岳～中ノ岳～荒沢岳	藤田他１名
	6.23～25	巻機山～丹後山	前神，大枝
	6.28～30	三国峠～仙ノ倉～谷川岳～蓬峠	若林
	8.24～26	谷川ヒツゴー沢	古橋他１名
	9.21～23	利根川源流遡行～丹後山	前神，若林
1975	4. 4～6	天神平スキー	佐藤(活)他１名

	5.23～25	谷川雪訓	加藤以下９名
	5.26～29	清水峠～巻機山～越後湯沢，中ノ岳～越後駒ケ岳～小倉尾根～駒ノ湯	加藤，坂牧，神野，佐藤，前神
	6. 8	谷川一ノ倉南稜	佐藤他２名
	9.10～12	土樽～仙ノ倉谷～西ゼンノ沢～平標山～万太郎～谷川～土合	兵藤，佐藤(活，周)
1976	5.21～24	谷川雪訓	松田以下11名，ＯＢ前神，加藤
	5.25～26	谷川岳～万太郎山～吾策新道～土樽	松田，落合，大慶，酒井，中西
	6.21～22	谷川一ノ倉沢南稜	佐藤(活)，近藤
	6.26～28	越後三山縦走	松田，落合，大慶，中西
	26	小出～枝折峠７：00駒ケ岳小屋11：15	
	27	５：10～中ノ岳８：30雨の為沈	
	28	４：40～オカメノゾキ７：20～五竜岳～八海山～千本桧小屋11：40浅草岳～里宮～大崎15～35～六日町	
	11.13～14	上州武尊山	松田，中西
	13	水上～上野原山の家14：50	
	14	６：25～沖武尊10：35～剣ケ峰11：50～前武尊13：00～花咲15：40	
1977	5.14～15	鳩待峠～至仏山～沼尻～大清水	引地，米田
	5.27～29	谷川雪訓	神野，佐藤，岡部，中西，引地，米田
	10.15	谷川マチガ沢～本峰～西黒尾根	中西，ＯＢ加藤
1978	5.27～6.1	谷川雪訓	神野以下14名
	6.14～16	尾瀬，燧ケ岳，至仏山	石川他１名
	8.13～16	奥只見ダム～鷹ノ巣尾根～平ケ岳～白沢山～大白沢池～楢俣川～至仏～裏燧より御池	谷津他１名
	8.20	谷川ヒツゴー沢	谷津他８名
	10. 8～9	尾瀬	小林，吉田，田中
1979	5.26～28	谷川雪訓	引地以下11名
	5.29～6.2	巻機山まで	萬濃，田中，宮下，岡部，竹若
	29	６：30～清水峠13：50	
	30	６：15～檜倉山12：15	
	31	５：00～巻機山13：00	

	1	13：40～避難小屋14：00	
	2	5：50～清水8：10（越後駒まで行く予定なるも断念）	
	5.29～30	白毛門～清水峠～蓮峠～武能岳～谷川岳～土合	小林，吉田
	5.29～31	一ノ倉南稜，幽ノ沢V字状岩壁右ルート	引地，中村，土方
	5.31～6.1	谷川岳～仙ノ倉～平標山～元橋	中村，土方
	6.25～29	奥利根，水長沢川	谷津，吉田，中丸
	10.20～21	巻機山，米子沢	土方，中村，宮下，他OB多数
1980	2. 9～11	日白山	萬濃他7名
	10	土樽4：30～群大ヒュッテ12：30	
	11	6：00～1250m地点9：40～土樽13：50	
	2.12～14	至仏山スキー	土方，竹若
	5.20～23	一ノ倉中央稜	土方，中村
	5.24～26	雪訓谷川岳	小林以下14名
	5.28～29	谷川岳～三国峠	小林，萬濃，安島，滝浦，竹内，原
	5.28～29	白毛門～清水峠～土合	宮下
	5.28～31	越後三山	岡部，吉田，石川，稲毛，入佐，福田
	28	土合6：49～大湯9：10～小倉山14：15	
	29	4：40～中ノ岳14：15	
	30	3：00～千本檜16：10	
	31	3：50～大倉国分岐7：00バス停11：55	
	7.12～13	西ゼンノ沢	土方，萬濃，田中
	9.13～14	赤谷川笹穴沢	土方，石川，稲毛，OB兵藤，松田
	9.14	マチガ沢本谷～東南稜	中村，安島

八ガ岳・戸隠・中央アルプス等

1963	10. 7～8	八ガ岳広河原沢奥壁2ルンゼ	蛭川，小野
1965	8.10～12	伊那市～内ノ萱～大樽小屋～西駒山荘～濃ガ池～駒ガ岳～宝剣岳～木曽殿乗越～伊那川小屋～倉本	岡田，宮武
1966	1.15～16	美濃戸口～行者小屋～阿弥陀岳往復～石室～横岳～硫黄岳～赤岳鉱泉	加藤，俵
	1. 7～11	北八ガ岳スキー	岡田，宮武
1967	6.27	黒沢～千本松～御岳山	中村，今泉
1971	7. 7～9	阿弥陀南稜～行者小屋～美濃戸口	松尾，工藤，前神
	11.4～7	双子池～黒百合平～渋ノ湯	西田
1972	4. 4～6	阿弥陀南稜～美濃戸口（取付で一日沈，ワンビバークでぬける）	高橋他2名
	11.10～11	木曽福島～八海山荘～田ノ原～王滝頂上～剣ガ峰往復（冬山偵察）	上田，前神
	12.11～14（冬合宿）	同上	上田，前神，藤田，元井，加藤，大枝，増井
	12.11～14	親湯～大河原峠～双子池	西田，藤田
1973	5.3～ 5	北八ガ岳	増井，元井，兵藤，佐藤(活)，松田，若林
	6. 9～10	編笠山～赤岳	大枝
1974	2.23～26	南八ガ岳，赤岳，阿弥陀岳	前神，藤田，元井，若林，浅田，松田
	3.19～21	八ガ岳	佐藤(活)他2名
	5. 3～4	八ガ岳（新人歓迎）	前神，近藤他若干名
	11. 1～2	八ガ岳	佐藤
	11.22～26	御岳（氷雪訓練）	前神，藤本，古橋，加藤他4名
	11.25～26	宝剣岳～空木岳	藤本，若林
1975	3. 1	阿弥陀岳北西稜	近藤
	11.21～24	田ノ原～王滝頂上（二ノ池東斜面にて雪訓）	加藤以下8名
1976	2.27～3.1	赤岳鉱泉ベース（ジョーゴ沢，小同心左稜線，赤岳南峰リッジ等，	松田，佐藤(活，周)，浅田，近藤，坂牧，永戸

		春合宿の強化合宿）	
	9.22—25	赤岳鉱泉～赤岳～夏沢峠～黒百合平～麦草峠～双子池～大河原峠	神野
	10.10～13	権現岳～キレット～赤岳～硫黄岳～黒百合平～麦草峠～双子池	中西
1977	2.19～23	渋ノ湯～黒百合平～硫黄岳～赤岳鉱泉～阿弥陀岳往復～美濃戸（春山プレ合宿）	神野，佐藤，中西，引地，米田
	2.22～24	赤岳	松田，中西
	6.24～26	赤岳～権現岳～信濃境	引地
	11.23～26	田ノ原～王滝頂上（雪訓）	近藤以下８名
1978	2.26～3.3	美濃戸～赤岳～硫黄岳～阿弥陀北稜，石尊稜（春山プレ）	神野，佐藤，中西，引地，米田
	9. 1～ 2	辰野～飯島～越百山～南駒ヶ岳～空木岳～池山尾根	佐藤，土方，ＯＢ望月他２名
1979	2.28～3.2	八ガ岳	引地，小林，米田，田中，土方，萬濃，谷津
	28	渋ノ湯11：15～黒百合平13：30	
	1	６：35～天狗岳７：40～夏沢峠９：25～硫黄岳10：55～赤岳鉱泉12：05	
	2	６：25～赤岳８：30～硫黄岳12：15～美濃戸口16：25（春山プレ合宿）	
	12.27～30	竜源橋～天祥寺平分岐～亀甲池～双子池～北横岳～雨池峠～縞枯山～麦草峠～高見石～黒百合平～天狗岳～渋ノ湯	土方，岡部
1980	2.21～26	野辺山～県界尾根～大天狗～赤岳～赤岳鉱泉石尊稜，阿弥陀北稜，赤岳主稜（春山プレ）	小林，土方，萬濃，中村，田中，宮下，岡部，竹若，吉田
1981	3. 1～ 2	小同心クラック，赤岳主稜，ジョーゴ沢（春山プレ）	土方，中村，萬濃，宮下，岡部，竹若，安島，稲毛，石川
	4. 3～ 3	戸隠連峰	土方，萬濃，中村，ＯＢ加藤
		上楠川橋６：20～Ｐ１尾根取付12：30～1580m12：30	
	4	６：25～ジャンクションピーク10：30～Ｐ１ノ頭15：30～西岳頂上16：00～幕営18：00	

	5	6：40～本院岳7：10～八方睨8：40～奥社10：50（詳細『針葉樹会報』59号）	
	6	～五地蔵岳～高妻山	
	7	～笹ガ峰	
	4.27～28	北八ガ岳	土方，萬濃，中村，岡部，安島，稲毛，石川，五ヶ山，石丸，寺戸，野中
1982	3.15～26	阿弥陀岳～硫黄岳～横岳～蓼科山	岡部，安島，石川，稲毛，山本，辻，石丸，五ヶ山
1984	3月上旬	八ヶ岳プレ春合宿，赤岳小屋をBCに雪訓	石丸，五ヶ山，白石，谷口，川名
	4.29～30	茅野～横岳～雨池～麦草峠～高見石～渋ノ湯	石丸，五ヶ山，白石，川名，鮎沢，斉藤，外池，岡本，藤田
	11. 4～6	木曽福島～正沢川本谷～木曽駒～宝剣岳～前岳	鮎沢

北海道・東北

1964	1. 6～12	吾妻連峰スキー合宿，一切経山等に登る	小島，半場，小野，平川，斉藤，田沼，吉沢
	8. 3～11	日高山行 新冠川～幌尻岳～エサオマントッタベツ岳～トッタベツ川～帯広 （悪天による増水に苦しめられる）	半場，小野，吉沢，吉川
1965	7.20～30	日高山行（入山後間もなく田沼が怪我をし計画中止）	吉川，田沼，加藤
	27	帯広～釧路～標茶	加藤
	28	～根室標津～ラウス温泉	
	29	ラウス岳～岩尾別	
1968	7.11～17	飯豊縦走　カイラギ雪渓～北股岳～御西岳～大日岳～日出谷	俵，西牟田，金子
1971	9.22～26	飯豊縦走　カイラギ雪渓～北股岳～湯ノ平温泉～新発田	西牟田，西田，松尾，前神
1972	6.29～7.3	飯豊縦走　カイラギ雪渓～飯豊山～三国岳～御沢～川入～一ノ木～	前神，加藤，兵藤，増井

		喜多方	
1974	4. 6～8 7. 6～8 8. 5～14	安達太良山 朝日連峰大鳥池～大朝日岳 日高コイボクシュシピチャリ川～カムイエクウチカウシ岳～エサオマントッタベツ岳～新冠川二俣～幌尻岳～トッタベツ川（入山から6日目にして漸くカムイエクウチカウシ登頂，北海道の山の深さに感激）	佐藤他1名 加藤，OB西田 前神，加藤，兵藤，浅田，松田
1975	6.27～30 6.28～30 8. 4～9 10～12 8.24～25	飯豊縦走　一ノ木～笹平～地蔵岳～飯豊山～御西岳～カイラギ岳～北股岳～針立峰～前杁差岳～大石～越後下関 朝日連峰縦走　大鳥池～大朝日～小朝日～古寺 日高　コイカクシュサツナイ岳等 大雪　トムラウシ等 （詳細　　参照） 利尻岳	永戸 兵藤，佐藤，神野，元井 兵藤，若林，松田，近藤 同上 浅田
1977	6	朝日連峰	近藤，神野
1978	6.17～20	飯豊連峰　御沢～地蔵山～飯豊本山～御西岳～カイラギ岳～北股岳～門内岳～杁差～東俣林道～越後下関	神野，引地，小林，田中，中村，萬濃
1979	8. 7～12 7 8 9 10 11 12	十勝岳 ～十勝岳温泉～三峰山下 ～富良野岳往復～上ホロカメットク山～十勝岳～鋸，美瑛のコル ～オプタテシケ山～双子池 ～コスマヌプリ～釣鐘山～三川台～トムラウシ直下 ～化雲台～五色岳～忠別岳～白雲石室 ～北海岳～間宮岳～旭岳～黒岳～層雲峡 （熊の気配も無し，800発買った爆竹が半分以上残る）	中村，土方，萬濃，谷津，吉田

1980	6.19～22	朝日連峰 宮宿～白滝～大朝日岳～寒江山～化穴山～大鳥	中村，吉田，入佐
	8. 3～11	日高	田中，岡部，竹若，入佐，滝浦
	5	帯広～中札内～八ノ沢出合	
	6	～三股～八ノ沢カール～カムイエクウチカウシ	
	7	～1823ピーク～コイカク北ピーク	
	8	～コイカクシュサツナイ岳～ヤオロマップ岳～1599m峰	
	9	～ルベツネ～ペテガリ	
	10	～ポンヤオロマップ岳	
	11	～帯広	
1981	6.19～22	飯豊連峰 飯豊鉱泉～笹平～地蔵山～三国小屋～御西～飯豊本山～北股岳～門内岳～杁差～東俣	岡部，石丸
1984	3.20～27	飯豊山往復　松ノ木尾～三国岳～切合小屋（春山合宿）	石丸，白石，谷口
	10.2～ 5	山形～白滝～鳥原山～小朝日岳～大朝日岳～大鳥池	谷口，鮎沢，斉藤，河野
	10.12～15	郡山～御沢～飯豊本山～カイラギ小屋～下山	五ケ山，川名

海外遠征記録

1965　カラコルム遠征先遣隊　221
（ミールサミール登頂）

1967　ヒンズークシュ遠征　230
（ノーバイズノン・ゾム、ウドレン・ゾム南峰、
サラグラール南峰登頂）

1975　インドヒマラヤ　266
（ハマヌンティバ登頂）

1977　アフリカ・ケニア山　272
（レナナ峰登頂）

1981　インドヒマラヤ　276
（ホワイトセール峰）

カラコルム遠征先遣隊

一九六五年夏

【メンバー】隊長・甘利仁郎、丸子博之、佐藤之敏

【行　程】

7月20日　日本発
27日　隊長カブールへ
8月3日　全員カブール集結
12日　カブール発、フルンジュ着
13日　キャラバン出発、ロバ七頭
14日　カウジョン着
16日　ミールサミール谷奥にベースキャンプ設営（四一五〇㍍）
18日　第一キャンプ設営（四六五〇㍍）
19日　第二キャンプ設営（南西氷河上四八五〇㍍）
22日　南稜につきあげるガリーにフィックス工作完了
26日　ミールサミール（六〇六〇㍍）登頂

一、カラチにて――現地交渉――

七月二十二日。早朝四時十分カラチ空港着。丁度モンスーンの時期なので想像していた程暑くはない。

七月二十三日。十時半大使館牧内、三井物産関口両氏と共に国防省へ。担当官アブドラ大佐に会う。

大佐はなかなかの偉丈夫で、折目正しいいかにも高級軍人らしい風格がある。お茶を飲みながら話を進める。驚いたことに三月に在日パキスタン大使館に提出した我々のアプリケーションが、まだ回ってきていない。写しを一部渡し、格別の配慮方お願いする。国防上特に問題起こらなければ期待にそうようにベストを尽すという返事。勿論すぐに許可しようという答は出るはずがないがかなり希望がもてる。

次いで外務省へ。担当官カユーム氏。元北京にいて最近アジア担当課長となった。ここにも同様、書類は来ていない。写しを渡す。お茶とビスケットが出る。牧内氏の話では、先程の国防省のお茶といい、異例なことの由。

今後の交渉次第では可能性は充分ある。牧内、関口両氏の観測も希望的である。ともかくひとまずカラチでのあいさつは終ったので、予定通り山へ向い出来るだけ早く登頂をすませて、九月十日頃には牧内氏とラワルピンディで落ち合い腰をすえて国防省、カシミール省にあたり、再びカラチへ戻って工作することに決めた。

七月二十五日。我々の荷物を積んだヴェトナム号がカラチへ入港。

七月二十六日。大使館マゴール氏と荷物通関の打合せ。我々のインボイスが「カラチ行」となっている為「カブール向け」のトランジット扱いにするのに若干日数がかかると言う。

七月二十七日。カブールにおける下準備の為甘利隊長一足先に朝六時、カラチを発つ。

（丸子）

二、バンシールに沿って——キャラバン——

八月十二日。朝九時、我々はやっとカブールを離れて山に向けて出発することができた。

ヒンズークシ登山は初めの計画にはなかった。出来れば本隊の目指す、マルビティン峰偵察をするつもりでいたが、どうしても許可の見込がたたず、あきらめてワハン谷を狙ったが、これも現地で簡単にはねられ、結局中央ヒンズークシュへ入ったのである。

その上で、当初の目標は、中央ヒンズークシュの最高峰、コ・イ・バンダコール（六六〇〇㍍）だったが、どうもこの山の周辺にコレラが発生した模様で、具合が悪く、あっさり我々は目標をミールサミールに変更した。カブール出発三日前、しかも、ほとんど何の予備知識も無しにである。

二台のジープは、ソ連の作った素晴らしいハイウェイをぶっ飛ばす。二時頃、グルバハールという村に着き、そこで、メロンだとか、ブドウを、しこたま買い入れた。

この村を過ぎると、ジープはいよいよバンシールの谷に入り、細い危険な道を行く。狭いジープの中を、途中で買い入れた数個のメロンと共に、ゴロゴロ、ガタンゆすぶられ、埃まみれになり、いい加減参ってしまった夕方六時頃、フルンジュという村についた。これ以上先は、車では危険で、翌朝この村からロバ、馬を雇ってキャラバンに出発することになる。

まず初めに、明日からのキャラバンに使うロバや馬の使用賃を決めてしまわないと安心ならないので、早速とりかかったが、これは難渋を極めた。去年のドイツ隊の例によって予定していた馬一頭一日につき八〇アフガニ、ロバ、四〇アフガニを、はるかにオーバーして、馬一五〇アフガニ、ロバ七〇アフガニだと抜かした。我々は通訳を混えて、あらん限りの知恵をしぼって大幅なる賃金値下げを計ったが結局、馬、一三〇アフガニ、ロバ、七〇アフガニという所に落ちついてしまった。その間我々は、警察の名を持ち出したり、〝そんなに高ければこの村では雇わない〟等とおどかしてみたものの、所詮は〝足〟を持っている者の強みと〝足〟を借りなければならない者の弱みの違いは、いかんともしがたいものだった。

八月十三日。いよいよキャラバンの第一日目が始まる。

ロバ七頭、馬一頭に荷を乗せ、もう一頭のロバには隊員が交代で乗ることにして、出発した。ミルクコーヒー色をした禿山に両側を囲まれた谷筋の道を進む。幾分腹の出かかった、我らが隊長

が、小さなロバに股がり、地面に足がつかんばかりにしてユラユラと進む様は、まさに喜劇的でさえもある。もっとも二〇貫の隊長に乗られたロバの小さな目は実に悲劇的ではあったが。途中、幾度かラクダに乗った遊牧民に出会った。彼らは、ソ連との国境近く、いわゆる最も中央アジア的な雰囲気の強い土地から南のジャラバード（カブールの東にあり、冬でも暖かい）までではるばる移動している人達である。

八月十四日。カウジョンという村に着いた。この地で目的の山ミールサミールより源を発し、バンシール谷に流れ込むミールサミールダリオ（ミールサミール谷）に入る。高度は二六〇〇㍍、ちなみにカブールは一七〇〇㍍、フルンジュは二三〇〇㍍、全く非能率なキャラバンで高度差三五〇〇㍍、雪を冠したらミールサミールの頂上までに高度は遅々たるものだった。ここから頂上の鋭くとがった針峰が見えるが、果たしてこれがミールサミールのご本尊か、或るいはその前衛峰か、とんとわからない。

八月十五日。カウジョンを出発、道はいよいよけわしくロバは恐怖におののいてなかなか思うように登ってくれない。そのうちに、二頭が相ついで谷底に墜落してしまった。幸いに死にはしなかったが、体のいたる所から血がふき出して幾分あわれをもよおした。もう使いものにならないので荷をおろしてやるとヒョッコリとおきあがり結構元気にスタスタ降りて行った。やはりロバにも根性のある奴と無い奴がいるらしい。その荷物は我々人間がかつぐことになった。

八月十六日。正午頃、初めてお目当てのミールサミールが姿を現わした。カウジョンから見えた山はミールサミールの前衛峰に過ぎなかった。主峰は雪は少ないが、急峻な岩稜、岩壁で四方を固く擁護された岩山である。黒い程の青空に真白な雪を配したコントラストに初めて見るミールサミールは厳しくも美しかった。

（佐藤）

三、高所キャンプ設営

八月十六日。我々はミールサミール・ダリオのどんづまり、高度四一五〇㍍の地点に、ベースキャンプを設けた。驚いたことに、距離にして二〇〇㍍上方に、イギリスのニューカッスル大学の遠征隊の一大テント村があった。女性一人を混えて、総勢十二名、半数は登山、半数は学術調査の遠征隊で、テント村には各種の観測器具が散乱していた。

そして我々を驚かしまた失望させたことに彼らの隊員二名は、今まさに高度五〇〇〇㍍のアタックキャンプより頂上攻撃を敢行中であった。我々がやっとベースキャンプを建設したところだというのに、一方ではアタック中であるとは、どうも、はなはだフェアイトをそがれる感じである。

八月十七日。体調のすぐれない丸子を残して、高所キャンプの建設予定地を捜すべく偵察に出かけた。ミールサミール西稜鞍部のやや手前の標高四六〇〇㍍の地点に至る頃には雪が本格的に降

ってきた。西稜鞍部の背後には、鉛色の空をバックにミールサミールの西壁とおぼしき大岩壁が威圧的にそびえていた。高度差一〇〇〇㍍以上にも及ぶ垂直の大スラブである。私はその黒く冷たい大岩壁に何か今後の登攀の困難さを予感せざるを得なかった。関口氏は高度の影響により体調が著しく悪化し、しきりに頭痛、吐き気を訴えだした。そこで我々はこの日の偵察を打ち切り、引き返すことにした。

イギリス隊のベースキャンプに寄ってみると、彼らのアタック隊が帰ってきた。私は複雑な期待をもってその成否を聞いたが、答は唯一言 failed であった。アタックメンバーの二人は勿論のこと、その他の隊員の落胆ぶりは見るも憐れであった。これが彼らにとって最後のチャンスで、これをもって全ての登山活動を終了するというものだったのである。私は一言同情の言葉を述べてその場を去った。

さて、いよいよ今度は我々の番である。全員の胸中には、イギリス隊の失敗により、その登頂の困難性を再確認し、同時に、それならばそれでかえって勝負のやり甲斐もあるものだ、という考えがあった様だ。

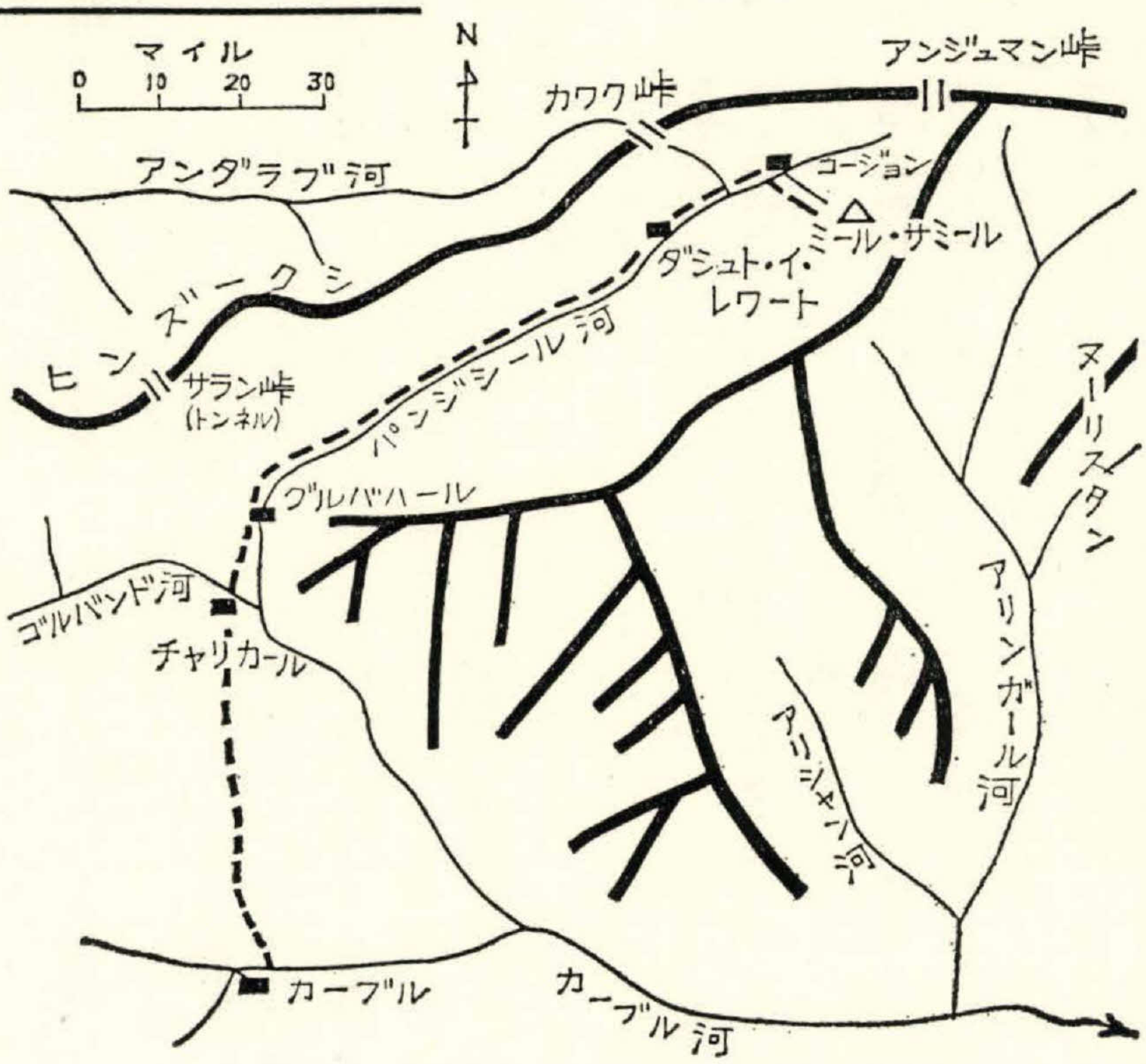
八月十八日。標高四六五〇㍍の西稜鞍部まで一時間程の草地に第一キャンプを設営。関口氏は下山。

八月十九日。第二キャンプ建設の為の若干のボッカと西南稜鞍部までの偵察。この偵察によって第二キャンプ予定地の西南稜鞍部五〇五〇㍍地点は、余りにも狭く、危険で、しかもそこへ行くまでの氷雪の急斜面を、重荷を背負って登ることはかなりの困難を伴い、それにその急斜面手前の南西氷河とも呼ぶべき平坦な大雪渓との高度差は、わずか二〇〇㍍にすぎず、鞍部に第二キャンプを設けるよりも、二〇〇㍍下にはなるが雪渓上にこれを建設した方が、以後より安定した活動ができよう、ということが分った。結局、第二キャンプは南西氷河上四八五〇㍍の地点に決定した。

この結果、我々は頂上六〇六〇㍍まで高差実に一二〇〇㍍のアタックを決行せざるを得なくなった。ところで、頂上までの最も可能性のある登路として期待していた西南稜は、恐ろしく細くやせた、かみそりの刃のような岩稜で、標高五〇五〇㍍の鞍部から頂上六〇六〇㍍までの高度差一〇〇〇㍍を、この岩稜通しに登ることになったら、それこそ決死の登攀になるだろう。稜の左側は高差一二〇〇㍍の垂直の西壁であり、右側を見下ろせば、はるか一〇〇〇㍍も下方に南氷河を臨むことになる。それは滝谷の第四尾根を、三つ四つ連ね、しかも、もっと細くやせさせたものと考えればよいであろう。あの第四尾根を単なる技術的な面でもっと困難にして、しかも未登であったとしても我々は、ひるまないであろう。しかし、それがこの高度で、しかも左右にあれだけの高度感をもって切れ落ちていることを考えた場合、事情は幾分変わってくる。その恐怖感が問題なのである。

正直のところ、我々には、この恐ろしい西南稜を登り切るという確固たる自信がなかった。このルートに、目には見えない何ら

ミール・サミール周辺



かの弱点がない限り一寸絶望的である。まさかこの六〇〇〇㍍そこそこの山にそれ程の決死の行動は挑めない。我々の登頂成功の見通しは全く暗かった。考えられるのは、一旦パンシール谷に降りて、ミールサミールダリオよりも一本上流の支谷をつめて東稜より攻撃するというものであるが、これとても、新しいベースキャンプ建設までに更に一週間を必要とすることになり、もはや我々には、それだけの時間的余裕も持ち得なかった。（佐藤）

四、ミールサミール登頂

八月二十一日。中央ヒンズークシの昼間は、実に暑い。氷河の表面をおおう雪が融け出して、アフタヌーン・フラッドが、そこかしこに出現する。

正午すぎ、丸子、佐藤の二人は、南西氷河四八五〇㍍の第二キャンプから、南西稜の偵察に出かけた。

この日の偵察行は、精神的にも、肉体的にも、実につらいものだった。下痢上りの丸子さんはかなり苦しそうだし、私にしたって連日の行動と、それに加えて、この猛暑。体がだるくてしようがない。南西稜コルまでの雪の大斜面が、どんなに長く感じられたことか。しかも行く手に待っているのは未知の絶望的とも思われる大岩稜。今の我々に、どうしても登ろうという意志があるかと問われたら、かならずしもイエスとは言えまい。私は、それが六〇〇〇㍍そこそこの山であるにしても、小人数のパーティでこれ

にいどむことの難しさをつくづく感じた。それを巧みにやり遂げるには、全員がスピーディにフルに動くことが必要である。しかしここに来て、それがなかなか困難であることを痛切に感じたのである。

結局、この日の偵察は高差一〇〇〇尺の危険な岩登りを強いられ、その上、大した見通しも得られずに終った。

八月二十二日。早朝六時半頃、第一キャンプから登って来た甘利さんに、私はたたき起こされた。前日の疲れで、まだ寝ていたかったが、そうは言っていられない。我々に残されている日数は、あと一週間もない。ともすればデクラインしがちな気分をもりたてて、最後の可能性まで見極めなくてはならない。甘利さんと私は、八時に、第二キャンプを出た。今日こそはと、二〇〇〇尺のフィックス・ザイルと大量のアイスハーケンを持った。朝の内は、昼間の猛暑が信じられないくらい寒くて、むしろ快い。我々は、今までの行動の中では最も快調と思われるペースで南西稜に達し、稜を一〇〇〇尺程登り、岩稜の向う側を、丹念に見た。そして我々は、南西稜と南稜の間隙をカバーしている大バットレスの急峻に落ち込む一本の黒いラインの中に、その単調さを破るが如き、短くはあるが緩いラインのあるのを、ふと発見した。

そうだ！そこには緩いバンド状の斜面が続いていた。南西稜を避けてこのバンドを南稜側にトラバース出来れば、あるいは容易なルートが発見出来るかも知れない。我々二人は、胸をときめかせながら右へ右へとトラバースして行った。途中の雪の斜面には、南米のアンデス等に独特のニェ・ペ・ペニテンテが見られる。それは、高さ一尺ないし二尺の氷雪のピラーであり、あたかも鐘乳洞の石筍の乱立を見るようである。

このペニテンテの斜面が尽きる所まで来て、はるか上を見上げると、そこの南稜へ直角に突き上げている氷のガリーを発見した。イギリス隊の言っていたアイスガリーとはこのことか。彼らは南西稜のことしか触れず、その中で急峻なアイスガリーの登攀に困難を極め失敗したのだとは教えてくれたが、南西稜からのトラバースには、うかつにも何程も言及していなかったのである。このアイスガリーは長さ約一五〇〇尺。初め遠くから見てみると、かなり急である。緩やかに見えた傾斜は、真下に来て、その中で急峻なアイスガリーは南西稜のことしか触れず、その中で急峻なアイスガリーとはこのことか。彼らは南西稜へ直角に突き上げている氷のガリーを発見した。イギリス隊の言っていたアイスガリーとはこのことか。彼らは南西稜のことしか触れず、その中で急峻なアイスガリーの登攀に困難を極め失敗したのだとは教えてくれたが、南西稜からのトラバースには、うかつにも何程も言及していなかったのである。このアイスガリーは長さ約一五〇〇尺。初め遠くから見てみると、かなり急である。

私はザイルを結び、アイスガリーの入口に先ず一本目のハーケンをガッチリ打ち込んで登り始めた。初めの四〇尺は傾斜四五度位、それ程急ではないが完全な氷である。

次の四〇尺は傾斜五〇度程で、ガリーの幅はやや広く、約四尺、両側の岩壁は高さ七、八〇尺、垂直に切り立っている。

このガリーの入口から登り始めたのは十一時、今は二時半。三時間半たつというのに、我々二人がかせいだのはたったの八〇尺。私の頭の中には、イギリス隊がこのガリーの登降に十三時間もかかったという事が、まざまざと浮かんで来た。

彼らの失敗は、このガリーに十三時間も掛け、それもアタックの当日に一気に登り切ってしまおうとしたところにその原因があると我々は考えた。そこで今日はこのガリーのルート工作に一日

かけ、下降の際に、補助ザイルを固定しておく。アタックの日には、その固定ザイルを利用し、このガリー登攀の時間を大幅に短縮して登頂成功をかちとろうと、もくろんでいたのであるが、どうもこの調子だと、そのルート工作さえも今日中に、出来そうもないように思えて来た。あと七〇〇㍍を、どうしても三時間以内に片付けなければならない。

次の四〇〇㍍は、傾斜はますますきつく約六〇度、雪が乗っているがその下は完全な蒼氷である。表面の雪に騙されて不用意に足をおろそうものなら蒼氷はアイゼンをガンとはねつけて、登攀者を滑落の運命に落すであろう。残りの三〇〇㍍は六五度から七〇度、最後の五〇㍍はほとんど垂直であった。

私はこの五〇㍍を前にして、さすがに後を、いや、下を振りかえり甘利隊長にこの辺で締めて引き返えそうと苦言を呈した程である。時刻は、四時半、夕闇がせまり、しかも、雲行きがあやしく、ついに小雪まで舞い出した……。

やっとのことでこの垂直の雪壁を登り切り、ガリーのトップに着いたのは、四時五〇分、我々はそこで小休をとった後、直ちに下降にかかった。帰りは補助ザイルをガリーに固定しながらの下降だが予想外に時間がかかり、ヘトヘトになって第二キャンプに着いたのは、真暗闇の八時だった。

八月二十六日。いよいよ待ちに待った頂上攻撃の日である。第二キャンプが四八〇〇㍍、頂上は六〇六〇㍍、標高差一二〇〇㍍以上のアタックである。しかも六〇〇〇㍍の高度の影響が身体に現われてくるだろう。

ともかく、朝六時に第二キャンプを出発した。途中までは知りつくしたルートなので、快調に飛ばし、八時半にはガリーの下に着いた。問題のガリーは苦心の固定ザイルを使ってたった一時間半で仕上げ、午前十時には既にガリーの上五三〇〇㍍に立った。

ガリーのトップは、丁度南稜の上部に位置し、我々は一旦そこから五〇㍍ばかり向こう側のペニテンテと岩のミックスした斜面に降り立ち、そして約七五〇㍍を頂上に向かって登るのである。

ペニテンテの斜面は、いちいちその氷柱をこわして登る訳にもいかず、脚を高々と挙げては一歩一歩登って行くので、全く閉口した。正午近く、ペニテンテの斜面を終り、急峻な岩壁の基部に着いた。高度は約五六〇〇㍍位であろう、甘利隊長も丸子氏も高度の影響でかなり苦しそうだった。かくいう私も初めて高度の影響を経験した。頭が痛くて吐き気がする。

ここで昼食をとり、アイゼンをはずして、岩登りの用意に取りかかった。約三五〇㍍の岩登りである。やはりここでも若いからということで、当然のように私がトップで登ることになってしまった。傾斜はきついが、岩が固くしまっていて実に快適な岩登りである。この岩登りだけが目的で、充分に時間もあったら、慎重を期してハーケンを打って登るべき所だろうが、今はそんな時間も惜しいので、私はザイルの長さ四〇㍍一杯フルに登ってから、そこに確保用のハーケンを打つにとどめた。

こうしてこの岩壁を登り切り、雪の斜面にたどりついたのが、

二時。我々は再びアイゼンをつけ、斜面をゆっくりと登って行った。頂上の高度六〇六〇㍍が正確ならば、あと残り一〇〇㍍程で我々は頂上に立つ。はやり心を抑えるようにして一歩一歩確実に登って行く。もうあまり傾斜はきつくなく、ザイルを解いて各様のペースで登って行く。雪の斜面はいよいよ緩くなりついには平らになった。その向う側に北方の空が続いていた。何もない。ただ、青い空間が果てしなく続いている。二時三五分、我々は六〇六〇㍍の頂上にたったのである。

周囲を見わたすと、このミールサミールは一段と高い。はるか北を望めば、ソ連の山々、西を望めば、パキスタンのカラコルムと思われる山波が続く。

頂上で三〇分程食事をとったり、記念撮影をしたりして下山、綿のように疲れはてて、第二キャンプにたどりついた。

この登頂成功後は我々は第二キャンプでゆっくりと休養を取り、懐かしいベースキャンプに降りていった。ベースキャンプに残っていた通訳とは十日ぶりの対面で、彼は大いに感激していた。その夜は彼が持参したライフルで撃った鹿の肉のすきやき天ぷらで、登頂成功を祝った。

（佐藤）

五、旅を終えて

ミールサミールの登頂をとうとう戦争に発展してしまったのだ。帰路の確保が問題である。カラチ空港が閉鎖されて国際便が飛べないらしい。しかしカラチには荷物も残してあるし、諸方面に挨拶もしなければならない。三人協議の上、三方向に別れて別々に帰路につくことになった。

佐藤之敏はトラック便をヒッチハイクで乗り継いで陸路ヨーロッパに向かう。パリまで行けば知人がいるから何とか金を無心して日本に帰れるだろう。サブザック一つの軽装で彼は砂漠を横断する長い旅に出発した。

丸子博之は奥さんが日航の社員なので彼女をカイロまで呼び出し、そこから先は家族旅行の無料パスを活用してヨーロッパに向かうべく、エジプト方面に向かって飛び立った。

私は陸路カラチに向かうことになり、ひとりバスに乗ってカイバー峠を越えた。ペシャワールからラワルピンディに着いてみると、急拠カラチ行きの飛行機が飛ぶということになった。大混雑の空港でようやく航空券を入手したが、「戦争によって万一墜落しても損害賠償は一切請求いたしません」という誓約書に署名を求められたのには驚いた。ラホール周辺が危険とのことだったが無事カラチまで飛ぶことができた。カラチも遠く砲声か爆撃か物騒な音がとどろき、夜は灯火管制で眞暗闇。パラシュートによるスパイの潜入をチェックするため「割礼」の有無を調べられるので夜は外出しないよう注意された。空港は閉鎖されて当分帰国できそうもないと思ったが、日本人婦女子を救出するべく日本政府が特別チャーターの救出機を差し向けてくれたのでそれに便乗し

てカラチを離れた。インドの上空は飛べないので一度アラビア半島に逆行して給油の上、インド洋上を大きく南に迂回して日本に向かった。その迂回分の航空代まで後日政府から請求される破目になったが、おかげで朝日新聞の「ひと」欄に取材され、思わぬ人から手紙などいただいたこと。

アフガンは、いま国内紛争に明けくれ、聞くところによると、ミールサミールの谷間にもゲリラ戦がくりひろげられているとのこと。紛争が解決を迎え、ヒンズークシュの村々に再び平和がよみがえることを心から切望する次第です。

（甘利）

ヒンズークシュ遠征

一九六七年夏

【メンバー】 隊長・山本健一郎、倉知敬、佐藤之敏、原博貞、池知昭洋、佐藤久尚（以上ＯＢ）、宮武幸久（学生）、ドクター・鈴木羊三（慈恵医大山岳部ＯＢ）、リエゾンオフィサー・ファルーキ、アシュラフ

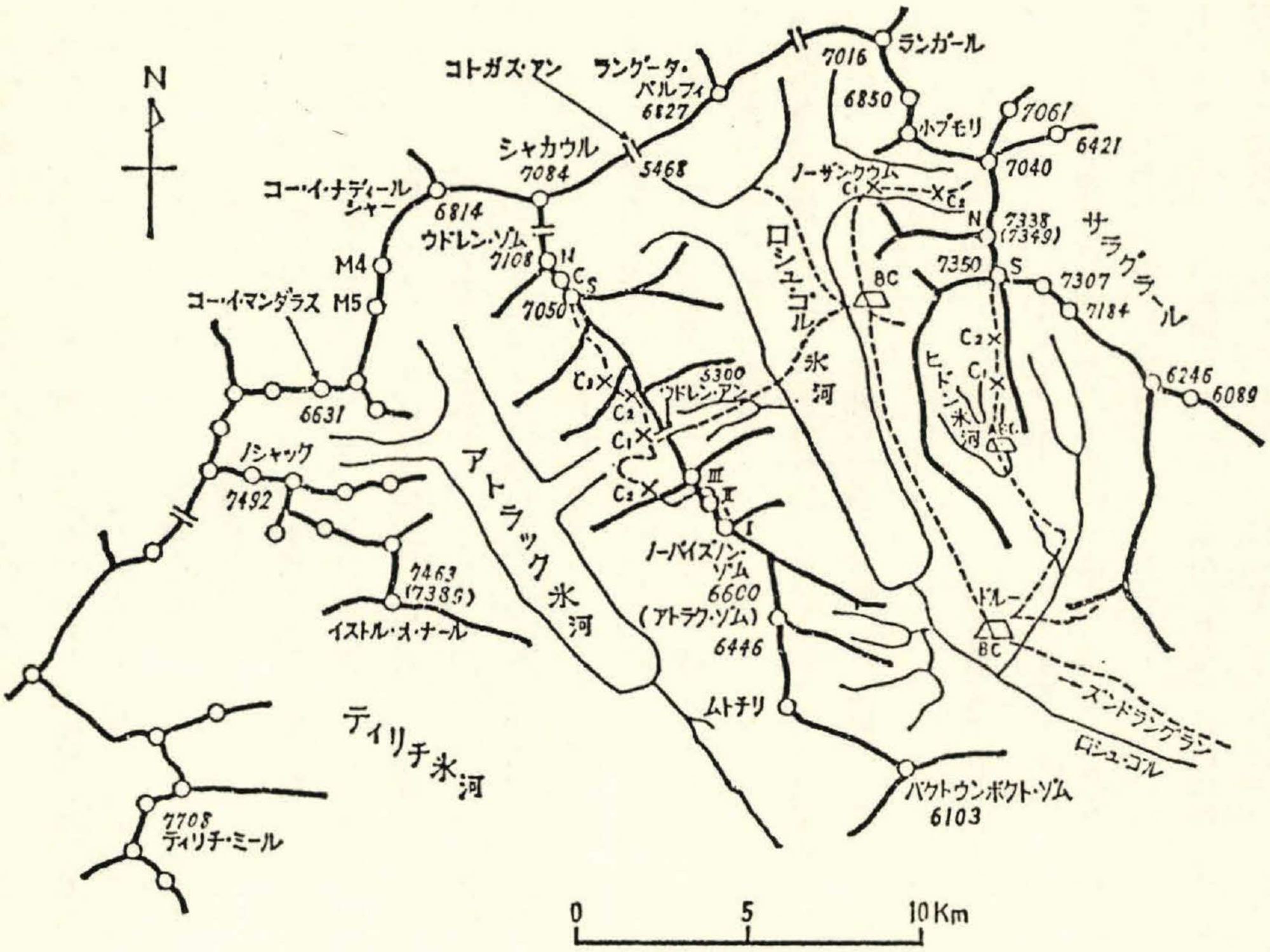
【行　程】

5月29日　山本、佐藤（久）離日
6月8日　全隊員カラチ集結
17日　隊荷トラックにてカラチ発
20日　全隊員及び隊荷ラワルピンディ集結
25日　チトラル着
27日　キャラバン出発
7月4日　ロシュ・ゴル氷河沿いのベースキャンプ到着（四三〇〇㍍）
8日　サラグラール峰ノーザンにひきいられた山岳部の悲願とも言うべき目標は、「戦前の水準への復帰」であった。
10日　同Ｃ2建設
12日　ノーザン・クウム氷河上にＣ1建設
15日　池知をベースキャンプに収容
19日　池知、アシュラフ大尉、宮武と共に下山、サラグラールより転進
23日　ノーバイズノン・ゾムとウドレン・ゾムの間のコルにＣ1設営
8月4日　ノーバイズノン・ゾム登頂
8日　ウドレン・ゾム雪壁下の台地にＣ2設営
9日　六三〇〇㍍地点にＣ3設営
11日　ウドレン・ゾム登頂
18日　サラグラール南面に転進。ドルーにＢＣ設営
19日　ヒドン氷河上にアドバンス・ベースキャンプ設営
20日　Ｃ1、22日Ｃ2を設営。
24日　佐藤（之）、原、サラグラール南峰に登頂
30日　全員チトラル帰着。

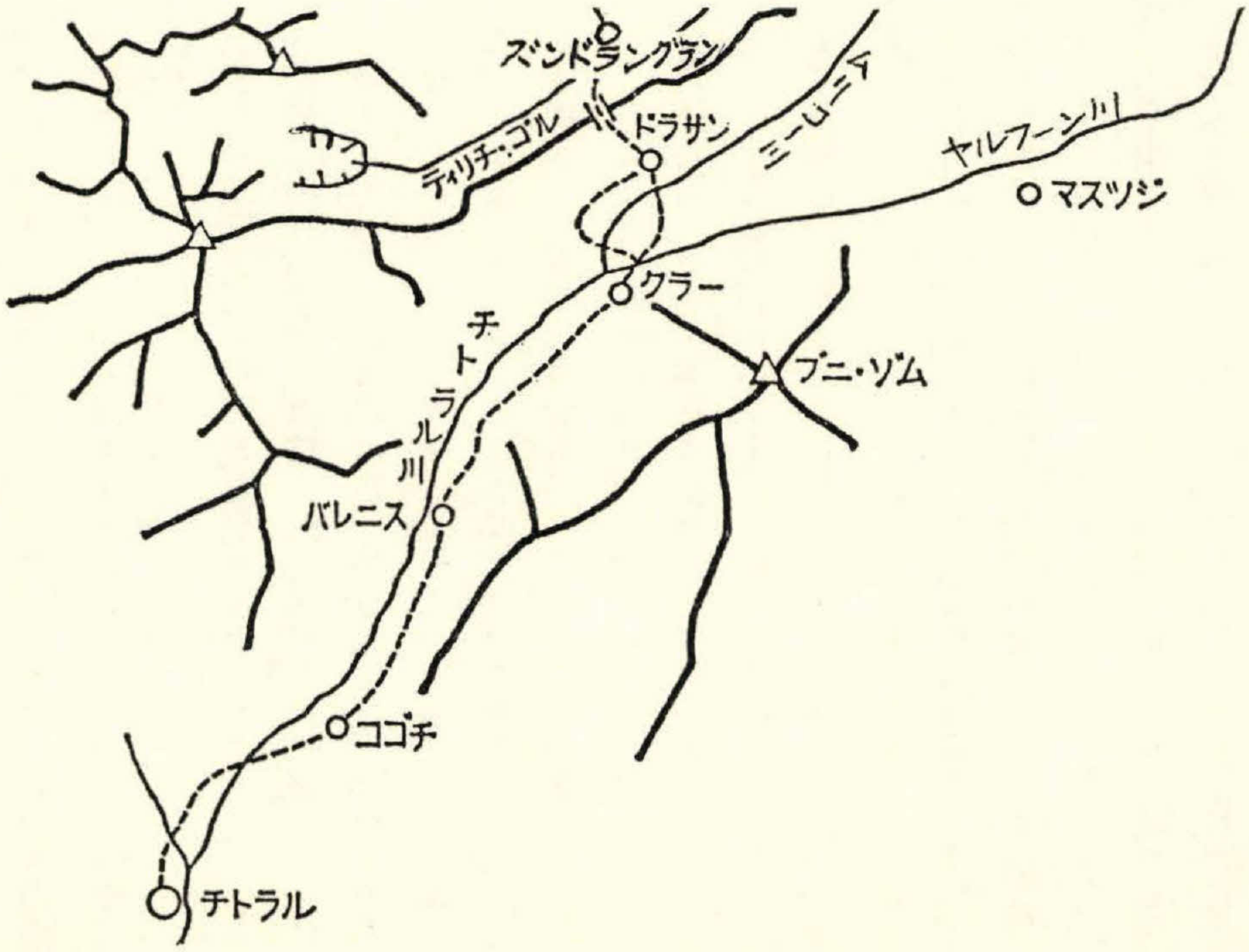
はじめに

われわれが、昭和二十八年山岳部に入部した当時、石原リーダーにひきいられた山岳部の悲願とも言うべき目標は、「戦前の水準への復帰」であった。

毎週月曜日の国立の部室での部会のあと、松林の中をラッパを吹いて通りすぎる豆腐屋を呼びとめて豆腐を仕入れ、合宿用の大鍋であたためながら一杯呑むときの話題は、いつもきまってあの輝かしい『針葉樹』八号、九号、十号の時代の水準に如何にすれ



登攀ルート



キャラバンルート

ば近づけるかというところにおちつくのであった。

幸いにも、戦前から引き継いだ老朽化した貧弱な装備は、OBのあたたかい配慮によって針葉樹会の会費の相当額を山岳部の援助に充てていただくことになり、年毎に充実していく山岳部の活動を支障なく拡大できるような体制になっていた。

あっという間にすぎてしまった四年間ではあったが充実した四年であった。最後の年になって、多分合宿の報告にお邪魔したときのように記憶しているが、山田亮三さんに「君達の山登りはあの頃のレベルに戻ったね」と言われ、それがあのあこがれの時代の担い手の一人である山田さんの口から出た言葉だけに、とび上がるほど嬉しくほこらしい気持に満たされたことをおぼえている。

そして、戦前の水準への復帰という課題が達成された今、何をなすべきかという話題がとりあげられるようになってきた。そして、当然のように次は海外の山へという話がもちあがってきた。当時の外貨事情からして、海外へ行くなどということは夢のような話であったがこわいもの知らずの若さのいきおいで、皆次第に本気になってきた。

しかし、何の知識もない学生にとって海外遠征などというものはどうとりかかれば良いのか皆目見当がつかない。ところが折良く望月達夫先輩が転勤で神戸から東京に戻ってこられた。そこで、昭和三十一年のいつ頃だったか、ケニス・メイスンのアボード・オブ・スノーの翻訳をお願いして時間をいただきお宅へお邪魔し色々とお教えいただいたり、ヒマラヤなどの本を見せていただき、ロールワリンの谷とかランタンヒマールなどの地名をはじめて耳にし、いささか興奮して家路についたことを昨日の様におもい出す。

われわれの遠征はこの日に端を発するといってもよいように思う。その後、中村（T）君の精力的なネパールの研究がはじまり、ネパールの遠征は諸々の事情で実を結ばなかったものの『針葉樹』十三号に詳しいアンデスの遠征という形で成果をあげるに到った。しかし、アンデスの次にはヒマラヤへという願いは根強く皆の内に残り、幾つかの計画がたてられては消えていった。そして、ネパール政府が登山禁止の方針を打ち出すにおよんで、われわれの関心もネパールからカラコルムに向けられた。ラカポシ、ハラモシなどの調査がすすめられ、最後にマルビティンを目標として詳細な研究がすすめられ遠征計画が練られた。一九六五年の春にはカラコルム遠征隊を出しても良いという針葉樹会の決定も得られいよいよ本番と張りつめた気持で準備をすすめていた矢先に、今度は思いもかけず印パ紛争の発生という事態によって、現地事情の偵察かたがたミールサミール峰を登りに行った甘利隊が、登頂は果たしたものの日航の在留邦人救出機で帰国するという始末、カラコルムの遠征もまた日の目を見ずにたな上げとなってしまった。

しかし、中島(寛)、倉知を中心とするメンバーは粘り強く、一

九六七年には何とか遠征隊を出そうと、パタゴニアの遠征とかアルゼンチンの南、サウス・ジョージア島への計画を練り、結局パタゴニア遠征計画を体協へ提出、一万ドルのスポーツ外貨の割当てを獲得するなど着々と準備をととのえていった。

しかし、一方ではすでに足跡をしるした南米でなく、何とかヒマラヤに足を踏みいれたいという願いも根強くのこっており、毎年カラコルム遠征のアプリケーションを提出していたが、ミール・サミール以来何かとお世話になっていた三井物産のカラチ駐在員関口氏より、もうすこしプッシュすれば六七年のカラコルム遠征は認められる可能性ありとの情報を得、色々と交渉を続けていただいたところ、六六年末になって六七年の日本からの遠征隊がわれわれのものが唯一のものであるとの保証があれば国防省はわれわれのアプリケーションをとりあげると言っている旨の連絡があり、カラコルム遠征隊として外貨割当てを受けているのはわれわれだけであることを理由に、その様な趣旨の証明書を日本山岳協会より発行してもらい早速現地へ送るとともに、許可がおりた場合を想定してあわただしく準備にとりかかった。

その後も事態は様々に変ったものの交渉係として派遣した佐藤(之)隊員の奮闘と一橋OB高木大使のご尽力によって、カラコルムは認められないがヒンズークシュなら認めるという国防省の意向に基づきサラグラール峰の登山計画が認められることになった。

この辺りの経緯については、あかね書房刊『ロシュ・ゴル氷河の山旅』に詳しい。同書のあとがきには「この本は公式記録ではない。公式記録は別に『針葉樹』十四号にくわしく発表されているので参照されたい」という記述があるが、この『針葉樹』十四号が十五年もの間刊行されず、当然の成行きとしてその間の記録をすべて盛りこむためにこの遠征の記録も相当に圧縮せざるを得ず、むしろ前掲の本が残されたより詳しい記録となってしまったのは皮肉である。

（山本健一郎）

一、カラチ

六月八日。とうとう全隊員がパキスタンにそろった。五月二十九日に、山本、佐藤(久)がJAL機で離日、六月三日には鈴木、池知、原の三人が、六月七日には倉知、宮武が、それぞれPAA機で羽田を発ち、カラチに無事到着した。

八日に全員そろった直後、山本隊長だけPIA機でラワルピンディへ発った。そちらで官庁のあいさつ回りなどやるためである。そのあと、カラチに残されたわれわれの仕事は荷物の通関であった。われわれの全荷物を積んだ大阪商船三井船舶の大阪丸は、すでにカラチ港に着き、沖待ち中である。遠からず岸壁に着き、港に荷上げするであろうし、速やかに通関の手続きをすませておく必要があった。

ところが、無税通関をしてもらうには、われわれの隊が正式にパキスタン政府によって認められたエクスペディションであるこ

とを証明するものがなければならない。その時、パーミッションはすでに下りることになっていたが、事務的な手続きが遅れて、まだパーミッション・レターという紙切れはわれわれの手元にはなかった。

一方、それとは別に、日本大使館発行の無税通関依頼書と荷物の内容証明を税関に提出する必要がある。この手紙は、大使館職員のマゴールが起案してつくってくれたが、これを彼の一存で発行するわけにはいかず、文化担当の松田書記官と、広長参事官の了承を得なければならない。普通ならば、パーミッション・レターの写しがあって初めてこういう類の手紙は出してもらえるのだが、われわれの場合はいささか特殊なケースだから、本当はやってもらえないことをお願いすることになった。どうも無理な注文なので大使館では大分油をしぼられたが、結局、マゴール氏の献身的サービスと、広長参事官の好意ある計らいで、その二つの書類をどうやら発行していただいた。

その後、実は複雑な官庁組織を相手に毎日さまざまな手続きをかさねた後、十七日になっていよいよ荷物の通関が実現した。早速、原と佐藤(久)、引き取りに税関へ。トラックはマゴールが手配してくれる。塔から荷物を運び出す。何しろ一箱の重量が一トンもあるものがあるから、クレーンを借りたり、フォークリフトを使ったりするのに手間取る。のせているうちに一台のトラックでは積み切れず、またもう一台、雇い加える。

夜八時、トラック二台は宿舎のジャパン・クラブへ回送されて来た。原、佐藤(久)、池知、宮武、トラックに便乗して行く。四人、てんでにうすぎたないシャツ姿に、町で買ったヘルメットをかぶり助手席に乗り込む。トラック代、途中の食費などとして、原に二〇〇〇ルピー渡す。あわただしい雰囲気のまま、大きなトラックがゴロゴロ音をたてて暗やみの中へ消えていった。

(倉知敬)

二、カラチからピンディへ

全重量三トンの荷物を積んだ二台のトラックが、我々が滞在していたジャパン・クラブの門前に来たのは、六月十七日午後八時過ぎだった。

すでに前日に連絡があり、出発の用意は整っていたので、直ちにトラックに乗り込んだ。お世話になった三井物産の関口氏、倉知、鈴木ドクターの見送りを受け、千数百キロあるピンディへの旅に出発した。トラック便乗は、運転手まかせだと荷物が何処へ行ってしまうか危ないし、又何時つくか不安だったからである。とは言っても、我々の全く知らない土地、乗った以上彼ら運ちゃん達に頼るほかない。彼らは臆病だから、気を緩めなければ平気だと、乗る前言われたが、隣りにすわって運転しているのを見ると、身体はでかいし、顔付きなどもとてもそうは思えない。

ともかく、夜ではあるし、涼しい風に打たれながらこりゃいいと思いながら、トラックは北上し始めた。とたん、未だ十分と進

まぬのに、トラックは、Uターンして戻ってしまった。彼らとの対話は、全くの手振り身振りなのだが、どうやら仲間の一人が、乗ってないらしい。彼らの溜り場らしい野外の映画館の側で二時間近く待たされた後再出発。これで、こちらは原さんと私、向こうは、運転手二人に助手二人が揃った。走り出すとすぐ、助手から我々の寝床を紹介された。それは運転席の屋根にあった。汚ない毛布を渡されて星空を見上げながら眠る用意をした。

いくら舗装されているとはいえ、ガタガタして寝つかれない。この街道、ピンディ、カラチを結ぶ唯一の陸路で、往来するトラックが数十台たむろしている。そんな所では、運ちゃん仲間がいるらしく、車を止めては会いにいってしまう。又止めやがったと気にしながらも、ハイデラバードを過ぎ、インダス川を越える頃には、すっかり眠り込んでしまったらしい。インダス川を越えることを、何となく期待していたのだが、まっ暗で何も見えなかった。

夜が明け、クウェッタへの道との分岐点となるサッカリに近づく頃、もう暑くて屋根の上には居られなくなった。手ぬぐいを頭にしたり、厚い毛布をかぶったりしたが、どうしてもがまんならぬ。ボーッとしてきたので、キャビンに入ることにした。この辺は、運河が発達していて、対岸の広々とした景色が良いので、カメラをとりだすと、運ちゃんに止められた。カラチでもそうだったが軍事目的上なかなかうるさいのだ。度々、検問所があって、パスポートと荷物の内容を調べられた。その度毎にいらいらするが、こんな所でめんどうな事でも起きたらといつも手でも振って別れる。とにかく暑い。腹も減ってきた。

それこそ、囲りに何もない一軒家といった茶店の前で車を止める。そこの主人が、さっそく、ベッドを木陰に置いた。木陰の木製のベッドが、パキスタン人の憩いの場なのだ。チャパティだけでもと口に入れる。のども渇いている。彼らはうまそうに水を飲んでいるが、水はぐっとがまんする。きりがないのは解っているが、コーラを飲む。実に、コカコーラはどんな所にでもあるもので、こんな時には幸いであった。

翌日、今までの見渡す限り荒地で、時々畑が見えていた景色から、道も良くなり、並木も増えてどことなく都会が近くなったようにに変ってきた。途中、ガソリンスタンドの側に、外観りっぱなドライブインがあったので、何か食えるのじゃないかと期待しながら、入ってみた。結局コーラしか飲めなかった。

翌二十日、モスク、宮殿、うまい物を期待して目をさましてみると、とんでもない、それらしきものは何も見えない。それどころか、行けども行けども砂ぼこりだけ。

峠を二つ越えると、道端に立っている道標が、ピンディまで、もう百マイルもないことを知らせてくれる。トラックは八〇キロ以上のスピードで飛ばす。その道標が一マイルずつ減っていくだけが、楽しみだ。

工場から、人々がぞろぞろと自転車で帰って行く。もう間近かだ。囲りも青々とした田園風景から突然幅広い舗装道路に変わっ

た。自家用車の数も増えている。とうとう、ピンディ市内に入った。後は目ざすホテルに行けばいい。今まで飛ばしてきた運ちゃんも、大都会に入ると、うろうろするばかり。どうもホテルが解らないらしい。人に聞いてやっと行き着くことができた。

（宮武幸久）

三、ラワルピンディ

六月二十日。朝、全員がラワルピンディに顔をそろえた。すなわち、十九日夕方には、一台目のトラックに乗って来た原と宮武が到着、二十日早朝の午前二時には、鈴木、倉知の二人がピンディ郊外のチャクララ飛行場に降り立ち、バスでフラッシュマンホテル着、つづいて、朝の七時頃には、二台目のトラックも到着、佐藤（久）と池知も顔をそろえ、以前からピンディ滞在中の山本、佐藤（之）と共に八人が、ホテルの一部屋にほとんど二カ月ぶりに、一堂に会したのである。

午前中、両佐藤、原、池知、宮武はチャクララ飛行場へ行き、トラックから荷を下ろし、倉庫に入れ、整理する作業に従事する。山本隊長と倉知は大使館へ。サテライト・タウンの大使館で文化担当官の原さんに会い、デクラレーション、アプリケーションの最終的なものなど、コピーの出来ているのをもらう。それを持って、山本隊長は直ぐ、外務省へ回る為汗をふき〳〵せかせかと出ていく。

鈴木ドクターは、所在なくゴロ〳〵寝ている。今の所、ドクターの仕事は、飲料水の入っているテルモスに浄化剤を入れることと位。

夜、ミーティング。それまでの各自の金の使途の明細を出させ、帳ジリを合わす。今後の予定の打合せ、サラグラール南峰に、北のニロギ氷河の方から入るか、南のロシュ・ゴル氷河側から入るか、パーミッションの内容、リエゾン・オフィサーの都合など考慮した上、決めなくてはならない。

佐藤（之）は、一応ジワールゴルよりニロギ氷河へ入り、同氷河上へBCを置き、サラグラールとスカイ・ゾムの間の尾根一つまり東稜一へ登り、その尾根伝い南峰へ登るルートを申請していた。しかし、このルートは非常に長いルートである上に、周囲に他の手頃な未登峰もなく、どうも割の悪い感じであった。それに、この辺では比較的知られている地域で、どうも面白味がない。

このサラグラール南峰以外に、この辺で残されためぼしい山としては、一つはサラグラールとランガールの中間にある七〇六一峠峰と、もう一つ、ウドレン・ゾムの東方にあるほとんど未知の山域であった。パーミッションには一つだけでなくいくつ登ってもよいという条件もあったし、二カ月の長い登山期間を見込んでいるわれ〳〵の隊にとって、出来ることならサラグラール南峰以外にも登りたい気持ちがあった。そのためには、ロシュ・ゴル側から入るのがよい。何故なら、ロシュ・ゴルにあるノーザン・クウムからなら、サラグラールも七〇六一峠峰も登れるし、また、

ロシュ・ゴル対岸のウドレン・ゾム側のピークにも登れる。

しかし、このルート選定には一つ、われ〳〵の登山に対する心構えの問題があった。それは、もしニロギ氷河の方に入ったら、例え東稜が登れなかったとしても、少なくともイタリア隊の登ったルートがある。最悪の場合、イタリア隊のルート通り、サラグラールの二登は出来る。それに反し、ロシュ・ゴル氷河の方は登攀の可能性については全く未知数である。その上、一九五八年にノーザン・クウムに入ったイギリス隊が事故を起こし、一人死者を出していることを考えると、かなりの困難性を予想しなければならない。

だから、何が何でもまず登頂という、初期の目的達成に最善をつくすか、それとも、現在の時点で客観的に見て、より価値あると思われる方へ重点を置くか、という問題である。これは結局、大勢としてはロシュ・ゴルの方を選びたい意見に傾いたが、それも、ルート変更を国防省がOKと言った場合そうしようということで、その後の交渉はリエゾンの意向次第となった。

二十一日。何かの祝日とかで、役所はすべて休み。午前中、二人のリエゾン・オフィサー、顔見せにホテルの部屋へやって来る。

Captain Moheeb Ur, Rawau Farooqie

Captain Malik Mohamed Ashraf

の二人である。ファルーキの方は、三十歳、深目・高鼻の典型的なアーリア系の顔立ちで、中肉中背。きびきびしていて、頭良さそう。アシュラフは三十八歳、背高く、ワシ鼻にするどい目。黒い顔色はドラヴィダ系の血が混っているせいなのだろう。いかにも頑固で融通がきかなさそうな感じだ。

簡単な自己紹介のあと、事務的な話し合い。彼等のために食糧を買うこと、地図の調達のこと、そして肝心のルート変更のこと。これは国防省の上官に相談してみなければわからないという。彼等は、自信たっぷりなようすで、何かとうるさいことを言う。国境七マイルは絶対に守れ、金はいくらもって来たか、等々。国防省は、事情を鑑みて、相当優秀な将校を派遣したらしい。

夜、日本大使館のレセプションあり。高木大使は出席されなかったが、大使公邸に、大使館関係者皆あつまり、日本食のバイキング料理が出る。大使の母校から派遣されたという関係からか、大使館の人々のぼくらに対する態度は非常に親切だ。食事が終わると庭に出て、丸くなってイスにすわり、雑談。これが延々と真夜中の一時頃までつづく。いささか疲れたが、こういうのんびりしたパーティがこちら風であるということだ。

二十二日。パスポート・オフィスへ行き、ヴィザ延長の申請。われ〳〵は一カ月以内のトランジット・ヴィザで来ているが、これを登山許可書をそえて、もう三カ月延期してもらう。ガサガサとした落着かないきたない役所で申請用紙をもらってくる。

国防省との交渉は楽にすみ、ロシュ・ゴル行きはOKとなる。どこでも登れるところから登ってよいという。国境七マイルの線に入らなければ。

二十三日。ＰＩＡのオフィスへ行き、チトラルまでの飛行機チャーターの交渉をする。荷物の量や、出発時間のことでもめる。とにかく明日、朝飛行場へ来いということになる。原と宮武は、ファルーキをつれ、リエゾン用の食糧の買出し。アタ、ダル、カレー、ケチャップなどのカンヅメ、それにタバコ等買う。アシュラフ一人、空路先発してチトラルへ向かった。

二十四日。午前六時半、全員三台の車に分乗してチャクララ飛行場へ向かう。飛行場へ着いてしばらく待たされる。その内、ゆっくり青や黄のキャンバスバッグが飛行場の方へ運び出される。ＰＩＡの緑色の線の入ったフォッカー機が何台も来て飛んでいく。その内アレだとＰＩＡの職員が言うのに、荷物が運び込まれる。気温や重量の関係で、荷物と一緒に二人しか乗せられないという。四人乗るつもりで来たが、その内、倉知、原が同乗して行くことになる。八時四十分、チャーター機はチャクララ飛行場を出発した。

（倉知敬）

四、キャラバン

六月二十五日。残り全員が空路チトラルに到着。キャラバン出発地に全員集合した。東京を出て以来実に二二日経っていた。

ひらけた河原の両側にズングリと聳える禿山、清々しい空気、そして谷の正面にそそり立つ純白のテイリチ・ミール、これらだけで今までの不快さを吹き飛ばすに充分だった。

翌二十六日は荷物の重量調整と梱包に一日汗を流し、計一三八個の荷物をこしらえた。

二十七日。夜も明けきらぬうちから集まった馬方たちは、リエゾンの合図でわれさきにと荷物に群がり軽いものの奪いあいを始めた。

七時半、先頭のロバが出発、五十六頭のロバと三頭の馬とが出発した訳だが、出発時の荷物の数量確認などに不手際があり、一番最後から先頭までかなりの距離があくことになった。

朝の爽やかさは束の間のことで、九時頃になるともう強い日差しが容赦なく当たり、それだけで身体が何かおかしくなるような気がした。懸崖につくられた起伏の多い路を只黙々と歩いた。

キャラバンの行進は、先頭を歩いてキャンプサイトへ安全に誘導する役に佐藤（之）と原、それにリエゾンのファルーキ大尉、しんがりに山本隊長、倉知、リエゾンのアシュラフ大尉、中間に適宜、鈴木ドクター、池知組と、佐藤（久）、宮武が入って歩くという体勢で、これは大体、ＢＣにつくまで続けられたが、初日は先頭のパーティを除き全員疲労はなはだしく、コゴチというその日の目的地には七人が一団になって最後に着く破目になってしまった。

今日は一五マイル歩いた。木陰でアンズをほおばり芝生に横たわると一日の疲れなど吹き飛んでしまう。夕食までの一時、両足に出来た底マメをつぶしてもらい、丹念にマーキュロを塗った。ドクターの初仕事である。空の注射器でマメの中の水をぬき、別

の注射器で又、マメの中にマーキュロを入れる。おかしなことになったものである。

二十八日。昨日は暑いさかりを選んで歩いたようなものだった。今日からは出発を出来るだけ早くし、正午前後には切り上げようということで先頭が出たのは六時十五分だった。満足のいく時刻ではなかったが、これだけの多人数であると思ったように旨くはいかないものである。

村は谷間から落ちる渓流に沿ってまるで水にしがみつくといったような形で点在している。遠くから見ると濃い緑に囲まれ、流れを中にし、一見裕福そうに見えるのだが、水は砂粒を含み、家は囲いに等しく、土地はやせて穀物はまばらで実は小さい。恐らく最低限度の生活ではなかろうか。

空は雲もなく、木陰以外に涼はもとめようもない。半ズボンに麦わら帽子で歩いているのに露出したところは一日で既に赤く腫れたようになり、ズボンとこすれあうところなどはどうにも我慢がならない程だった。

この道はシャンドール街道といい、インダスとパミールを結ぶ通商路の一つである。チトラルからマスツジを通り、ヒンズークシュのバロギール峠を越えてパミールに到る。今は奥へ向かう人はほとんど見られない。

今日は一二マイル歩きバレニスという村に足をとめる。先頭は一二時一五分着で順調であったが、しんがりは二時間近く遅れ、二時、やっと全員が集合できた。

二十九日。今日はキャラバン行程中最も長い一七マイル。昨日と同様、先頭が出発したのが六時一五分。両側を山にはさまれ、谷に沿ってしか展望がきかないので歩く楽しみもない。三日目ともなるとさすがにうんざりする。

バレニスを出て二時間少々でレシュンという村に着く。この辺りは谷すじも広くなり、前後左右可成りの見晴らしがきく。後方を振り返ると穂高のキレットを思わす白い双耳峰が見え、川の対岸左手には形のよい鋭峰があって、又右手には巨大なスラヴを有する岩峰が望まれる。

先頭が今日の宿泊地クラーに到着したのは一二時。しんがりが到着したのはそれから三時間も後。日を追うにつれ、ロバの疲れはひどく、元気なものとそうでないものとの差は開くばかりだ。

クラーのレストハウスはこれまでの中で最も素晴らしく、芝生を敷きつめた広い庭の中には緑の豊かな大木が一本立ち、恰好の日陰を提供してくれた。

三十日。今日は一〇マイル歩いてドラサンまで行けばよい。クラーを出て一〇分もすると左からムリコ川が入ってきて、チトラル川と合流する。我々はチトラル川に沿って更に二〇分進み、チャルンという村の中程にある橋を渡ってチトラル川の右岸に出た。シャンドール街道ともここでお別れである。

橋を渡ったところで荷物を運ぶロバ隊と隊員達とは別れる。ロバ隊はチトラル川に沿って先程の合流点まで戻り、そこからムリコ川を上流に辿ってドラサンに至る。我々はチトラル川の右岸を

三〇分程歩き、川幅が又広くなるあたりから丘を登って反対側のムリコ川のかなり上流に下りるのである。

丘は駈け足で二〇分くらいで登りきる。まばらではあるが緑に蔽われた原で、背後にはこれまた素晴らしいブニ・ゾムの四つの針峰が雲を突き破るかのように聳立していた。息の苦しさも忘れ暫し茫然とした。

ドラサンではこの辺一帯の王侯らしき人の接待を受け、アンズやリンゴのなる広い庭を借りて荷物を解くことにした。次から次に到着するロバも正午すぎには全部集まり、運賃の支払いを済ませたのち四日間行動を共にしたロバと馬方に別れを告げた。明日からベースまでの三日間はポーターの背中で運ぶわけだ。

翌七月一日は予定を変更し、一三〇個以上もある荷物の重量調整に一日を費した。

七月二日。一三一人のポーターが一列に並ぶ。番号札を首から下げ、緑や黄の色とりどりのキャンバスバッグを背にし、八時出発。今日は三九〇〇㍍のサンドラングランという部落まで行くのである。

ムリコ川を離れドラサン峠を越えてロシュ・ゴル入口のズゾムが又現われてくる。今日は陽がかなり昇ったせいか鋭い輝きはなく、前方の高原の緑と融和して、ヨーロッパアルプスの美しい写真を見ているような気持ちがした。

二時峠着。苦しい息に喘ぎながらフイと頭をあげると、とてつもない大きな山々が目の中にとびこんできた。ティリチミール山群、イストル・オ・ナール、それから我々の目指すサラグラール南峰、それらが谷の入口から上下五千㍍の高度差で立ちはだかっているのである。

スケッチやルートの検討に一時間程すごして下りにかかる。下れば下る程大きく高くなってゆくサラグラールを横目に見ながら約一時間三〇分で谷入口のズンドラングランに着く。

ここで人夫をやといかえる。一三一人を一人ずつ番号札と照合し賃金を払う。それが終わると、明日の分の人夫の手配をするのである。

七月三日。朝はかなり寒い。サルト峠の西側の真下にあたるので陽が当たるのも遅いのである。

新しい人夫と共に出発したのは八時であった。ロシュ・ゴルは下部は非常なゴルジュになっており、八時出はじめの二時間は右岸に沿って高まきの連続で結構緊張させられた。

一カ所だけ残っている古い雪渓をつかって左岸に移ると景色もガラッとかわる。小さな部落のまわりでは山羊が遊び、澄んだ水が流れ、草が繁っていた。そこからは山羊が河原沿いに進み、今日の幕営地、ドルーと呼ばれる粗林大木が日陰をつくり、それに水の便もよい。一度落ち着いたら動きたくなくなってしまいそうな絶好の場所だった。河原に出て上方を見ると、すぐ先にもうロシュ・ゴル氷河の舌端が見え、その上にはヒンズークシュ特有の黒い泥によごれた氷河が続いていた。

四日。ベース・キャンプの位置を決定すべく倉知、佐藤(之)、

両隊員が先行する。本隊は昨日同様八時に出発した。我々は氷河左岸の斜面につけられた巻道をかなりの急角度でのぼり、一時間ほどでモレーンの上につけられた道に出た。この道を二時間ばかり辿って一一時、サイド・ヴァレーの中に入る。ベース・キャンプはさらに上方一時間のところに設けた。渓流流れる草と砂礫の台地で、快適なキャンプサイトであった。昔、オックスフォード大学隊がベースキャンプを設けたトティラス・ノクと呼ばれる放牧地である。

（池知昭洋）

五、ベース・キャンプにて

深夜「ドドー」というすさまじい音で目を覚まされる。四三〇〇尺のこのロシュ・ゴル氷河のサイド・ヴァレーにあるBCでは、夜、昼にかかわらず雪崩の音がきかれる。何しろこのBCは、サラグラールを始めとするランガール、シャカウール、ウドレン・ゾム等六〇〇〇〇尺級のものすごい岩壁にとりまかれていて、その岩壁にぶら下っている大きなブロックが時間かまわず落ちてくるのである。しかし、いずれもBCからは一〇〇〇尺ぐらいの距離があるので安心していられる。

八日間のキャラバンを終え、荒荒しいロシュ・ゴル氷河をつめ、ここBCにたどり着いたのが七月四日である。先ず最初の仕事はポーターへの賃銀の支払いであった。何しろ一三〇人のポーターに、それも、ろくに数さえ数えられない連中に一人一人、一日分八ルピー也の紙幣を支払わなければならない。相憎く、天候は今迄の内、最悪で、周囲は灰色のどん帳に包まれ、あられさえ降ってくる始末で、その中で冷たい風にさらされながらの仕事は楽ではない。

私は訴えの多いポーター達の診療に当るが、何しろ言葉がこちらが英語で言うのを、リエゾン・オフィサーのアシュラフ大尉がウルドウ語に訳し、もう一人通訳を通して、そのウルドウ語をチトラル地方の方言に訳すわけで、帰りはその逆になる、という甚だ手間のかかる手続きで訴えを聞いてやるのである。

又、ローカル・ポーターの中から　ハイ・ポーターとして、少し強そうなのを選び出す仕事が残っている。ネパール・ヒマラヤと違って、ここでは訓練されたシェルパはいない。又、カラコルムの様に多くの遠征隊が入っているわけではないので、山登りに馴れているポーター等もいない。ハイ・ポーターといってもローカル・ポーターと大した変りはないのである。結局大勢やとって、危険な岩壁やアイス・フォールでかえって足手まといになっては、ということで二人を選び出すことになった。一人はスリアット・シャー。大変立派なひげを持っていて、我々隊員より顔立ちは数段上である。もう一人はダルベッシュ・ハーン。田舎のオッサンという感じであるが、細かいことに迄よく気が付く。

BCを設営した日は天候が悪く、周囲の山々は霧に包まれて姿を見せなかった。しかし、翌朝起きてみてびっくりした。目の前にサラグラール西面の岩壁が殆んど三〇〇〇尺ぐらい垂直に落ち

ているのである。目を転ずれば西側には真白いピークが折しも朝日に輝いてきらめくばかりに美しい。更にロシュ・ゴル氷河の源頭にはアフガニスタンとの国境陵線の山が真白に光っている。昨日はアフタヌーン・フラッドが流れ込んだり、寒風にさらされたりして、印象はよくなかったが、このBCは本当は素晴しい山々に囲まれ、近くには小川が流れ、高山植物が咲き乱れるという桃源境なのだった。物資の整備や、テントの整頓を終えると、倉知、佐藤（之）、原、佐藤（久）の各隊員はサラグラール・ノーザン・クウムの登路偵察に早々と出発して行った。

後に残った山本隊長以下の四人は相変わらずBCの整備に追いまわされている。池知隊員は軽い高山病にやられて、朝からテントに入りっきりである。頭痛のため、食欲は全くないらしい。とりあえず鎮痛剤等を投与しておくが、余り効果はないらしく、夕方になっても相変らず寝たっきりである。

翌日は山本隊長と宮武隊員がC1までの荷揚げに出たので、私は調子の戻って来た池知隊員と高度を揚げるべく、サラグラールの西面とノーザン・クウムとを分けている尾根を登ってみた。岩屑を積み上げた様なガラガラした可成り急な尾根を、下からじっくりつめて行くと、ロシュ・ゴル氷河をへだてて六六〇〇㍍の美しい峰や、ウドレン・ゾムが眼前にせり上ってくる。突如、大砲を撃つ様な轟音が響く、ふり返ると、ウドレン・ゾム南峰から雪煙りを上げて雪崩が落ちている。何しろ氷河まで二〇〇〇㍍ぐらい落ちるのだから、音がしてから、おもむろにザックを降ろして、カメラをとり出しても充分に間に合うというシロモノである。

四五〇〇㍍ぐらい迄高度を上げると、さすがに少し頭が痛く、何か耳鳴りがする様な気分で、血圧が高くなっているのが自分でもわかる。最初出掛ける前にあの辺が四五〇〇㍍ぐらい、約二時間、とふんでみた所は、まだまだ見上げる様な上の方で、二時間近く登ったのに少しも近づいた気配がない。最初の一週間はこういう距離の錯覚ということが屢々起り、しかも上の方がつまって見えるので高さもそれ程感じられない。距離感は三分の一から五分の一ぐらいに過少評価していたが一～二週間たつと、それも馴れてしまって大体間違えない様になってきた。

ルート工作や、前進基地の設営が軌道に乗り出すと、山本隊長と私を残し、他の隊員はハイ・ポーターと共に全員がC1より上の生活に入ってしまう。BCには山本隊長と二人のリエゾン・オフィサー、コックのシェルワリと私、それに買って来たニワトリと羊二～三匹が残留部隊となった。後に池知隊員の事故で戦場の様な忙しさになるのであるが、今殆んどの隊員が出払ってしまったBCは、のんびりしたムードが漂っていて、ルート工作に悪戦苦闘を続けている他の隊員には申し訳ない様な天下泰平の日が続いている。

朝、先ずコックのシェルワリがニワトリを追っ払っている声で目を覚ます頃には、もう陽が大分昇っていて六六〇〇㍍のノーバイズノン・ゾムが真正面から朝日を受けて、まぶしいくらいに輝い

いている。我々のBCは、サラグラールに陽をさえぎられてしまうので、まだうす暗く、羽毛服を着ていて丁度よいくらいに寒い。早速メステントにもぐり込むと、シェルワリが、ミルクと砂糖をたっぷり入れた紅茶を持ってきてくれる。一休みしていると、そのうち陽がさして来て、みるみる温度が昇っていく。羽毛服を脱ぎ、セーターを脱ぎ、今日は何をして時間をつぶそうかと考えたりしていると、リエゾン・オフィサーも起き出してくる。ここでの彼等の生活程度は我々より上等で、シェルワリに水を運ばせて、歯を磨いたり、顔を洗ったりするのである。我々ときたら、食べて寝て、その間に少し仕事をするということの繰り返しである。

近くのモレーンの上に昇ったり、高山植物の写真など撮っていると一時か二時頃になり、昼食をしに又、メステントにもぐり込む。食糧箱をひっかき廻して適当なものをさがし出して自分で料理したり、面倒くさい時には、シェルワリにチャパティーを焼かせて食べる。チャパティーは最初のうちはまぐさを食べている様で味も素っ気もなかったが、そのうちにうまく感ずる様になり、ジャムや味噌をつけて食べたり、副食を工夫したりして可成りいける様になった。特にC1より上に居て、高所食ばかり食べているとチャパティーが食べたくなるらしくて、BCに帰ってくると、若い人達はよくシェルワリに作らせて食べていた様である。

（鈴木羊三）

六、ノーザン・クウムの偵察

サラグラールは大岩壁に囲まれていて考えられる登路はいくつもない。その一つは岩壁の左端の方から手前へのびているギザギザの尾根をたどる方法だ。佐藤（之）と原が二人でそちらへ偵察に行くことになった。もう一つは以前ここへやって来たオックスフォード隊のとった、もう一つ北方にある氷ム氷河ーをつめる方法だ。その方面を調べるために佐藤（久）と倉知はロシュ・ゴル氷河の本流をさかのぼり、遠くからルート発見を試みることにした。

BCのすぐ前にあるサイドモレーンの急崖をよじのぼり、岩くずにおおわれた氷河の真中に出、氷河の上流へ向う。いたるところクレバスがあって、あちこちそれを迂回しなければならないので、ひどく時間をくう。足元の岩くずも非常に不安定で、足元をすくわれることもたびたび、疲れることこの上ない。まだ高度になれないので頭はズキズキするし、この日は本当につらい一日だった。

しかしさすがに周囲の風景は素晴らしい。サラグラールは、位置をかえるに従って少しずつ変化をみせ、北の方の氷河もよく見えて来る。佐藤（之）たちが行った尾根の、BCとは逆の側も見え、すごくやせたけわしい様が手にとるようにわかる。その尾根はとても登れまい。

一方、ノーザン・クウム氷河の方は、ロシュ・ゴルの真中からみると、非常に浅い広い谷となって、その奥は、黒々とした岩壁に囲まれているのがわかる。それはとても登れそうもないが、右手の陰に氷河が曲がって入り込んでいるように思え、そちらへ入り込めば、いいルートがあるかも知れない。

オックスフォード隊がの奥に、ノーザン・クウム（北の盆地）がある。——

——ロシュ・ゴル氷河

と書いているそれは、その陰になってみえない部分にあるのではないだろうか、と思い、うにちがいないという確つくづく双眼鏡でながめている内に、そ信に変わって来た。

さて、翌日は、そのノーザン・クウムへ向かって、佐藤（之）と二人、氷河を登ってみた。山本隊長とリエゾン・オフィサーのファルーキ大尉も途中まで同行した。

その氷河の下の部分は、近よってみるとひどく荒れていて、真中に、二段になったアイスフォールが、ドンとかまえている。氷はモレーンで所々おおわれ、遠くから見るとうす黒く不気味に光って、いかにも恐ろし気だ。上の方は、そのアイスフォールの陰に入って、よく見えない。

丁度左の側壁の下に、落石の音。思わず首をすくめるが、岩壁はすぐ手近かのようにみえて、かなり遠方にあり、よほど大規模な岩雪崩でもないかぎり、ここまで届かない。それでも、ブス、ブスと気味の悪い音をたてて、石が雪の中にものすごい勢いでとび込んでいるのを見ると、おそろしくなる。

まもなく、どうしてもアイスフォールの中へ入り込まなければルートがなくなり、仕方なくクレバス帯をあちこち迂回しながら登っていく。相変らず、左手から絶え間ない落石、時々、ドドーンというクレバスの中で氷のくずれる音。その度に、神経がビクビクッとして、何とも落ち着かない。

アイスフォール帯を登りつめると、上は、やわらかな雪原となっていた。その奥には、きのう遠くからながめた、黒々した岩壁、それはまるで、円形劇場（コロセウム）のように、氷河をとり囲んでいる。

だが、右手に入り込んでいるクウムは？よくよく見ても、何にもないではないか。そんなはずはない、と思いながら、双眼鏡をとり出し、またよくよく見ても、それらしきものはない。あるのは、急峻なルンゼ、岩壁。しかもその上には、茸雪のような、氷塊が、まさにくずれんばかりにはりついている。

一体、イギリス人たちはどこを登ろうとしたのだろう、そう思いながら、この円形にはりめぐらされた岩壁帯にルートを探しながら目を走らせると、全体として左側の壁の方が傾斜がゆるいことがわかって来た。そこにある何本かのルンゼを適当にひろっ

て、途中の岩棚をトラバースしてそれを結びつければ、何とか登れるかも知れない。

そうだ、あの円形の雪原そのものがイギリス隊のいうノーザン・クウムだ、という結論に到ったのはBCにかえってしばらくしてからだった。そして、イギリス人のルートは、例の左手のルンゼの付近だろうということも、どうやらわかって来た。

BCのまわりの岩壁は、およそどうしようもない程だし、他に適当なルートも考えられないので、このノーザン・クウムのルートをもう少し登って可能性を見てみよう。こう考えて八日、今度はテントを持って偵察に向うことにした。

ノーザン・クウム氷河の入口に第一キャンプをつくり、そこから上の雪原に出て、さらに円形劇場の中に入ってまわりの岩場をよくみてみるつもりだった。

九日は、佐藤(之)、佐藤(久)、原、倉知の四人で氷河をつめ、円形劇場の入口にある大きなクレバスの所まで登り、ためつすがめつしたが、例のガリーは行けそうな気もするが、危ない感じがして、結論が出ない。

結局、もう一つ上部雪原にテントを出し、そこからとにかく岩へとりついてみる、というのが、その日のテントへ帰ってから出た結論だった。

(倉知敬)

七、遭　難

七月十二日。氷河最奥部のC2を六時三〇分に出発。気温はかなり低い。原、池知、佐藤の順で初めからコンテで行く、テントからすぐの五〇㍍ばかり先のクレバスの横断が非常に悪い。あちら、こちらにクレバスが黒い影を覗かせている。

広い雪の斜面を登り、そこから氷の狭いクーロアールに入る。約一〇〇㍍で右斜上に走っているバンドに移り、このバンド伝いに、稜線まで一気につきあげているクーロアールまで辿りつこうという計画である。最も困難と思われたのは、そのバンドのトラバースで、たとえフイックスしたとしても、荷上げができるかどうかは疑問であった。

クーロアール基部に、八時一五分着。踏跡がしっかりしていたとはいえ、十日に来たときは、四時間三〇分もかかったところである。

天気もよし、体調もよし、今日こそ稜線に出てやろう。そして、ロシュ・ゴル氷河に入って以来、一度も見なかったサラグラールの頂上を見るのだ。もう、ベースキャンプ建設から、八日も経っている。

クーロアール基部に打ち残しておいたアイス・ハーケンを確かめ、九時登攀開始。

日中は水が流れるクーロアールも、朝は氷化し、少し開けた上

端部まで、かなりの傾斜で望まれた。池知、佐藤、原の順で、スタカットで登ることにする。幅三㍍ぐらいの狭い底は、氷と岩の半々に分かれており、主に右側の岩伝いに登る。傾斜の割には岩が大まかで、スタンスが大きく、楽に登れた。約三〇㍍で、ハーケンして確保する。次に原がトップに立ち、岩伝いに、四〇㍍いっぱい伸ばす、僅かのところでトラバースの基点に到達できず、安全な岩陰でハーケンにて確保する。

自分の番が来て登り出そうとした時、頭上に、空を切る鋭い音を耳にした。あの、落石独特の、シュルシュルっという音である。左足にひどい衝撃をうけたのは、その一瞬であった。身体全体がしびれてしまったような強いものであった。

何が起ったかわからない驚きと痛みとで、顔をしかめたまま叫び続けた。左手で太腿を抱え、右手で顔を覆い、岩に倒れるようにもたれかかったのを覚えている。ズボンが裂け、血が湧き出している。足は、膝の上から醜く曲がり、つま先はまるっきり外を向いてしまって、ブランと下がっていた、無意識に両手で抱え込み、元に戻したが、痛みがひどく、立っていられず、遂に、丸く、のめり込んでしまった。足場が充分であったことと、原の確保とで、衝撃時に落ちなかったのは幸いだった。駆けるように下りて来た佐藤が、ザイルにぶら下ったも同然の身体を抱きとめ、二㍍下のテラスに下ろしてくれる。サブザックをはずし、ザイルを緩めてくれたので呼吸は楽になる。しかし、こんなところで、ゆっくりしてはいられない。又、何時襲われるか分からないのである。

すぐにも逃げ出したくなるような、この狭いクーロアールを約四〇㍍、後と前で確保され、やっと、安全地帯に逃げ込む。先程の出発点の岩陰に斜面を削ってもらい、佐藤の尻皮をもらって横たわる。

石の当ったのは、左足の膝上五㌢位のところ。大きく陥没していたし、其処で段になっていたので、骨の折れているのは直ぐに分かった。出血は、相変わらず止まず、ズボンの吸いきれない分が、雪の上に垂れ続けていた。

取敢えず、佐藤は、この場を原に任せ、急ぎ下ることにする。生憎、今日は、トランシーバーの交信をしないことにし、機械も、テントに置いてきている。当然の事ながら、ベースキャンプまで下らねばならぬ。

三時頃、此処は日陰になる。途端に水はやみ、滴は止まり、壁全体が氷化しはじめる。気温もぐんぐん下がり、震えが止まらない。血を吸い尽したズボンも固くなってきたような感じだ。遙か下のテントのまわりは、まだ、太陽に輝いているのに。全く皮肉なものだ。一難去って、又、一難。出血が止まったと思ったら、今度は寒さである。

辺りは、そろそろ、薄暗くなってきた。遠くに輝いていたウドレン・ゾムも黒いシルエットになりかけてきた。お尻が半分も載らず、何度も坐り直しては、根気よく寄添っていてくれる原の体温がとても気持よい。何時間経ったか突然、原が叫ぶ。「オイ・ライトが見えるぞ」。かなり疲れているらしく、ライトが、非常

にゆっくりと揺れている。
ウツラ、ウツラしていたのだろうが、そのまま、眠ったらしい。呼び声に目が覚めたら倉知さんと宮武君が来ていた。この暗い中、よくも、あの危険なクレバス地帯を通って来たものである。早速、寝袋に入り、改めて横になったら、流石にホットして、すぐに眠り込んでしまった。倉知さん、原、宮武の三人は、新たに斜面を切り開き、坐ったままで、一晩を過ごしたらしい。

十三日、気持のよい朝を迎える。三人で下しにかかる。寝袋に入ったまま、顔と腕だけ出し、胸部を四〇㍍のメインザイル二本で縛る。上で、二人が交互に確保し、一人が寝袋をひっぱり、ずり下ろすのである。

下の方に、どうやら、四人の登ってくる姿が見えたようである。佐藤(之)、佐藤(久)、ポーターのウイラヤットとダルベシであろう。昨日経験済みのように、この雪面は、高度差で五〇〇㍍乃至六〇〇㍍あり、既に近くに来ているようで、なかなか時間がかかる。待っている訳にはゆかず、又、下り始める。

氷河上に着いたところで、背負子を二つつなげ、簡易ソリを作った。

寝袋の上から、ソリにがんじがらめに縛られ、愈々出発である。前に二人、後に二人、それぞれ、ザイルでループをつくり、肩にかけて引っぱるのである。

いつの間にか、太陽は真上に来、正午も間近と思われた。ソリを下にまわし、やっと、順調に動くようになる。（池知昭洋）

七月十二日。夕方四時頃、佐藤（之）隊員がC1から一人で降りて来た。時間が時間だし、一人というのがおかしい。何か悪い予感がする。案の定、事故発生である。池知隊員がノーザン・クウムで落石にやられたのである。

詳しい状況はわからず、どういう医療器具や薬品を用意したらよいか見当がつかない。佐藤隊員の話ではかなりの重症で今晩が峠だろうということである。事故現場は約五八〇〇㍍の所で、今、すぐ出発しても、明日の午後でないと行き着かない。結局、抗生物質と止血剤をポーターにもたせて急行させた。山本隊長と私もすぐ後を追って、ノーザン・クウムのC1に入ることにして装備をととのえた、シュラーフ・ザックや、羽毛服、それに残った薬品や医療器具等を揃えたらかなりの量になって、これからC1迄かと思うと、一寸うんざりしたが、そんなことを言っている場合ではない。何とか、明るいうちにC1に入ることが出来、翌日はアイス・フォールを越えてC2に入った。救出作業は大変な苦労で、担架を作り、三日かかって、やっと池知隊員をBC迄下ろすことが出来たのである。

七月十五日。BCに着いたのは夕方で、もう暗くなってしまい、これから治療にとりかかるのも大変だし、池知隊員も可成り

元気なので、すべては明日ということにして四日ぶりのBCでぐっすり眠ることが出来た。

翌日は朝から治療にとりかかった。少し足を動かしても猛烈に痛がるので、全身麻酔を使うことにしたが、四三〇〇㍍で全身麻酔なのでどんなことが起るか、おっかなびっくりである。万一を考えて、強心剤やコマーチゾン等の他、酸素もすぐ使える様にしておいて、静脈注射で行った。傷は左大腿部下端に近い所で、外から見ると骨迄達すると思われる深い傷があり、明らかに骨折が認められる。傷をきれいにした後、傷の所だけ開けておいて、後はギプスで腰迄固定してしまった。幸い麻酔からすぐ醒め、意外に元気なので安心した。ギプスで固定したために少しぐらい動かしても痛みは感じなくなり、夕方になると食欲も出てきた。しかし、ここに困ったことが起きた。大小の用便である。小の方はポリエチレンタンクで何とか足せる様になったが、問題は大きい方である。各隊員頭をしぼって色々考えるがなかなかよい方法がない。結局腰かけて、腰かけに穴のあいた椅子、つまり西洋便器みたいなものを作って使用することにして、やっと解決したのである。

山本隊長と相談して成るべく早く日本に帰すことに決定、カラチ迄、誰を付添わせるかも問題になったが、幸い、我々の隊にはリエゾン・オフィサーが二人居るので、その一人、アシュラフ大尉と、一番若い宮武隊員を同行させることにした。再び暑い下界に下りることでもあり、又、不潔な所を通らなければならないので、抗生物質を大量に持たせた。出来れば私が付添って日本迄帰れればよかったのであるが、山登りはまだ始まったばかりなので隊長の要請もあり、心残りながら私は残ることになった。しかし、日本迄戻る間に、傷が悪化して全身状態が悪化しないか、ギプスの固定が悪くて痛みが起きないか気が気でなかった。

七月十九日早朝、担架に乗せられて、ポーターにかつがれて淋しそうに下って行く池知君達を送り出してしまうと、何だか、今迄張りつめていたせいか、急にがっくりしてしまった。

隊員二名を欠いて、しかも事故というショックから抜け出るために、一応ノーザン・クウムからの攻撃はあきらめ、気分転換を計るというのではないが、高度馴化を進めることと一歩離れてサラグラールを見るという目的のため、ロシュ・ゴル氷河対岸の、ポーター達が、ノーバイズノン・ゾムと呼んでいる六六〇〇㍍の美しい未踏峰が攻撃の対象に選ばれた。

（鈴木羊三）

八、ノーバイズノン・ゾム登頂

我々がBCについた時からこの六六〇〇㍍峰（ノーバイズノンゾム）は最も注意をひいていた。高さは低いが、横に大きくひろがり、実にボリュームがある。ロシュ・ゴル側から見る限りではルートは発見できないが、一応、ウドレン・ゾムとノーバイズノンとのコルに上って見る事とした。

七月十九日。そのコルまでの予定で偵察に出る。ロシュゴル氷

河のモレーンの横断に丸一時間かかる。氷河を横断してから急ではあるが何の障害もない雪面をコルへと登る。前の救助作業で体力を消耗した為か、停滞日が続きすぎたせいかけだるくて仕方がない。氷河というよりも五月の雪渓といった所をフラリフラリと登っていった。最後の雪壁をのり切ると、これまたゴーカケンランたる視界がひろがった。コルは雪原といってよい程ひろがっており、少々右手寄りに行けばよいイストル・オ・ナールからノシャク、コーイ・マンダラスの山群がすべて一望のもとにある。コルの高度は約五一〇〇㍍。高度計が高山病になったのかまったくあてにならないので、目測であるが。ふりかえれば、豪快なスラブの壁をめぐらしたサラグラールの低さよ。何もわからずに取り付いていたが、ここにきてはじめて、頂上からベースまでの壁、氷河の入り方などが判明した。

ノーバイズノンのルートは、このコルから直接には取り付けない。六六〇〇㍍の頂上に至るまで、このコルから二つのピークがある。その一番手前の約六一〇〇㍍程のピークの頂きからコルまでは岩壁となって一気になぎ落ちている。しかしアトラク氷河側に比較的ゆるいリッジを派生させているので、少しアトラク側に下ってリッジの側壁を登れば、何とかなりそうだ。一応の目途をつけて重い腰をあげ、帰途についた。

二十一日。全員でコルまで荷上げ。二十二日には、倉知以下佐藤(之)、佐藤(久)、原の全登攀メンバーがコルのC1に入った。いよいよ攻撃開始である。翌朝の偵察、佐藤(久)、原で下部のルートをはかなく感じた。しかも頭上には鈍く青く光る氷のひさしが、今にも崩れ落ちそうにおおいかぶさっていて、はなはだ気味が悪い。確保の為停止していると恐しさがつのり池知の事故があったばかりだ。

偵察の二人がヨレヨレになってC1に帰って来たのは夕闇と競争で六時頃だった。C2予定地は見つかったが、とに角出だしのトラバースが危険である。明日は日の当る前、六時に出発しようという事になった。氷庇の崩壊をさける為である。

二十六日。六時出発の予定が、遅れて六時半となった。この遅れが、我々のつまづきとなった。アイゼンをしめて、見るともなくルートをながめていると、氷庇がぐらりとゆれ、続いて、すさまじい音をたてて落ちはじめた。崩落はしばらく続いた。もし予定通りに取り付いていたら、丁度、崩落の通路にいた頃である。氷庇と云っても雪庇の様に稜線にあるそれでなく氷壁のそこここに張付い

をすてる事とした。すなわちアトラク氷河に向って、さらに二〇〇㍍程下り下の氷壁をつめて、支稜に出るのである。そちらの方面に倉知、佐藤(久)で偵察に出、佐藤(之)原組は、ノーバイズノン終了後登る予定のウドレンゾム南峰の偵察に出た。あくまで強気で出ているのである。

ウドレンの方は、一見登れそうに見えなかった壁が数本の岩稜と雪壁を交互にルートにとれば登れる事が確定した。ただペニテンテがひどく、場所によっては、背丈より高いやつが乱立している。乗ればくずれるし、戦後伸びた脚の長さでもまたぐことも出来ないのでいちいちピッケルでたたきこわさなければならない。この高さでピッケルをふるのは楽ではなく、五八〇〇㍍程で、先の目途がついたことにして、うまくルートを見つけたらしく引き返した。倉知・佐藤(久)組も、前後してC1に到着した。

二十七日、全員でC2予定地まで荷上げ。ルート工作を兼ねている。支稜までの氷壁は、フィックスザイルのべた張りである。アイゼンを利かせた足首が痛くなる頃支稜上にとび出す。

二十八日。C2入り。C2までくれば又一段と景観がさえる。左端にティリチミール、右端にナディルシャーとそれぞれ一つずつの七〇〇〇㍍峰が余計に見えだす。夕日はマンダラスのピラミッドピークのかげに沈む。ピラミッドといっても能のない只の三角形ではない。頂上から東面に向って好ましくしゃくれたカールを持ち、左右の稜線の直線的な鋭さに曲線の優美さを与えている。ナディルシャーの様にただボリュームだけある海坊主形の山、或いはイストル・オ・ナールの様な男性的迫力はあるがゴチャゴチャして形のはっきりしない山等の中で、マンダラスは断然僕達をひきつける。そのマンダラスが完全なシルエットとなる頃は気温も急激に下り始め、皆テントの中におさまりこんだ。

二十九日。C2は一応アタックキャンプであるが、何せ、ここから頂上までどの位あるかわからないのと、C2―第一のピーク間がかなり悪いので、偵察とルート工作を兼ねて、第一のピークまで行ってみる事とする。クレバスに二度さえぎられたが、スノーブリッジをみつける事ができた。慎重にスタカットを多用して行くが、フィックスを張ってアタックの時はコンテで登れる様にする。確保の支点は主に岩に求める。ここの岩はリスが広い為、アイスハーケンをがっちり根元までたたきこめる。てこでもぬけないという感じで頼もしい限りだ。北側にルートを求めて、リッジと雪壁を交互に登り、雪庇をまいて南側にでる。ここから雪庇の基部をトラバース気味に斜上して行くと六一〇〇㍍の第一のピークに出る。

先を見やれば、目標ははるけき彼方である。第一のピークと第二のピークのギャップ、その先の上り下りの多い複雑な稜線、丸く盛り上ってテラテラ光っている雪面、そのはるか向うにノーバイの頂上が光っている。C2からは到底一日での往復は不可能と思われたので、アタックの帰路のビバーク用に六一〇〇㍍の頂上のクレバスを利用して雪洞を堀っておいた。

三十日。アタック。二人ずつのザイルパーティに分れ、がんばって八時には第一のピークに着いた。ところが、にわかに雪が舞い出し、行先は黒雲につつまれてしまった。待機と決め雪洞にもぐりこむ。天気は好転しそうにない。強行するか。C2で停滞するか、そこで最も魅力的な案が出た。この際寝袋だけ持って一気にBCまでかけ下りるというのである。C2で節食生活を送って消耗するよりベースでまともな休息をとる方がよいしベースから二日でC2に上れるから楽にアタック態勢に入れる。皆勿ちこの安易な案にとびついて一目散にベースにかけ下りた。

一日の予定がつい二日休養してしまった。ベースを建ててから既に相当の日数がすぎているのにもかかわらず、一つの頂上にも登っていないので、連絡将校に対して甚しく信用を落してしまった。我々の隣にベースをもうけたドイツ隊も、ラングータ・バルフィ（七〇五〇㍍）に対するアタック体勢をととのえている。そろそろ焦り出した。出発の時に、佐藤(之)さんが将校へ大見栄をきっている。「ノーバイズノンとウドレン南峰を登ってしまうまではベースに帰らない」。将校は疑わしそうにニヤニヤ笑っていた。二日かけて順調にC2へ入った。

八月四日。佐藤(之)・(久)、倉知・原の二組のザイルパーティに分れて燃え上ってアタック開始。六一〇〇㍍ピークの上に朝日がさした。ここから第二のピークのコルまで四〇〇㍍下らなければならない。雪庇の稜線は下の壁をトラバースし、しゃにむに急ぐ。昨日から山本隊長、鈴木ドクターはサポートの為にC1に入っている。二時間おきにトランシーバーで交信するが、C1は第一キャンプの陰で通じないので、ベースのファルーキ大尉に仲介してもらう。コルへの最後の下りは二百㍍程のペニテンテの雪面である。気温は既に上り出しているからもぐることもぐること。バランスもなにもなく、おりているのか落ちているのか判然としないまま強引に進む。コルから見ると第二のピークは、ものすごい急傾斜に見えるが、取付くとそれ程でもない。確保のアイスハーケンがガッチリ氷に食い込んでいた。この辺りから、小さな上り下りが、いくつも続き、余り高度はかせげない。途中にコルがあるが、その一つに池があった。勿論表面に氷がはっているが、うまい水を飲む事が出来る。この高さで何で完全に凍ってしまわないのか分らないが、ありがたいことであった。こういう稜線歩きをしていると三月の西穂稜線を思い出す。西穂―奥穂間に似ているようで嬉しかった。

最後のコル、眼前に大雪面が続いている。ここから再び高度をあげるのだ。流石に大分参ってきた。既に午後の部に入っている。大休止で昼食をとる。さて、ここからは根気オンリーの登りである。ジグザグを切りながら何も考えないようにしてひたすら登る。日も傾きはじめた。やけくそになって「殺せえ！」などと口走る奴が出る頃やっと乗りきった。雪庇の出た小さな壁を乗越して尾根上に出ると、やっと目標の頂上が見える。二つ向うのピークの上にすまして雪をまといつかせているのが、まさしく六六〇〇㍍である。自然に足が速くなる。スタカットで登る必要があ

ると思える所もノーザイルでガサガサ登る。

倉知さんから声がかかる。「ちょっと待て、映写機を出す」。神妙に一列になり雪稜を登り出す。佐藤(久)が立ち止り、ためらう様にまわりを見、そして手を上げた。頂上だった。握手の手が交錯する。嬉しかった。事故には会うし、これだけの日数をかけながらピーク一つ登れぬしで、自分達の力が信じられなくなってきつつあったからである。これでやっと階段を一段上り先に明るさが見えだしたのだった。不真面目な僕の喉元にも熱いかたまりがつきあげてきた、既に四時を回って日は弱くなっている。隊長に成功の報を知らせたいが、トランシーバーがこわれている。早く帰りたいが、ビバークは避けられない。ここで我々は大失敗に気がついた。ビバークは予定していたのだが、第一のピークまでは引返せるだろうという事で、ツェルト、燃料・食糧・エアマット等大事なものを皆雪洞にデポしてしまったのである。この時間ではとても第一のピークまでは帰れない。三人用のツエルトが一つあるから何とかなるだろうということで、ビバーク地をさがしながら下って行く。大雪面を下りきったコルのロシュゴル寄りにサイトを求めた。六時だった。寒くはあるが、天気がよいのでさして苦にもならないビバークである。

翌日、重い足で往路をたどる。下り一方ならよいのだが。第一のピークの四〇〇〇尺の上りはどうなるのかと思っていたが帰巣本能はおそろしいもので意外にスンナリ越える事が出来た。C2帰着二時三十分。山本隊長が心配してポーターを連れてC2まで来ていた。無事を知って再びC1へ下って行ったが、ポーター共のあぶなっかしい事。よくもここまでと感心するやら心配するやらしていた。

六日。丸一日がかりでフイックスを撤収しつつC1まで下る。本当はベースに帰りたい所だが、連絡将校への高言の手前、下る訳にもいかず、ウドレン・ゾム南峰へこのままむかわなければならない。

（原博貞）

九、ウドレン・ゾム南峰登頂

多くの犠牲と、大勢の人々の後援のもとにはるばるやって来たからには、何としてでも七〇〇〇尺の頂上を踏まなければならないという義務感と、六六〇〇尺のノーバイズノン・ゾムで経験した登攀の苦しさ、さらにそれを上回るだろう苦しさに対する不安感、複雑な気持の登攀意欲と、高度及び肉体的疲労からくる無気力感とが入り混って次の目標ウドレン・ゾムの登攀が始まった。ここC1には、我々がノーバイズノン・ゾム登攀中に、山本隊長及びポーターがあの長いいやらしいベースキャンプからの氷河上のルートを何回も往復してせっせと運び上げてくれた食糧が十分ある。

ウドレン・ゾム南峰のつづく稜線には四つの大きな段がある。C1から見る限りでは、なんとか第2段目もしくは第3段目の棚あたりにキャンプを建てれば、そこから頂上は射程距離にあるも

のと思われ、それにはまず、第一段目と第二段目の間に立ちふさがる巨大な雪壁の中にルートを探さなければならなかった。そこで八月八日、その雪壁のすぐ下に広がるゆるい雪の台地――これはC1から目と鼻の先に見える――にC2を建設し、明日じっくりと一日かけて問題の壁の偵察及び出来ればルート工作を行うことにし一〇時頃、佐藤(之)、原のペアーがルート工作隊として、個人装備と若干のフィックス・ロープ、ハーケン類を持ってC1を先発、その後、約三〇分ほど遅れて倉知、佐藤(久)のボッカ隊が、テント、炊事用具、燃料等を持ってつづいた。C1から緩いペニテンテの斜面を登るとちょっとしたピークの頭に出る。C1からの高度差は一〇〇〇尺程度のものであるが、その登りはペニテンテの発達と、疲労のためかなり苦しい長く感じられる登りであった。

そのピークの降りは、ちょっと急な氷壁状をなしていて悪かったが、先発隊が張っておいてくれたフィックス・ロープに頼って降ると、後は岩と雪の歩き難い斜面だけであり、途中、一カ所一〇尺の完全な岩登りに出会ったが、ホールド、スタンスとも十分で、別に大した苦労もなく予定の台地に到着した。

ボッカした四人用テントを建てている頃から雪がチラホラ降り始め、目の前にせまる雪壁もガスの中に消えてしまった。

八月九日、佐藤(之)、原の偵察隊はC3建設の目処をつけるべく、早朝六時にC2を出発、問題の雪壁及びその上の稜線上の偵察に向う。テントの前からすぐに激しいペニテンテ群が待ちかまえていた。ここのペニテンテは、今迄に出会ったものにはないような立派なもので、人間の背丈ほどのものがニョキニョキと林立して、まるで小学生の頃科学図鑑で見た月世界を想像させるような光景であった。

さしものペニテンテ群も斜面が傾斜を増すにつれて、その激しさを減じていた。最後の稜線に続く斜面に出るとそこには長い登りが待っており、稜線は気が遠くなるような遠くに青空の中でその純白のカーブを浮出させていた。稜線上に出るまでに一体、何時間かかるだろうか、そんなことを漠然と考えながらひたすら登り、一時ちょっと過ぎに稜線に出た。

そこから稜線は細いスノー・リッヂとなり岩の階段へと続いていた。その部分は非常に悪く、黒々とした岩の階段状を呈しておのする岩が完全に露出した、冷たい大きないかにも硬そうな感じり、思わぬ難場に〝はた〟と行き詰ったという感じさえしたが、何とか一本のルートを見い出し、明日のボッカにそなえてガッチリとフィックス・ロープを固定し、先を急いだ。しばらく急な雪壁が続いた後、ぽっかりと、それも本当に突然という感じで、平らな小さなテラスに出た。広さは、せいぜい3～4坪程度のものであったが、この急な稜線の中に予想だにしなかった傾斜角度ゼロのスペースを見つけ、一も二もなくここをC3の位置とすることに決定した。

翌一〇日、個人装備、テント、食糧等のC3及びアタックに必要な一切の荷を四人で運び上げるには一回では少々無理であった。しかしこれから上では、技術的にポーターを使う訳にもいかず結

局我々四人だけでボッカする以外に手はないのであるが、かと言って、二回に分けてボッカするという気にも、あの目の前に広がる巨大なカーテンの如き長い雪壁の登りを考えると、とうていなれなかった。

そこで、運び上げるべき個人装備を最小限に抑え、テントは三人用に四人入り窮屈だが我慢することとし、食糧は四人で四日分とけずって厳しい重量制限をした。

二時頃、長い長い永久に続くかと思われるような硬雪を登り切り稜線に出た。

稜線上は昨日の偵察隊が巧みに作っておいたルートをフィックス・ロープをフルに利用して二時ちょっと過ぎに予定のキャンプ・サイトに到着。佐藤(之)、原はすぐ明日のアタックのために少し先まで偵察に出た。ここC3は高度六三〇〇㍍、急な稜線の上によくも崩れないでこんなテラスが乗っかっているかと感心するような小さな雪棚上にあった。

明けて十一日、晴一時曇　高距七五〇㍍の登攀、今日は特に寒い。凍りついたピッケルバンドをしっかりと締めつけ六時テントを出る。テントの前からすぐに急な雪面、倉知、佐藤(久)のペア、佐藤(之)、原のペアでアンザイレンしてモクモクと登る。突然、目の前に高距二〇〇㍍はあろうかと思われる氷壁が現われた。下部一〇〇㍍は氷壁というよりもむしろペニテンテの雪の急斜面といった方がよく、割合楽に登れたが問題は上部一〇〇㍍にあった。傾度六〇度ぐらいの硬い氷化途上の雪壁、上部には雪庇すら張出していた。直登は無理。上部に一ヶ所だけ雪庇の張り出しの小さなところがあった。おのずからそこに向ってルートは決った。

佐藤(之)が原の確保で登り出す。一歩一歩足場を切って確実に進んで行く。確保には三〇㍍ザイルのアイスハーケンが有効であった。三ピッチで雪庇の下に着き、原が乗越しにかかる。左斜上への乗越しのため、右手でピッケルを振るうわけにもいかず、かと言って左手では力が入らないしバランスも崩れやすい。おまけにヒンズークシュの雪庇は氷庇といった方がよいくらいのもので、ピッケルで崩せるような生易しいものではなかった。原は体を弓なりにそらしく雪庇のすぐ下まで近づき丹念にホールドを作り微妙なバランスで乗越しに成功した。

雪庇を越えると雪原に出る。高度は既に六六〇〇㍍。時間は一〇時半。快調なペースである。早くも登頂の見通しはついたようであった。BCの山本隊長と交信し登頂の見通しについて連絡をつける。四人の間には自然と明るいムードが流れてきたが、それでも四人とも心の底には一抹の不安があった。というのは、ノーバイズノン・ゾムでの苦い経験があったからである。ノーバイズノン・ゾムのアタックの時も午前中は快調なペースで進み楽勝ムードであったが、午後になるとガタンとペースが落ちそれに予想もしなかったギャップが次々に現われ結局登頂はその日のうちにできたものの帰路にはつらいビヴァークを余儀なくされてしまったという経験があったからである。ましてC3まで帰りたかった。もうビヴァークは沢山である。

急な雪面、次に氷と岩のまだら模様の長い斜面が続いていた。この頃から高度の影響か軽い頭痛を覚える者がでてきたが、それでもペースは快調である。ルートは稜線をはずれアトラック氷河側の山腹にあった。南西面向きのためすでに七〇〇〇㍍に近いという高度なのにその付近は雪がほとんど融け乾いた黒いスレート状の岩くずが積み重なったような岩場をトラバースしていく。

この頃から淡いガスが発生し始め、頂上が隠れてしまった。地形が複雑なためどうも頂上がはっきりしない。兎に角、稜線に出れば頂上もはっきりするだろうと何んとか登れそうなルンゼに導かれて登った。稜線上に出れば、すぐに目の前に目指す頂上が見えるものと期待していたが、岩のコブが立ちはだかっていたため目の前には二〇㍍ぐらいの大きなあのコブを乗り越えれば向うは頂上だとばかりに苦しいのを我慢して一気にコブを登り切ったが果して期待は裏切られた。もう一つ今登り切ったと同じような格好のピークがあるだけだった。しかもそのピークは今登り切ったものよりも一回り大きく、おまけに上部が岩塔となっておりに乗り越えるのは難かしそうであった。そのピークを巻くべくやむを得ず再度ルートをアトラック氷河側の山腹に採るとそこはガラガラの岩くずの積み重った斜面であった。ガラガラと誰に気がねをすることもなく岩を蹴落しながらルートに導かれるままに再び稜線上に出た。

あった!!　頂上が二〇㍍先に我々の足もとから緩やかなリッジが続いていた。佐藤(之)が登頂の瞬間を八ミリにとらえるべくザックからカメラを取り出し構え、そして原、佐藤(久)、倉知の順に背後のカメラを意識しながら一歩一歩踏みしめるように多少演技を混じえて雪のリッジを登った。

午後一時三〇分、ついに頂上に立つ。

アトラック氷河側半分は岩くず、ロシュゴル氷河側半分は雪とはっきり分れたかなり広い頂上であった。又、これが七〇五〇㍍の頂上かと思うほど穏やかな頂上であった。

頂上で鈴木ドクターから依頼の七〇〇〇㍍での血圧を計った。今までBC、C1、C2、C3と各高度ごとに血圧測定を行って来て、その結果はいずれも高度と血圧は比例関係を示していたが今七〇〇〇㍍での結果は全く予想に反していた。四人とも皆、二〇～三〇ぐらいC2やC3の時よりも下っていたのである。多分この低下はそれまでの毎日の激しい登攀に比べ意外に楽だったこの日の登攀とそれからくる精神状態の安定によるものであろう。

下降は速かった。ノーバイズノン・ゾムの時とは違って今度は降り一方であると思う気易さもあり、登りに苦労した氷壁もスノーバーを支点として簡単にアップ・ザイレンで下り、七五〇㍍の下降も三時間足らずで終了させた。午後六時、日中あれほど激しい輝きを見せていた中央アジアの太陽も赤味を帯びてアフガニスタンの国境稜線に傾きかけた頃、我々はテントに帰り着いた。既に我々からは登頂の感激も去り、ただ心地良い疲労感が残ってい

るだけだった。

十、サラグラール南峰登頂

（佐藤久尚）

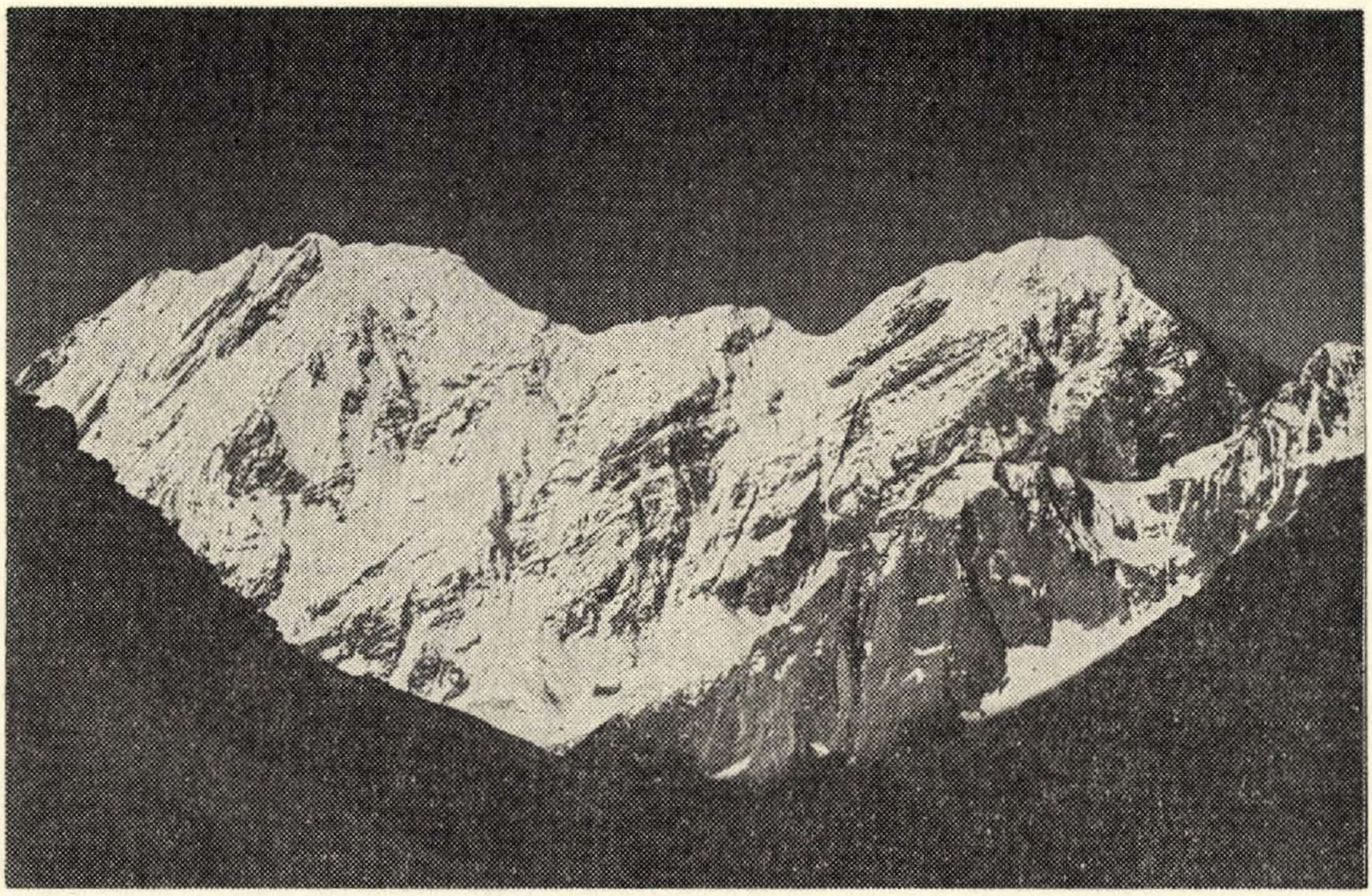
われわれは二つの登頂を終え、例の事故以来初めて、本来の落ち着きを取りもどし、充実感を味わった。しかし、加えてうれしかったのは、ウドレン・ゾム南峰登頂の明くる日、われわれがベース・キャンプに帰り着いた折りも折り、事故に遭った池知をカラチまで送り届けた宮武が、アシュラフと共に、二十四日ぶりにベース・キャンプに舞いもどって来たことであった。

彼らは、負傷者を運ぶ困難の他に、たまたまパキスタン中南部一帯を襲った大雨に遭い、都会に着いてからもたいへんな苦労を強いられ、山に引き返す際にもチトラルまでの飛行機が休航のため、陸路をジープで帰って来たのである。この貴重な遠征における二十四日の長い時間を、いちばん若い宮武は、負傷者送還のために費やしてくれた。最後の残り少ない日程を、宮武のためにさいてやりたかった。われわれは二つの登攀の疲れをいやしながら、以後の行動計画について、熱をおびた議論をした。そして、当然のことながら、サラグラール南峰の最後の可能性を追求してもう一度試みようという提案がなされた。

しかし、残されている時間は一〇日間足らずであり、登頂した二つの山から臨んだサラグラールの様相は、ロシュ・ゴル側からの登高に関する限り、やはりかなり困難があり、少なくとも、一〇日やそこらの短期間では成功の見込みがないことが予想された。一方、ロシュ・ゴル氷河の下流、ノーバイズノン東方に、アトラックとか、ムトチリと呼ばれる六〇〇〇㍍級の未踏峰がある。それあたりが、残る日々を消化するに最も適しているのではないかと思われた。

ところが、行きがけの駄賃ならぬ帰りがけの駄賃ぐらいに思っていたこれら六〇〇〇㍍そこそこの山は、そう簡単にわれわれの駄賃にはなってくれなかった。ロシュ・ゴル谷の右岸（ドルーの対岸）から支谷に入り込むと、その奥が広大な内院となっている。この内院を三方から取り囲んでいるのが、アトラック、ムトチリ、バクトンボクトの三山であり、それは高さ一五〇〇㍍ほどの城壁のようなリッジで連なっており、そのリッジまで這い上がらなければどのピークにも到達し得ない。それは、大量のザイルと金物類（ピトンなど）を要し、しかも一週間かそこいらの短期間に登りきれる山ではない。

しかし、アトラックの内院の偵察は無意味ではなかった。というより、この偵察行が与えた新しい視角は、全く予想だにしなかった結末をわれわれの遠征にもたらしたのである。偵察の結果に失望して踵を返した私の目に、サラグラール南面の姿が飛び込んできた。アーベント・ロートに輝く頂上付近から、手前に向かって一直線に落ち込む大急斜面はその下部を手前の尾根に遮られて見えないが、その尾根の消えるあたりから、南面の氷河を吸収している谷が、明るく穏やかなものとして目に映った。それを見て



ノーザン・クウムＣ１よりノーバイズノン・ゾム（左側）

私は、これが往きのキャラバンの時もサルト・アン峠から初めて目にしたサラグラールのあの絶望的な風貌をした南面と同一のものであろうか、とわが目を疑った。

八月十七日。私と宮武は、ドルーからサラグラール南面の谷に入った。谷の入口はゴルジュになっていて極度に狭く、激流がさかまいているので、上から捲かなくてはならなかった。しかし、奥に入れば入るほど谷は広がり、二時間もすると、谷が大きく二手に分かれる広大な盆地のような広場に出た。その左手の方の直接サラグラール南面の大氷河に連なっている谷に向かい左折すると、南面を二つに分けている中央岩稜ともいえる岩尾根にぶつかる。この岩稜のすぐ左手に、ちょっと目につきにくい、ガラガラした、全体が茶色っぽい感じの谷がある。サルト・アンから観察した時、絶望的ではあるが、どうしても可能性を見出さなければならないとしたら、おそらくこれしかあるまいと、秘かにスケッチしておいたルートに続くのが、この谷――ヒドン・ヴァレーであることが、直感的にわかった。

二人はぐんぐん登って行った。とにかく今日中にも可否のメドを付けなければ本隊の現ベース・キャンプからの移動とのかねあいもあって日数的に困難になってくる。それでなくてもすでに、どう引き延ばしても一〇日しかない短期間の間に、三四〇〇㍍のドルーから七三五〇㍍のサラグラール南峰に攻撃をかけることは常識的に考えれば無理な話なのである。二人は三時に、この谷のどんづまりに着いた。そこは周囲を高いこげ茶色をした岩壁に囲

まれた釜の底のような所で、右手から周囲の暗い色彩を突き破るようにして、急なアイスフォールが流れ落ちていた。その氷河の上方を目で追っていくと、電光形に大斜面が、大まかに三段の層をなして頂上近くまでダイレクトに続いているように見えた。ここにアドヴァンス・ベース・キャンプを設けると、ここの高度がほぼ四五〇〇㍍。頂上まで約三〇〇〇㍍の高差があるが、むだのない直線的なルートがとれそうなので、高度馴化の十分できている現在なら、快調にキャンプ建設が進められるかもしれない。こう考えた時、私の中にほとんど直感的に登れるという自信が湧き上がってきた。

八月十九日。われわれは、二人のポーターを使い、予定通り、四五〇〇㍍の地点にアドヴァンス・ベース・キャンプを建設した。どんづまりの雪の盆地から右斜めに急上昇する氷河は、出だしはガリガリの氷が表面にむき出しているベア・グレイシャー（裸の氷河）の趣を呈し、ともすればアイゼンの爪もはねつけられそうであった。この氷河は盆地から三〇〇㍍ほど上で、左からほとんど直角にもう一つの急峻な支流懸垂氷河が合流している。この懸垂氷河が本流に流れ込むところは、巨大なアイス・ビルディングが折り重なるようにして乱立し、それがいまにも崩れ落ちそうに前傾していて、見る者に強烈な恐怖を与える。もし、アイス・ビルディングの一塊が崩れ落ちてきたら、本流一杯に広がる危険性は充分にあった。表面が、ガリガリに凍った最初の二〇〇㍍を過ぎると、巨大なクレバスが到るところ口を開いた地帯にぶつかる。平坦地におけるクレバスはまだいいが、氷河そのものが急傾斜をなしている箇所でのクレバスは、割れ目が段違いになって上端が氷壁となってしまい、縄梯子を使用しなければ、ボッカ・ルートには使用できない。この地帯に一五〇㍍の固定ロープを張り、縄梯子のために、スノウ・バーを深くたたき込んだ。

翌二〇日。ドクターを除いた六人全員でルート工作とボッカに向かう。出だしのガリガリの氷の上に一〇〇㍍ロープを固定し、クレバス地帯に前日の分に加えてさらに一〇〇㍍、段違いクレバスの乗っ越しに縄梯子をセットした。クレバス地帯を過ぎると傾斜は落ちて、淡々とした緩い斜面がしばらく続く。つぎにルートは逆くの字に左斡めに折れて傾斜を増し、全体にでこぼこした斜面に変わる。この斜面を登りきるあたりから雪が降り始めた。

全員かなりの重荷を背負っているが、ほとんど日本の山にでも登っているくらいのペースで、すこぶる調子が良い。高度は五六〇〇㍍ほどであろうか、斜面の右脇にせり上がったような狭い台地があった。そこを第一キャンプと決定した。この日、私と原は第一キャンプに残り、そのまま明くる日はさらに上にルート工作を進めることになり、その他の四人はアドヴァンス・ベースに引き返した。

翌二十一日。私と原の二人は第二キャンプ地を求めて偵察とルート工作に向かう。一方、倉知と佐藤（久）、宮武はダルベッシュ、ウィラヤートを伴い、第一キャンプに入ることになっている。二、三日前より曇り、あるいは雪の日が続いたので、ヒンズ

ー・クシュも、八月の末近くになると天候はくずれてくるのかと心配していたが、この日はまた持ちなおして快方に向かった。第一キャンプから一〇〇〇㍍ほど登ると、ヒドン・クレバスが縦横にある。平坦な雪面に出標にしなければならないところだ。この平坦地が、上部の急斜面とぶつかる接線となっているところは、大きなヒドン・クレバスになっていて、対岸の斜面に取り付くには不安定なスノウ・ブリッジを渡らなければならなかった。

普通ならば、このような場所には何らかの工作を施すのが当然だが、この山に対するわれわれの最後の局面におけるわれわれに採用を許されたシステムは、少し違っていた。残された日数はもう一週間を割っていた。少なくとも一週間後にはドルーのベース・キャンプを離れていなくてはならない。もともと今回の遠征の計画としては、ロシュ・ゴルにおける登山活動四〇日分のスケールで、装備にしろ、食糧にしろ、そのメドがつけてあった。七月四日に最初のベース・キャンプを建設してから四〇日目というのは八月四日に当たり、今やそれより一週間を過ぎている。もちろん、食糧はいくぶん余裕をもって確保してあったが、それもリミットはせいぜい二週間である。こうしてあと一週間がわれわれに許された撤収をも含めた登攀活動の時間であった。

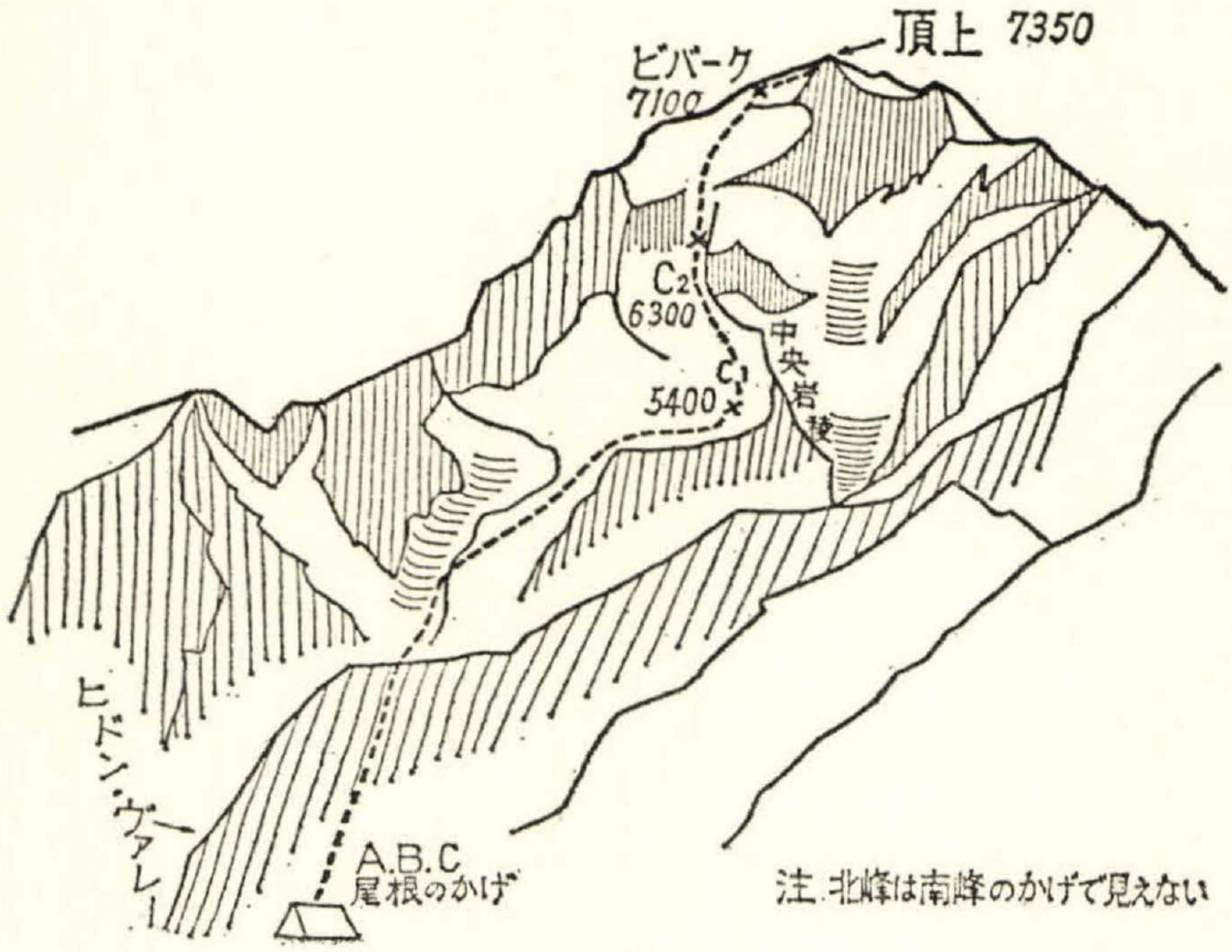
各キャンプに二日分くらいの食糧しか置かず、また高度をかせぐ上に、停止の要素となることは最少限に押えることが、今採るべきわれわれのシステムであった。同じルートを三度も四度も通ることはない。悪くても、その工作に時間は、全く即時対応のスタカット・クライミングけねばならなかった。

朝のうち、晴れていた空は、平坦地を過ぎて急斜面を登り出してから一時間もすると、雲が出てきて、斜面の一〇〇㍍先はガスで見えなくなった。胸をつく急登で、ペニテンテが無くなると、今度は硬い氷まじりの雪面で緊張させられる。とにかく時間節約のために、偵察といえどもボッカを兼ねているので、トレースの無い未知の急登を重荷でたどる辛さは相当なものであった。左上方からのセラックの崩落を避けるようにして、三〇〇㍍ほど息つく間もなく登ると、巨大なスキーシャンツェのようなこの大斜面の右側を縁どる痩せた岩稜に達した。

時刻はまだ一二時をやや回ったばかりである。しかし上方を見上げても、この大斜面はまだまだかなり続きそうな気配で、その上もテントを張れそうな場所が見当たるかどうかわからない。高度はほぼ六二〇〇㍍。ここを最終キャンプとすれば頂上まで一二五〇㍍。アタックにはやや長過ぎるかもしれない。しかし、もしさらにこの上にキャンプ地を求めて進み、その上アタックに出発することは体力的にも無理な気がした。それよりか、むしろ思いきってこの地に最終キャンプを設け、今日、明日を楽な行動にして、明後日のアタックに備えた方が得策であるように思えた。今までわれわれは、概してこういった少数キャンプ、長いアタックというシステムを採ってきた。天候が急激に崩れることの少な

いヒンズークシュのタクティクスとして、これは妥当な考え方であると思う。

すでにわれわれの行動は、一日刻みで秒読みの体勢に入っていたのである。かくて、われわれは六二〇〇㍍の狭い岩稜の上に、最終キャンプを決定した。そこは、サラグラール南面を二手に分けている中央岩稜の上に当たり、このあたりから不明瞭に発生した痩せ尾根が、下部に向かうに従って顕著な大岩稜になり、南面の谷を二分しているのである。この岩稜の左側は、われわれが今まで登って来た大斜面と下部の氷河であるが、右側は一〇〇〇㍍ないし一五〇〇㍍の高差で切れ落ちて南面右側の氷河に接している。



サルト峠からのサラグラール南峰

従って、われわれの最終キャンプはこの急崖の真上に位置することになった。痩せたリッジの上にやっと見つけたキャンプサイトは、やや谷側に外傾した岩棚であり、二人用のテントも満足に張れそうもない狭さであった。われわれ二人は、まだ時間もあったので、岩を運んで、端に継ぎ足したりして、どうにか二人用テントの広さを確保した。

午後三時ごろ、われわれは、最終キャンプ直下の急斜面に撤収時のための固定ロープを施しながら引き返した。この日、第一キャンプに入ることになっていた宮武は、前日の無理がたたって調子が悪く、ベース・キャンプに留った。倉知と佐藤(久)が第一キャンプに入った。

二十二日。倉知、両佐藤、原の四人で最終キャンプへの荷上げとキャンプ設営を行なった。前日整備しておいたキャンプ地は二人用テントにもぎりぎり一杯の狭さで、谷側のポールは崖の上にはみ出してしまった。ポールを山側の岩角にザイルで連結して、テントがずり落ちないように配慮した。これで、いよいよアタッ

クの体勢が整い、私と原の二人が、アタック・メンバーとして残った。この日、一日快晴が続き、アタックを前にしたわれわれに大きな安心を与えてくれた。

八月二十三日。午前三時起床。身体がひどくだるい。連日の行動による疲れが、底から石のように跳び出た狭いテント内の睡眠ではいやせなかったのであろう。テントの外をのぞくと満天の星である。われわれはゆっくり準備をした。二人ともあまり言葉が出ない。

この山への再度の、そして最後の攻撃が決定されてから、なんと短時間のうちに、とんとん拍子にこの最終キャンプまで来てしまったことか。そう思った時、今日今しも最後のアタックに向かおうとしていることに、何か急に訳のわからない不安が湧いてくるのは致し方がなかった。ノーザン・クウムでのあの苦い思い出が頭をかすめる。

五時半、あたりはまだ暗いが、東の空に赤味がさしてきた。外に出る。さすがに寒い。アイゼンを付ける手が凍りそうである。ビバーク必至を覚悟しているので、キスリングにつめた荷物はズッシリと重かった。

五時五〇分、われわれはキャンプを離れた。まず岩稜通しに一〇〇〇尺ほど登る。旧ベース・キャンプから羨望の眼で仰ぎ見ていた、南峰に直接突き上げているあの岩稜は、今やわれわれの手前すぐ眼下にあった。その岩稜に隠れて向こう側に、旧ベース・キャンプがあり、ノーバイズンはもうほとんど同高度にあった。

岩稜を登りきると、雪稜に変わる。面がフィルムクラストした雪面で、足り、登りにくかったが、しだいに硬くり、ついには凍った斜面が出てきてしトに移り、ピッケルでステップ・カッチ、三ピッチ、このままいったら、高対していくら時間があっても足りないた。実際、キスリングの重荷での氷の部分は四ピッチで終わり、堅いし、以後ずっとスタカットでの登攀に

一一時ごろ、第一キャンプ、第二キャンプを通じて、ほとんど一貫した急傾斜で上昇してきた大斜面の上端に達した。高度は約六八〇〇尺。登って来た方を振り向くと、テントは見えないが第二キャンプ、第一キャンプ、アドヴァンス・ベース・キャンプと各キャンプ地はほとんど一直線上に並んで見える。全くむだのないダイレクトなルートを採って来ていることがよくわかった。

そこを過ぎると傾斜は急に落ちて、びっくりするほど平らなプラトゥに達した。サルト・アン峠から見たサラグラール南面の姿からは、とても、こんな所に、これほど平らな広場があるとは想像できなかった。ここで初めて南峰への登りの全てを目撃した。このプラトゥの尽きるところから、再び急な登りが始まっていて、それがおよそ五〇〇尺ぐらい続いて頂上に達しているらしい。われわれは目に見えているところが頂上であることを願っ

た。

ここで食事を摂って一二時ごろ再び登り始めた。見る限りでは、少しおそくなるかもしれないが、この日のうちに頂上に達し最終キャンプまで戻れそうであった。しかし、プラトゥの端から登りについてみて、われわれは失望した。想像以上の急登であり、初めの一〇〇〇尺ほどは、氷と岩のミックスした壁になっていた。ピトンを打って登るが、キスリングを背負った今の状態では、もし一人が墜落したら、残りの一人がザイルで確保できる可能性はほとんどない。二人は緊張に息をこらして登った。この一〇〇尺に一時間半を費やしてしまった。

岩場をどうやら過ぎると、ややでこぼこした雪壁状の急斜面が続いている。高度はすでに七〇〇〇尺はあろう。われわれはようやく疲れを感じ出した。ウドレン・ゾム南峰の時は七〇〇〇尺でもそれほど感じなかった高度を感じる。重荷のせいであろうか。傾斜が急なので、停止して確保の最中にもキスリングをおろすことができない。時刻はすでに三時になろうとしていた。われわれの歩みはしだいにのろくなってきた。今や、今日中に最終キャンプにもどるなどということは全く不可能になっていた。

二時半、ついにビバークすることにする。時間的にやや早いかもしれないが、今日中に登って、下降の際にビバークをするよりも、余裕をみて、翌日、疲れの取れたところで登頂を果たしたかった。登って来た雪の斜面を左にはずれて、岩壁の中に適当なテラスを見つけ、これをビバークサイトとした。高度は約七二〇〇尺。

明けて八月二十四日。うつらうつらとまんじりともできなかった。長く寒い夜が明けた。今朝も食欲は乏しかった。何も喉に通らない原は気の毒だ。われわれは重い荷のうち、必要のない物は、キスリングと共に、ビバーク地に残してサブザックの軽装で出発した。

今日も快晴である。傾斜は昨日と同じくらいだが、軽装になったためか楽になり、何とはなしにザイルを付けずに登り出した。私が先頭になって登る。昨日の苦しさは全くなかった。踵が痛くなるほどの急斜面をアイゼンを効かして一歩一歩登る。一時間ほど登ったであろう。突然、猛烈な寒気と風圧が顔面を殴った。雪粒が激しく顔に当たって、まともに目を開けていられない。どうやら目の前の登りはなくなったようだ。後を振り返ると、原は遅れていた。私が立ち止まって後ろを向いているので、原が大声で聞いてきた。

〃ユキサーン、どうしたんですかぁ？〃

〃前に何にも無いぞぉ！〃

〃それじゃあ、頂上ですかぁ？〃

〃どうも、そうらしい！〃

私は寒さで口がこわばって物がうまく言えなかった。しばらくして、風がいくぶん弱まると、そこはまぎれもなく頂上であった。原も登って来た。やはり、昨晩からほとんど何も食事を摂っていないのがこたえたようである。

登頂の時刻は九時をやや過ぎていた。目の前におもしろい景観が横たわっていた。東西に長い南峰に、ほとんど直角に南側から登って来たわれわれの目に、南峰の相似形の北峰が、これまた、東西に長い頂上を五〇〇㍍ほど北方に、南峰と平行して横たえていた。そして、南峰と北峰の間に、五〇〇㍍ほどの幅を持った雪田があり、両峰を南北に分けていた。

西に、ティリチ・ミールはさらに高く、イストル・オ・ナール、ノシャックはほとんど同高度に見えた。ロシュ・ゴルの対岸のあの美しいノーバイズノンは今やはるか下に見える。二〇日ほど前に、われわれが、つねに上を仰ぎつつ懸命に登りつめた峰が、今では、まるで鳥瞰図でも見るように眼下に俯瞰された。それは何とも楽しい感覚であった。遥か北東にかすんで見える山々は、パミールの山であろう。

イタリア隊が北峰登頂に使った尾根が見える。その尾根の降りて行く所はニロギ氷河であり、その北側にウシュコ氷河がちょっぴり顔を出していた。北峰の向こう側には、ノーザン・クウムがあり、あの事故現場があるのである。こうして、三つの頂上に立ち得て、このような歓びを味わうにつけて、池知のことが辛く思い出された。彼は今ごろ、東京の暑い夏を病院で過ごしていることだろうと。

われわれは、一時間ほどで頂上を去った。

（佐藤之敏）

三時、佐藤(之)の元気な声がトランシーバーから聞こえた。昨夜、七、二〇〇〇㍍地点でビバーク、今日午前九時登頂に成功とのこと。バンザイ！　さすがにうれしさがこみあげてくる。

さて、すると次の問題は第二次の攻撃をどうするかだ。食糧もまあまあで、もう一度倉知、佐藤(久)、宮武でアタックを試みることも不可能ではない。しかし、連日の行動で疲れも残っているし、八月も終わりに近く、天候の方も何日好天が続くか保証の限りにあらずだ。北峰へもアタックを出してみたいが、これは佐藤(之)の見通しでは、あと三、四時間はみなければならないらしい。無理をしないことだと言い聞かせ、その旨を伝える。上でも協議の上、これからすぐ降りると返事をしてきた。

ドルーを発して五日、高差約四〇〇〇㍍を一気に登りつめ、七〇〇〇㍍級のピークに初登頂したという例はあまり聞いたことがない。天候にめぐまれたこと、全員高度順化がとてもよくできていたことの二つがこの大成功の原因であったろう。さっそく、朝日新聞社と事務局の中島に打つ電文を起案、満ち足りた気分で青空をながめる。あいにくとアルコールは一滴も残っていず、乾杯はジュースでやるしかない。せいぜいご馳走をと言って、ドクターはコロッケをつくりはじめた。

八月二十六日。闘いは終わった。ズングランの村からポーターたちがあがってくるのを待って、一日の休養をとることになった。

おだやかな日差しが、樺の木の林の中に落ちてくるまで、皆ぐ

っすりと寝ていた。谷の奥の真っ正面に、ウドレン・ゾムの南峰が見えている。眼前にそびえる岩山のため、サラグラールは全く見えない。この狭い谷の奥の、今まで人の入ったことのない氷河を、五日かけて頂上へ達したのだ。今や、あたりの風物の一つ一つが、とても親しみのあるものとしてながめられる。河原を散歩しながら、ふと足下の何でもない石ころを拾ってポケットにたいせつにしまった。永遠に忘れないぞ、とばかに力みながら、飽かずに四囲の山々をながめていた。こんな時には、時のたつのも早い。たちまち、午後になり、上へ荷を降ろしに行ったウィラヤート以下の一行がもどり、あとは荷の整理、洗いものにいそがしい。ドクターは散髪屋を開業する。

今宵の泊まりはわれわれだけと思ったら、本谷の上の方からも降りてくる人影がある。馬を何頭か連れてやってきたこの男たちは、だいぶ下流の部落の男たちで、やはり夏の間放牧しておいた馬を連れもどしにきたらしい。もう、ロシュ・ゴルのわれわれのベース・キャンプのあたりも、草が少なくなったのだろう。日中の日差しも、このあたりの高度ではだいぶ弱まっていて、以前のように暑いという感じはしない。近づく秋に追い立てられるようにして、山を降りるのだ。夜、頭上に白鳥座の美しく輝くのを見た。星は日本と変わりない。そんなことを考えていたら、無性に日本へ帰りたくなってしまった。

八月二十七日は、いよいよロシュ・ゴル谷を去る日だ。朝早くから登ってきたポーターの声と、たき火の音で眼覚める。寒い。ここでも朝ははく息が白くなってしまう。一週間前はこんなことはなかった。

下り出すと速い。目につく緑がだんだんふえてくる。背の高いポプラの樹が水流沿いにあって、流れに映えてとてもきれいだ。緑とはこんなに素晴らしいものだったろうか。ダルベッシュの夏の別宅へくる。彼らは、夏の間ここまで登ってきて、麦をつくり、羊を放牧して暮らすのだ。そのための粗末な小舎が何軒か散在している。

その先は、急な、荒れて乾燥したところだ。荒れは深いゴルジュになり、道は右岸の高いところを捲いている。池知は、ポーターにかつがれながらここを下ったのだが、その時はほんとうに恐ろしかったそうだ。無理もない。思ったより長い下りだった。だんだん暑さが身にこたえてくる。二か月もの間、夜は氷点下に下がるようなところで暮らしていたのだから、無理もない。汗ビッショリになってしまった。

ズンドラングランの村では、大ぜいの人にとりかこまれて、往きと同じところにテントを張る。村長があらわれてあいさつする。ドクターはたちまち長蛇の列をつくる病人の群れにつかまってしまう。ヨードの不足から、見事な甲状腺腫をもった者がたくさん集まってくる。一眼見てゾッとさせられるような深い傷口をあけた腫れ物で死にかけた女がつれてこられたり、いささか気味が悪い。気晴らしにふと散歩した麦畑のへりに、ジャガイモが植えてあるのを見つけた。狂喜してダルベッシュに交渉し、塩ゆで

の新ジャガにありついた。

翌二八日には、サルト峠を越える。朝、ウィラヤートとダルベッシュに見送られて、出発する。二人して、うれしそうに笑いながらいつまでもついてくる。峠の登りがはじまるところで、堅く手をにぎって、最後のサヨナラだ。いつまでもこちらを見て手を振っている。曲がり角に来てもう一度振り返り、帽子を振ってあとは脇眼もふらずに登り出す。すこし登ると視界がひらけて、部落の全景が見降ろせるようになる。真ん中に架かる橋の上をもどっていく二人の人影が見えた。

われわれの山サラグラールも、この峠で見おさめだ。今日は、右の肩に雲をかぶって不機嫌そうにそびえている。左へ、ロシュ・ゴルにおちている岩尾根の上に、ドイツ隊の登ったラングータ・バルフがちょっと白い頭をのぞかせている。二、三分峠の上にたたずんで、思い切りよく向こうへ駆けおりてしまった。急で草のない北側にくらべて、南側は明るく、緑がゆたかで広々とした別世界だ。山がせまっていないので、のびのびとしている。やっと帰ってきたような気分になる。

ドラサンからは、馬をとばしてレシュンまで一日、レシュンからジープ二台に分乗して、三十日の午後、チトラルの町へすべりこんだ。

このあと、隊は飛行機待ち数日ののち、空路を断念、トラックとジープを一台チャーターして、まだ雪の残るロワライ峠を越え、二日がかりで、ラワルピンディへたどりついた。この旅は暑くてたいへんではあったけれど、昔ヒンズークシュを目指した登山者が、みな越えたロワライ峠を通ることができたのは、収穫であった。峠の南側は、舗装こそないが、交通量も多い。ディール、マラカンドを経て、マルダンで一泊、もうここには炎熱の平原だ。そして、翌五日の昼には、目指すラワルピンディに着き、われわれの旅は終わった。

（山本健一郎）

インドヒマラヤ

一九七五年夏

【メンバー】 前神直樹、藤本敏行

【行　程】

9月6日　日本発、ニューデリー着
11日　マナリ着
12日　目標をハヌマンティバに決定
15日　マナリ発、パルチャンよりキャラバン開始
25日　ハヌマンティバ直下BC設営（五〇〇〇㍍）
27日　ハヌマンティバ登頂（五九二八㍍）
30日　パルチャン着

九月十二日　晴後曇

マナリの第一夜が明けた。僕はゲスト・ハウスの息子のビルとさっそくSP（Superintendent Police）へ許可交渉に行った。しかし、結果は、インド政府の許可がなければ、つまりリエゾン・オフィサーを一人連れてこなければ、ティチュ及びトス氷河入域の許可はできぬ、ディオティバとハヌマンティバは登ってもよい、というものであった。しょげてしまったが、ビルがさかんになぐさめてくれた。だがなぐさめられるとますますガックリする。気をとりなおして、ケロシンとポリタンを買い、バスに乗った。マナリへ戻り、前神と相談の結果、目標はハヌマンティバと決めた。

九月十三日　晴

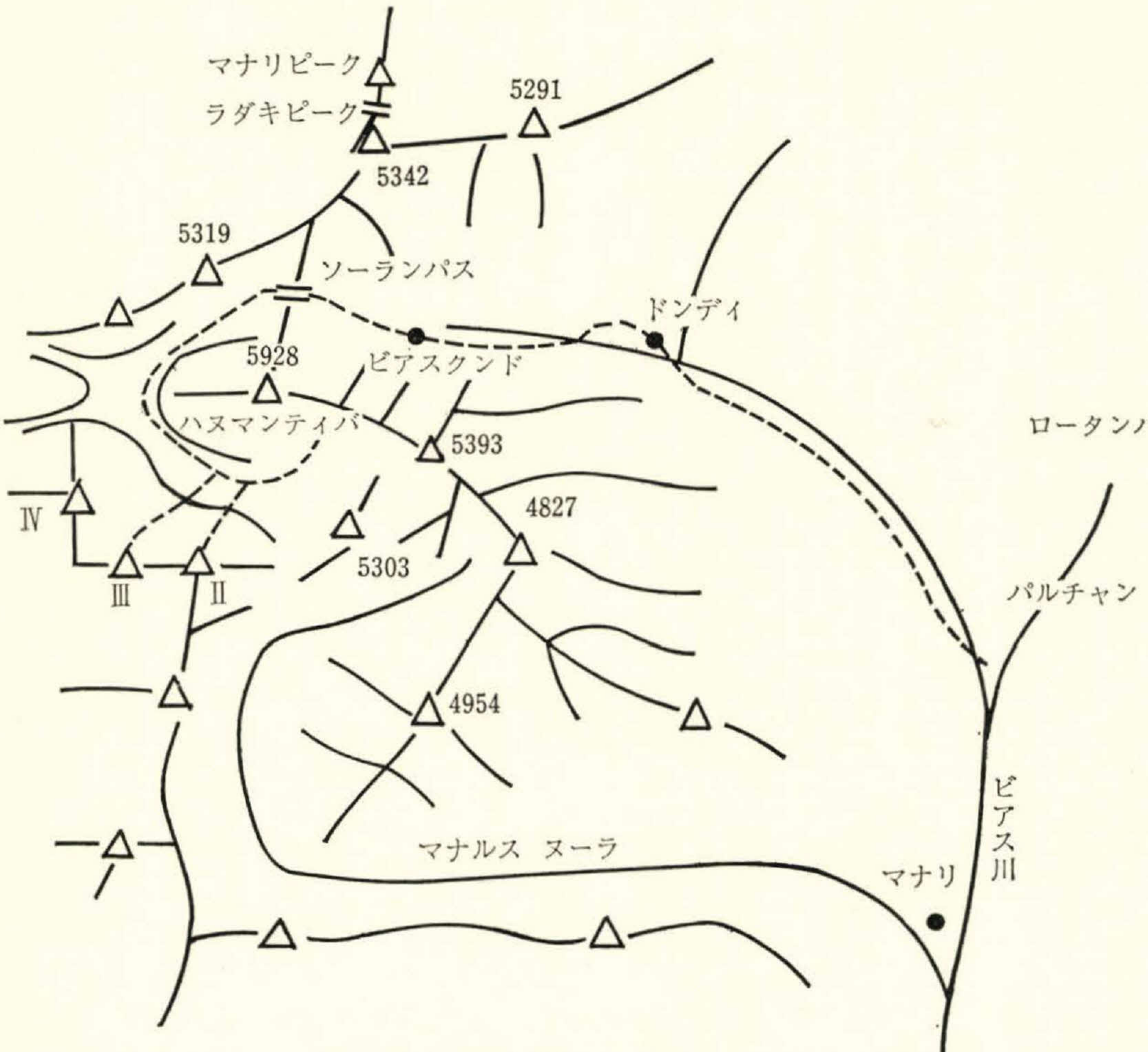
朝食後、ビルの案内で三人でバシストまでシェルパを捜しに行った。あてにしていたシェルパは何とかガルワルへ行ってしまっていたのだ。見つからないので、今度はタクシーをとばしてパルチャンまで行き、何とか一人見つける。ラム・チャンドという名の新米シェルパだ。午後僕は風邪でダウンしてしまったが、前神がビルと食糧等の買出しをした。ポーターはビルが近くの村の知り合いを斡旋してくれることになった。

九月十四日　曇時々雨

出発の予定だったが、僕の具合が良くならず、一日中寝ていた。三日続いた晴天が終わり、今日はまた断続的に雨が降る。雨季の明ける気配などまるでない。

九月十五日　曇後時々雨

九時のバスでポーター達とパルチャンへ向け出発した。パルチャンはソーラン谷の出合、ロータンパスの登り口にある戸数四十程の村である。シェルパの家で昼食をとるがよくキャラバン開始。部落とんでもない美人だ。一一時すぎいよいよ前の川を渡り、ソーラン谷へと入っていく。シェルパ達は二五㌔㌘、我々は一二～一三㌔㌘の荷で歩く。一五時半頃ドンディへつ



ハヌマンティバ周辺

きテントを張った。シェルパにペースをまかせると、一五分歩いては一〇分休むことがわかった。前神はかなり激しい下痢をしていた。

九月十六日　曇時々雨

今日もまた雨のいやな一日。僕の風邪はまだ完全にはなおっていないし、前神は下痢というわけで、どうももう一つ元気が出ない。黙々と歩いて一四時ビアスクンドに来たが、今年は異常に雨が多いとこぼしていた。

九月十七日　曇時々雨

一〇時半、前神はシェルパとポーターをつれて、ソーラン・パスの途中までボッカをかねて偵察に行った。五名は三時間半ほどして帰幕。そろそろジフィーズがすばらしい食物に見えてきた。ポーターの作る食事はお世辞にもうまいとはいえない。それにしても奴らの食欲のすごいこと、一回の食事で軽く二合は食べる。

九月十八日　快晴後曇

快晴の朝が明けた。八時三〇分出発。ハヌマンティバの東面は切れ落ちた断崖となっており、その北稜の落ち切った所がめざすソーラン・パスである。そこへ達する道は遠目には判然としない。コルの下五〇〇㍍程は黒々とした岩場なのである。一〇時半、昨日のデポへつく。

エーデルワイスの咲き乱れる草尾根上、岩場の取付まで30分程の所であった。はるか東方には、写真で見なれたディオティバ、イソドラサンの姿が見える。ポーター達に約束の金を払ってやると大喜びで、握手をしたり、幸運を祈るとか愛想は抜群だったが、さっさと下っていった。午後、前神とラムチャンは、岩場の途中まで荷上げをかね偵察に行った。

九月十九日　曇後雪後雨

昨夜は二人ともかなり激しい下痢をしていた。七時四五分、一三～一四キログラムの荷を背負って出発。昨日のデポまで一時間半でつく。デポを回収し、適当に稜線めざして登った。途中で道をはずし、ソーラン・パスまでは経験のあるラムチャンはもっと左がルートだというが、そのまま強引に登った。とにかく脆い岩で、岩登りは不慣れなラムチャンにはかわいそうなことをした。稜線の反対側は一面の雪で、ゆるい斜面がガスの中に続いていた。ソーラン・パスにはケルンと棒くいが一本立っており、日本の山とそっくりだった。標高は約五〇〇〇㍍だが、頭痛も何も感じない。雪が舞い始めたので、荷をデポして早々に下り始めた。四五〇〇㍍付近で雪は雨に変わり、濡れた岩は滑りやすく緊張して下った。

九月二十日　快晴後曇

快晴の朝が明けたが、前神は朝から頭痛と喉の痛みを訴えていた。八時出発、一二時ソーラン・パス着。前神の調子が悪いので泊ることにした。夕食はα米、さけ茶漬、きゃら蕗。非常においしい。

九月二十一日　霧・小雪

小雪のちらつく朝、前神は明らかに風邪であった。多少無理をしても、降りて高度を下げた方がよいのか。しかも外は非常に寒く、彼自身も一日休みたいと言う。初めての五〇〇〇㍍での休養はいかがなものかと思ったが、熱は三九度近くあるし、停滞と決定。夕方天候は好転し、ハヌマンティバの北稜が見えた。上半はきれいな雪稜、下半は高度感があっておもしろそうな岩場で、魅惑的であった。

九月二十二日　曇後雨

前神の熱は依然三九度を下らず、咳も深い。昨夜は四～五回キジを撃ったし、その内何回かは血便であったという。無念だが下ることに決め、パルチャンへ戻るため必要最少限の荷を持ち出発。一四時、ビアスクンドにテントを張る。さっそく前神の熱をはかると三六度九分。気分もよいという。一五〇〇㍍低所に降りたことがこの好結果を招いたのだろうか。それとも何かまた別の理由があったのだろうか。翌朝熱がなく調子のよい場合には再度ソーラン・パスへと決めた。

九月二十三日　雨後雪後曇

前神の調子はよい。八時一五分出発、岩場にさしかかる頃より雨は雪に変わり、めっぽう寒い。ラムチャンがバテたので、岩場の途中、四五〇〇㍍付近のデポ地点にテントを張った。

九月二十四日　晴

八時一〇分出発。ソーラン・パスで荷を回収し、反対側の氷河

を下り始めた。岩くずの下の氷、クレバスが小さいながらも氷河であることを示している。緑の草地が広がるアルプス的景観のビアスクンドに比べ、こちら側は処々に枯れたような草があるきりの荒涼とした世界だ。天候もこの稜線を境に、クル側は雲が多く、チャンバラホール側は青空に積雲が浮かんでいる。ハヌマンティバの北西稜を大きく巻きこんで、西面の氷河に入り、ハヌマンティバⅣの下にテントを張った。あたりの溝という溝には水流ができている。これがアフタヌーン・フラッドかと思う。前神と偵察に出る。一時間半ほどさらに氷河をつめると、ハヌマンティバへのノーマルルートとなる南面が見えてきた。どうもハヌマンティバは高いばかりであまりおもしろそうな山ではない。むしろ衛星峰的なⅡ、Ⅲ、Ⅳ峰の方が登りがいはありそうだ。夕方快晴となり、寒い夜が来た。

九月二十五日　晴

ラムチャンは昨夜は寒くて眠れなかったという。昨晩の残りのカレーでブロンタ（油を使ったチャパティ）二枚を流し込んでも、外へ出る気がせず、八時ようやく出発した。十時頃ハヌマンティバ直下にBCを設営、明朝アタックと決めて、小休止の後、黒い三角形の岩壁をもつハヌマンティバⅡに向けて出発。BCの標高は約五〇〇〇㍍、このピークは約五五〇〇㍍である。取り付きまで雪原を横断すること五〇分、後は急な雪面をまっすぐ登りつめ、細い雪稜をたどれば頂上だった。頂上着一三時一〇分。ラムチャンがオーバーな身振りで、「サーブ、グッド、グッド」と言って抱きしめてくれた。シェルパ開業二度目の山行で、これが初めての頂上である彼にしてみれば当然のことだろうし、我々も実際嬉しかった。前神は「そんなにまで…」とかなんとか言って照れていた。この夜は前神と食い物の話ばかりしていた。α米がそろそろ底をつき出してきたというのに、お茶漬のりは山ほどあった。

九月二十六日　快晴時々雪後晴

八時一五分ハヌマンティバめざして出発。しかし三〇分ほどで南から来た雲にすっぽりおおわれ、雪が降り出した。相当激しくなったので引き返した。一〇時頃より再び日がさし始め、天候は回復したので、ハヌマンティバⅢと思われるBCから真南に見えるピークを一人で登りに出かけた。広い雪原を横断してコルめざして登るのだが、稜線は遠い。コル手前に五～一〇㍍位の深さのヒドン・クレバスが二ヶ所あった。稜線直下のため雪が吹きだまっていたのだろう。稜線上は新雪が五～一〇㌢積もり、アイゼンが団子になる。左側は雪庇が危い。右手は急な雪面が谷底へと続いていた。たいした傾斜ではないが一人だと慎重になる。頂上手前五㍍ほどの岩場で少々緊張して、一二時三〇分頂上着。BCから休まないで二時間だった。夕方また雪が降り出す。

九月二十七日　晴後曇後雪後曇

今日こそは、と心に決めて出発。この氷河の最高峰とあっては、登らなくては気がすまない。急な雪面をただがんばって登ればよかった。藤本、ラムチャン、前神のオーダーで進んだ。さす

がに五五〇〇㍍上は猛烈に息が切れる。ほとんど四〇歩ごとに一息つかなくてはならなかった。クレバスが二ヶ所あったが容易に越えた。一一時半頃よりすっかりガスの中に入り、最後まで急斜面に悩まされたが、一二時四五分、五九二八㍍の頂上に立った。うれしかった。南面からは丸い鈍重な感じのこの山も、頂上は狭く、のぞきこむと北稜が細くガスの中におちこんでいた。三〇分ほど写真をとったりしてすごし、寒いので下った。下りは早い。夕方食料を整理してみると、もう底をつきはじめていた。米やダル(豆)を、うまくない、下痢をするといってソーラン・パスに残してきたのが、今になってひびいてきたのだ。チャパティを作るためのアタ、ギーそれに砂糖がもうほとんどない。これで二十九日にはソーラン・パスに戻らざるをえなくなってしまった。

九月二十八日　快晴

チャイ(紅茶)とビスケット、チャパティにジフィーズ2袋という豪華な朝食をとった。八時半出発。Ⅳ峰の下にテントを移動し、Ⅳ峰めざして一一時半頃出発した。だが休憩中に作ったお茶を飲みすぎて、僕は気持が悪くてしかたがなかった。そうすると何となく登高意欲が減退してきた。そこで前神に、登るのはやめにしてあのアイス・フォールで氷壁登攀の練習をしないか、と提案してみた。前々からハヌマンティバ以外はさして登りたくもないといっていた前神は、一も二もなく賛成してくれた。要するに日和ったのである。そうして午後は氷壁で遊んでいたのだが、それは全く楽しいひと時であった。完全な氷の斜面、これは最高に面白い。腕が棒になるほど堅いのに大分時間がかかった。その間ラムチャンは寒さにふるえながら待っていてくれた。

九月二十九日　晴時々曇

この氷河最後の夜が明けた。いよおさらばだ。すきっ腹をかかえてたどる帰途、思いは様々であった。登りそこねたⅣ峰が抜群に立派に見える。ソーラン・パスは再びガスの中だった。岩場の途中、かつてのデポ地まで下って泊った。

九月三十日　雪後曇

とうとう砂糖もミルクもなくなり、ラムチャンが塩とギー入りの紅茶(スープのようだ)を作るがまるで飲めない。小雪の中を出発。何しろ一歩滑れば谷底行きであるのには神経をつかった。ビアスクンドで老羊飼いに不要な荷を預けた。足指にけがをしている、というので見てやると、ざっくり口をあけた深い傷だ。それに綿をあてて、汚ないボロ布でしばっているのだが、もう一〇日近くたつのに痛みがとれないという。レスタミン軟こうをぬってやり、バンドエイドをはる。その上からボロ布だ。トウモロコシでできた黄色いチャパティと水煙草をふるまってくれた。二週間ぶりの煙草はまったくうまい。ボコボコという音がまたよかった。今日中にパルチャンまで帰ろうというので早々に出発し、ドンディをすぎ、パルチャンまであと六㌔㍍という所で木材運搬のトラックに乗せてもらった。すごいトラックで、歩くのとたいした変りはないが、豆のできかかった

足はこれで救われた。パルチャンの村はずれでトラックを降り、さっそくチベッタンの茶店でチャイとポコーラ（玉ねぎやじゃがいもの少量入った天ぷら）、ゆで卵にありついたが、死ぬほどうまかった。

（藤　本）

アフリカ・ケニア山

一九七七年夏

【メンバー】松田重明、佐藤活朗

【行　程】

7月9日　日本発
11日　カラチ経由ナイロビ着
16日　ルウェンゾリ登山準備
18日　カンパラ着
25日　ルウェンゾリ登山準備
31日　カセセの司令官より登山をとめられ、ルウェンゾリ断念
8月10日　ナイロビ経由ナロモルへ
13日　トップ小屋着（四七九〇㍍）
　レナナ峰（四九八五㍍）を往復
15日　下山

ケニア山行日誌

八月十一日　ナロモルリバーロッジ――岩小屋

九時半ローバーでロッジを出発。途中の村でガイドとポーターを拾う。ガイドは、フランシス・ワチラー＝二五歳、ポーターは、エドワード＝二〇歳。いずれもキクユ族、運ぶ荷の重さは十八キロまでと決められている。

国立公園のゲートで入園料を払う。詳細は忘れたが、五五〇〇円も払わされる。実に高い。

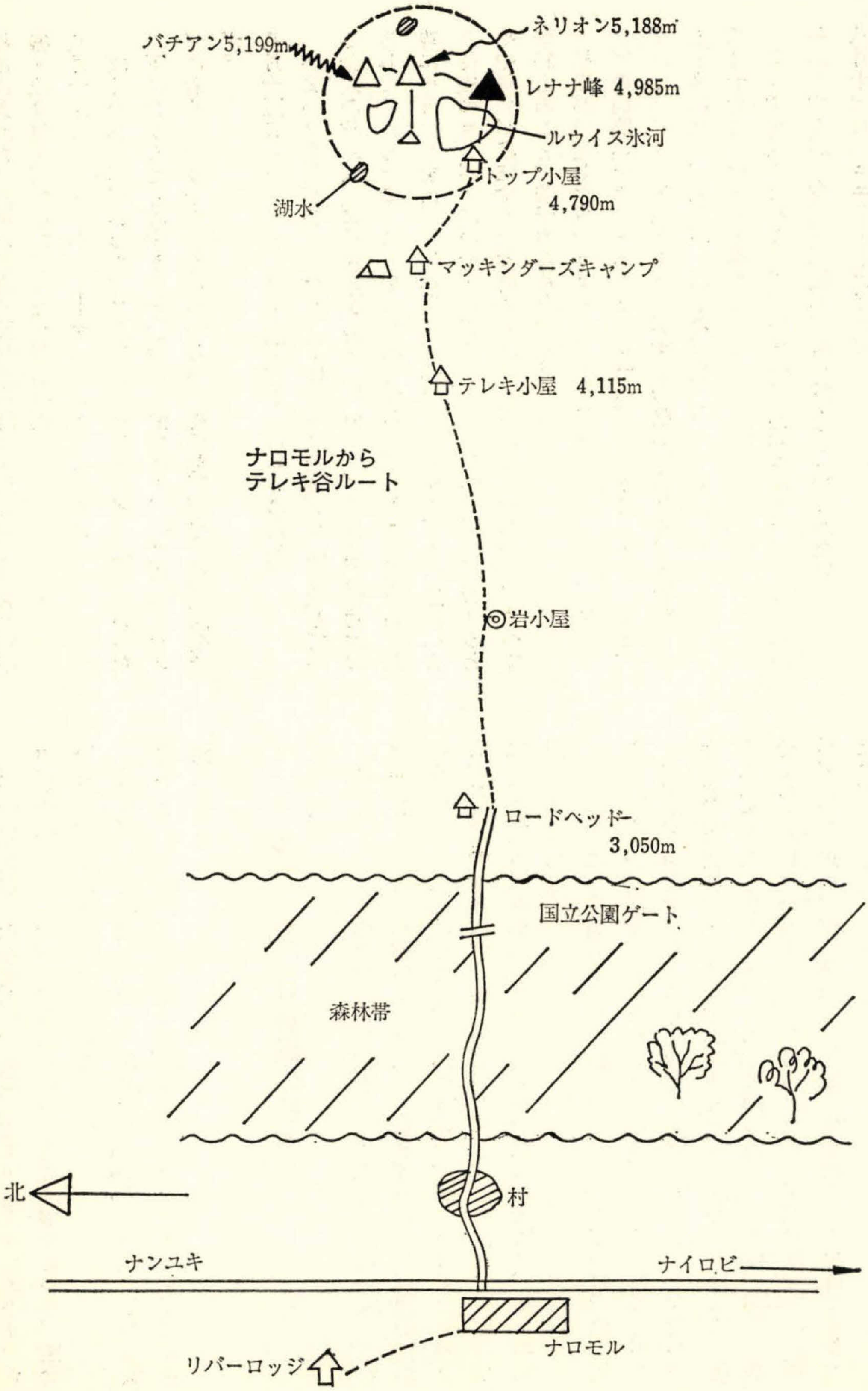
一〇時四五分歩きだし、二時すぎ雨に会う。テレキ小屋まで行くのを断念して途中の岩小屋にテントをはる。ポーター達は下にある小屋に帰す。

八月十二日　岩小屋――テレキ小屋（四一一五㍍）
　ポーター達を待ち八時出発。一二時三〇分テレキ小屋着。午後雨あり。

八月十三日　テレキ小屋――トップ小屋（四七九〇㍍）
　七時二〇分出発。広い谷あいを一時間で、マッキンダーズキャンプ（リバーロッジ経営のテント群）。ここからルウイス氷河のモレーンの急登にかかる。非常に息苦しく、休み休み登る。このあたりから体調がおかしくなったようだ。トップ小屋着一一時。並んで立っているアーサー・ファーミン記念小屋に入る。

〈レナナ峰往復〉

小屋に荷を置いて二人で頂上に向かう。ピッケルとカメラだけを持ってゆく。ルウイス氷河をはさんで対岸にそびえるバチアン・ネリオン峰が圧倒的だ。富士山のような雪の斜面を三〇分ほどでレナナ頂上に着く。技術的には容易だがぼくは息切れが激しく、


バチアン5,199m
ネリオン5,188m
レナナ峰 4,985m
ルウイス氷河
トップ小屋
4,790m
湖水
マッキンダーズキャンプ
テレキ小屋 4,115m
ナロモルから
テレキ谷ルート
岩小屋
ロードヘッド
3,050m
国立公園ゲート
森林帯
北
村
ナンユキ
ナイロビ
ナロモル
リバーロッジ

松田に遅れた。高度は四九八五呎。一時半小屋に戻る。食欲不振・吐き気・頭痛がひどくなり苦しい夜。

八月十四日　トップ小屋――マッキンダーズキャンプ

ぼくの具合が悪いので、フランシスのアドバイスによりいったん下におりることにする。一〇時半小屋を出て、一二時半キャンプに着く。空身でも歩くのがつらい。高度を下げても依然回復せず。

八月十五日　マ・キャンプ――下山――ニエリの病院。

いよいよ衰弱がひどくなり、下山する。キャンプに常駐している公園の救助隊（Mt. kenya Rescue Party）隊員二人が助けおろしてくれる。歩くことをこれほどつらく感じたこともない。八時にキャンプを出て三時林道終点へ。トランシーバーの連絡により待機のローバーにのせられてリバーロッジへ。平地におりるとやや気分が好転する。救助隊にはずいぶん迷惑をかけたがすべて無料とのこと。若干の謝礼をする。

松田が手配した車でニエリのイタリア系ミッション（カソリック）の病院「マタリ・ホスピタル」へ。救助隊の人々はここをすすめた。イタリア人ドクターがすぐ診察してくれる。注射をされると楽になり、久しぶりにものが食べられる。

八月十六日　マタリ・ホスピタル

ようすを見るとのことで、いま一日入院となる。歩くとまだふらふらするが、食欲が回復し、腹が減ってしかたがない。

八月十七日　ニエリ――ナイロビ

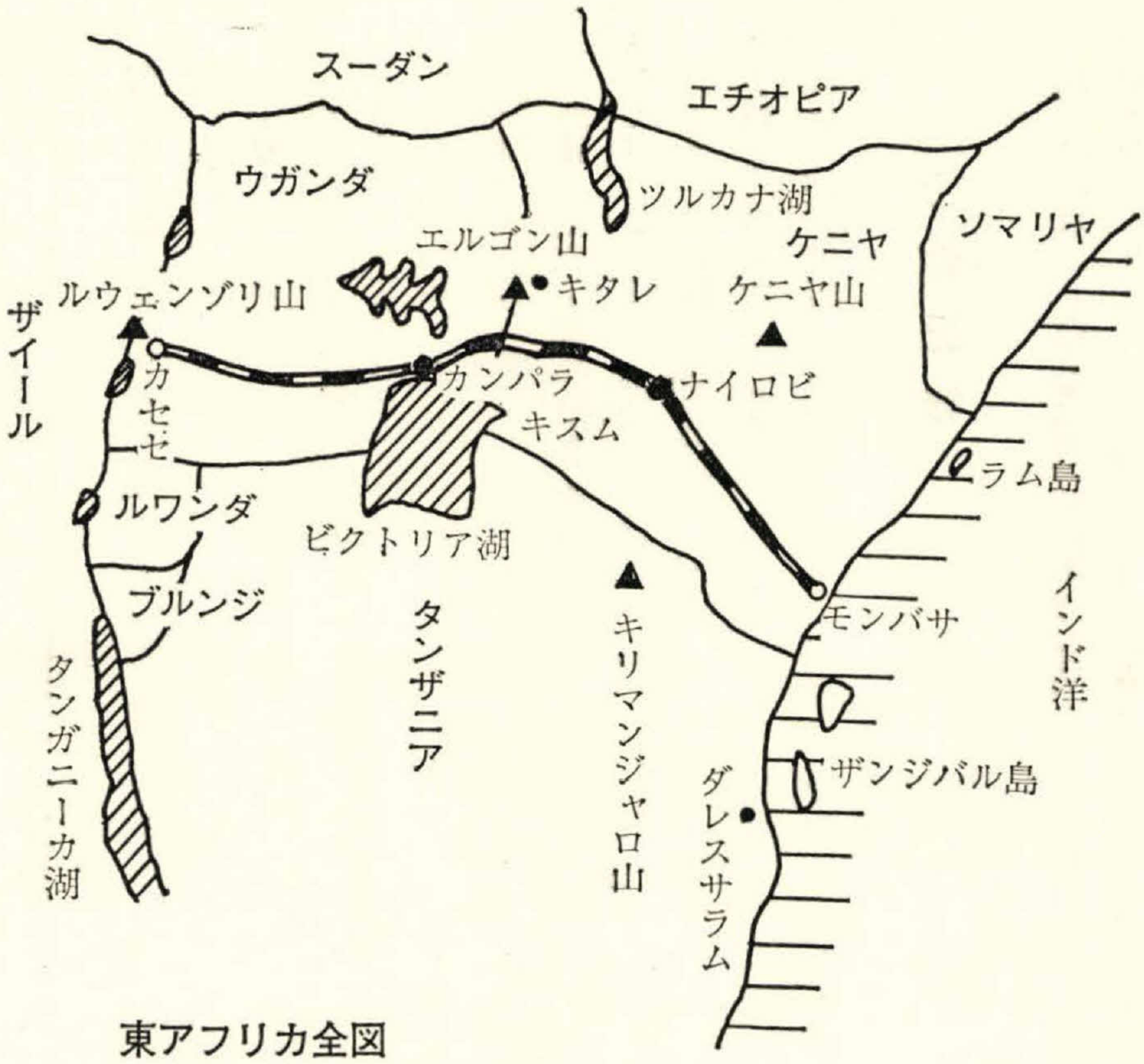
薬（抗生物質）を与えられ、退院。本来現地人のためのミッション系病院であるせいか、支払も安い。職員に感謝しつつ、乗合い自動車でニエリからナイロビに戻る。

その後、数日は疲れやすく、体がすぐだるくなった。しかし安静にしているほどではなく、普通に生活できた。ナイロビでX線検査の結果、やはり軽い肺水腫だったとのこと。

ルウェンゾリ計画の反省

ルウェンゾリ登山の失敗の原因を考えてみる。直接的には、ルウェンゾリの天候が不順であったことがあげられる。軍司令官がそうだと言っただけでなく、確かに今年は、ナイロビもカンパラも、乾期と言うのに雲が多かった。しかし、この直接的原因の他に、私達がカセセから引き返してしまった事の裏には、種々の原因が考えられる。

まず第一に、時間的余裕がなかった事。帰国の際の飛行機の便の確認や、当局に申請したウガンダ滞在の期限が迫ったことがあり、天候の回復を待ち、あくまで登山を試みることができなかった。資金の面は、やりくりすればカセセでの滞在を延ばしてもどうにかなったと思う。要するに、計画の段階で、準備、交渉、移動にかかる日数を過少に評価していたため、実際の旅行では計画がどんどん遅れ、結局登山にかける日数を削らざるを得なくなったのだ。



東アフリカ全図

第二に、私達の語学力が不足していたことがある。軍司令官、及び、陪席していた副官は、共に達者な英語を話す。彼らは、どうしても私達を登らせたくなかったらしく、たたみ込む様に、英語で話してくる。しかも、彼らの言うことは、天候が悪く山は地滑りの危険大だから登山を中止しろということで、理にかなっているので、とても反論できなかった。しかし、ルウェンゾリの登山口にある村イバンダまで行き、そこでルウェンゾリに詳しいウガンダ人ジョン・マッティに、より詳細な状況を聞くことも可能だった。私達は、そのことを司令官に納得させるだけの英語力が不足していた。これも、敗因の一つである。

第三に、私達は何らの移動手段も持たず、しかも、荷物が重かったことである。もし、私達が自動車を確保していたなら、司令官を待っていた五日間に、少なくともイバンダまでは行けた筈である。更に、先に述べた様に計画が遅れた原因の一つには、移動の手段を確保するのに手間取ったことがある。現地で中古車を入手するのは、私達の資金力からは、とても無理だったにしろ、レンタカーでもかりれば、かなり行動半径が広くなっただろう。

(私達は、二人とも自動車免許を持っていなかった。)

以上の反省をまとめると、日本での準備不足の為、実際の旅行で、種々の思わぬ障害が出て来て、結果的にルウェンゾリ登山に失敗したと言えるのではないだろうか。現地の情報を充分入手した上で計画を立てれば、アフリカに行って計画が狂うことはなかっただろうし、もっと日本で英語の勉強をしておけば、また、自動車免許を取る努力位しておけばよかったと思うのである。

(佐藤)

インドヒマラヤ

一九八一年夏

【メンバー】隊長・中村宜幸、土方浩、萬濃英士

【行　程】

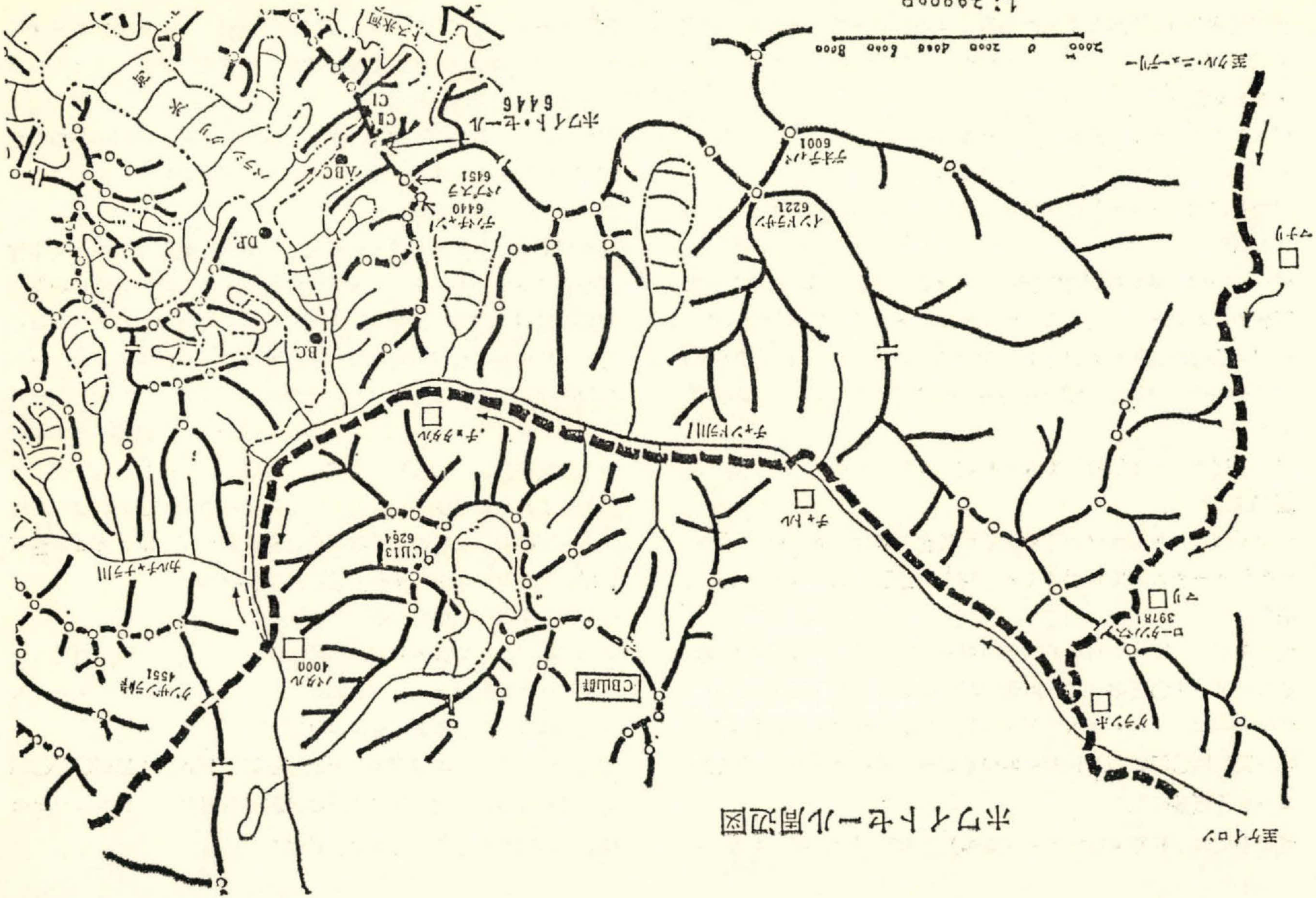
8月1日　日本発
10日　デリー発マナリ着
15日　マナリ発バタル着
16日　ホワイトセールベースキャンプ設営
23日　ABC設営
26日　ルートを北稜より南東稜に変更
9月1日　C1設営（五二〇〇㍍）
4日　C2設営（五七〇〇㍍）
9～13日　南東稜上にて遭難

なお、詳細は報告書『白きヒマラヤの巨帆』を参照されたい。

行動記録

以下は三君よりの日本国内関係者宛手紙及びABCに残された行動メモにより、インド入国以降の彼らの行動を日毎に再構成したものである。なお手紙の引用の後のカッコ内は手紙を記した日付、発信者及びあて先を示している。

八月一日　成田発一一時四〇分のインド航空機にて離日。
八月二日　零時三〇分デリー、パラム空港着。福永氏他の出迎えあり、YMCAツーリストホテルに入る。
八月三日　日本大使館、インド登山財団（IMF）にあいさつ。その後、空港にて隊荷の通関及び通信省にてトランシーバー通関手続。
八月四日　空港にてトランシーバーを受領。
八月五日　IMFにてリエゾン・オフィサーについて打合わせ。土方は発熱で休養。
八月六日　休養。
八月七日　マナリへの交通手段としてバスをチャーターする契約をする。午後、IMFにてリエゾン・オフィサー、パント大尉に会い、行動の打合わせ。
八月八日　インド・ルピーへの換金、トラベラーズ・チェックの購入。食糧買出し。
八月九日　残りの食糧等の買出し。夜、中村、土方は、クラリッジス・ホテルにて折から出張でデリーに到着した山岳部OBの佐藤(活)に会い、これまでの行動メモを渡し、明朝マナリに向け出発する旨伝える。
八月十日　福永氏及びリエゾンのパント大尉と共にバスにてデリ


北ケイロン
ホワイトヒール周辺図
C.B山群
ハヤシ
4004
ハヤシ川
ウツボラ林
4551
カバチョウ川
ムラオ川
ADC
DC
DP
CI
CI
ホワイトヒール
6446
イヌマチ
6451
チョウヤ
6440
ムラオ
6001
イシドウヤ
6221
ヒガシ・ニュータウン
1:20,000
ロータリー
3978
ヤリ
ナカムラ
チョウヤ川
CU13
6264
ナカタハシ
チョウヤ川
ヤナリ

ー発六時半（福永氏はマナリ到着後ロータン・パスを往復して帰った）。チャンディーガル、クルを経てマナリ着二一時。ベアス・ホテル泊。

八月十一日　マナリ滞在。チン・ボーイと会い、現地シェルパ（ボララム）、ポーター、キッチン・ボーイと会い、現地食糧等の買出し。

八月十二日　マナリ。石油等を買い、バタルまでのトラックのアレンジ。

八月十三日　本日出発の予定であったが、中村風邪気味のため延期する。なおマナリについて彼らは「デリーに比べると別天地…：美しい森林に囲まれた町」（八月十五日、土方より佐藤ＯＢ宛）と印象を残しており、近くにある温泉に入りにいったりしている。

八月十四日　クル往復。パント大尉とヒマチャル・プラデシュ州観光局へ。

八月十五日　マナリよりバタルへ。六時一五分トラックにてマナリ発。ロータン・パス九時バタル着一三時四〇分、レストハウスで一時間四〇分、続いて二時間半でＢＣまで下る。なお、二人は高度の影響は特に感じていない。一方、中村はこの日ＢＣよりポーター三名をつれてＤＰへ荷上のため往復。「天候は連日の晴天で顔がヒリヒリしています」（同前引地あて）。泊。

八月十六日　バタルよりホワイトセールベースキャンプ（ＢＣ）へ。ポニー一〇頭をつれ、五時間程でＢＣ到着。

八月十七日　バラ・シグリ氷河偵察。中村・萬濃・ボラムの三名で四二五〇㍍付近まで達しＢＣへ戻る。羊を食糧用に二五〇ルピーで一頭購入。

八月十八日　デポ・ポイント（ＤＰ）往復。隊員三名、パント大尉、ポーター二名で荷上し、四二九〇㍍にテントを設営デポ・ポイントとしＢＣに帰る。往路五時間、帰路三時間、シェルパは羊を解体し、乾肉を作る。

八月十九日　ＤＰ上部偵察。土方、萬濃、ポーター三名でＤＰに荷上の後、土方、萬濃のみバラ・シグリ氷河をさかのぼりＤＰに戻る。二名はＤＰ泊。

八月二十日　ホワイトセール氷河へ。土方、萬濃はＤＰより一時間程でホワイトセール氷河末端に着き、氷河上のクレバスを避けながら四七八〇㍍に到着し、予定ルートの北稜を観察。「（当初のポイントと思われた上部岩壁より）ユルへ上るアイス・フォールの方が難しそうに見えました」（八月二十一日、土方より連絡本部引地宛）。下りにロープを五〇メートルフィックスしてＤＰまで一時間四〇分、続いて二時間半でＢＣまで下る。なお、二人は高度の影響は特に感じていない。一方、中村はこの日ＢＣよりポーター三名をつれてＤＰへ荷上のため往復。「天候は連日の晴天で顔がヒリヒリしています」（同前引地あて）。

八月二十一日　ＢＣにて全員休養。

八月二十二日　パント大尉クルへ一時下山。土方と萬濃はホワイト・セール氷河プラトーまで登り、アドバンス・ベース・キャンプ（ＡＢＣ）の位置を決めＢＣに帰投。

八月二十三日　ＡＢＣ建設。土方、中村、ボラムの三名でＡＢＣを建設。中村はＢＣに戻る。土方、萬濃は下痢のためＢＣで休養。

八月二十四日　土方、ボラムBCへ戻る。この日パント大尉はクルよりマナリへ。

八月二十五日　全員BCにて休養。

八月二十六日　BC滞在。北稜観察の結果及び残り日数（BCへ二一日間）を考慮の末、北稜を断念し、第二次目標の南東稜に転進することに決定。

八月二十七日　BCよりDPへ全員で荷上往復。パント大尉マナリよりBCへ帰着。

八月二十八日　この日はABCまで上り、翌日ルート工作を行う予定であったが、中村下痢のため動けず。他の者でDPまで荷上を行なったものとみられる。BC泊。

八月二十九日　全員でBCよりABCへ荷上。土方、萬濃はABC泊。中村DP泊。翌日からの本格的登攀活動を控え、彼らは登頂の意欲を新たにしていた模様である。以下同日付の手紙が彼らの最後の手紙となった。

「……順調に行けば九月の十日すぎには頂上へ行けると思います。山へ入ってから毎日良い天気で、五日に一回ぐらい夜中に雨がパラつく程度です。」（八月二十九日、萬濃より家族宛）

「（明日）三十日でなんとかなお物資の方は、明三十日ですべてABCへ集結する予定です。予定よりかなり遅れてしまいましたが、このあと三人とも体調を崩さなければなんとか登頂は果たせるものと思っています。」（八月二十九日、中村より連絡本部引地宛）

八月三十日　第一キャンプ（C1）予定地（五二〇〇㍍）まで土方、萬濃がルート工作。ロープを五〇㍍二本固定。中村はDPよりABCに上り、三名がABCに集結。この日ポーター二名を解雇し、前記の手紙を持たせてDPよりBCへ下山させる。BCではパント大尉及びキッチンボーイが三名の帰還日（九月十五日。遅くとも十七日との打合わせであった）まで待機することになっていた。荷上が終了したので、これ以後の登山活動は三名とシェルパのボラムで行なっており、以下の行動記録は体調を崩して九月六日BCに降りたボラムがパント大尉にもたらした中村のメモ（後述）による。

八月三十一日　上部での行動を前にABCにて全員休養。ポーターはBCよりバタルへ下山。

九月一日　全員でABCよりC1往復。C1を建設。

九月二日　全員でC1に上り、中村、土方はC1泊。萬濃、ボラムはABCに戻る。

九月三日　中村、土方はC1よりC2予定地までの半分位の間のルート工作。萬濃、ボラムはABCよりC1へ荷上に往復。中村、土方C1泊。萬濃、ボラムABC泊。

九月四日　中村、土方はC1より出発し、C2（五七〇〇㍍）を建設した後、ABCまで下る。

九月五日　全員ABCにて休養。

九月六日　ボラムが体調を崩したため下山させることにし、中村、萬濃がついてABCからホワイトセール氷河の中程までボラ

ラムを送ってゆく。ボララムはこの日の内にBCに到着し、中村のメモをパント大尉に手渡した。それによると五七〇〇尺までのルート工作を完了し、九月十日頃登頂の予定だ、とのことであった。

彼らの行動が判明しているのはこの日までであり、以下は推測を含む当時の状況である。

パント大尉の報告によると、同山域の天候は九月八日までは好天が続いていたが、九月九日及び十日の二日間は天候が崩れ、ベース・キャンプでは雨、上部は雪であった模様である。

一方、三名はボララムを下山させた後の七日、好天を利してC1に入ったものと推定される。翌八日には、さらに既にフィックス工作を終えていたルートを辿り、C2に達し頂上アタックに備えたものであろうか。続く九、十日の二日間、頂上を目前にした彼らが、C2或いはC1にて入山以来初めてともいえる悪天に遭遇したであろうことは、パント大尉の報告よりみても、想像に難くない。

BCで待機していたパント大尉はこの悪天の為、計画に遅れが生じたものと考えていたが、十六日になり下山用の馬がBCに到着したので自らDPまで登ってみたものの、彼らが下ってくる気配はなかった。パント大尉は十八日までBCで彼らを待った後、十九日朝下山を開始し、同日、クルの郡知事及びマナリのWHMIに三名の行方不明を急報した。

遭難の推定

一九八一年九月六日、それまで三君と同行していたハイポーターのボララム氏が下山、その後は三君のみの為、遭難の状況は特定出来ないが、一連の捜索活動、各種情報を前提として次の様に推定される。

(情報)

㈠入山以来良好だった天気は九月八日夜より崩れ、九日、十日と悪天。十一日は好転した。(ベースキャンプで待機していたリエゾン・オフィサー、パント氏)

㈡三君は九月九日以降C2より頂上へ向かう稜線上の岩壁帯にかけてフィックスロープを張った後、三人で待機、十三～十五日下山の予定であった。(九月六日ABCから下山したハイポーター、ボララム氏)

㈢キャンプ2の右隣のコル、更に頂上へ向かう稜線上の岩壁帯付近の二ヶ所からホワイトセール氷河へ向けて大規模な雪崩の跡が発見された。(九月二十四日ABC上部まで入ったWHMI第一次地上捜索隊)

㈣C1に人影は無く、C2の入口は外から閉められており、また南東稜上に人影は無かった。C2から岩壁帯に向けてフィックスロープが工作されているとは見えなかった。(十月二～四日、ヘリによる空中捜索隊)

（遭難の推定）

㈠時期　一九八一年九月九日～十三日頃

㈡場所　C2よりホワイト・セール頂上に向かう稜線

㈢推定　悪天であった九日、十日はC2にて停滞、天候の回復した十一日以降頂上に向かったものの、途中、新雪雪崩、或いは雪庇の崩壊などにより、ホワイトセール氷河または反対側へ転落した可能性が高いと推定される。

なお、一九八二年八月、雪解けを待ってホワイトセール氷河上を再捜索したが巨大なでぶりがあるばかりで三君の痕跡は無かった。

岳友追悼

中村慎一郎君

1968年5月1日　5時45分
鹿島槍ガ岳 天狗尾根 第一クーロアールにて
マガリ沢側へ転落死亡
享年20歳（詳細104ページ参照）

橋本明君

1970年9月2日　10時20分
甲斐駒ガ岳 赤石沢奥壁 中央壁にて転落死亡
享年23歳（詳細111ページ参照）

中村宜幸・土方浩・萬濃英士君

1981年9月11～13日頃
インドヒマラヤ，ホワイトセール峰南東稜上
にて消息を断つ　新雪雪崩，あるいは雪庇の
崩壊によりホワイトセール氷河または反対側
に転落した可能性が高いと推定される
享年22・23・21歳（詳細276ページ参照）

『針葉樹』第1～13号収録内容

名　　称	発行年月日	ページ	収録年代	主　要　記　録
東京商科大学一橋山岳部年報No. 1	大14 ―― (1925)	116	1925. 4 ～ 1925.10	「山と人生」「山讃賦」「岩菅スキー初登攀」「白峯三山」「小西俣遭難」「日光より平ケ岳」「年報」
針葉樹　第2号	大15.12.16 (1926)	210	1926. 5 ～ 1926.10	「只見川を中心として」「東北朝日岳」「前穂高北尾根について」「秩父雑記」「年報」
〃　第3号	昭 2.12.28 (1927)	194	1926.11 ～ 1927.10	「黒部下廊下を観る」「3月の針ノ木谷と立山越え」「北海道の旅」「年報」
〃　第4号	昭 4. 3. 1 (1929)	129	1927.11 ～ 1928.10	「山に登る心」「山岳追想」「晩春の塩見赤石縦走」「尾瀬の3月」「小槍」「年報」
〃　第5号（10周年記念号）	昭 5. 7. 1 (1930)	220	1928.11 ～ 1930. 5	「山の個性」「1月の槍平と槍ガ岳」「大武川より大井川東俣へ」「守門山スキー行」「年報」
〃　第6号	昭 7. 8. 1 (1932)	252	1930. 5 ～ 1932. 3	「シルク・ド・ガバルニ」「春の赤石岳」「鹿島鎗岳」「Tの死を憶う」「年報」
〃　第7号	昭 9.10.10 (1934)	93	1932. 4 ～ 1934. 3	北アルプス，南アルプス，中央アルプス等合宿記録
〃　第8号	昭10.11.25 (1935)	263	1934. 7 ～ 1935. 8	鹿島槍ガ岳東面の登攀記録，樺太・北海道，上越国境東北地方の山々の登山記
〃　第9号	昭12. 7.25 (1937)	159	1935. 9 ～ 1937. 3	「厳冬の北岳バットレス」「3月の鹿島槍荒沢奥壁」「シッキムヒマラヤ主要登攀踏査表」
〃　第10号	昭14. 9.15 (1939)	116	1937. 4 ～ 1938. 3	「前穂高東面に就いて」「昭和12～14年度活動記録」
〃　第11号	昭30.12.31 (1955)	124	1953. 4 ～ 1955. 3	「二つの春山合宿」「10号以後の歩み」「昭和28～29年度活動記録」
〃　第12号	昭35. 7.25 (1960)	294	1955. 4 ～ 1960. 1	「積雪期合宿記録」「コルディレラ・ワイワッシュー・ペルーアンデスの一山群」
〃　第13号（アンデス遠征記録特集）	昭39.11.10 (1964)	373	1960. 4 ～ 1963. 3	「1961年アンデス遠征記録」「4年間の合宿をめぐって」

あとがき

▒"「部の通史」をつくれば如水会から金がもらえる。"様々な要因はあったが、この甘い誘いこそが、僕達の「ロマン」をとりまとめる最大の契機となった。

どうしてここまで、即ち二〇年間の記録がたまりにたまるまで十四号の発行がのびたのかは、近年の若手OBの数と顔ぶれを見れば、一目瞭然である。しかも、僕達はオ、ケラだった。そこで僕達は今回の「山岳部六十年史」の企画こそが、僕達の記録を残す最良最後のチャンスだとばかりとびついた。

けれども、資金はそう簡単には集まらない。出来ばえの良さと料金の低さを共々要求された印刷屋さんは哀れをとどめ、僕達の壮挙(!)に小遣いを(といっても福沢さんは大切なものですが)出しぶる良識ある(!)先輩達の攻略に僕等は頭をかかえた。再三再四の購入のお願い、あげくは各代ごとに販売促進者を設定してのTEL攻勢。そして、終りよければ全て良し。おかげさまで、このたび十四号が産声をあげることとなった。

会社勤めを始めて以来、同期の連中と一緒に飲む機会はすっかり減ってしまった。それでも、これからは書棚から十四号を引き出せば、沈澱のテントの中の岳友の顔が浮かんでくるし、今では肩を並べて縄のれんをくぐれない失われし後輩の顔も浮かんでくる。

ここに十四号を作りあげたのだから、あとは、山に登るだけだ。

(資金担当　米田篤裕　五五年卒)

▒針葉樹十四号の刊行をもって販売活動の前半を終了するに当り、続く十五号刊行の際の御参考までに対する販売活動は、各応募のとりまとめ依頼が百名中、応募百十名(五世代の代表者への販売活動は、OB諸氏の各方面への「顔の広さ」と学生・若手OBの足を生かした機動的活動を展開する予定ではありましたが、それを支えるに充分な組織作りと、その組織内ルートを通じての情報の広範な交換とがやや不充分であったためか、満足のいく結果を得たとは言い難いものの、来るべき後半戦においては、以上の反省をふまえ、一人でも多くの人にこの記録が読み継がれるよう努力するつもりです。

なお、最後になりましたが、一早く応募下さった多くの会員、およびOBの呼びかけに応じて応募して下さった皆様、そして広告掲載に快く応じていただいた企業各位に対し、改めて深く感謝の意を表明致します。

(販売広告担当　宮下克彦　五七年卒)

▒「議論し、実践し、記録する」。これが三位一体となって初めて登山と言える。――大先輩がこう言われています。それからす

ると我が山岳部活動は過去二十年間、いささか欠けるところがあったことになりますが、十四号の発行をもってようやくこれにピリオッドがうたれました。

昨年この計画が発表された時には、うかつにもこんな大事になろうとは考えてもいませんでした。編集が進み、支払いの時期が近づくにつれ、我々は次第に追いつめられ、各担当が報告しているとおり、あらん限りの手を使って資金集めに奔走させられることになったのです。同時に一～十三号の復刻版まで発行するという構想はいささか大がかりすぎたのかもしれません。

しかし、横山会長のこうして「あとがき」を受けて、ようやく、を書ける状態となりました。

ほっとした思いでゲラを通読してみると、六〇年代から七〇年代、そして八〇年代へと続く日本の社会の価値観の変化が、山岳部の在り方にも色濃く反映されているようで、いたく興味をそそわれました。東京オリンピックから大阪万博へ至る六〇年代は飛躍的な経済発展の時代、石油危機に繰り返し見舞われた七〇年代は一転して不確実性の時代、そして今や、脱産業化が華々しく喧伝されています。そのなかで、社会はより個人主義的な性格を強め、山岳部の活動、いや、山登りの在り方にもそれはあるようです。

針葉樹は本来、学生がつくるものではありますが、このたびは様々な企画がありましたが、すべてを十分に盛り込むことは出来ませんでした。予算の都合で記録も相当カットしました。その点御容赦いただいたうえで、どうかじっくりお読みいただき、「山へ」の思いをかきたてていただければ幸いです。

最後に、編集、資金両面から御援助いただいた針葉樹会、如水会の皆様、そして新制作社の方々に深く感謝申し上げます。

（佐藤久尚　四一年卒）

頒布番号 267

＜編集委員＞
佐藤久尚
金子晴彦
米田篤裕
宮下克彦

針葉樹 第14号 定価 10,000円

1985年6月27日 発行

発行者 一橋山岳部 東京都国立市一橋大学内

制作／新制作社

ジャパンゴアテックス株式会社
ゴアテックスのすべてがわかる資料をさしあげています。住所、氏名、年齢、職業、掲載誌名を明記して、〒156 東京都世田谷区赤堤1-42-5 ジャパンゴアテックス㈱本社・マーケティング本部 広報・宣伝グループまで。☎03-327-0011(代表)



ヒートロス0

原因は「通気性」だった。

時として、「通気性」が、
マウンテン・ウェアの致命的な欠陥となることがある。
なぜなら、酷寒では「通気性」がそのままヒートロスにつながり、
体温を急激に低下させるからだ。
ゴアテックス・マウンテン・ウェアは、完璧な防風性によってヒートロスを防ぎ、
高い透湿性によって、外気を通さずに〈ムレ〉だけを追放。
さらに、防水性、対汚染性も万全。
まさに、理想のマウンテン・ウェアだ。

外気を通さずに〈ムレ〉だけを追放。ゴアテックス®

GORE-TEX®

実業之日本社 東京銀座1-3/振替東京1-326

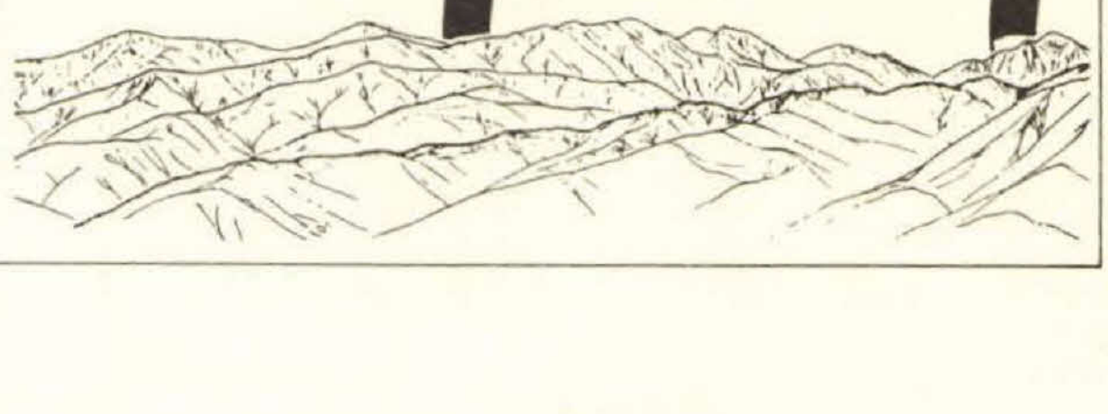
大増刷！

車窓の山旅・中央線から見える山

山村正光

中央線新宿—松本間、同じ地点の同じ車窓から富士山、北岳、奥穂高が見えるのはどこ？130の山々への熱い思いをつづる異色随想。

●A5変型判 ●定価1900円



好評既刊＊発売中

常念の見える町
安曇野抄
蜂谷 緑 ●四六判／1380円

山と別れる峠
串田孫一 ●A5変型判／1600円

アルプス青春記
朝比奈菊雄・A5変型判／1600円

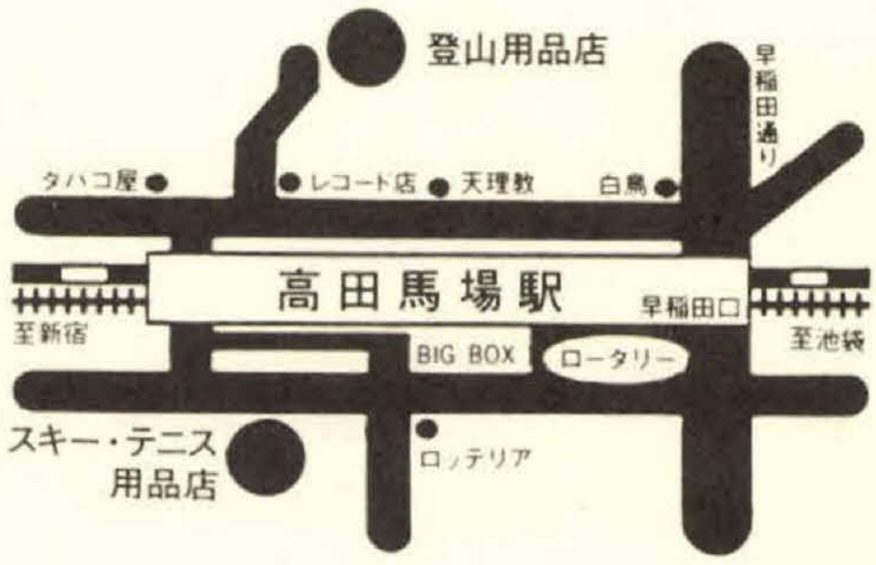
山の博物誌
西丸震哉 ●A5変型判／1500円

山を考える
本多勝一 ●四六判／1200円

山とスキーとテニスの プロショップ

KAMOSHIKA
かもしか®スポーツ

登山用品店



登山用品店/東京都新宿区高田馬場4-4-11
〒160 ☎03-371-4333(代) 営業時間/AM10:30
～PM8:30(平日) AM10:30～PM7:00(日・祭)

よりよきテントの最高峰をめざす

吉田テント！——小さな店の大きな自信！

1978　植村直己北極点単独旅行
1978　日本大学北極点遠征隊
1980　植村直己アコンカグア登山隊
1981　北海道大学バルンツェ登山隊
1981　植村直己冬期エベレスト登山隊
1981　明治大学エベレスト登山隊
1981　早稲田大学K2登山隊



夏山用テント　　冬山用テント　　テントの専門メーカー

吉田テント

東京都杉並区桃井1－3－3
☎(399)2548・夜間(398)8469

世界の屋根を飛ぶ、感動の空の旅。

ヒマラヤの翼ネパール航空
Royal Nepal Airlines

ネパール航空日本地区総販売代理店
ヒマラヤ観光開発株式会社
〒105東京都港区新橋3-26-3 会計ビル5階
TEL：03-574-9292
TELEX：2522837 HKKTYOJ
SITA TP：TYOTORA

◉当社はネパール政府観光局指定インフォメーションセンター、ホテル・エベレスト・ビュー日本事務所を兼ねております。

DO TREKKING

毎日が、出逢いと発見TREASURE TOUR

- トレッキングから登山隊の許可取得、現地手配まで経験豊かなスタッフがおりますので、安心しておまかせ下さい。
- カトマンズ・ポカラ周辺を中心とした一般旅行も取扱っています。ネパールへのご旅行については何なりとお問い合せ下さい。
- 現地手配は、ヒマラヤ観光開発㈱が行なっています。

豊穣な文化と美しい大自然を持つ、光あふれる地ネパール。
ほほえみを絶やさない人々との出逢い、
蒼空に厳しくも美しく聳える氷雪の峰々との対峙、
岩をかむ激流の峡谷を辿ってやがてヒマラヤの高地へ……。
ヒマラヤの王国、ネパールのトレッキングは、
毎日が感動的な出逢いと発見の旅です。

マウンテントラベル株式会社
〒105 東京都港区新橋3 26 3会計ビル4F ☎03 574 8880

みなさまに最適のメガネを選ぶ店



岩崎眼鏡店

岩崎利一(如水会員)

東京都中央区銀座6－9－4（銀座松坂屋前）

電話 571－0319・3091郵便番号104

一級建築士事務所

土木建築設計施工



昭和建業株式会社

常務取締役　中村章正

高崎市下小鳥町550番地

TEL 0273－62－3311㈹

むずかしい御相談でお疲れになったら

心のふるさと　**みね**

◇　各種のお酒とりそろえてあります
◇　お値段は人品骨相次第
◇　人生相談もうけたまわります

ギンザ1－10－5　　TEL（535）2021
取締役　み　ね　さん

繊維製品綜合卸・輸出入

鳴河株式会社

NARUKAWA CO,LTD.

名古屋市中区錦2－7－8
TEL　052(201)8311

荒庄鳴河㈱　東京都中央区日本橋富沢町11番地
TEL　03(662)9181

紙から印刷まで

株式会社 **和　香**

取締役　遠藤晶士（昭和37年卒）

本社：〒116 東京都荒川区西日暮里2-45-5 ☎803－1341㈹
中央支店：〒104 東京都中央区湊町2-4-5 ☎551－2928



株式会社 パピウエア

ビ　バ　本　店	〒730 広島市中区本通り1—5（金座街中ほど）	☎(082)247-4541
ブティック ラ・コモ	〒730 広島市中区袋町6—1（袋町アンバー1F）	☎(082)241-4541
ブティック四季	〒730 広島市中区本通り9—2（並木通り入口）	☎(082)247-4551
サンク・ド・クール	〒730 広島市中区立町5—7（Gハウス1F）	☎(082)244-5575
ビ バ 松 山 店	〒790 松山市湊町5—1—1（まつちかタウン）	☎(0899)45-2548

山の本

茗渓堂

〒一〇一　東京都千代田区神田駿河台二―
電話〇三―二九一―九四四二
振替東京八―二四七二三

山なみ帖
小谷隆一　3,200円

わが登高行　上巻　3,800円
三田幸夫　下巻　4,500円

静かなる山　正篇　1,700円
川崎精雄ほか　続篇　1,800円

登山史の周辺
山崎安治　3,800円

登山史の発掘
山崎安治　2,500円

快晴の山
織内信彦　2,500円

森林・草原・氷河
加藤泰安　2,500円

山に忘れたパイプ
藤島敏男　3,200円

折々の山
望月達夫　1,900円

山を見る日
川崎精雄　2,900円

山は満員
渡辺公平　2,200円

山・人・本
島田　巽　2,400円

すこし昔の話
初見一雄　1,200円

我がスキーシュプール
麻生武治　3,400円

小さな頂
一原有徳　2,900円

北の山　続編
伊藤秀五郎　2,700円

詩集 山の風物詩
伊藤秀五郎　1,400円

日高山脈
北大山の会　2,400円

わたしの草と木の絵本
坂本直行　1,200円

山日記　昭和61年
日本山岳会編　1,400円

原野から見た山　画文集
坂本直行　4,200円

山・原野・牧場
坂本直行　1,500円

雪原の足あと　画文集
坂本直行　3,800円

坂本直行　淡彩画絵はがき
1集、2集、3集　各300円
4集　400円

ランタン紀行
エーデルワイス・クラブ　1,500円

ナンダ・デヴィ縦走1976
ナンダデヴィ登山隊　3,900円

マナスル1974
日本女性マナスル隊　3,400円

登頂ゴジュンバ・カン
高橋　進　900円

遙かなる未踏の尾根
日本山岳会東海支部　4,800円

グリンデルヴァルトの山案内人
ブラーヴァン　3,800円

続ブータン感傷旅行
小方全弘　1,500円

エーデルワイスの詩
坂倉登喜子　3,800円

山岳　日本山岳会
62年、64年、65年各2,000円
63年2,200円、66年2,300円
67年、69年各2,500円
68年、71・72年合併号、73年
74年、75年、76年各3,000円
77年、78年、79年各3,500円

山岳総索引　1,000円
（第26年第1号から第60年まで）

低山高蹤
神谷恭遺稿と追悼　2,900円

山ひとすじ
中村謙遺稿と追悼　3,400円

中国に虹をかける



古代楼蘭王国はシルクロードの珠玉のオアシス，

いま私達は中国大陸にティーロードの虹をかけます。

楼蘭（ろうらん）

株式会社 楼 蘭　〒193 東京都八王子市椚田町1214—1 ☎0426-63-7460